財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第328集

多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　第1集

多　田　山　古　墳　群

今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　－古墳時代編－

～多田山丘陵における後・終末期古墳の調査～

第1分冊　本文編

2004

群　馬　県　企　業　局
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 328 集

多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　第１集

多　田　山　古　墳　群

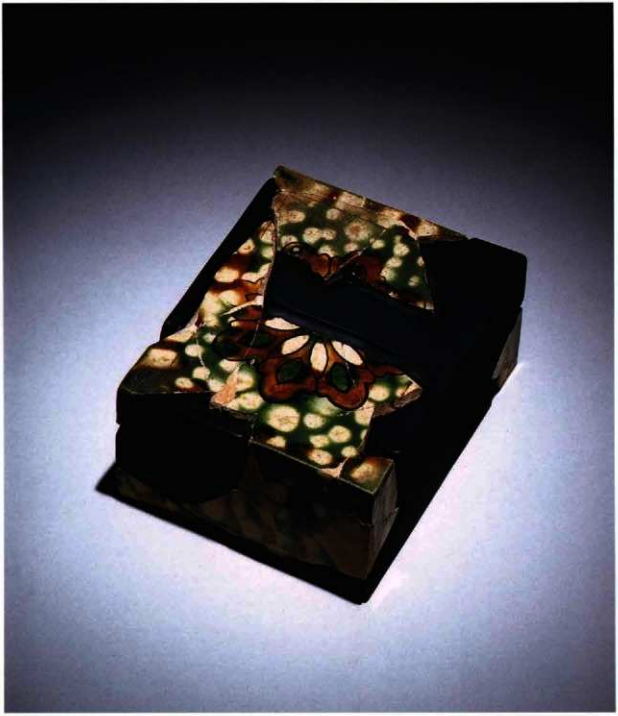
今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　－古墳時代編－

～多田山丘陵における後・終末期古墳の調査～

第１分冊　本文編

2004

群　馬　県　企　業　局
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団



多田山 12 号墳出土の唐三彩・陶枕

墳丘及び石室・前庭全景

前庭出土の唐三彩・陶枕片

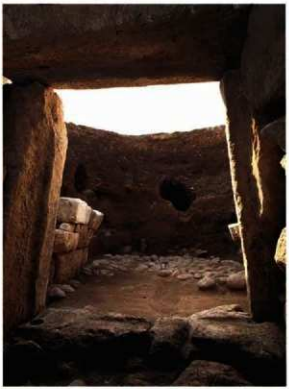
羨道からみた石室状況

墓土断面（玄室西）

石室から佐位を望む

石室全景

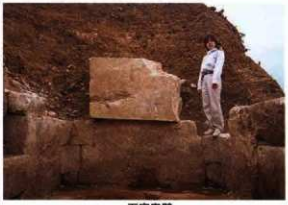
墳丘及び石室・前庭全景



観音開き扉の存在を示す玄門

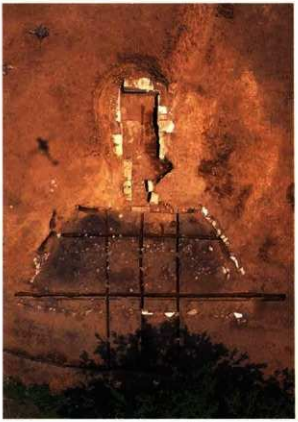
玄室内の截石切組積

墳丘・石室前土坑及び石室・前庭全景



石室奥壁

盛土断面（奥壁うしろ）



石室・前庭　垂直全景

多田山３号墳第３主体部　出土人骨

多田山４号墳主体部　舟形粘土床

多田山４号墳　形象埴輪群

多田山２号墳　馬形埴輪

多田山６号墳　人物埴輪（馬子）

多田山９号墳　人物埴輪（巫女）

竪穴全景

竪穴内出土土器・鉄製品

序

多田山古墳群は、群馬県企業局による「多田山丘陵開発事業」に先立ち発掘調査が実施されました。

平成10年度から13年度にかけて、当事業団により実施された発掘調査の中で、6世紀から7世紀にわたり造営され続けた21基の古墳と、それに付随する関連遺構が調査されました。

「多田山には数々の歴史が眠る」と語り継がれてきましたが、その通り、調査の成果は多大なものでした。

多田山12号墳から発見された唐三彩・陶枕は、その筆頭に挙げられます。日本国内での発掘事例が希少な遺物であるとともに、華麗な彩りを放つこの唐三彩・陶枕は群馬県はもちろんのこと、全国からの注目を集めました。

こうした優品が多田山古墳群から発見された背景には、その時代、これを入手するだけの地域の力がこの地に存在したことを物語っています。その先人の業績が、今回の調査によって、我々の目前に現れたのです。

価値観が多様化する現代において、より良く生きるための羅針盤が何であるのか、混沌としています。ですが、「温故知新」という諺もあるように、古墳時代の多田山を支えた人々の知恵と技術を知ることで、私たちは生きる勇気と将来の指針を得ることができるのではないでしょうか？

発掘調査から報告書作成に至るまで、群馬県企業局、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、赤堀町教育委員会、地元関係者の方々には多くのご指導、ご協力を賜りました。報告書の上梓に際し、関係者の皆さまに心から感謝申し上げるとともに、併せて本書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い、序とします。

平成16年3月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　小野宇三郎

例　言

1　本書は、多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「今井三騎堂遺跡」「今井見切塚遺跡」の発掘調査報告書である。両遺跡の発掘調査報告書は時代別に4分冊（旧石器・縄文・古墳・奈良平安）で構成されるが、本書はその内の「古墳時代」の遺構・遺物についての埋蔵文化財調査報告書である。

2　「今井三騎堂遺跡」「今井見切塚遺跡」は群馬県前橋市東大室町及び群馬県佐波郡赤堀町今井に所在する。

3　遺跡の発掘調査及び整理事業については、群馬県企業局より委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。経費については群馬県企業局と、一部は群馬県土木部が負担した。

4　発掘調査は「今井三騎堂遺跡」については平成10年4月1日から平成12年3月31日まで、「今井見切塚遺跡」については平成9年9月24日から平成14年3月31日まで、それぞれ実施した。

一方、整理事業は両遺跡の古墳時代の遺構・遺物を併せた形で、平成13年4月1日から平成16年3月31日まで実施した。

5　発掘調査及び整理事業体制は次の通りである。

事　務　担　当…菅野清・小野宇三郎・吉田豊・原田恒弘・赤山容造・神保侑史・能登健・渡辺健・住谷進・萩原利通・小渕淳・坂本敏夫・大島信夫・植原恒夫・佐藤明人・水田稔・真下高幸・相京建史・笠原秀樹・井上剛・小山建夫・竹内宏・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・岡嶋伸昌・宮崎忠司・片岡徳雄・森下弘美・阿久澤玄洋・田中賢一・大澤友治・吉田恵子・内山佳子・若田誠・佐藤美佐子・本間久美子・北原かおり・安藤友美・狩野真子・羽島京子・星野美智子・松下次男・浅見宣記・吉田茂・蘇原正義・今井とも子・並木綾子

発掘調査担当…（今井三騎堂）石坂茂・松島久仁治・大西雅広・斉藤和之・須田正久・深澤敦仁・小保方香里・小野和之・関俊明・諏訪晶・松原孝志・石田真・原真・井上哲男・坂口一・佐藤理重（今井見切塚）石坂茂・深澤敦仁・田中雄・松島久仁治・原真・大西雅広・須田正久・斉藤和之・佐藤理重・小保方香里・井上哲男・坂口一・土谷慎二・津島秀章・田村博・関口博幸

整理事業担当…深澤敦仁・阿部由美子・平林照美・羽島望東子・小久保ヒロミ・横坂英実・池田和子・五十嵐由美子・馬場信子・佐藤元彦・関邦一・土橋まり子・横倉知子・藤井文江・湯浅美枝子・小村浩一・高橋初美・佐藤美代子・矢島三枝子・田中富子・富沢スミ子・岸弘子・伊藤幸代

6　本書の編集・執筆は以下の通り行った。

・編集は深澤敦仁が行った。

・本文執筆は、第5章・第6章以外は深澤が行った。但し、第3章の唐三彩の記述は、弓場紀知氏（出光美術館）、亀井明徳氏（専修大学）からご教示を受けた上で行った。また、第3章・第4章の鉄製品の記述は杉山秀宏（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団）の観察記録に基づいて行った。

・第5章については、株式会社古環境研究所、株式会社パレオラボに委託し、その成果報告書を掲載した。

・第6章については、人骨分析を田中良之氏・石川健氏（両氏とも九州大学大学院）、唐三彩自然科学分析を平尾良光氏・早川泰弘氏・榎本淳子氏（3氏は独立行政法人東京文化財研究所）及び、二宮修治氏・菊池一弥氏・曽方絵理氏（3氏は東京学芸大学）、凝灰岩分析は新井房夫氏（群馬大学名誉教授）、赤色顔料分析を本田光子氏（別府大学）より玉稿を賜った。（※所属名は当時）

・写真撮影については、遺構写真を各発掘調査担当者が行い、遺物写真を佐藤元彦が行った。なお、一部の

遺構遺物写真については、小川忠博氏によって行われた。

・報告書図版ののデジタル編集の一部は、株式会社測研　に委託した。

7　本古墳群の図面・写真・出土遺物は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。但し、中里塚古墳の出土遺物は群馬大学、見切塚１号墳の出土遺物は赤堀町教育委員会がそれぞれ管理・保管している。

8　発掘調査・報告書編集に際しては、下記の方々・機関には有益なご教示をいただいた。記して感謝します。

青木繁男・青柳泰介・荒木勇次・飯島静男・飯塚聡・石川正之助・石野博信・井上喜久男・井上唯雄・入江文敏・入沢雪絵・梅澤重昭・内田真澄・江原昌俊・王維坤・王小蒙・太田博之・大谷徹・大道和人・小笠原好彦・小川忠博・小渠宗一・賀来孝代・加藤瑛二・加部二生・亀井明徳・亀田修一・河上邦彦・川越俊一・川原秀夫・川西宏幸・金宰賢・小池雅典・小宮俊久・小林修・国井洋子・久保田了次・斉藤孝正・酒寄雅志・鹿田雄三・杉本宏・鈴木靖民・島田孝雄・志村哲・清水豊・白田郁夫・須永房吉・鈴木重治・早田勉・田口一郎・辰巳和弘・田中良之・玉田芳英・趙榮濟・曹永鉉・塚田良道・外山政子・鳥羽孝之・長井正欣・中里正憲・永井智教・中島直樹・南雲芳昭・橋本博文・長谷部楽爾・土生田純之・浜中邦弘・原島美穂・坂靖・日高慎・深澤芳樹・松島榮治・前原豊・松藤和人・松村一昭・松村永子・松村恵司・松本浩一・三浦京子・三浦茂三郎・三輪嘉六・村松篤・桃崎裕輔・森浩一・森田悌・矢部良明・山本豊・弓場紀知・吉澤悟・吉村公男・横澤真一・柳昌煥・若狭徹・若松良一・割田博之

群馬県企業局　日本道路公団　群馬県土木部　前橋市教育委員会　赤堀町教育委員会　赤堀町立歴史民俗資料館　出光美術館　独立行政法人東京国立文化財研究所　独立行政法人奈良国立文化財研究所　（敬称略）

凡例

1　図中に使用した方位は、すべて国家座標（2002.4 改正前日本測地系）の北を使用している。

2　遺構図・遺構図とも、縮尺は図毎にその縮尺を付した。

3　遺物の赤彩については、円筒埴輪以外はすべて赤トーンで示した。円筒埴輪については、器面の拓影と混在してしまうために、赤彩部分に関してはその位置を観察表に記載した。

目次

巻頭図版
序文・例言・凡例

第1章　環境
1　多田山について・・・・・・・・・・2
2　周辺古墳の様相・・・・・・・・・・4
3　調査史・・・・・・・・・・・・・・6
第2章　経緯・方法・経過
1　調査にいたる経緯・・・・・・・・・8
2　調査区について・・・・・・・・・・8
3　調査の方法・経過・・・・・・・・・10
4　調査の経過・・・・・・・・・・・・10
5　整理の方法・経過・・・・・・・・・12
6　普及活動について・・・・・・・・・12
第3章　古墳の調査報告
1　多田山1号墳・・・・・・・・・・・17
2　多田山2号墳・・・・・・・・・・・25
3　多田山3号墳・・・・・・・・・・・63
4　多田山4号墳・・・・・・・・・・105
5　多田山5号墳・・・・・・・・・・133
6　多田山6号墳・・・・・・・・・・149
7　多田山7号墳・・・・・・・・・・175
8　多田山8号墳・・・・・・・・・・179
9　多田山9号墳・・・・・・・・・・185
10　多田山10号墳・・・・・・・・・221
11　多田山11号墳・・・・・・・・・243
12　多田山12号墳・・・・・・・・・247
13　多田山13号墳・・・・・・・・・293
14　中里塚古墳・・・・・・・・・・・309
付：「中里塚古墳（仮称）調査報告」（1953年）
15　多田山15号墳・・・・・・・・・351
16　多田山16号墳・・・・・・・・・401
17　多田山17号墳・・・・・・・・・417
18　多田山18号墳・・・・・・・・・443
19　多田山19号墳・・・・・・・・・465
20　多田山20号墳・・・・・・・・・499
21　見切塚1号墳・・・・・・・・・・509
第4章　埴輪棺・石槨墓・竪穴の調査報告
1　多田山1・2・3号埴輪棺・・・・543
2　多田山1・2号石槨墓・・・・・・551
3　多田山古墳群69号竪穴・・・・・559
第5章　自然科学分析
1　土層とテフラ・・・・・・・・・・572
2　木質遺物樹種同定・・・・・・・・576
3　埴輪の胎土材料・・・・・・・・・580
第6章　特論
1　多田山古墳群出土人骨・・・・・・592
2　多田山12号墳から出土した
唐三彩陶枕の自然科学的調査・・・605
3　多田山12号墳及び中里塚古墳で
使用されている白色凝灰岩石材の
産地同定について・・・・・・・・614
4　多田山古墳群出土の
赤色顔料について・・・・・・・・615

結　び・・・・・・・・・・・・・・・・617

第2分冊　　写真図版編

報　告　書　抄　録

ふりがな	ただやまこふんぐん　いまいさんきどういせき・いまいみさりづかいせき　こふんじだいへん
書名	多田山古墳群　今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡　古墳時代編
副書名	多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第328集
シリーズ名	
シリーズ番号	1
編集者	深澤敦仁
編集機関	財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377-8555　群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2　TEL　0279-52-2511
発行年月日	2004年3月26日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	事業コード				
今井三騎堂	前橋市東大室町・佐波郡赤堀町今井	10210 10461	00516	36°22′54″ 139°12′30″	19980401～ 19991031	131,750㎡	住宅団地造成
今井見切塚	前橋市東大室町・佐波郡赤堀町今井	10210 10461	00501	36°22′40″ 139°12′25″	1997924～ 20020331	148,500㎡	住宅団地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今井三騎堂	墳墓	古墳時代	後期古墳　9 終末期古墳　5 埴輪棺　3 石標墓　1 竪穴　1	埴輪・土器・鉄製品・人骨 唐三彩・土器・鉄製品	・多田山３号墳には追善行為の様相あり ・多田山古墳群69号竪穴は導送関連施設の可能性あり。 ・多田山12号墳前庭から唐三彩・陶枕出土 ・中里塚古墳には観音開きの扉の痕跡あり
今井見切塚	墳墓	古墳時代	後期古墳　3 終末期古墳　5 石標墓　1	埴輪・土器・鉄製品・人骨 土器・鉄製品・人骨	・多田山15号墳は截石切組横石室をもつ終末期古墳。

第1章　　環　境

1　多田山について

多田山の位置　群馬県には日本百名山のひとつ、名峰・赤城山がある。「裾野は長し　赤城山」と、上毛カルタで詠まれるその雄姿は、見る者を癒し、勇気を与えてくれる。

その南の麓、「赤城山南麓」に、多田山はある。

この多田山は、行政区域的には、群馬県の中部にある前橋市・佐波郡赤堀町・勢多郡粕川村の行政境にまたがる場所に位置する。(図1)

最高標高は159.1 m。周辺地との最大比高差は約40 mをはかり、その広がりは南北約2.0km、東西約1.0kmにおよぶ。

その姿は、いにしえより、ランドマークとしての役割を果たしていたことがうかがえる。

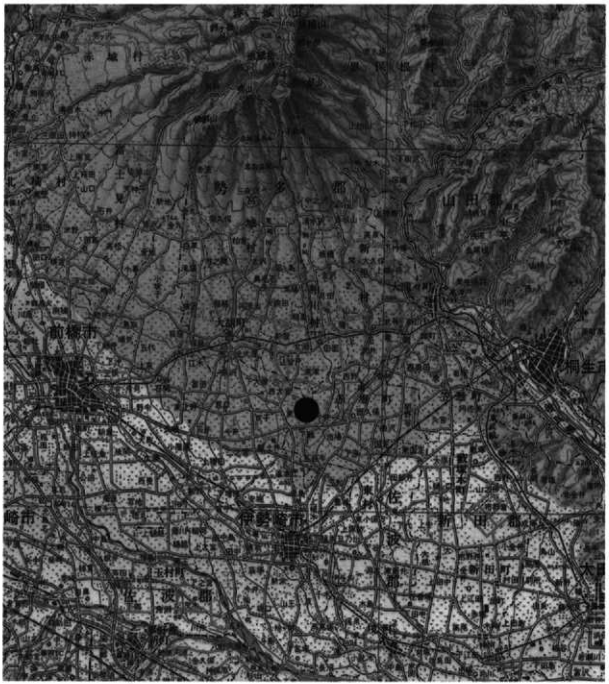
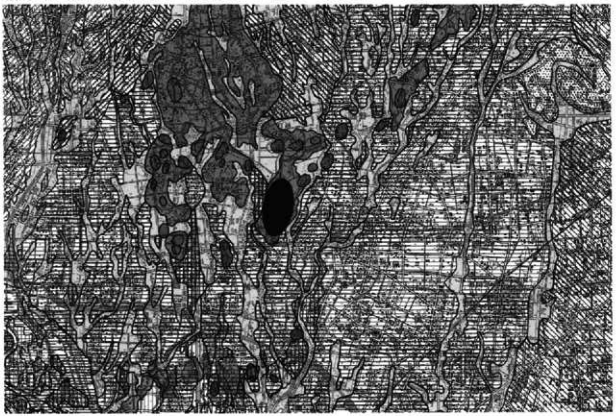


図1　多田山の位置（国土地理院　20万分の1「宇都宮」を使用）

地　勢　多田山が位置する「赤城山南麓」には火山麓扇状地が広がっており、荒砥川・宮川・神沢川などの小河川が多数存在する。これらの河川は小規模な開析谷を形成する一方で、その間には南北に細長い台地を形成している。そして、この低台地の南端には、多くの小丘陵が点在している。これらの小丘陵は、今から約 20 ～ 30 万年前の赤城山の山体崩壊に伴い発生した岩屑なだれ（梨木泥流）の堆積物と流れ山で形成された丘陵であり、多田山もこうした丘陵のひとつなのである。

一方、多田山の東には、粕川を境にして、広大な平坦面を形成する「大間々扇状地」の低台地が広がっている。多田山周辺はこの扇状地の扇端部にあたり、多くの湧水が存在している。そして、この湧水から流れ出る小河川が、周囲に南北に細長い開析谷を形成させている。（図 2）



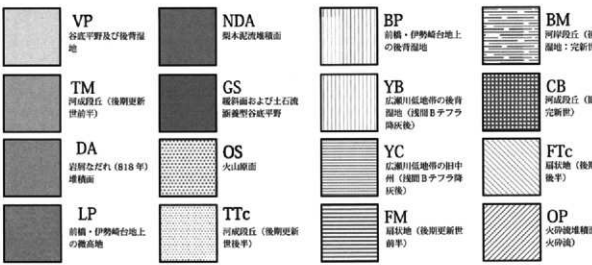


図 2　多田山周辺地形分類図（S＝1／75,000　「群馬県史　通史編 1」より引用・一部加筆）

2　周辺古墳の様相

（1）分布と石材

分布　この地域の古墳は、①荒砥川・柏川・神沢川等による開析谷が原因となってつくられた低台地、②赤城山山体崩壊に伴って発生した岩屑なだれの堆積物で形成された丘陵、に立地するものが多い。

石材　ほとんどの古墳において、輝石安山岩を採用している。この石材は赤城山麓一帯の、河川や山中から採取可能な石である。また、角閃石安山岩・凝灰岩の採用も一部に認められるが、前者は旧利根川流路である広瀬川から利根川中下流域に分布するものであり、後者は新里村から笠懸町にかけて限定的に分布するものである。なお、ごく稀に、珪岩や緑泥片岩が採用されている。

（2）様相の推移（図3）

4～5世紀の様相　華蔵寺裏山古墳（前方後方墳：約40 m）は4世紀後半の築造とされる、本地域の最古段階の古墳である。なお、本地域では確実な前期古墳がほかに見当たらない。中下位層の墓制としては、前方後方形周溝墓や方形周溝墓などが考えられ、それらの存在は多数認められている。

その後、5世紀中葉になり、御富士山古墳（前方後円墳：125 m）が築造されると、本地域でも、赤堀茶臼山古墳（前方後円墳:70 m）、丸塚山古墳（前方後円墳:81 m）、今井神社古墳（前方後円墳:71 m）が築造される。埋葬施設としては、長持形石棺（御富士山）、木炭槨（赤堀茶臼山）、組合式石棺（丸塚山・今井神社）が、それぞれ確認されている。中下位層の墓制としては所謂「初期群集墳」が考えられ、白藤古墳群・三騎堂古墳群・近戸古墳群・峯岸山古墳群・地蔵山古墳群などがある。埋葬施設としては竪穴式小石槨を採用している。

なお、本地域の4～5世紀の様相は、群馬県西部地域と対峙させた場合、「有力な前方後方墳・前方後円墳が少ない」という特徴が浮かび上がってくる。

6世紀の様相　前二子古墳（前方後円墳：93 m）は6世紀初頭の築造とされる、横穴式石室墳である。埋葬施設に採用された石室は所謂「初期横穴式石室」であり、本地域における横穴式石室導入の様相を示す古墳である。なお、本墳は副葬品等の様相においても、前代からの飛躍性が高い。その後、中二子古墳（前方後円墳：107 m）と後二子古墳（前方後円墳：82 m）が継続して築造される。轟山A号墳（前方後円墳：29 m）や殖蓮村71号墳（前方後円墳：～50 m）などの中小規模の前方後円墳の築造も中葉以降は行われる。中小富裕層の墓制としては、6世紀前半においては小円墳群が考えられる。これは、前代の「初期群集墳」からの継続性が考えられる。埋葬施設は竪穴式小石槨が主体だが、荒砥村245号墳（円墳：12 m）のように、一部には横穴式石室が採用されはじめる。後半には、内堀M4号墳（円墳：20 m）や新里天神山古墳（円墳：40 m）の様相が示す通り、横穴式石室の採用は普遍化する。

なお、上記の通り、本地域での横穴式石室の採用は大型首長墳においては前半期の採用が認められるが、その普遍的採用は後半期を待たねばならない。

7世紀の様相　前方後円墳及び埴輪消滅後は、祝堂古墳（円：30 m）、中塚古墳（円：38 m）、荒砥富士山1号墳（円墳：49 m）など、大型円墳が台頭する。これらの首長墳の多くには、切石積（截石切組積）石室が採用されることが多い。中小富裕層の墓制としては小円墳群が考えられ、埋葬施設には前庭が付設する横穴式石室が多くで採用される。また、牛伏古墳群などで見られるように、墳丘を伴わない小横穴式石室という墓制も存在する。

なお、7世紀後半には、上植木廃寺が建立されており、本地域における切石積（截石切組積）石室の成立・展開との深い関わりを窺わせる。また、古墳の終末については、7世紀末の造営が最終段階と思われるがそこへの追葬・追善行為は8世紀後半に至るまで行われていたと考えられる。ちなみに、8世紀には火葬墓が新たな葬制として本地域に受容されており、新旧墓制の錯綜する様が思い浮かばれる。

1．中里塚古墳　2．前二子古墳　3．中二子古墳　4．後二子古墳　5．小二子古墳　6．赤堀茶臼山古墳　7．願蓮村71号墳　8．丸塚山古墳　9．上植木廃寺　10．原之城遺跡　11．華蔵寺裏山古墳　12．祝堂古墳　13．荒砥荒子遺跡　14．つくば山古墳　15．ツボロ古墳　16．伊勢山古墳　17．午島古墳　18．荒砥村291号墳　19．梅ノ木遺跡　20．中塚古墳　21 新里天神山古墳　22．山上愛宕塚古墳　23．山内出古墳　24．西大窪丸山遺跡　25．舞台1号墳　26．荒砥富士山1号墳　27．小幡荷6号墳　28．見切塚1号墳　29．荒砥村245号墳　30．三ヶ尻西遺跡　31．内堀M－1号墳　32．内堀M－4号墳
A．多田山古墳群　B．蟹沼東古墳群　C．地蔵山古墳群　D．陶山古墳群　E．高山古墳群　F．書上古墳群　G．台所山古墳群　H．波志江沼西古墳群　I．牛伏古墳群　J．石山片田・庚塚古墳群　K．八幡林古墳群　L．弥山古墳群　M．狗山古墳群　N．南原古墳群　O．田向古墳群　P．三騎堂古墳群　Q．北原古墳群　R．吉ヶ峯・蟲山古墳群　S．神社丘古墳群　T．峯岸山古墳群　U．伊勢山古墳群　V．阿久山古墳群　W．丸山古墳群　X．天神山古墳群　Y．横俵古墳群　Z．白藤古墳群　a．大沢古墳群　b．近戸古墳群　c．西原古墳群　d．谷津古墳群　e．新山古墳群　f．柳久保古墳群　g．小幡荷古墳群　h．水口山古墳群　i．上縄引古墳群　j．二之塚古墳群

図3　多田山周辺の主な古墳・古墳群および関連遺跡（国土地理院　5万分の1「前橋」を使用）

3　調査史

古くより、「多くの古墳が存在する」といわれてきた多田山は今日までに幾度かの調査を経てきた。（図4）

※

1929（昭和4）年、赤堀村大字今井所在の茶臼山古墳は帝室博物館鑑査官・後藤守一氏らによって調査された。わずか10日あまりの調査ながら、その成果は多大であり、墳丘・埋葬施設の把握と神獣鏡・内行花文鏡・短甲などの副葬品、家形埴輪をはじめとする豊富な形象埴輪群が検出されている。

なお、1933（昭和8）年春には、その報告書『上野国佐波郡赤堀村今井茶臼山古墳』が上梓された。

この調査報告が、多田山丘陵における最初の発掘調査・報告である。

※

1935（昭和10）年、群馬県は県内一斉の古墳分調査を実施した。この調査では、8,423基の古墳が確認されたが、赤堀村（現：赤堀町）でも地元調査員によって333基の分布状況が調査された。その際、多田山も調査が行われ、赤堀村第265号墳（＝中里塚古墳）や赤堀村266号墳（＝多田山15号墳）など、約30基ほどの存在が確認された。なお、この調査成果は翌1936（昭和11）年に『群馬縣古墳概觀』および『上毛古墳総攬』としてまとめられた。

1．赤堀茶臼山古墳　2．赤堀村第265号墳（中里塚古墳）
3．赤堀村第266号墳（多田山15号墳）　4．多田山古墳
5．田向古墳群　6．荒砥村第245号墳　7．見切塚1号墳

図4　多田山における調査古墳分布図

※

1952（昭和27）年と翌1953（昭和28）年、多田山古墳と中里塚古墳は群馬大学教授の尾崎喜左雄氏らによって調査された。うち1953年調査の、中里塚古墳においては、埋葬施設とその関連施設に調査主眼がおかれ、所謂「截石切組積」横穴式石室の調査が本格的に行われ、調査概報（本書に再録）が発行された。なお、この調査に関連し、多田山火葬墓群の調査も行われている。

※

1963（昭和38）年、多田山南端に位置する「田向古墳群」が6世紀後半から7世紀にかけての7基の古墳が調査された。調査成果は、1966（昭和41）年に群馬大学が発行した、『昭和37・38年度における発掘調査』（群馬大学教育学部尾崎研究室調査報告第1輯）に収められている。

※

1980（昭和50）年、多田山東南麓にある荒砥村245号墳が、群馬県教育委員会によって調査された。古式の石室が調査され、導入期の横穴式石室として注目された。その成果は、『荒砥宮原遺跡・荒砥宮川遺跡』（群馬県教育委員会）に収められている。

※

1990（平成2）年、多田山南斜面にある「見切塚1号墳」が赤堀町教育委員会によって緊急調査された。6世紀中ごろの横穴式石室墳であるこの古墳の調査成果は『平成2年度埋蔵文化財調査概報』（赤堀町教育委員会）に収められている。

※

こうした調査歴を経て、その成果を踏まえた上で1998（平成10）年、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団による多田山の調査は始まった。

第２章　　経緯・方法・経過

1　調査にいたる経緯

群馬県企業局と日本道路公団東京第二建設局及び群馬県は、平成８年12月20日に「多田山住宅団地造成事業に関連して施工する北関東自動車道建設事業に掛かる土砂採取と群馬県が施行する県道付け替え事業等に関する基本協定書（以下、「基本協定書」）を締結した。

これにより、前橋市・佐波郡赤堀町・勢多郡粕川村にまたがって存在する多田山丘陵は、その一部が土砂採取対象地となったのである。そして、「基本協定書」第５条に基づき締結された、「「細目協定書」第１条　（２）の２　埋蔵文化財発掘調査　及び第３条　埋蔵文化財調査　事業用地内に・・・・ものとする。」の条文に基づき、対象地内の埋蔵文化財調査を実施することとなった。

本丘陵内には頂上部の平坦面から東に緩斜面をなす赤堀町域側を中心に「中里塚古墳」をはじめとする多数の古墳や「多田山火葬墓群」「見切塚遺跡」などが周知の遺跡として存在していたものの、土砂採取対象地についての協議が具体的に進められていく中で、対象地内にどの程度の埋葬文化財が包蔵されているかについてはその範囲及び内容の具体的な把握が急がれた。こうした経過の中、平成９年２月より、群馬県教育委員会によって対象地内の埋蔵文化財の試掘調査が実施され、その結果、土砂採取予定地324,000㎡のうち、280,250㎡（今井三騎堂遺跡は131,750㎡、今井見切塚遺跡は148,500㎡）において、旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・中世の各時代の遺構遺物を検出した。

そして、平成９年９月24日、群馬県企業局と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は、「平成９年度多田山住宅団地埋蔵文化財埋蔵文化財発掘調査委託契約」を締結した。

これにより、多田山丘陵の埋蔵文化財調査が財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって着手されることとなった。

2　調査区について

遺跡名称について　多田山住宅団地造成事業に伴う埋蔵文化財調査（以下、「多田山調査」）の範囲は、調査区の真ん中を南北に走る尾根によって行政区を前橋市東大室町と佐波郡赤堀町今井に分かれている。このため、遺跡名称に関しては、前橋市教育委員会と赤堀町教育委員会、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で協議をおこない、その結果、赤堀町の地名に基づき命名することとなった。そして、県道・前橋赤堀線を境界とし、その北を「今井三騎堂（いまいさんきどう）遺跡」、その南を「今井見切塚（いまいみきりづか）遺跡」と名付けた。

古墳群の名称について　多田山丘陵の調査における古墳群および古墳の名称については、赤堀町教育委員会と群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で協議を行い、上記２つの遺跡の区別を行わず、一連のものとして呼称することとした。したがって、「多田山○○号墳」となる。

但し、既調査によって古墳名がついているものに関しては、その名称を優先することとした。これに該当する古墳は、「多田山14号墳（調査着手時）→中里塚古墳（報告時）」と「多田山21号墳（調査着手時）→見切塚１号墳（報告時）」の２基である。

グリッドについて　多田山丘陵の調査では324,000㎡の調査区に、共通するグリッドを設置した。（図５）

そのグリッドは　大グリッド（100ｍ×100ｍ）と小グリッド（4ｍ×4ｍ）を基準にしてある。

そして、その表記の方法は、Ｙ座標をアルファベット２文字、Ｘ座標を３桁数字で示し、それを併記することとした（例：「FB－181」）。そして、調査範囲との関係から「ＡＡ－１」をＹ＝－56,380、Ｘ＝41,816とした。

X座標の読み替え公式（数値＝α）

○グリッド名から座標値を求める場合

42,500 －（171 －α）×4＝X座標

{例：α＝181 の場合

42,500 －（171 － 181）×4＝42,540}

○座標値からグリッド名を求める場合

（α－ 42,500）÷4＋ 171 ＝グリッド名

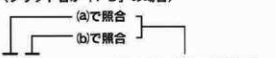
{例：α＝42,540 の場合

(42,540 － 42,500）÷4＋ 171 ＝ 181}

Y座標の読み替え方法

○2つのアルファベットを(a)(b)の相関表に照合させ、その組み合わせで読み替える。

（グリッド名が「F B」の場合）



この場合は「－ 55876」

※座標値からグリッド名を調べるにはこの逆を行えば良い

表1　Y座標読み替え相関表（a）

A⇔－ 563	J⇔－ 554	S⇔－ 545
B⇔－ 562	K⇔－ 553	T⇔－ 544
C⇔－ 561	L⇔－ 552	U⇔－ 543
D⇔－ 560	M⇔－ 551	V⇔－ 542
E⇔－ 559	N⇔－ 550	W⇔－ 541
F⇔－ 558	O⇔－ 549	X⇔－ 540
G⇔－ 557	P⇔－ 548	Y⇔－ 539
H⇔－ 556	Q⇔－ 547	
I ⇔－ 555	R⇔－ 546	

表2　Y座標読み替え相関表（b）

A⇔ 80	J⇔ 44	S⇔ 08
B⇔ 76	K⇔ 40	T⇔ 04
C⇔ 72	L⇔ 36	U⇔ 00
D⇔ 68	M⇔ 32	V⇔ 96
E⇔ 64	N⇔ 28	W⇔ 92
F⇔ 60	O⇔ 24	X⇔ 88
G⇔ 56	P⇔ 20	Y⇔ 84
H⇔ 52	Q⇔ 16	
I ⇔ 48	R⇔ 12	

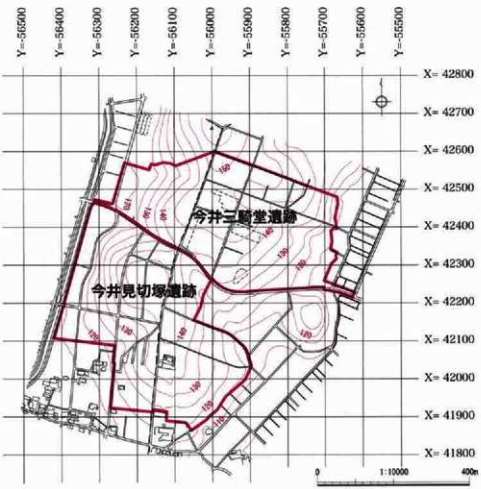


図5　多田山丘陵の遺跡名区分とX・Y座標値（赤線内が調査区域）

3　調査の方針・方法

調査の方針　調査対象となった古墳時代遺構は、古墳21基・埴輪棺３基・石槨墓２基・竪穴１基であった。これらのうち、古墳については墳丘の高まりが明瞭に認識できたり、石室の一部が露出していたりするものが多く、その遺存状況が比較的良好であることが調査着手当初の段階で判明していた。

よって、調査方針として次のことを掲げた。

「各古墳の調査について墳丘および埋葬施設の解体調査を実施することを調査方針とする。」

そして、その目的は、「『構造物としての古墳』の属性を明らかにし、そこから当時の技術や精神性を読み取れるであろう特徴を抽出する」ことにある。

調査の方法　上記の方針に掲げた通り、原則的には全ての古墳について「墳丘及び埋葬施設の解体調査」を実施する体制をとった。

基本となる調査工程は次の通りである。

第１段階　現地形測量・表土の除去
（調査範囲の確定／埋葬施設残存状況の確認）
第２段階　周堀の調査
（周堀および墳丘の形状と規模の確定／出土遺物の記録と取り上げ）
第３段階　墳丘および外表施設の調査
（盛土や外表施設の検出と記録）
第４段階　埋葬施設の調査
（埋葬部の種類や内部構造の確定・副葬品の記録と取り上げ）
第５段階　墳丘および埋葬施設の解体
（古墳築造に関する情報の抽出と記録）

この調査工程は個々の古墳の状況に応じて、工程を追加・割愛している。その点については、後述する、各古墳の調査報告に示してある。

※

なお、古墳以外の遺構調査については、一般的な遺構調査・記録方法をとった。

4　調査の経過

多田山丘陵開発に伴う埋蔵文化財発掘調査は、1997（平成９）年10月、今井見切塚遺跡において開始された。1998（平成10）年４月には、今井見切塚遺跡調査に加えて、今井三騎堂遺跡の調査も開始された。しかし、調査着手から９ヶ月間(1997年10月～1998年６月）は、調査工程上、古墳の分布する地区の調査はなく、旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代の遺構遺物調査のみがが実施された。

古墳時代の遺構・遺物の調査が開始されたのは、1998年７月からであり、まずは今井三騎堂遺跡において着手された。以後1999（平成11）年９月までは今井三騎堂遺跡内、1999年12月から2001（平成13）年８月までは今井見切塚遺跡内、それぞれにある古墳時代遺構・遺物の調査を実施した（表３・４）。なお、この期間中、1999年10・11月の２ヶ月間と2001年３・４月の２ヶ月間、計４ヶ月間は、調査工程の都合上、古墳時代遺構・遺物の調査を中断している。

調査は前述した第１～５段階の方法を基本形として実施した。古墳の残存具合は総じて良好であったが、とりわけ、横穴式石室を有する９基の古墳は、その残存具合が目立って良好であった。この９基の古墳については、石室内調査および墳丘・石室解体調査（第４・５段階調査）が、他の古墳にかかる時間の２倍以上を要した。

今井三騎堂遺跡における調査（表３）　古墳14基、埴輪棺３基、石槨墓１基、竪穴１基を調査した。

古墳については14基中８基（多田山１～７・９号墳）の古墳において、周堀内からの埴輪の出土があった。また７基（多田山１～５・８・９号墳）の古墳からは、計11つの竪穴系埋葬施設が検出され、うち５つは未盗掘の埋葬施設であった。埋葬施設内からは、人骨や副葬品が出土し、慎重な記録および取り上げを必要としたため、調査に時間を要した。

上記の古墳以外では、４基（多田山10・12・13

号墳・中里塚古墳）の古墳おいて、残存状況の良い横穴式石室が検出された。うち、多田山12号墳と中里塚古墳の石室は「截石切組積石室」であり、この形の石室構築の仕組みが精緻で複雑なため、調査には時間を要した。

今井見切塚遺跡における調査（表4） 古墳7基、石槨墓1基を調査した。

古墳7基のうち、見切塚1号墳（調査時名称：多田山21号墳）は平成2年に赤堀町教育委員会によって、周堀および石室内精査（本調査の第4段階の途中までに相当）まで終了しているため、石室内精査の一部と墳丘・石室解体調査のみを実施した。

古墳については7基中6基(多田山15～19号墳・見切塚1号墳）の古墳で、残存状況が良好な横穴式石室が検出されたため、調査（第4・5段階調査)。に時間を要した。とりわけ、多田山15号墳は、本調査における最大規模の古墳であり、「截石切組積石室」を有する有力墳であることも判明したため、調査には最も時間が費やされた。この理由としては、すでに調査された、同規模の有力墳である、多田山12号墳から唐三彩・陶枕が出土していたため、多田山15号墳においても、いくつかの予想される状況において検証に耐え得る調査データを取得できる調査体制をとったため、調査が細密になったことが挙げられる。

	1998（平成10）年						1999（平成11）年									備　考
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
多田山1号墳	1/2/3	4/5														
多田山2号墳		1/2	3/4	4	5											
多田山3号墳	1/2	3	4	4	4	4	5									
多田山4号墳		1/2	2	3/4	4	5										
多田山5号墳	1/2	3/4	4	5												
多田山6号墳			1/2	3/5												(4なし)
多田山7号墳	1/2															(345なし)
多田山8号墳		1/2	3/4	4	5											
多田山9号墳			1/2/3	4	5											
多田山10号墳		1/2/3	4	4/5	5											
多田山11号墳				4/5												(125なし)
多田山12号墳							1/2	2/3	3	4	4			5	5	
多田山13号墳							1/2/3	4		4	5	5				
中里塚古墳							1/2	2/3		4	4	5	5			
多田山1号墳輪郭				調査												
多田山2号墳輪郭				調査												
多田山3号墳輪郭				調査												
多田山1号石槨墓				4												(1235なし)
多田山69号竪穴				調査												
遺跡現地説明会										★						4月18日開催

表3　多田山古墳群調査経過（その1）　1998（平成10）年7月～1999（平成11）年9月

※表中の数字は調査方法の段階を示す

	1999	2000（平成12）年												2001(平成13）年								備考
	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	
多田山15号墳					1/2	3/4	3/4	4	4	4							3/4/5	4/5	5	5	
多田山16号墳	1/2	2/3	3/4/5	4/5	5																
多田山17号墳	1/2	3	3/4							4	4	4/5	5								
多田山18号墳	1	2/3	3/4	4	4	4	5	5													
多田山19号墳						1/2/3	2/3	4	4	4	4	4	5	5							
多田山20号墳						1/2	2/3					1/2		3/5							(4なし)
見切塚1号墳						4	4			4/5	5	5									(123なし)
多田山2号石槨墓									4												
遺跡現地説明会								★													7月15日開催

表4　多田山古墳群調査経過（その2）　1999（平成11）年12月～2001（平成12）年8月

※表中の数字は調査方法の段階を示す

5　整理の方法・経過

報告書作成業務は2000年４月から開始された。

接合・復元を要する遺物は、遺物収納箱200箱分あった。その多くは埴輪であったが、中でも形象埴輪については参考資料に拠り積極的に復元した。

なお、唐三彩・陶枕の取り扱いについては、青木繁男先生（東京国立文化財研究所（当時））にご教示いただき、接合・補強も行っていただいた。

遺物実測は整理担当者および整理補助員が直接行ったほか、機械実測の力も借りた。

遺物・遺構図面のトレースは、全ての図面についてデジタルトレースを採用した（写真１）。

報告書編集作業（版下作成等）は、「写真図版編」に関しては従来型のアナログ版下を作成したが、「本文編」に関しては、デジタル機器を用いた方法を採用し、業務の迅速化を図った（写真２）。

2003（平成15）年９月に入稿し、2004（平成16）年３月に納本となった。

6　普及活動

発掘調査期間中、２度の遺跡現地説明会を開催した。1999月４月18日には435名、2000年７月15日には450名の見学者が、多田山古墳群を訪れた（写真２）。さらには、多田山古墳群の調査内容と成果について綴った「多田山の歴史を掘る」vol．１～３を発行した（写真４）。また、日本考古学協会会員をはじめとする多くの研究者や、赤堀町立赤堀小学校６年生をはじめとする地元住民の見学会も、折りに触れて開催された。

さらに、唐三彩・陶枕は2000年６月～2001年３月の間、文化庁主催の「発掘された日本列島2000」へ出品され、全国７箇所を巡回した。

一方、整理期間中、2002年９月22日には、接合復元が完了した埴輪の展示説明会「多田山のはにわたち　大集合」を開催した。当日は県内外から100名以上の参加を得られた。

写真１　遺物デジタルトレース（提供：株式会社 測研）

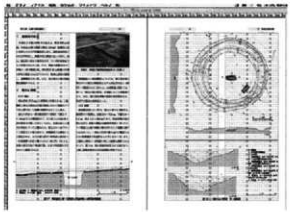


写真２　デジタル編集作業データ

写真３　1999年４月18日開催の現地説明会

写真４　「多田山の歴史を掘る」vol．１～３

第３章　　古墳の調査報告

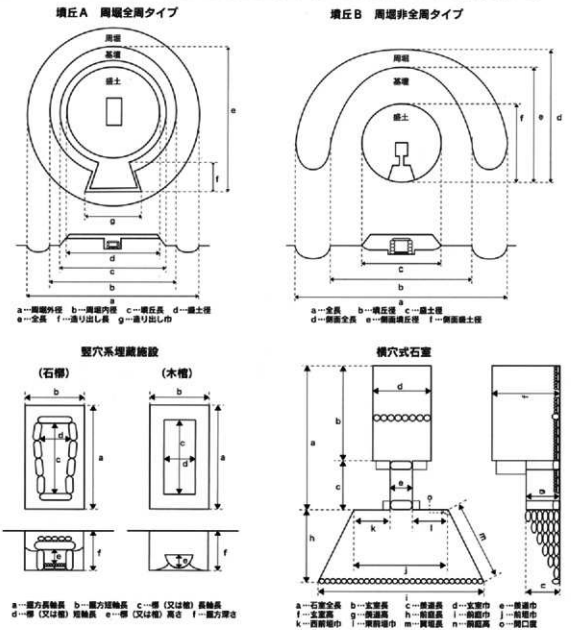
◆古墳の位置と名称について

◇本書で使用する遺構各部位の名称は、図６の名称を、便宜的に用いることとする。

◇石の積み方は「積み方Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」を基準として表記する。

◇今井三騎堂遺跡および今井見切塚遺跡で調査された古墳の、位置は図７の通りである。

◇名称については、同一丘陵上に存在する歴史性を重視し、「多田山○号墳」とした共通名称を用いる。



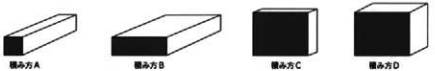


図６　遺構名称模式図（上）／石の積み方模式図

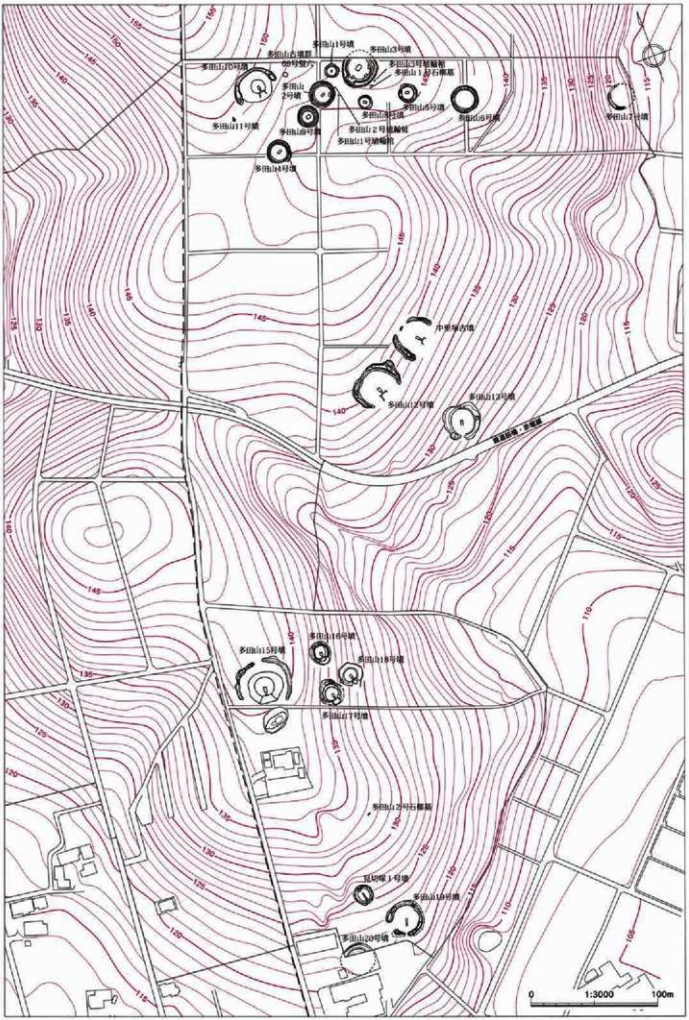


図7　多田山古墳群　古墳および古墳時代遺構配置図

◆基本土層

◇多田山丘陵における基本土層は図８（左）の通りである。本報告に関連する土層のみ示した。

◇本文では「浅間Ｂ軽石」を「Ａｓ－Ｂ」、「二ツ岳パミス」を「ＦＡ」、「浅間Ｃ軽石」を「Ａｓ－Ｃ」と表記する場合もある。

◇基本土層と古墳との標準的な関係は図８（右）の通りである。但し、例外もあるため、その都度記した。

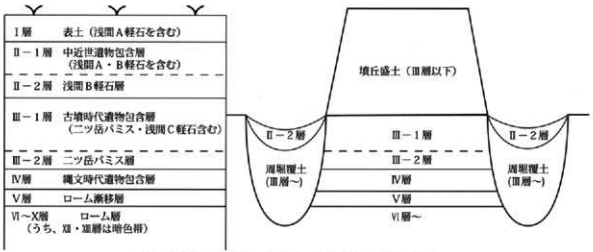


図８　基本土層図（左）／基本土層と古墳との関係図（右）

◆時期区分表

◇今回の調査報告に際し、参考とする時期区分は表５の通りである。

各遺構の時期については、便宜的に「多田山○期（○には０～Ⅵ）を用いることとする。

表５　時期区分表（案）

多田山古墳群時期			０期	Ⅰ期		Ⅱ期		Ⅲ期	Ⅳ期		Ⅴ期		Ⅵ期
須恵器	高坏	短脚１段透孔高坏	○	△									
		長脚１段透孔高坏			○								
		長脚２段透孔高坏				○	○						
		脚無透孔高坏					○	○	○				
		高盤							○		○		
		蓋逆さの高盤											○
	坏蓋	有稜坏蓋	○		○								
		無稜坏蓋				○		△					
		カエリ付坏蓋					○	○	○		○	△	
		端部折曲坏蓋									○		○
	坏身	底部底おこし坏身								○	○	△	
		底部回転糸切り坏身											○
土師器	坏	内斜口縁坏	○		○								
		須恵器坏蓋模倣坏			○		○	○	○				
		脚柱模倣坏							○		○		○
		平底坏											○
	甕	球胴甕	○		○	△							
		長球胴甕					○						
		長胴縦削り甕					○	○					
		長胴縦枠めの削り甕						△	○				
		斜め削り甕								○	○		
		短胴斜枠めの削り薄甕									△	○	○
		武蔵型甕											○
鉄鏃	長頸鏃	片小爪片逆刺鏃	○		○								
		台形鏃	○		○								
		棘形鏃					○	○		○			
		鏃身部開裏失								○			
	無茎鏃	有脚扶一角形鏃				△	○	○		○			
円筒埴輪		半円形透孔	○	△									
		円形透孔	○		○		○						
		底部調整				△	○						
		最高位長化				△	○						
備考			TK47	MT15		TK10		TK43	TK209TK217 飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ平城Ⅰ	平城Ⅱ	平城Ⅲ	平城Ⅳ 平城Ⅴ

多田山１号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・18
3　埋葬主体部・・・・・・・・・・・・・・・20
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・22
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・24

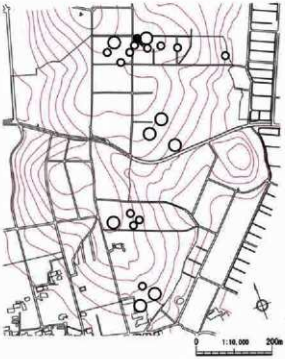


図9　多田山１号墳　位置図

1　調査前

多田山１号墳が存在する地点は、標高146ｍ付近、多田山丘陵の頂部（標高159ｍ）南東に馬の背状にのびる平坦地形面である。

調査前は平坦化しており、古墳の存在を想定できなかった。なお、本墳は上毛古墳総攬記載漏れである。

写真５　平面プラン確認状況（南→）

2　墳丘と周堀（図10）

（1）墳丘

墳丘直径7.5ｍの円墳である。残存状況がよくないこともあり、墳裾部における地山削り出しのテラス面の存在は認められなかった。さらに、墳丘盛土は全く残存していなかった。但し、地山中には純堆積のテフラは確認できなかったものの、ＦＡや浅間Ｃ軽石を含む層が確認できた。

（2）墳丘下面溝

表土除去後、墳丘平面プラン確認時に、墳丘外縁（墳裾部）の内側に、直径約5.0ｍの同心円状の堀り込みが断続的に存在することを確認した。掘り込みは、上幅0.5～0.8ｍ、深さ0.2～0.4ｍ、断面は皿状、覆土にはＦＡや浅間Ｃ軽石が含まれいることが確認された。

調査所見として、この掘り込みを本墳と有機的関係にあるもとの考え、「墳丘下面溝」とした。有機的関係とした理由は、次の通りである。一つ目は、掘り込み形状が、墳丘形状と同心円状であり、両者が連続して形成されたと考えられるからである。二つ目は、覆土にＦＡや浅間Ｃ軽石が含まれているからである。三つ目は、覆土中にベンガラの塊が存在していたからである。

（3）周堀

周堀は、墳丘同様、平面プランはほぼ円形を呈している。底部は平坦であり、周堀内埋葬を思わせるような土坑等の掘り込みは確認されなかった。周堀の規模は上幅1.0～2.0ｍ、深さ0.4～0.6ｍであり、周堀の規模を含めると古墳規模は直径約15.0ｍになる。さらに周堀断面は椀状、覆土にはＦＡや浅間Ｃ軽石が含まれていることが確認された。

（4）周堀内における遺物出土状況

周堀内より出土した遺物は、全て円筒埴輪である。平面分布的には散在しており、特定のエリアに集中する状況は認められない。また、層位的には、全埴輪片が周堀覆土上層の黒色粘質土層（周堀断面C-C'での第１層）からの出土に限定される。

なお、本墳における埴輪樹立については、極めて少量の埴輪樹立を想定している。なぜならば、調査時における埴輪出土が極めて少ないからである。

「墳丘が削平を受け、本来はこれ以上の多くの埴輪が存在していたが失われた」との考え方をし、本墳においても多数の埴輪の存在を肯定する考え方もできなくはない。しかし、この考え方は成り立ちがたい。なぜならば、この種の「初期群集墳」は低墳丘を指向するため、高々とした墳丘を想定するのは無理だからである。さらに、墳丘下面溝の存在は、墳丘築造前の地表面をも示すものであり、埋葬主体部の高さも考慮すると、想定される墳丘は現状の高さからさほど高いものを想定できないのである。

よって、仮に、本墳に埴輪が多数樹立されていたならば、周堀または周辺の表土からもっと埴輪が出ていいはずである。それがないという状況からすれば、やはり埴輪の存在は微量であったとすることが妥当である。

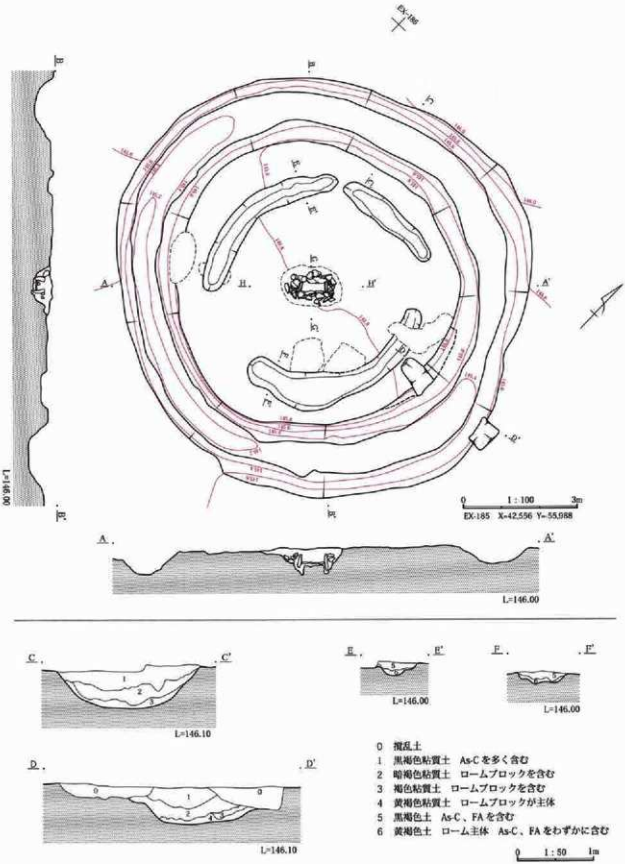


図 10　墳丘（盛土下溝含む）および周堀　平・断面図

３　埋葬主体部

（１）概要（図 11・12）

埋葬施設は、所謂「竪穴式極小石槨」である。検出時は天井は崩落、内部には土砂が流入していた。

規　模　石槨の主軸はＮ－ 45°－Ｗである。石槨の規模は、内法で長軸長 0.62 m、短軸長 0.30 m、残存高は 0.20 mである。

積み方　石材には輝石安山岩の割石を使用し、短側壁は各１枚、長側壁は各２枚を、積み方Ｃで積みあげ、床面には小振りの板状割石（重さ 0.7 ～ 2.7kg）を平置きしている。

赤　彩　赤彩は確認されなかった。

人骨・歯　出土は皆無であった。

副葬品　出土品は皆無であった。

構築方法　墓坑を構築し、その中に石を組み、土石混合の裏込を施すという、当該地域での一般的な「竪穴系埋葬施設」の工法を採用している。

なお、盛土が残存していないため、盛土と埋葬施設との構築の前後関係は把握できなかった。

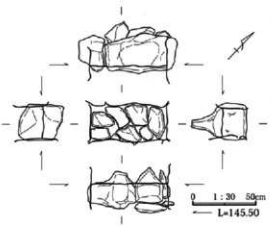


図 11　石槨　展開図

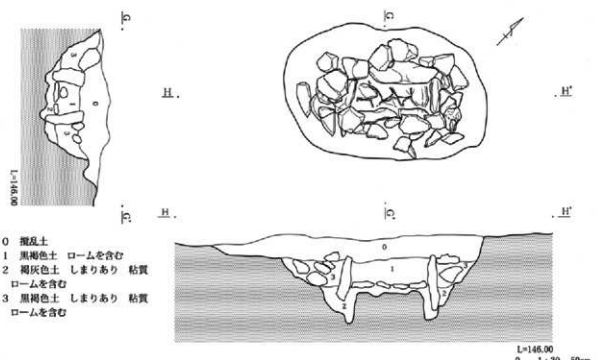
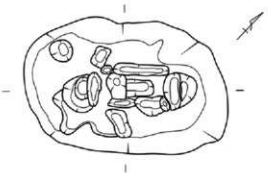


図 12　石槨　平・断面図

（2）解体調査データから復元する構築工程（図13）

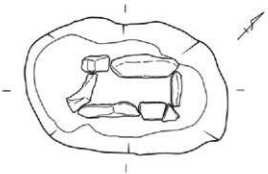
第1段階　墓坑の掘削

墳丘のほぼ中央部に、長軸 1.60 m、短軸 1.00 m、深さ 0.50 m（確認時）の楕円形の墓坑を掘削する。この際、側壁を設置する箇所は布堀状に深く掘削する。なお、調査所見からは墓坑の掘削段階が盛土前か、盛土後かは不明であった。



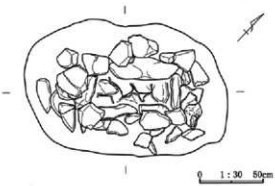
第2段階　長・短側壁の設置

側壁設置の際は、まず、布堀状に深く掘った箇所に粘質土を充填させる。そして、次に、その粘土中に石材を差し込む。差し込みの深度を調整することによって、大きさの異なる石材でも、設置時の上端部のレベルをバランスよく同じに保てる。



第3段階　床石の設置と裏込みの充填

床石は板状石の広い面を上にして並べる。これらの床石の上に、玉砂利は敷かない。裏込には割石と粘質土をランダムに充填させる。



0　1:60　1m　　0　1:30　50cm

第4段階　天井の高架と閉塞

盗掘を受けていたため、調査データは皆無だが、最終段階で、天井を高架し、粘質土等で石槨本体を閉塞したものと、推測される。

図13　石槨構築工程推定図

4　出土遺物

（1）円筒埴輪（図 14・15・表6）

円筒埴輪片は、接合関係をもつものは少なかったが、複数の属性に類似点が多いことから、同一乃至同工の一群資料と考えられる。

規　格　推定規格は全て２条３段構成である。

口径は 21.0 ～ 22.0cm を、底径は 12.0cm 前後を推定できる。器高は良好な推定資料がないのだが、２・３段の段高からあえて推定するならば、28.0 ～ 33.0cm の範疇でおさえられよう。

透　孔　２段目に円形透孔があくと考えられる。

突　帯　断面が緩い台形を呈する。

成整形　全ての資料が、円筒部外面は「タテハケ→口縁部のみヨコナデ」、同内面は「タテナデ→上半部に粗いナナメハケ→口縁部のみヨコナデ」となっている。ハケは２～３本乃至３～４本／ cm の単位の工具と推定される。突帯は上下端のみをナデつけているものが主体をなすが、加えて頂面をナデつけるものもある。

赤　彩　器面への赤彩は、その可能性をもつ１点のみ存在するが、それ以外は皆無である。

底部調整　確認されていない。

線　刻　外面３段に「一」？が１点ある。

胎　土　混入物の多い、粗い素地の胎土である。

混入鉱物・粒子には、石英・輝石または角閃石・チャート・赤褐色・白色・黒色粒子・軽石など多田山古墳群の埴輪に一般的に混入するものを含むのみであり、片岩や骨針は含まない。

焼成・色調　色調は橙色を呈し、焼成はやや甘い。

（2）形象埴輪・土器

形象埴輪・土器類は、出土していない。

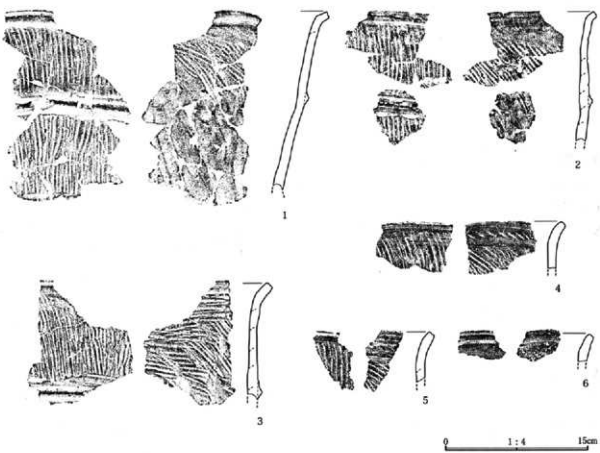


図 14　円筒埴輪（1）

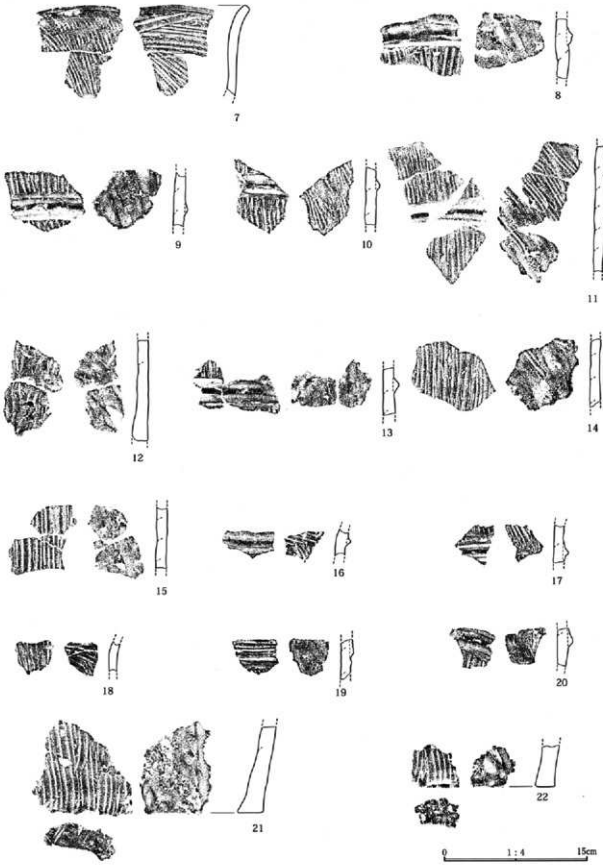


図15　円筒埴輪（2）

多田山１号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号　**種類**…円筒⇨普通円筒　**器高**…－⇨不明　**口径**…口縁部の直径※斜体数字は復元径　**底径**…底部の直径※斜体数字は復元径
調整（外面）…A⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　a⇨「タテハケ」(aは、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載)
調整（内面）…A⇨「タテナデ→上半粗いナナメハケ→口縁付近ヨコナデ」　a⇨「タテナデ」　b「タテナデ→上半ナナメハケ→・・・」
(a・bは、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載)　**ハケメ**…幅10mmあたりのハケメの本数
突帯…A⇨断面が台形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　B⇨断面三角形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　C⇨断面三角形＋丁寧な仕上げナデを上端のみ施す。下端は簡略的な仕上げナデ　**透孔**…A⇨円形の可能性高い
線刻…○⇨あり　×⇨未確認　線刻の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外３⇨外面３段目　「形」は、描かれた形を掲載。
色調…A⇨橙色　**出土位置**…「周堀」のみ　**備考**…その他、特記事項を記載。

表6　円筒埴輪観察表

番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	刷毛 (本)	突帯	透孔	線刻 有無	線刻 内容	底調	色調	接合	備考
1	普通	-	*21.0*	-	A	A	3～4	B	-	×		-	A	周堀	-
2	普通	-	*22.0*	-	A	A	3～4	B	-	×		-	A	周堀	-
3	普通	-	*22.0*	-	A	A	3～4	B	-	×		-	A	周堀	-
4	普通	-	-	-	A	A	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-
5	普通	-	-	-	A	A	2～3	-	-	○	外3/－	-	A	周堀	-
6	普通	-	-	-	A	A	不明	-	-	×		-	A	周堀	3号墳の埴輪似
7	普通	-	*22.0*	-	A	A	3～4	-	-	×		-	A	周堀	-
8	普通	-	-	-	A	a	2～3	A	-	×		-	A	周堀	-
9	普通	-	-	-	a	a	2～3	B	-	×		-	A	周堀	-
10	普通	-	-	-	a	b	2～3	A	A	×		-	A	周堀	-
11	普通	-	-	-	A	A	2～3	C	-	×		-	A	周堀	-
12	普通	-	-	-	a	a	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-
13	普通	-	-	-	a	a	2～3	C	-	×		-	A	周堀	-
14	普通	-	-	-	a	b	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-
15	普通	-	-	-	a	a	2～3	-	A	×		-	A	周堀	-
16	普通	-	-	-	a	b	不明	B	A	×		-	A	周堀	-
17	普通	-	-	-	a	a	2～3	B	A	×		-	A	周堀	-
18	普通	-	-	-	a	b	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-
19	普通	-	-	-	a	a	不明	A	-	×		-	A	周堀	*タガの頂面面取り*
20	普通	-	-	-	a	a	2～3	A	A	×		-	A	周堀	-
21	普通	-	-	*12.0*	a	a	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-
22	普通	-	-	*12.4*	a	a	2～3	-	-	×		-	A	周堀	-

5　まとめ

調査・整理により、この古墳に関して得られた遺構に関する主な情報は次の４点である。

①墳丘径が７．５ｍの円墳であること。

②輝石安山岩の剥石を用いた「竪穴式極小石槨」を埋葬施設としていること。

③墳丘盛土は残存しないが、その直下の地山中にはＦＡや浅間Ｃ軽石を含む層が確認できること。

④周堀内にはＦＡの堆積が認められないこと。

また、遺物に関する主な情報は次の３点である。

⑤円筒埴輪の形態は、２条３段構成、円形透孔(推定)のものであること。

⑥円筒埴輪の外面の成整形はタテハケのみであり、底部調整・赤彩は施されていない。

なお、調査・整理を経ても得られなかった情報は次の３点である。

⑦墳丘盛土に関すること。

⑧形象埴輪の存在に関すること。

⑨埋葬者や供伴する副葬品に関すること

これらのことから次の位置づけができる。

多田山１号墳は「群集墳」内に認められる小円墳の属性（①②）を有している。築造年代に関しては、出土した円筒埴輪片の特徴（⑤⑥）から多田山Ｉ期と推定する。このことはＦＡとの関係（③④）とも矛盾しない。

つまり、この古墳は、所謂「初期群集墳」の中に存在する小規模円墳と位置づけることができる。

多田山２号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・26
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・26
3　第１主体部・・・・・・・・・・・・・・・30
4　第２主体部・・・・・・・・・・・・・・・34
5　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・38
6　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・62

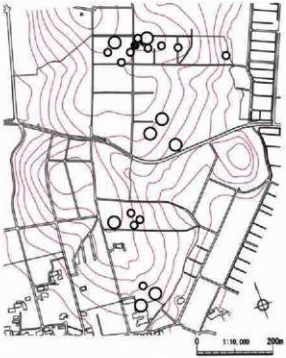


図 16　多田山２号墳　位置図

1　調査前

多田山２号墳が存在する地点は、標高 145 m付近、多田山丘陵の頂部（標高 159 m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面にある。調査前の状況ではほぼ平坦化し、南北方向に農道が走っていた。故に、墳丘状の高まりも存在せず、その存在を想定できる状況ではなかった。だが、事前の試掘において周堀の一部が確認され、墳丘直径 20 m程度の円墳の存在が想定された。そのため、慎重に表土を掘削し、遺構確認を行った。なお、本古墳は上毛古墳総攬記載漏れである。

2　墳丘と周堀

（1）墳丘（図 17・18）

墳丘直径 15.5 m、二段築成の円墳である。二段築成と考えた理由は、墳丘裾部において地山をテラス状に削り出した痕跡が観察できたことによる。

盛土の存在は一部（農道直下の部分）で厚さ 5 ～ 10cm ほどが確認された。その直上には As-B を含む黒色土が覆っていることから、本来はさらに盛土が存在していたと思われる。盛土はロームブロックと黒色土との混土であり、周堀掘削土を利用したと想定される。また、盛土直下の旧地表には FA の一次堆積層の存在が認められた（図 17）ことから、本墳の盛土行為が FA 降下後、あまり時間差なく行われたと推測される。

写真６　周堀及び埋葬施設確認状況（南東→）

埋葬施設との新旧関係については、第１主体部の埋土がこの盛土を断ち切るように存在すること（図 17）が確認されたことから、古墳築造に際しては、第一に「墳丘の盛土行為」を実施したことが推測できる。なお、墳丘部に埴輪の基部が原位置のまま、残存する資料は皆無であった。

（2）周堀（図 18）

調査確認面においては、墳丘の周りを全周する。調査時での規模は、上幅 3.0 ～ 5.0 m、下幅 0.8 ～ 1.2 m、深さ 1.0 ～ 1.4 mであり、断面形状が逆台形を呈する。周堀の底面は比較的平坦化していたが、その底面には張り床状の埋め戻しをした痕跡は認められなかった。一部に土坑状の掘り込みが確認されたが、埋葬施設と特定するには至らなかった。また、土橋状に周堀の一部を掘り残した痕跡は検出されなかった。覆土は、黒・暗褐色粘質土が主体であり、上層に As-B の一次堆積層が存在する。

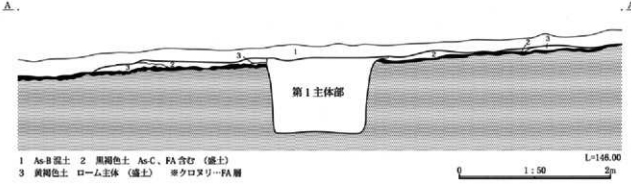
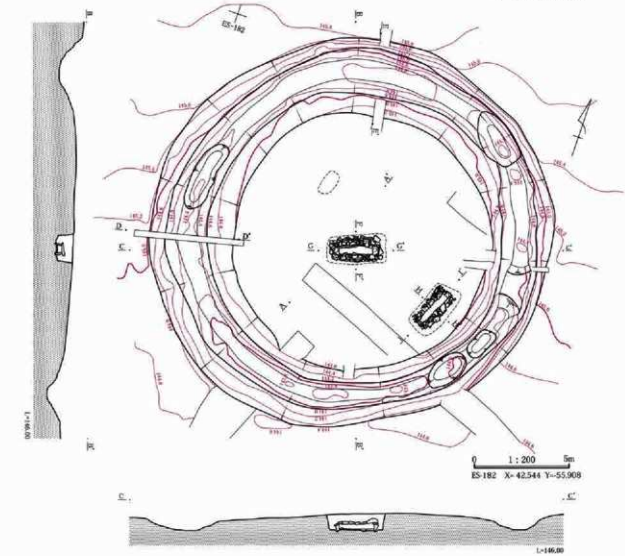


図 17　墳丘盛土・第１主体部と旧地表面との層位的関係図



0　撹乱土
1　As-B 混じり黒色土
2　As-B 層
3　黒色粘質土　FA（または As-C）を含む　ハニワが多量に含まれている
4　黒褐色粘質土　FA（または As-C）を含む　ハニワが含まれている
5　暗褐色粘質土　FA（または As-C）をわずかに含む
6　暗褐色粘質土　FA（または As-C）を含む　ロームブロックを含む
7　褐色土　ロームを含む。FA（または As-C）をわずかに含む
8　黄色土　ロームブロックを多く含む

0　1:50　2m

図 18　　墳丘および周堤　平・断面図

（3） 周堀内における遺物出土状況（図 19・20）

周堀内からは多量の埴輪片と少量の土器片・石製品が出土している。

埴輪の出土状況　出土した埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。

円筒埴輪は全て２条３段のものであり、70 本以上の個体が破片となって出土した。朝顔形埴輪は規格の統一性は不明だが、８本以上の個体が破片となって出土した。

形象埴輪は、人物と馬の破片が出土した。接合ともに２体づつ、個体識別ができる。人物・馬以外では、陰茎形と鳥形があるが、これらも人物や馬の一部に取りつくものと考えられる。

ところで、これら各種埴輪の出土状況には共通点と相違点がある。

まず、共通点は層位分布に認められる。全埴輪片がAs-B 層直下の黒色粘質土層（周堀断面Ｄ・Ｅでの第３・４層）に出土が集中している、という点である。この層は周堀底面から 0.6 ～ 1.4 m の高さに認められる層であり、墳丘裾に存在する「テラス面」の上層にも相当する高さにある（ちなみに、周堀底面からの埴輪片の出土は皆無であった）。

一方、相違点は平面分布に認められる。円筒埴輪・朝顔形埴輪は、平面分布的にはエリアⅠ～Ⅷの全てから出土しているが、形象埴輪はエリアⅢ～Ⅴからの出土に限定されるのである。さらに、これらの接合関係に関しては、円筒埴輪・朝顔形埴輪の場合、一個体の接合は同一・隣接エリアの資料に限らず、複数の遠隔エリアの資料についても認められた（なお、形象埴輪の場合は、出土エリアが限定されるため、自ずと接合も同一・隣接エリアに限定された）。

こうした出土状況と接合関係を考え合わせると、

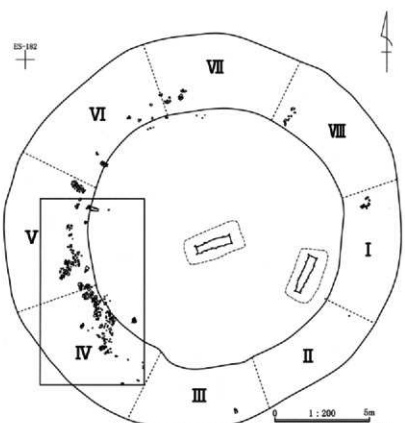


図 19　周堀内における遺物分布図

以下のことが推定される。

円筒埴輪・朝顔形埴輪については、出土分布の状況から本来の樹立位置を復元することは難しい。なぜならば、どれか1つの個体資料をとってみても、その接合資料の分布範囲が複数のエリアにわたっているからである。なお、このような分布状態になった理由としては、埴輪の原位置からの転落以外に、何らかの原因が加わったことが考えられる。この点に関しては、埴輪破片がAs-B層下の黒色土中から集中して出土することも何か示唆的である。

形象埴輪については、層位・出土位置・接合関係がいずれもまとまりを持つこと（図20）から、おおよその位置を推定することは可能である。それによれば、「人1と馬2」、「人2と馬1」の位置的関係性が認められる。さらに、この関係性は、各形象埴輪の属性からみても、その組み合わせに有機的関係を見いだすことができる。

土器の出土状況　土器は土師器・甕（器－1）、鉢、（器－2）、坏（器－3～5）が出土した。器－1～5全てが平面分布ではエリアⅢから出土した。ところが、層位分布では器－1～4は暗褐色粘質土層（周堀断面C・Dでの第5・6層）から、器－5は黒褐色粘質土層（前述した埴輪片包含層）から出土した。前者の暗褐色粘質土層は周堀底面から0.1～0.6 mの高さに存在する層であり、黒褐色粘質土層（前述した、埴輪片包含層）より下層に位置する。

石製品の出土状況　滑石製紡錘車（石－1）が1点出土した。平面分布的にはエリアⅣからの出土であり、層位分布的には黒褐色粘質土層（前述した、埴輪片包含層）からの出土である。

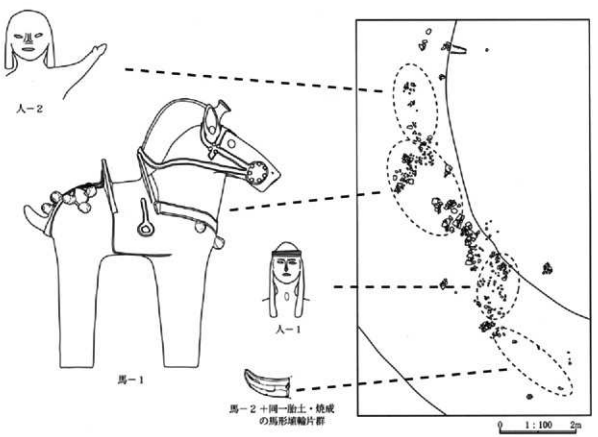


図20　形象埴輪の詳細出土分布図

３　第１主体部

（１）概要（図 21・22）

第１主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

遺構確認面　確認面はわずかに残存した盛土面であり、その面において長軸 3.0 m×短軸 1.5 mの長方形の平面プランが確認され、墓坑の存在を認識した。覆土には粘性の強い、ローム混じりの暗褐色土が一面に使用され、その状況から完全未盗掘であることを確信した。

規　模　石槨の長軸はＮ－60°－Ｅである。石槨の内法は、長軸 1.75 m、短軸 0.35 ～ 0.40 m、高さ 0.25 ～ 0.30 mである。短軸長は東側のほうが僅かに広く（0.40m）、西側のほうが短い（0.35 m）。

石　材　石材は全て輝石安山岩の割石を用いている。いずれも板状の石材で大きさは様々だが、厚さはほぼ 10cm 程度に揃っている。

積み方　石材はいずれも板状石材の最も広い面を立てるようにして設置している（積み方Ｃ）。短側壁は各１枚、長側壁は北壁は４枚、南壁は６枚を縦置きし、床面には６枚（9.2 ～ 13.6kg）を平置きし、小石で間詰めをしている。

天井石は計６枚である。大きさは、最東端（頭部上）の 147.0kg を最大、最西端（足部上）の 15.2kg を最小にと、様々であるが、幅 0.6 ～ 0.75 mの長さの部分を高架させている点は共通している。

裏込めは、輝石安山岩の小振りの割石と白色粘土をふんだんに使い、養生している。特に白色粘土は、まるでパテのように石と石との間を埋めている。

閉　塞　閉塞は上下２重に行われていた。第１の閉塞（下層の閉塞）は輝石安山岩の割石と白色粘土を用いた閉塞である。天井石のすき間を割石で塞ぎ、さらにそのすき間を白色粘土で埋めていた。第２の閉塞（上層の閉塞）は粘質土を用いた閉塞であり、粘性の強い、ローム混じりの暗褐色土を用いて、墓坑を完全に埋めていた。

赤　彩　長・短側壁及び全ての天井石にベンガラが塗布されていた。長・短側壁への塗布は、地中に埋まった箇所に塗布が確認できないことから、壁面構築後に行われたものと思われる。天井石への塗布は、高架以前に内面のみに行ったものと思われる。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混合の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域での一般的な工法を採用している。

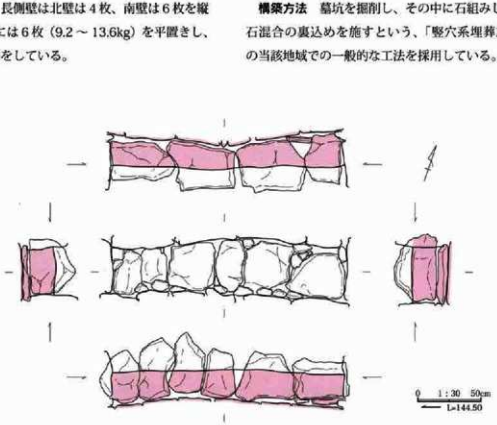


図 21　第１主体部　展開図

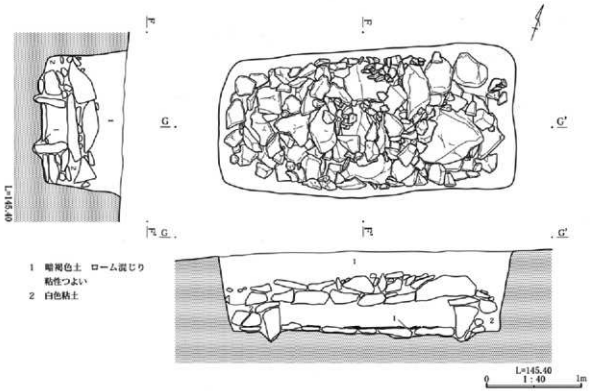


図 22　第１主体部　平・断面図（閉塞時）

（2）遺物出土状況（図 23）

人骨・歯　人骨１体が出土した。残存状況は悪く、頭蓋骨片・歯・下肢骨片が僅かに出土したのみである。頭位はＮ－60°－Ｅである。田中良之教授による、「性別不明の成年後半から熟年」との鑑定結果を得ている。

副葬品　被葬者の左腕付近の左脇から刀１・刀子１が出土した。

刀（鉄－１）は全長 52.2cm、刀部を南東（遺体と反対側）に、切先を南西に向けて床面に置かれていた。刀身と鞘尻金具のみが残存していた。また、刀子（鉄－２）は刀身全長が 14.2cm、刀部をほぼ南に、切先をほぼ西に向けて、刀の上に重ねて、置かれていた。

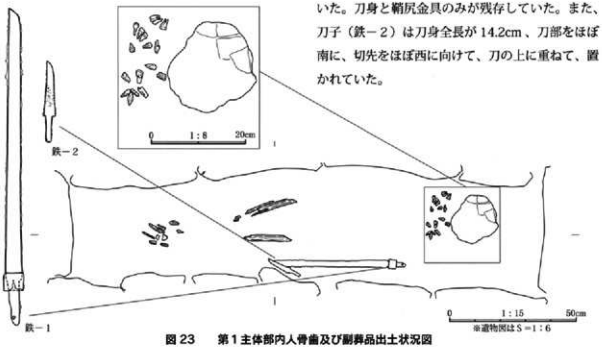


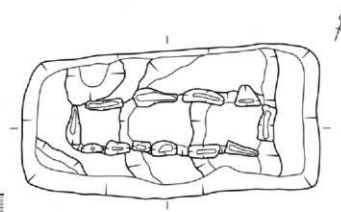
図 23　第１主体部内人骨歯及び副葬品出土状況図

(3) 解体調査データから復元する構築工程（図 24・25）

第１段階　墓坑の掘削

墳丘のほぼ中央部に、長軸 3.00 m、短軸 1.50 m、深さ 0.90 m（確認時）の隅丸方形の墓坑を掘削する。この際、側壁を設置する箇所については、若干の掘り窪めをさらに行った可能性もある。

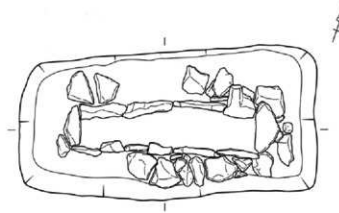
なお、墓坑の掘削は墳丘の盛土後に行われたと推定している。



第２段階　長・短側壁の設置

側壁の設置は、まず、短側壁用の板石を差し込む。その後、長側壁用の板石を東側から順に差し込む。なお、側壁設置のための明瞭な布掘りは認められないことから、側壁用の石材は打ち込まれたものと推定する。

さらに、側壁の裏側には抑えの石材（鉢石安山岩の割石）をあてがう。



第３段階　床石の設置

床石を東側から順に敷いていく。まず、大振りの板石を敷き、その隙間を小振りの板石で詰める。そしてさらに、その隙間に白色粘土を詰める。なお、床石の設置にあたっては、その直下に白色粘土を敷いたり、床石の上に、玉砂利を敷くような行為はしていない。

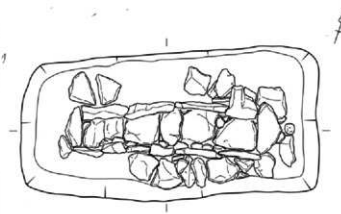


図 24　第１主体部　構築工程推定図（1）

第4段階　裏込めの充填と石槨内への赤彩

墓坑と石槨の隙間には輝石安山岩の割石と白色粘土を用いて、側壁高と同一レベルまで裏込めする。また、各側壁高の高さ調整には低い箇所へ板状の石材を平置き（積み方B）することによってバランスを保つ方法を採用する。また、石槨内には全側壁面に赤色顔料を塗布する。ちなみに、床面には塗布しない。

遺体及び副葬品はこの段階で納められる。

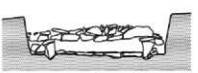
第5段階　天井石の高架

天井石は、まず、石材下面（槨内に向く面）にベンガラを塗布し、その後、東側から順に高架させる。

第6段階　天井の閉塞

高架した天井石には隙間が多いため、その隙間を埋めるために、輝石安山岩の小振りの割石でその箇所を閉塞する。さらに、白色粘土で、隙間を埋め、完全密閉する。白色粘土は多量に使用する。

この後、黒色粘質土で墓坑全体を閉塞する。



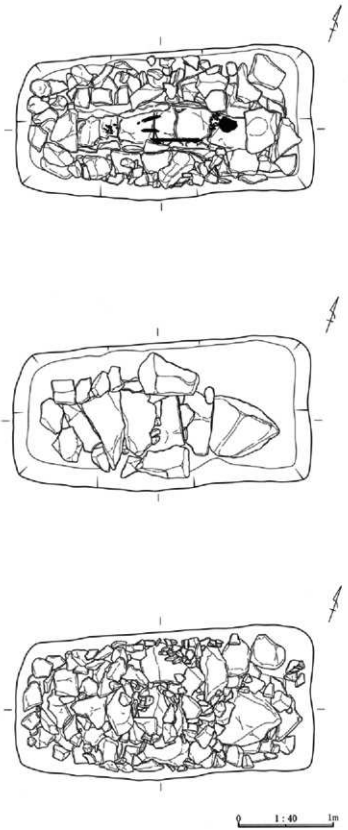


図25　第1主体部　構築工程推定図（2）

４　第２主体部

（１）概要（図 26・27）

第２主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

遺構確認面　確認面は盛土が失われた地山面であり、その面において長軸 3.00 m、短軸 1.50 mのやや不正形の隅丸方形の平面プランが確認され、墓坑の存在を認識した。覆土には砂質の、ローム混じりの暗褐色土が一面に使用され、一部には天井閉塞石が露出している状態であった。

規　模　石槨の長軸はN－23°－Eである。石槨の内法は、長軸 2.00 m、短軸 0.36 ～ 0.56 m、高さ 0.32 ～ 0.38 mである。短軸長は北側のほうが広く（0.56m）、南側のほうが短い（0.36 m）。

石　材　石材は全て輝石安山岩の割石を用いている。北短側壁と北側天井石は厚さ 30cm 程のブロック状の石材を用いているが、その他はいずれも厚さ 10 ～ 18cm の板状の石材を用いている。

積み方　北側壁はブロック状石材を安定よく据える積み方（積み方Ｄ）を用いている。他の３つの側壁では、板状石材の最も広い面を立てる積み方（積み方Ｃ）を主に採用し、部分的には別の積み方（積み方Ａ・Ｂ）を用いている。床面には多数の板石（0.2 ～ 3.6kg）を平置きしているが、北側ほど大振りの石を用い、南にいくに従って、石のサイズが小さくなる状況が顕著にうかがえる。

天井石は計５枚である。大きさは、最北端（頭部上）の 81.3kg を最大、最西端（足部上）の 33.2kg を最小にと、様々であるが、幅 0.62 ～ 0.80 mの長さの部分を高架させている点は共通している。

裏込めには、白色粘土や礫はあまり用いず、ローム混じり土を主体的に用いている。

閉　塞　閉塞には、輝石安山岩の割石と白色粘土を用いている。まず、大振りの割石（30.0 ～ 45.5kg）を天井石の合わせ目の上に置き、その後、小振りの割り石ですき間を塞いでいる。そして、その上を白色粘土で完全にすき間を塞いでいる。なお、このあとに第１主体部のような粘質土を用いた閉塞があったと推測されるが、調査においてはそれを示す痕跡は認められなかった。

赤　彩　赤色顔料の塗布は認められなかった。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混合の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域での一般的な工法を採用している。

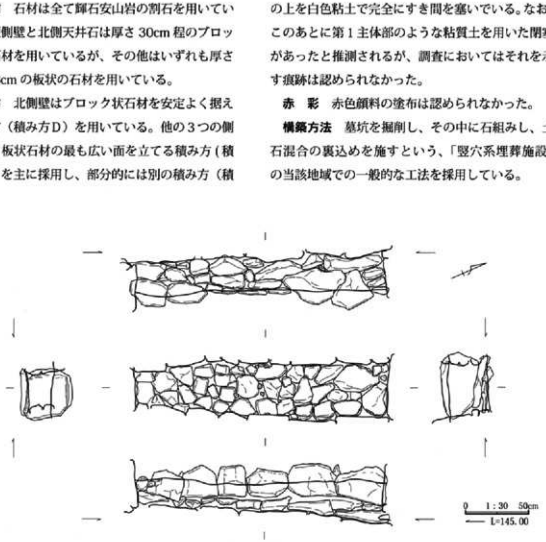


図 26　第２主体部　展開図

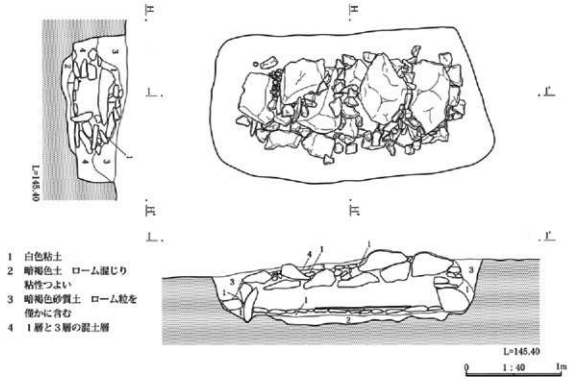


図 27　第2主体部　平・断面図（閉塞時）

（2）遺物出土状況（図 28）

石槨内には多量の土砂が流入していたため、検出時には内部の土砂も全て節にかけながら、出土遺物の検出に努めた。

人骨・人歯　検出は皆無であった。

副葬品　被葬者の左腕付近の左脇から大刀1・無茎鏃1が出土した。刀（鉄－3）は全長100cm、刀部を北西（遺体の方に向く方向）に、切先を南西に向けて床面に置かれていた。刀身のみが残存していた。また、鏃（鉄－4）は正確な位置は不明だが、刀周辺の覆土の中から出土した。

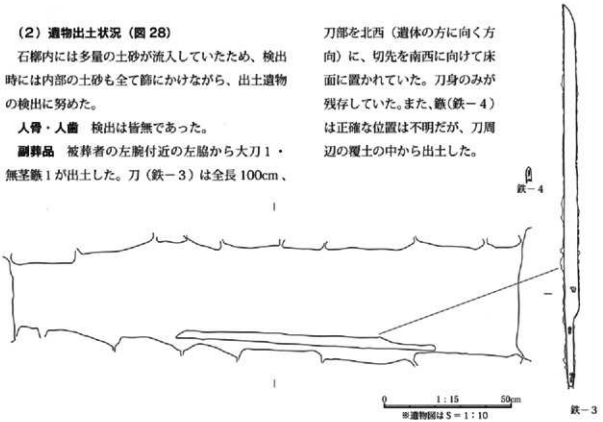


図 28　第2主体部内副葬品出土状況図

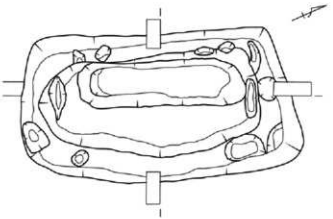
(3)　解体調査データから復元する構築工程（図 29・30）

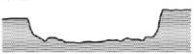
第１段階　墓坑の掘削

墳丘内の西端、墳裾に近い位置に、長軸 3.00 m、短軸 1.50 m、深さ 0.70 m（確認時）のやや不正形の隅丸方形の墓坑を掘削する。

墓坑の形態が東辺（右図では下辺）がやや湾曲気味で、北辺（右図では右辺）が斜位になっているのは、本墳の形態（円墳）の墳裾に制約された結果と考える。

なお、墓坑の掘削は墳丘の盛土後に行われたと推定している。

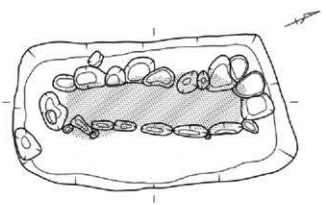




第２段階　粘土床の構築

墓坑の底面全体には、ローム混じりの粘質土を張り、床を水平に整形する。その後、石槨を構築する箇所（右図のトーン箇所）に、粘土床として、白色粘土を２～３cm の厚みで敷く。

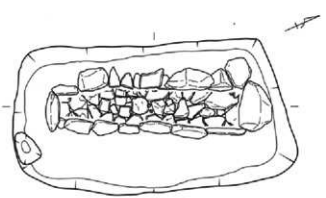
なお、この際、石槨の側壁用材設置のための布掘りがされた可能性は低い。



第３段階　側壁・床石の設置

前段階で敷かれた粘土床上に、石槨の側壁用材と床用材を設置する。

なお、設置の順は、側壁→床石の順である。長側壁は下段を積み方Ｃとし、それ以上を積み方Ｂとする。床石は小振りの板石を敷き詰める。



0　1：80　2m　　0　1：40　1m

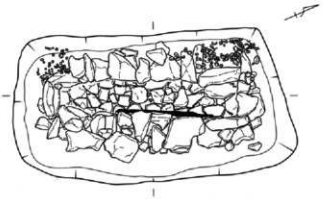
図 29　　第２主体部　構築工程推定図（1）

第4段階　裏込めの充填

墓坑と石槨の隙間には輝石安山岩の割石と白色粘土を用いて、側壁高と同一レベルまで裏込めする。白色粘土はふんだんに使われ、石と石との間に多量に詰め込まれている。なお、極めて限定的に小円礫を敷いた状況も認められる。

石槨内の赤色顔料の塗布はしない。

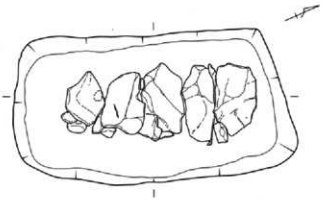
副葬品はこの段階で納められる。遺体の埋葬もこの段階と考えられる。



第5段階　天井石の高架

天井石は、北側から順に高架させる。

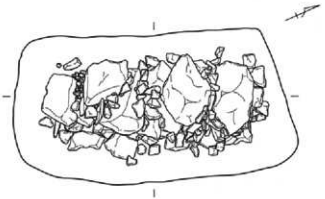
なお、下面への赤色顔料の塗布はしない。



第6段階　天井の閉塞

高架した天井石には隙間が多いため、その隙間を埋めるために、輝石安山岩の小振りの割石でその箇所を閉塞する。さらに、白色粘土で、隙間を埋め、完全密閉する。白色粘土は多量に使用する。

この後、粘土とロームを含む砂質土で、墓坑全体を閉塞する。



0　1:80　2m　　0　1:40　1m

図30　第2主体部　構築工程推定図（2）

5　出土遺物

（1）円筒埴輪・朝顔形埴輪（図 31 ～ 41・表 7・8）

円筒埴輪は接合により 60 本以上、朝顔形埴輪は８本の存在が確認された。各属性は次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全て２条３段構成である。

法　量　器高は 28.8 ～ 36.2cm の範囲にあるが、33cm 前後のものが多い。

口径は 18.4 ～ 23.0cm の範囲にあるが、19.0cm 前後のものと 22.0cm 前後のものとの２つにまとまりが認められる。

底径は 8.5 ～ 14.0cm の範囲内にあるが、11.0 ～ 12.0cm のものが多い。

技法の特徴　外面調整については「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」と、「全面を板ナデ後、口縁部のみにヨコナデするもの」の２種類が認められる。全体の９割以上は前者であり、後者は極めて客体的に存在する。

内面調整については、「全面をタテナデし、最後に口縁をヨコナデする」という工程は全資料に共通する基本工程である。だが、中間工程において差違が認められ、「全面にタテナデを施した後、同じくほぼ全面にハケを施し、最後にヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケ、再度ナデを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、口縁をヨコナデするもの」の４種類に大別できる。うち、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」が主体的に存在する。なお、これらは、ハケやナデの方向や工具の差違によってさらに細分も可能である。

突　帯　断面形には「台形」、「三角形」、「扁平な台形」の３種類がある。主体的な存在は「三角形」であるが、特に前二者は混在することが多々認められる。また、突帯の器面へのナデつけには「仕上げナデ（突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を「上端・下端とも施すもの」、「上端のみに施すもの」「施さないもの」の３種類がある。主体的な存在は「上端のみに施すもの」であり、この属性については混在するものは少ない。

なお、突帯を貼り付ける位置（高さ）は１条の突帯においても一定していない場合がある。

透　孔　「半円気味の円形」と「円形」の２種類がある。主体的な存在は「円形」である。但し、「円形」とはいうものの、雑なものが多く、器壁を切り抜く際の刀子痕が確認できるものも少なくない。

線　刻　多種の線刻が認められる。外面３段には「＝」「－」「○」「～」「×」、外面２段には「－」がある。また、内面上位には「｜｜」「×」「＃」「＝」「｜｜」」「－」、内面中位には「＼」がある。

底部調整　内面を削るものが稀に認められる。

色調・焼成　色調には「黄橙色系」「橙色系」「黄褐色系」「灰白色系」「赤褐色系」がある。焼成には「硬質な焼き上がり」と「軟質な焼き上がり」とあるが、後者の方が多い。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石・角閃石が含まれているほか、白色粒子（軽石？）・長柱状黒色結晶（長石？）の混入が目立つ。なお、片岩や骨針化石が認められるものも稀にある。

B．朝顔形埴輪

規　格　円筒部には、２条３段構成のものと３条４段構成のものがある。朝顔部には突帯が１条つく。

法　量　器高 45.2 ～ 45.8cm 、口径 29.3 ～ 36.0cm 、底径 12.0 ～ 12.7cm を計る。

技法の特徴　外面には「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面には「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁にヨコナデを施」している。

突　帯　断面・台形で、上下に仕上げナデを施す。

透　孔　円形である。

線刻・底部調整　ともに認められない。

色調・焼成　色調は橙色であり、硬い焼成である。

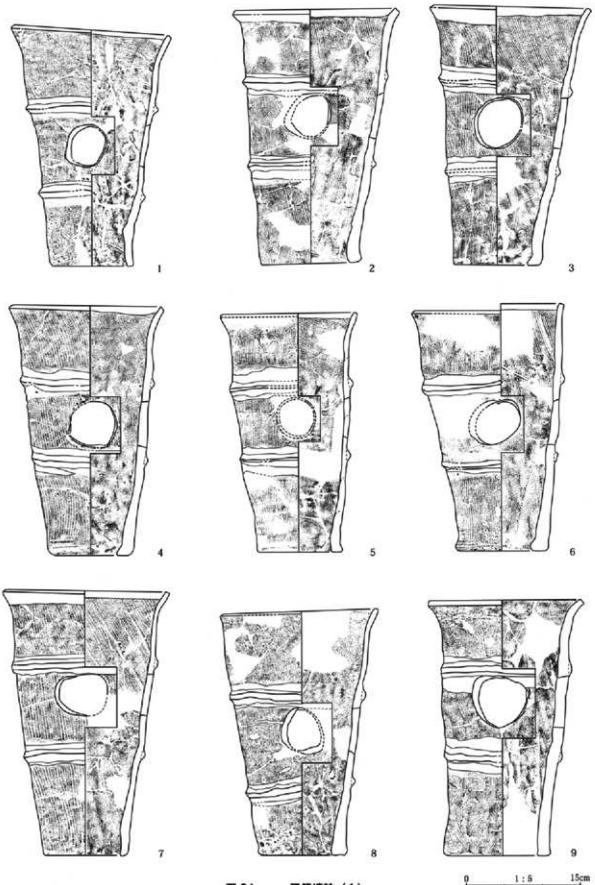


図 31　　円筒埴輪（1）

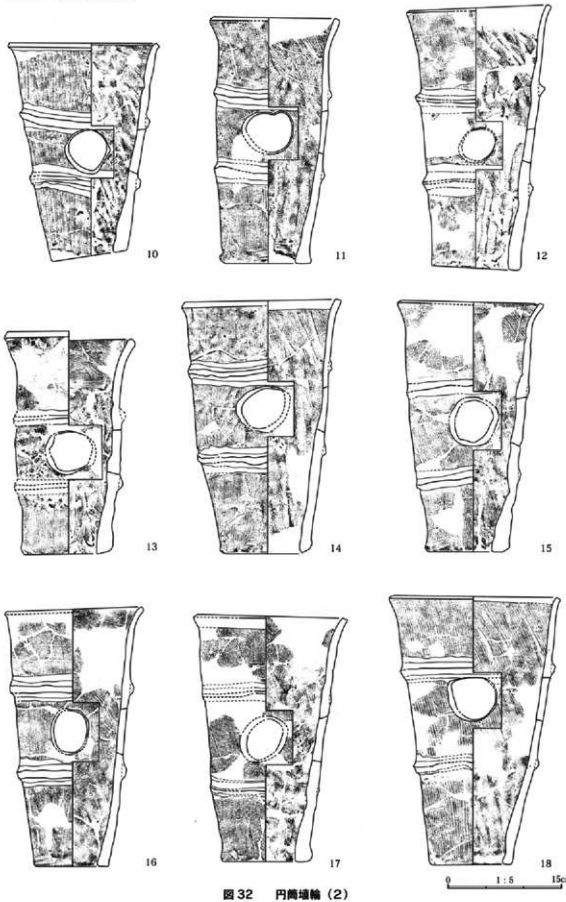
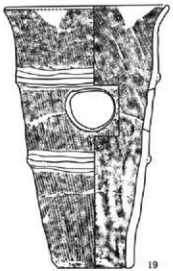
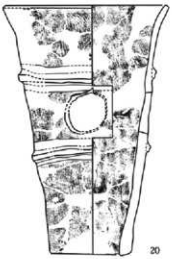
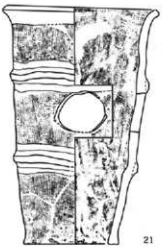
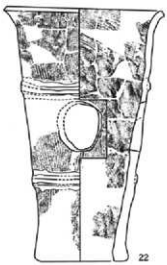


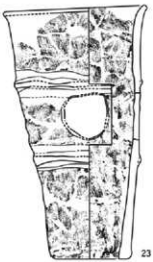
図32　円筒埴輪（2）

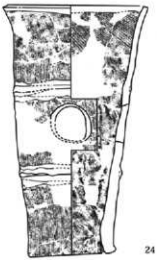


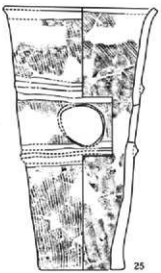












0　1:6　15cm

図33　円筒埴輪（3）

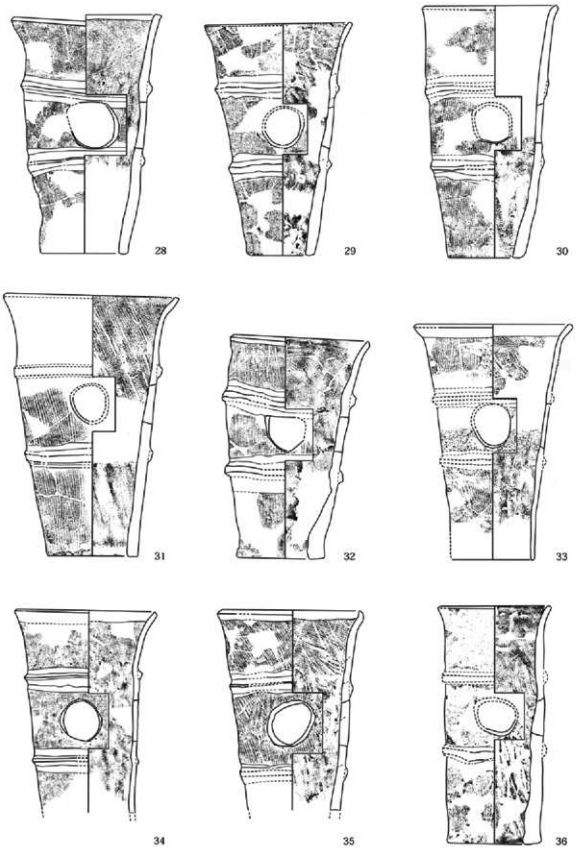


図34　円筒埴輪（4）

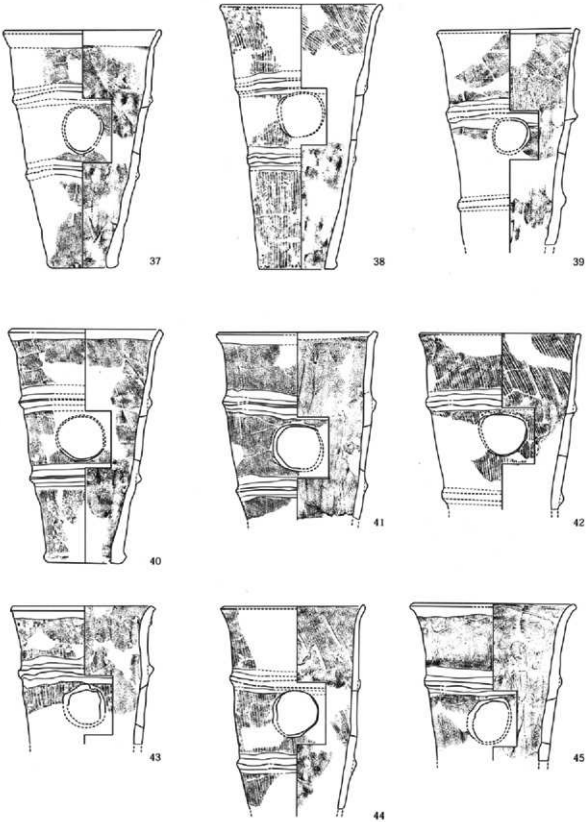


図35　円筒埴輪（5）

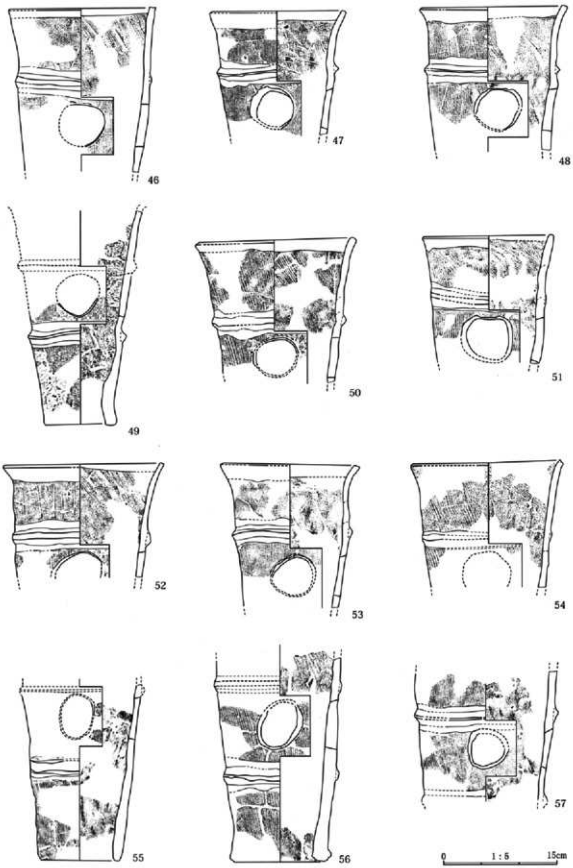


図 36　円筒埴輪（6）

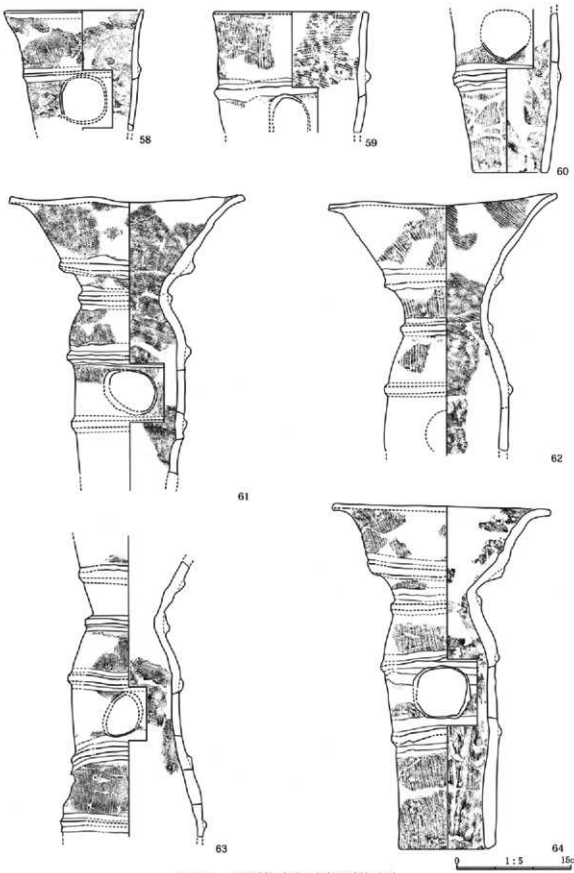


図37　円筒埴輪（7）・朝顔形埴輪（1）

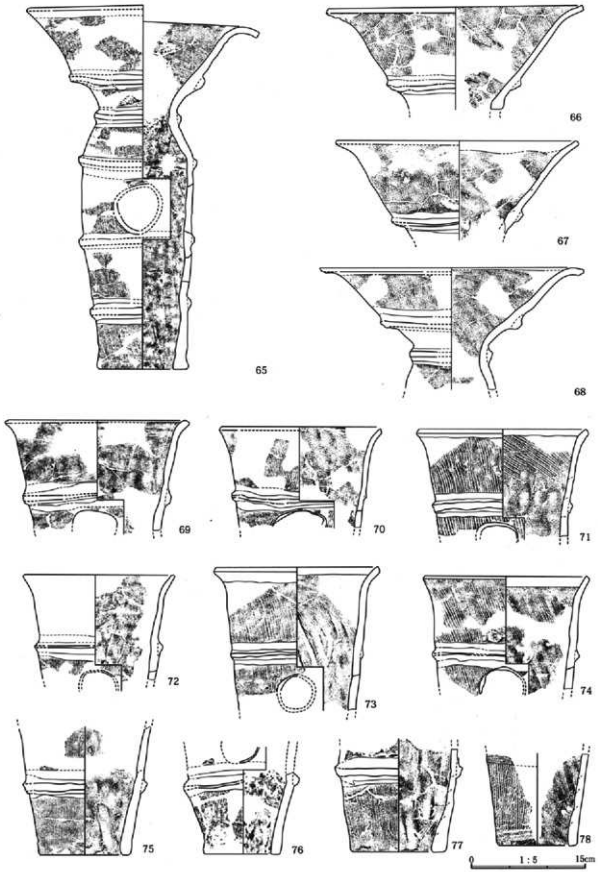


図38　朝顔形埴輪（2）・円筒埴輪（8）

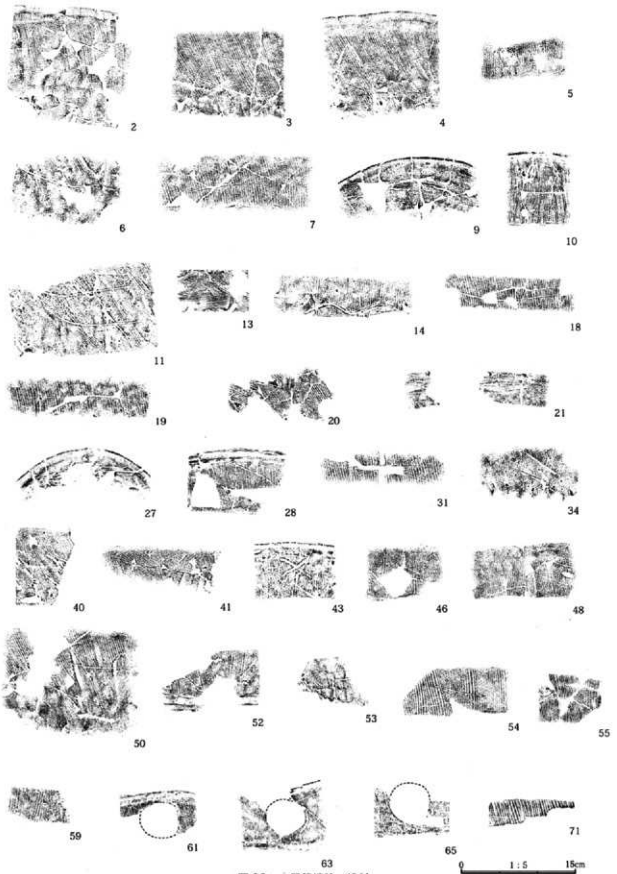

2
3
4
5
6
7
9
10
11
13
14
18
19
20
21
27
28
31
34
40
41
43
46
48
50
52
53
54
55
59
61
63
65
71
0
1:5
15cm

図39　円筒埴輪　線刻

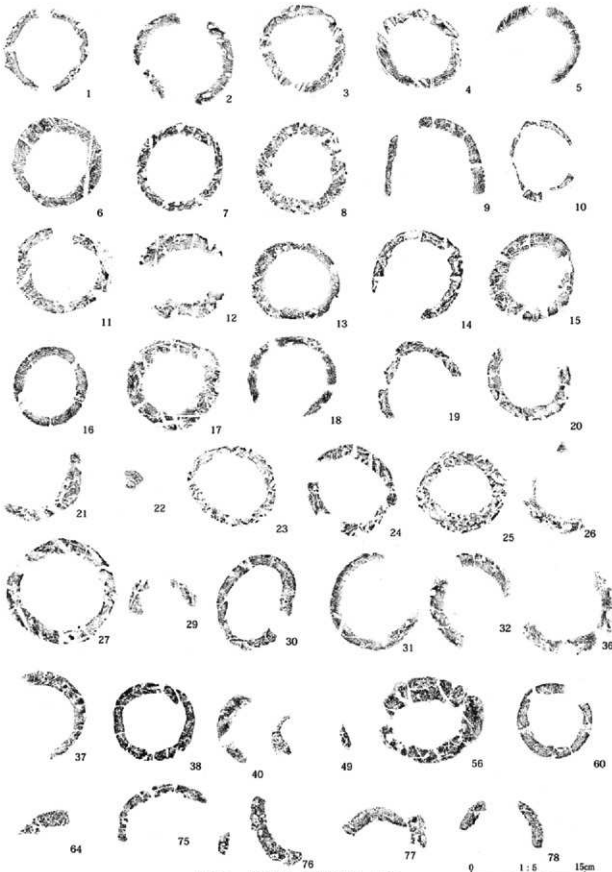


図 40　円筒埴輪・朝顔形埴輪　底部

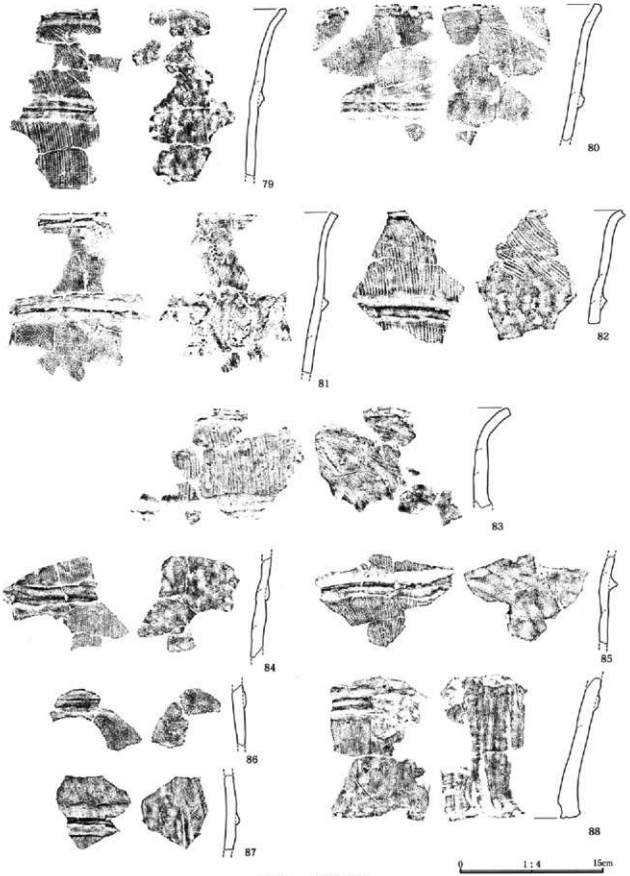


図41　円筒埴輪片

多田山２号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号
種類…普通⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪
器高…口縁部から体部までの高さ（口縁の高さが一定していない場合はいちばん低い位置を計測）※斜体数字は復元高
口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
調整（外面）…Ａ⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　Ｂ⇨「板ナデ後、口縁ヨコナデ」　ａ⇨「タテハケ」ｂ⇨「板ナデ」（ａとｂは、破片資料のため全体が不明なものに記載）
調整（内面）…Ａ⇨「タテナデ→上半のみタテハケ→口縁ヨコナデ」　Ｂ⇨「タテナデ→上半のみナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｃ⇨「タテナデ→上半のみタテナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｄ⇨「タテナデ→タテハケ→上半のみヨコハケまたはナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｅ⇨「タテナデ→上半のみタテナナメナデ→口縁ヨコナデ」Ｆ⇨「タテナデ→上半のみタテナナメハケ→ナデ→口縁ヨコナデ」　ａ⇨「タテナデ」　ｂ⇨「タテナデ→ナナメハケ」　ｃ⇨「タテナデ→タテナナメハケ」　ｄ⇨「タテナデ→上ヨコハケ→口縁ヨコナデ」　ｅ⇨「タテナデ→口縁ヨコナデ」（ａ～ｅは、破片資料のため全体の様相が不明なものに記載）
ハケメ…幅 10mm あたりのハケメの本数
突帯…Ａ⇨断面台形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｂ⇨断面台形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｃ⇨断面三角形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｄ⇨断面三角形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｅ⇨断面台形＋仕上げナデを施さない　Ｆ⇨断面三角形＋仕上げナデを施さない
透孔…Ａ⇨半円太向の円形　　Ｂ⇨円形
線刻…○⇨あり　×⇨なし　？⇨線刻が施されそうな部分が欠落しているため、不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
　線刻の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外２⇨外面２段目　外３⇨外面３段目　内２⇨２段目附近の内面　内３⇨３段目附近の内面　「形」は、描かれた形を掲載。（例：外面３段目に横線２本の線刻→「外３／＝」）
底部調整…○⇨あり　　△⇨確定はできないが可能性あり　　×⇨なし
色調…Ａ⇨黄橙色　Ｂ⇨浅黄橙色　Ｃ⇨にぶい黄橙色　Ｄ⇨橙色　Ｅ⇨にぶい橙色　Ｆ⇨明黄褐色　Ｇ⇨灰白色　Ｈ⇨明赤褐色
出土位置…出土したエリア（図 19）に○を記載。※１個体が複数破片の接合のために、出土エリアが複数にまたがる場合が多い。
備考…底部調整および線刻の詳細を記載。その他、特記事項を記載。

表７　円筒・朝顔形埴輪観察表（1）

No	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径	調整 外面	調整 内面	刷毛 [本]	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置								備考
											内容			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
1	円筒	31.4	21.0	11.0	A	B	4～5	C	B	○	内3／‖	△	D	○	○	●						軽量・底部内面ヨコケズリ
2	円筒	34.2	22.0	13.0	A	A	5～6	D	B	○	内3／×	×	B			○	●	○				
3	円筒	34.6	22.0	11.5	A	A	3～6	B	B	○	内3／#	×	F			○	●					
4	円筒	33.2	21.0	11.5	A	A	4～5	D	B	○	内3／#	×	F				●					
5	円筒	32.1	18.5	11.0	A	B	3～4	C	B	○	外3／＝	×	D					●	●			軽量・歪み酷い・片岩含む？
6	円筒	32.7	21.0	12.0	A	B	5～6	B	B	○	内3／#	×	C	▲							▲	
7	円筒	35.2	22.5	11.0	A	A	4～5	B	B	○	外3／－	×	D					○	●			軽量
8	円筒	32.5	21.5	11.5	A	B	6～7	B	B	？		×	D	○					▲	▲		
9	円筒	33.8	22.0	14.0	B	C	粗ナデ	A	A	○	内3／＝	△	D			○	●		●			底部外面に板ナデ・片岩含む？
10	円筒	28.8	21.5	11.0	A	D	7～8	B	B	○	外3／○	△	D			○	●		●			底部外端打ち欠き
11	円筒	32.2	21.0	11.5	A	C	5～6	D	B	○	内3／#	×	A					○	○	●		歪みひどい
12	円筒	35.1	19.0	12.0	A	B	6～7	A C	B	？		×	G		○	○	●					
13	円筒	29.6	19.0	12.0	A	B	7～8	D	B	○	内3／‖	×	D		○	●					○	粗雑・片岩含む？
14	円筒	33.4	21.0	12.0	A	A	5～6	E	B	○	外3／～	×	D	○					○	○		
15	円筒	33.5	19.5	11.5	A	C	6～7	F	B	？		×	C			○	○					
16	円筒	34.7	19.5	10.2	A	D	5～6	B	B	○	外3／＝	△	D			○	●					底部内面ヨコケズリ？
17	円筒	33.3	20.5	12.0	A	C	6～7	F	B	？		×	D		○	○	○					
18	円筒	36.2	21.5	11.5	A	C	3～4	B D	A	○	外3／－	×	E			○	○					
19	円筒	34.3	22.0	11.5	A	C	3～4	B	A	○	外3／－	×	E				○	●				
20	円筒	33.4	22.0	11.0	A	C	5～6	B	B	○	内3／－	×	B			○	○	●				
21	円筒	32.0	20.5	*12.0*	A	D	6～7	A	B	○	内3／＝	×	D			○	●	●				片岩含む？
22	円筒	33.3	21.5	*11.0*	A	C	5～6	E	B	？		×	D			○	○					
23	円筒	33.4	*20.0*	11.0	A	D	6～7	C	A？	？		×	D							○		
24	円筒	33.4	19.5	11.5	A	C	6～7	F	B	×		×	C			○	●	○				軽量
25	円筒	34.9	21.5	11.0	A	C	3～4	B D	B	？		×	B					●				
26	円筒	34.6	21.0	12.0	A	C	3～4	B D	B	？		×	E				○	●				
27	円筒	35.5	21.5	14.0	B	E	粗ナデ	A？	B	○	内3／＝	×	D				●					器面剥落
28	円筒	30.5	20.5	－	A	F	4～5	B	B	○	内2／＼	－	B				○	●				
29	円筒	30.6	*18.0*	8.5	A	D	7～8	C	B	？		×	D			○	●	●				
30	円筒	31.0	*20.0*	11.0	A	E	3～4	A C	B	？		－	A	○	○		○	○	●			焼成時の黒点粒子あり
31	円筒	34.2	*23.0*	12.0	A	E	5～6	A	B	？		×	A									
32	円筒	29.0	19.0	11.6	A	D	6～7	A	A			×	D			○	○	●				
33	円筒	30.2	*19.0*	*10.0*	A	E	4～5	C？	B	○	外3／×	－	D								○	器面剥落
34	円筒	－	19.2	－	A	D	5～6	B D	B	○	内3／－	－	D				○	●				突帯部内面圧痕明瞭

表8　円筒・朝顔形埴輪観察表 (2)

No	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	調整		周毛(本)	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置								備考
					外面	内面					内容			I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	
35	円筒	−	19.8	−	A	C	4～5	C	B	×		−	C					○	●	●		
36	円筒	31.3	*19.0*	12.5	A	A	5～6	B	B	?		×	D							○		湯面剥落
37	円筒	31.5	*20.0*	10.4	A	A	7～8	D	B	?		△	D				○	●				底部内面ヨコケズリ
38	円筒	34.8	21.0	11.0	A	B	4～5	B	B	?		×	D			○	●					
39	円筒	−	*18.5*	−	A	D	5～6	B	B			−	D					○				
40	円筒	31.3	*22.0*	*10.5*	A	E	5～6	D	B	○	内3/#	×	F			○	●	○				
41	円筒	−	22.0	−	A	B	5～6	BD	B	○	内3/−	−	D	▲						○	▲	
42	円筒	−	21.0	−	A	C	4～5	B	B	○	外3/−	−	B				○	○				
43	円筒	−	19.5	−	A	B	4～5	B	B	○	外3／×	−	D				○	●				
44	円筒	−	19.6	−	A	C	5～6	BD	B			−	D	▲							▲	片岩含む?
45	円筒	−	22.1	−	B	E	板ナデ	A	B	○	内3/=	×	D			○	●	○				歪みひどい
46	円筒	−	*21.0*	−	A	E	4～5	C	B	○	外3/−	−	D			○	○	○				
47	円筒	−	19.0	−	A	B	6～7	C	B	○	内3/=	−	A						▲	▲		
48	円筒	−	20.5	−	A	C	6～7	C	B	○	内3/=	−	C								○	
49	円筒	*30.5*	−	10.0	a	b	6～7	BD	B	?		×	D		○	○	●					
50	円筒	−	21.5	−	A	E	3～4	D	B	○	内3/#	−	A			○	○	●				
51	円筒	−	19.0	−	A	B	4～5	A?	B	?		−	A						▲	▲		
52	円筒	−	21.5	−	A	E	5～6	B	B	○	外3/～	−	D							○	○	
53	円筒	−	19.0	−	A	e	6～7	C	B	○	内3/=	−	D						○	○	○	
54	円筒	−		−	A		3～4					−	D			○	●					
55	円筒	−	−	*11.5*	a	a	5～6	BD	B			×	B					●				
56	円筒	−	−	12.9	a	b	4～5		B	?		×	D									片岩含む?
57	円筒	−	−	−	a	a	5～6	BD	B			−	C							○		
58	円筒	−	18.4	−	A	B	7～8		B			−	A							○	○	
59	円筒	−	21.0	−	A	d	3～4		B			−	D	○						○	○	
60	円筒	−	−	10.0	a	a	4～5	B	B	?		×	A			○	●	○				
61	朝顔	−	31.4	−	A	B	5～6	AB	B			−	E				○	○	●			
62	朝顔	−	*31.5*	−	A	B	3～4	AB	B			−	C		○	○	●		●			
63	朝顔	−	−	−	a	a	7～8	AB	B			−	D				○			○		片岩含む?
64	朝顔	45.2	29.3	12.7	A	E	7～8	AB	B			×	D				○	●				片岩含む?
65	朝顔	45.8	31.0	12.0	A	B	6～7	AB	B			×	F		○					▲	▲	片岩含む?
66	朝顔	−	*34.2*	−	A	B	5～6	AB	−			−	D	○						○	○	片岩含む?
67	朝顔	−	*34.0*	−	A	a	3～4	B	−	?		−	D				●	●				
68	朝顔	−	36.0	−	A	E	6～7	B	−	?		−	E				○	○			○	
69	円筒	−	23.0	−	B	e	板ナデ	A	A	?		−	D				○					
70	円筒	−	22.0	−	A	B	5～6	B	B	?		−	D		○	○	○					
71	円筒	−	*22.0*	−	A	B	5～6	B	B	○	外2/−	−	D	○								
72	円筒	−	*20.0*	−	a	B	6～7	C?	B			−	D		○					○	○	
73	円筒	−	*22.0*	−	a	c	4～5	BD	B			−	A					○				
74	円筒	−	*22.0*	−	A	E	4～6	BD	B			−	A				○					片岩・骨針含む?
75	円筒	−	−	14.0	a	a	5～6	B	−	×		×	A								○	
76	円筒	−	−	*12.5*	a	a	4～5	B	必?	×		△	A					○	○			底部外面指頭痕
77	円筒	−	−	12.0	a	a	4～5	B	−	×		×	D						○			片岩・骨針含む?
78	円筒	−	−	11.0	a	a	4～5	−	−	×		×	D						○			
79	円筒	−	*23.0*		A	?	4～5	C				−	D							○		
80	円筒	−	*22.0*	−	A	B	4～5	A	−	○	内3／−	−	H					○				
81	円筒	−	*22.0*	−	A	E	7～8	C	−	?		−	D		○							
82	円筒	−	*22.0*	−	A	E	3～4	C	B	○	外2/−	−	E				○					
83	円筒	−	*23.0*	·	A	d	6～7	C?	−	×		−	D				○					
84	円筒	−	−	−	a	a	6～7	EF	B	×		−	E			○						異質な突帯
85	円筒	−	−	−	a	c	5～6	D	B	×		−	D			○	○					異質な突帯・片岩含む?
86	円筒	−	−	−	a	a	7～8	B	−	×		−	D			○						異質な突帯
87	円筒	−	−	−	b	a	板ナデ	D	−	×		−	D			○						片岩入り埴輪片と同種
88	円筒	−	−	*10.5*	b	a	板ナデ	B	−	×		×	D			○						片岩含む?

(2) 形象埴輪

A. 人物埴輪（図42）

人－1

円形鍔帽をかぶる男子

残存状況　頭頂部から胸部までが残存する。腕は残存していない。残存高は22.5cm。

表現の特徴　帽子は巾1.0cmの粘土帯を頭部に巡らし、さらにその中央に沈線を巡らすことによって表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。目は切れ長のややつり目に表現されている。鼻は鼻筋の通ったスリムなかたちであり、鷲鼻に表現され、鼻孔の表現もある。口は横長水平に表現されている。顎は粘土の貼り付けにより作られており、シャープに表現されている。左右頬に、美豆良が一部残存する。なお、胸部には美豆良の下端部が貼り付けられたと思われる剥離痕がある。背面には垂髪が一部残存するが、巾2.2～2.8cmの粘土帯の貼り付けによって表現されている。頸部には首飾り（or 勾玉？）が剥離した痕跡もある。器面の一部は剥落している。赤彩での表現は認められない。

技法の特徴　巾1.2～1.5cmの粘土帯による輪積みで作られている。なお、頭部と体部は別づくりである。頭部は顎部分から上に向かって、輪積みされ、頭頂部を直径1.5cmほどの粘土塊で閉塞する。体部は胸部から上に向かい頸部まで輪積みされる。そして、頸部内面で、粘土帯の未接着の部分が確認できることから、胸部と頭部の接合が頸部で接合されたことが確認できる。外面は、不定方向のハケを施した後、不定方向ナデを施す。特に顔面部は丁寧はナデが施されている。ハケを施した後、ナデを施す。なお、頭頂部付近の内面は、指頭圧痕が残るのみであり輪積みの痕跡が残存したままである。

色調・胎土・焼成　にぶい橙色を呈する。きめ細かい胎土であり、角閃石や輝石の混入が目立つ。硬い焼き上がりである。

出土位置　周掘エリアⅣ（詳細は図20を参照）

備考　出土状況と所作から馬曳きと考えられる。

人－2

左腕を上げる男子

残存状況　頭部から頸部まで及び左腕が部分的に残存する。残存高は15.6cm。

表現の特徴　頭部は欠損しているため不明である。眉の表現は見られない。目は切れ長のつり目に表現されている。鼻は鼻筋の通った形だが、鼻孔の表現はない。口は横長水平の表現と思われる。顎は粘土の貼り付けによって表現されている。左頬には下げ美豆良が一部残存する。この美豆良は胸部まで届かず、下端部は宙に浮いている。なお、下げ美豆良片がもう一つあり、接合関係は認められなかったが形状・胎土が酷似することから、右の下げ美豆良と考えた。背面には垂髪が一部残存するが、巾2.3～3.1cmの粘土帯の貼り付けで表現している。頸部には首飾りの表現は認められない。左腕は斜め上に掲げ、手のひらは開いている。赤彩での表現は認められない。

技法の特徴　巾1.0～1.5cmの粘土帯による輪積みで作られ、粗いユビナデを施している。腕部は中実で肩部付近で差し込まれている。

色調・胎土・焼成　橙色を呈する。砂質の粗い胎土であり、角閃石や輝石のほか、黒白色粒子（凝灰岩？）の混入が目立つ。軟らかい焼き上がりである。

出土位置　周掘エリアⅤ（詳細は図20を参照）

備考　出土状況と所作から馬曳きと考えられる。また、胎土・焼成は同墳の人－3・馬－1と酷似する。

人－3

立位人物の裾部

残存状況　裾部と基部の接合部分のみ残存する。残存高は13.0cm。

表現の特徴　裾の下端は丁寧に表現してある。裾部に何かの剥落痕は認められない。

技法の特徴　巾1.2～2.0cmの粘土帯による輪積みで作られ、粗いユビナデを施している。裾端部は貼り付け。

色調・胎土・焼成　橙色を呈する。砂質の粗い胎土であり、角閃石や輝石のほか、黒白色粒子（凝灰

岩？)の混入が目立つ。軟らかい焼き上がりである。

出土位置　周堀エリアV

備考　同墳の人－2と胎土・焼成が酷似する。

人－4

部位：半身像の基部。底部から、突帯下部にかけての破片。破片上端にヨコナデの痕跡があることから、このように判断した。外面は板ナデ調整。内面はタテナデ。底部の調整なし。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。輝石・角閃石・黒白色粒子が目立つ。周掘エリアVからの出土。

人－5

部位：衣服の裾部か、頭髪の先端部。緩やかに湾曲し、端部を面取りする。内面に剥落痕はない。内外面ともナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。輝石・角閃石・黒白色粒子が目立つ。周掘エリアVからの出土。

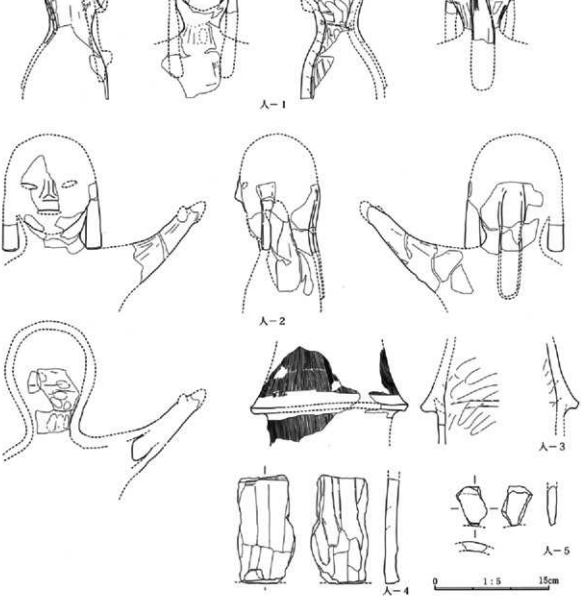


図42　人物埴輪　人－1～5

Ｂ．馬形埴輪

馬－１（図 43 ～ 46）

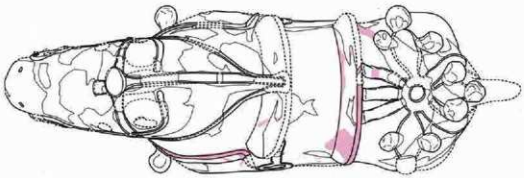
残存状況　頭部から脚の付け根までは７割程度の残存であるが、脚部は左前脚が僅かに残存するのみで、他の３脚はほとんど失われている。復元全長は 68.0cm、復元高は 71.0cm である。

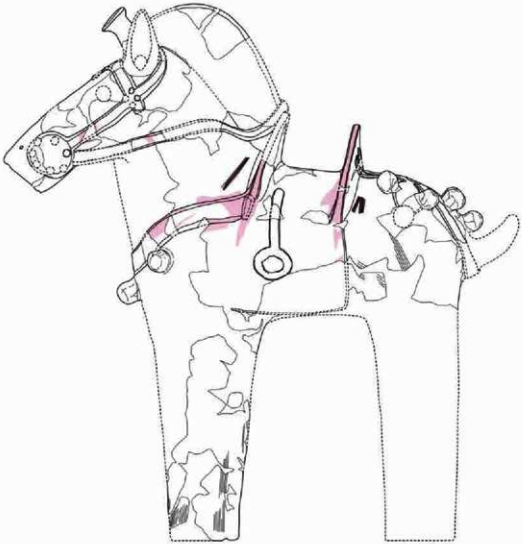
形態・表現の特徴　頭部は筒形であるが、口先方向にむけてややすぼまっている。顎部は筒形頭部の側面に粘土板を貼り付けることによって表現されている。鬣は板状を呈し、縁部は粘土紐で左右に僅かながら突出させ、「断面Ｔ字形」を呈している。また、先端部には小さな円盤をのせた角状鬣がつく。背部は鞍の前輪に取りつくように表現されている。ハケによる鬣側面の髪表現は認められない。耳は欠損しているが頭部刳り貫き後、粘土板等で表現されたものと考えられる。目は刳り貫きにより、円形に表現されている。鼻は口の上の部分に穿孔によって鼻孔が表現されている。口は中空のままであり、線刻による表現はない。顎部・頸部は太く、僅かに前斜するが、ほぼ直立であり、その上に頭部の乗っている。胸部は僅かな張り出しの表現が認められる。胴部は巾に対して高さの方があり、胴側部は丸みを持たず、ほぼ直である。腹部は前胴部と後胴部は膨らみを持っているが、鞍装着部分では僅かに括れた表現をとっている。尻部は単純な丸形であり、尾は欠損しているもの、尻部との殷地部の痕跡から、粘土塊のはめ込みによって表現されていたと推測できる。腹部は僅かに残存しているのみでその形状を把握しづらいが、脚部の付け根の位置等からみて、扁平なものではなく、やや丸みをもった形状が表現されていたと推測できる。脚部は左前脚のみの状況だが、筒形で胴部に近くなるにつれて径が太くなるように表現されている。また、蹄の表現は残存部では認められなかった。スカシ孔は尻部の尾の下位置に１孔確認されているのみである。胴部下にも存在した可能性は高いが、破片が皆無であるため確認はできない。

馬具の表現　表現された馬具は、障泥の一部を除いては、全て扁平な粘土紐（又は粘土板）の貼り付けによって表現されている。さらに、現状観察において、貼り付け表現のところどころに赤彩がなされていることが確認できることから、本来はこれらの箇所の大半には赤彩が施されていたものと考えられる。

鏡板は直径 6.0cm 程の円盤状のものであり、７つ（乃至８つ）の鋲の表現が確認できる。面繋は巾 1.2 ～ 1.8cm の粘土紐で表現され、辻金具の表現はないが、４つの鋲が表現されている。手綱は巾 1.0 ～ 1.5cm の粘土紐で表現され、端部は左右鏡板に繋がる。胸繋は、巾 2.5 ～ 3.0cm の粘土紐で表現され、端部は鞍・前輪の下端部に連結する。なお、前輪との連結部には胸繋の端部を表現したと思われる、巾 2.8cm の舌状突起がある。また、胸繋には鈴が３個（以上？）つく。鞍は前輪・後輪とも厚さ 1.5cm 程度の弧状の粘土板を取り付けることで表現しているが、居木等の表現はない。輪鐙は巾 1.0cm の粘土紐で表現されている。障泥は厚さ 1.0cm 未満の粘土板を貼り付けて表現されていると思われる。しかし、前脚付近では胴部との境界が不鮮明である。なお、この不鮮明の位置には巾 1.0cm の帯状の赤彩が施されている。尻繋は巾 1.2 ～ 1.5cm の粘土紐で表現され、環状辻金具と取りつく。なお、この辻金具からは菱形三鈴杏葉が左右・後ろの三方に取りつく。

技法の特徴　頭部は輪積みで成形されており、内面には粗いナデが残存する。頸部も胴部も輪積の積み上げによってつくられているが、それぞれ輪積みの方向が異なる。なお、何れも、内面には粗いナデが残存する。脚部と胴部下（腹部）との接合部分には分厚い粘土板は用いられておらず、脚から胴部下（腹部）にかけて、ほぼ同じ器厚でスムーズに湾曲した連結状況が認められる。脚部は大半が欠損しているため、技法の詳細は不明である。なお、外面は器面の荒れが激しく、整形に関する観察がほとんどできない。だが、部分的にハケ調整は認められることを重視すると、全面にこれが及んできたことも考えられる。





0　1:5　15cm

図43　馬形埴輪（1）馬―1

各部位の技法の特徴からは（1）脚部の製作→（2）粘土帯による脚部と腹部との連結→（3）輪積みによる胴部の製作→（4）輪積みによる胸部・頸部の製作→（5）輪積みによる頭部の製作＋頭部と頸部の連結→（6）外面の整形及び装飾＋赤彩、という工程が推測される。

色調・胎土・焼成　橙色を呈する。砂質の粗い胎土であり、角閃石や輝石のほか、黒白色粒子（凝灰岩？）の混入が目立つ。軟らかい焼き上がりである。

出土位置　周堀エリアⅤ（詳細は図20を参照）。

備考　胎土・焼成は同墳の人－2・3と酷似する。

※

以下に記述する馬－2～18（図46）は、いずれも色調は橙色～明赤褐色を呈し、胎土はきめ細かく、輝石の混入が目立ち、焼成はやや硬質である。

馬－2

部位：角状飾。天井部に平坦面がある。断面円形。ナデ調整。全面に赤彩の痕跡がある。周堀エリアⅣからの出土。

馬－3

部位：障泥の一部？わずかに湾曲する。外面に帯状の剥落痕がある。ナデ調整。内面には曲面に接合されたような剥落痕がある。ナデ調整。周堀エリア

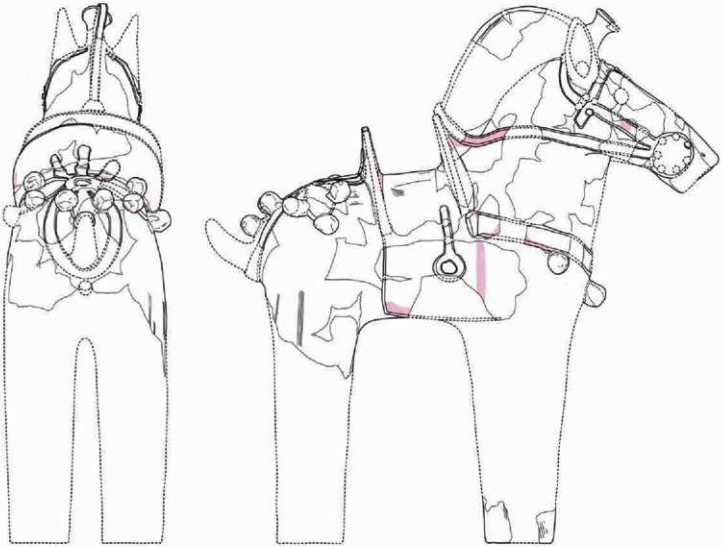


図44　馬形埴輪（2）馬—1

Ⅳからの出土。

馬－4

部位：耳片。付け根の部分。内外面ともナデ調整。赤彩なし。周堀エリアⅢからの出土。

馬－5

部位：面繋（または他の繋）。ややねじれた形状をしており、その状況から面繋と推定した。赤彩あり。外面の平坦面はハケ調整。上下面はナデ調整。内面は剥落痕あり。周堀エリアⅣからの出土。

馬－6

部位：面繋の一部。ややねじれた形状をしており、その状況から、耳付近の面繋の破片と推測。外面はナデ調整後、部分的にハケを施す。赤彩あり。内面には剥落痕跡がわずかにあるのみ。周堀エリアⅢからの出土。

馬－7

部位：胸繋の一部。赤彩は未確認。外面はナデ調整。内側は剥落した状態。周堀エリアⅣからの出土。

馬－8

部位：馬鈴。馬具から剥落した鈴と推定。突起物状を呈する。切り込みの表現なし。ナデ調整。赤彩なし。周堀エリアⅣからの出土。

馬－9

部位：馬鈴。馬具から剥落した鈴と推定。突起物

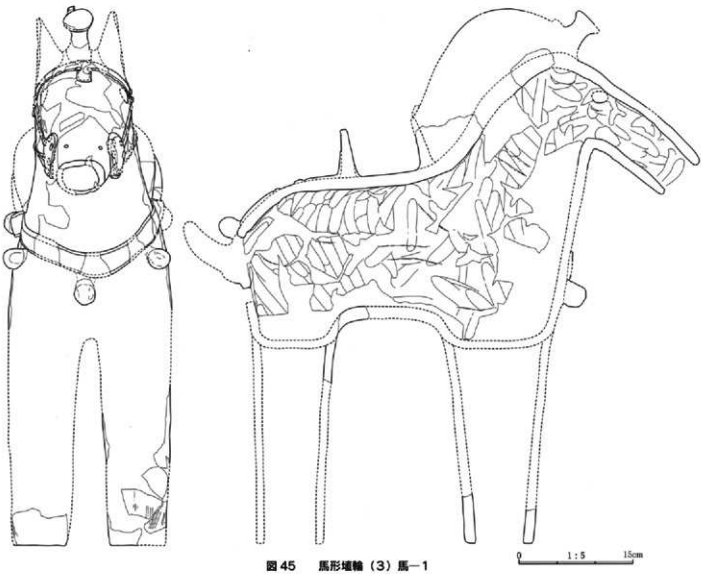


図45　馬形埴輪（3）馬－1

状を呈する。切り込みの表現なし。ナデ調整。付け根部に赤彩あり。周堀エリアⅢからの出土。

馬－10

部位：三鈴杏葉の一部？開いた状で内面には剥離の痕跡あり。形状は「八の字」状にナデ面が開き、その下端に、弧状の輪郭の剥離痕跡があることから、鈴が剥落したものではないかと考え、菱形杏葉の一部と推定。外面には赤彩あり。外面はナデ調整。周堀エリアⅣからの出土。

馬－11

部位：繋？　外面には平坦面あり。ナデ調整。内面には明瞭な剥落痕がない。鈍角に屈曲し、両端が欠損している。馬具という決定打はない。赤彩なし。周堀エリアⅣからの出土。

馬－12

部位:輪鐙の一部。外面は平坦仕上げ。ナデ調整。赤彩なし。内面に剥落痕あり。周堀エリアⅣからの出土。

馬－13

部位：鼻と手綱の一部。前輪との接合部の剥離痕跡がある。手綱部分に赤彩の痕跡がある。成整形は、ハケ調整後、手綱の粘土紐を貼り付け。部分的に棒状工具による、刺突痕がある。周堀エリアⅢからの出土。

馬－14

部位：胸繋。馬の右側、鞍との接合点付近のものと推定。巾2．8ｃｍ程度の粘土紐の貼付している。成整形は、外面はハケ調整後、繋を貼り付け、その後、鈴を貼り付けるが、剥落。内面はナデ調整。周堀エリアⅢからの出土。

馬－15

部位：胴部から脚部にかけての一部？　わずかに湾曲する。外面はハケ調整、内面はナデ調整と、指頭圧痕の痕跡あり。輪積みの痕跡も内面では明瞭。周堀エリアⅣからの出土。

馬－16

部位：後両足の股から尻の孔までの間の部分？外面はハケ調整。内面はナデ調整。赤彩なし。周堀エリアⅢからの出土。

馬－17

部位：尻尾の下端から尻の孔までの破片。破片の湾曲の在り方と剥落の痕跡具合からそのように判断。尻尾の付け根が存在し、その在り方から、中空の尻尾であることが分かる。また外面には、尻繋の剥落痕がある。さらに、尻孔の痕跡も一部残存する。外面はハケ調整。内面はナデ調整。周堀エリアⅢからの出土。

馬－18

部位:尻尾。中空。内面には輪積み痕が見られる。外面はヨコナデ後、ハケ整形を施している。付け根と先端付近に赤彩が残存する。周堀エリアⅢからの出土。

C．その他の形象埴輪（図46）

陰茎－1

男性埴輪の一部と考えられるが、明確な剥落痕跡が見あたらない。海綿体部分は中実。先端は小孔を深さ5mmほどあける。睾丸部は不整形の球形粘土を海綿体部分に貼り付けている。全面ともナデ調整。包茎状態の陰茎を表現していると推定。やや硬質の焼成。色調は橙色。焼成はやや硬質。胎土はきめ細かく、輝石目立つ。人－1の胎土と似ている。周堀エリアⅢからの出土。

鳥－1

何かに付属の鳥形土製品としたほうが妥当。翼を広げた状態。頭部は欠損。胴部の粘土に扁平な粘土板を貼り付け、翼を造り出す。尾は胴部に、別の粘土帯を貼り付け、薄く引き出している。腹部に相当する箇所に剥落痕がある。その角度は胴の角度に対して斜位であり、巾も2cmもあることから、人物埴輪の腰部についていたと考えることが妥当。人物の腕部、円筒埴輪の口縁や胴部についていたと考えるには、剥落痕の在り方がおかしい。翼部の一部に赤彩の痕跡あり。色調は橙色。焼成はやや硬質。胎土はきめ細かく、輝石目立つ。周堀エリアⅣからの出土。

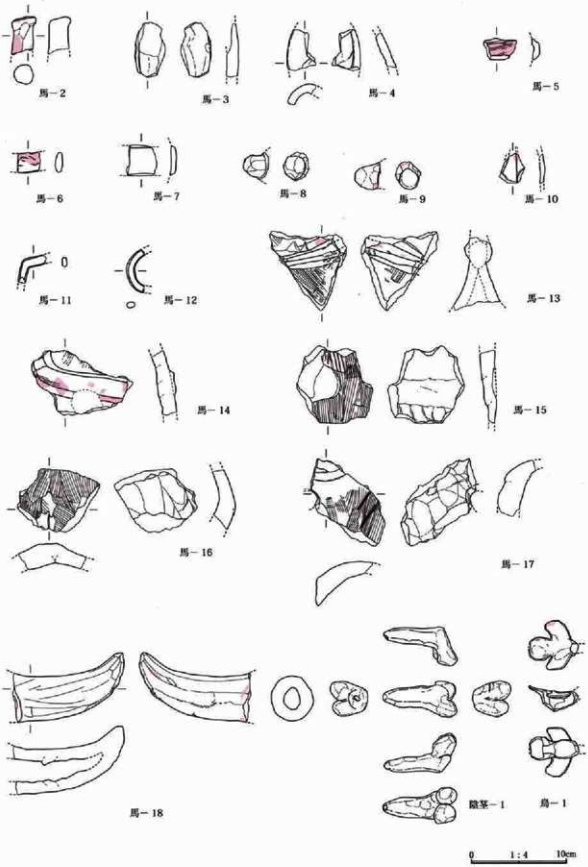


図46　馬形埴輪（4）・その他形象埴輪　破片

（3）土器（図 47・表9）

出土土器は全て土師器である。出土量は少なかったものの、細片まで観察したところ、出土器種は甕と坏に限定される。なお、須恵器の出土は一片も確認できなかった。

単口縁甕（器－１）・小形甕（器－２）はいずれも胎土には砂礫を多く含んでおり、にぶい黄橙色の色調を呈する。良好な焼成具合などの点も含めて、この２点（器－４も可能性あり）は本墳出土の形象埴輪（人・馬）との類似性が高い。成整形の技法は異なるものの、いずれも器面を丁寧に仕上げている。小形甕（器－２）については内外面に赤彩を施している。なお、赤色顔料はベンガラである。内斜口縁坏（器－３）・内湾口縁坏（器－５）はともに小破片での出土である。赤彩の痕跡は認められなかった。

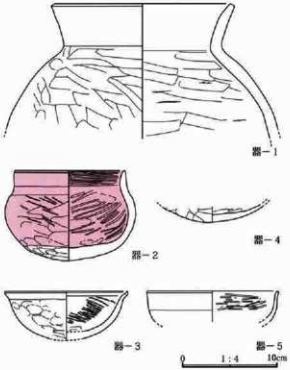


図 47　土器

表9　土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口/底/高	形態及び成整形の特徴	色調	焼成	出土エリア							備考
						Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
1	土師器 甕	19.1/×/14.5～	形態：外斜する単口縁・端部は面取り　球胴　成整形：口縁横ナデ・体部外面はケズリ後、ハケ状工具による細かいピッチのナデ、内面はヘラナデ	にぶい黄橙色	密				○					同墳の形象埴輪に胎土が類似
2	土師器 小形甕	12.0/×/9.5	形態：口縁は短く直立。明瞭な頸部はない。体部は中位上半に最大径をもつ球胴。底部は丸底だが、僅かに平底を意識したナデによる面がある。成整形：口縁は横ナデ。体部は斜横位ヘラケズリ後上半のみ、ナデ、その後、斜横位ヘラミガキ。内面はナデ後、斜横位ヘラミガキ。仕上げに内外面（外面の体部下位を除く）に赤彩を施す。	にぶい黄橙色	やや密				○					同墳の形象埴輪に胎土が類似
3	土師器 坏	13.1/×/5.1	形態：所謂「内斜口縁坏」。口縁の縁は短く外斜し、端部を摘み上げる。体部はやや深く、球形。　成整形：口縁横ナデ。体部は外面は斜横位ヘラケズリ後、上半のみナデ調整。内面はナデ調整後、斜位ヘラミガキ。	橙色	やや密		○							回転復元
4	土師器 甕?底部	×/×/×	形態：底部は丸底　成整形：外面は不定方向のヘラケズリ　内面は不定方向のナデ	にぶい橙色	密			○						同墳の形象埴輪に胎土が類似・外面に瓦炭
5	土師器 坏	14.0/×/3.0～	形態：口縁は僅かに内斜し、端部は丸く収める。底部は丸底と推定。成整形：口縁はヨコナデ。体部は外面はナデ調整。内面はナデ調整後、斜位ヘラミガキ。	にぶい橙色	やや密			○						回転復元

（4）石製品（図 48）

紡錘車（石－１）は周堀内から出土した。

石材は滑石である。色調は青灰色を呈する。形状は断面台形を呈し、斜辺には僅かな屈曲をもつ。大きさは、短辺 3.3cm 、長辺 4.4cm 、高さ 2.0cm を計る。成形は各面とも丁寧な磨きを施している。線刻は見られない。

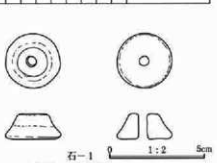


図 48　石製品

（5）鉄製品（図 49・表 10）

刀（鉄－１）は全長 52.2cm、刃長 44.0cm、刀巾 1.0cm、茎長 8.2cm、茎巾 1.6cm を測る。直刀であり、切先はカマス状になっている。関は刃部側は直角関だが、棟部側は不明瞭である（斜関か？）。中茎は隅抉尻で径 0.4cm の孔を１つ有する。鞘尻金具は装着状態であり、両面ともほぼ中心部に径 0.1cm の孔１つづつ有する。なお、鞘尻金具の内面にはところどころに木質が付着している。

刀子（鉄－２）は全長 14.2cm、刃長 9.7cm、刀巾 2.0cm、茎長 4.5cm、茎巾 1.0cm を測る。完形の中型刀子である。切先はやや反っている。刃の中央部に繊維が付着しており、茎には木質が一部残存する。

大刀（鉄－３）は全長 110.0cm、刃長 82.0cm、刀巾 3.7cm、茎長 22.0cm、茎巾 1.8cm を測る。切先はわずかに上反りしている。関は刃部側は斜角片関である。中茎は隅切尻であり、茎胴部は中細である。中茎には径 0.5cm の目釘穴を２孔有する。刃部および中茎にはところどころに木質が残存している。

無茎有腸抉長三角形鏃（鉄－４）は、刃長（推定）4.0cm、刃巾 2.4cm を測る。逆刺を一部欠損する。捩りばさみの木質が両面に遺存する。

表10　鉄製品計測値一覧

遺物番号	種類	全長	刃長	刃幅	刃厚	茎長	茎幅	茎厚
		木質	出土位置	備考				
1	刀	52.2	44.0	1.0	0.40	8.2	1.6	0.30
		○	第１主体部	中茎に１孔あり・鞘尻金具を装着				
2	刀子	14.2	9.7	2.0	0.30	4.5	1.0	0.25
		○	第１主体部	中茎に木質・刃部に繊維あり				
3	大刀	110.0	82.0	3.7	0.50	22.0	1.8	0.50
		×	第２主体部	中茎に目釘穴２孔あり				
4	無茎有腸抉長三角形鏃	3.8+	3.8+	2.4	0.15	－	－	－
		○	第２主体部	捩りばさみの木質残存				

数値の単位はｃｍ

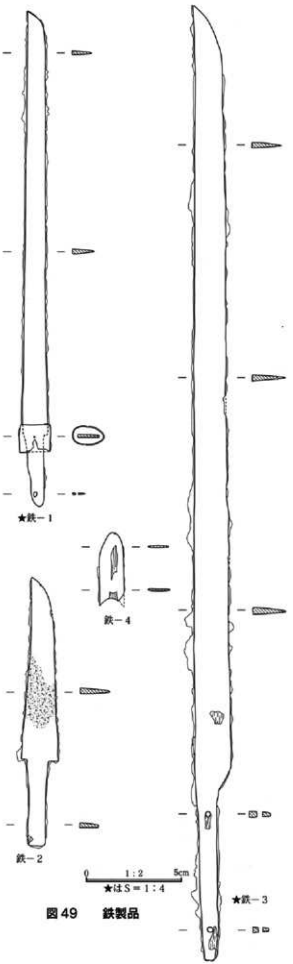


図 49　鉄製品

６　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が 15.5 mの円墳である。

遺構②　墳丘盛土直下にはＦＡ層が存在する。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　鄙石安山岩の割石を用いた「竪穴式小石槨」が２基存在する。

遺構⑤　第１主体部には壁面へのベンガラ塗布があり、第２主体部にはそれがない。

遺物に関する主な情報

遺物①　土師器坏・甕など、滑石製紡錘車、埴輪が周堀内から出土している。

遺物②　形象埴輪は馬・人が２体づつ存在する。

遺物③　円筒埴輪は全て２条３段構成であり、基部の伸長化は認められない。

遺物④　円筒埴輪は円形透孔が主体で、器面赤彩はなく、底部調整も確かなものは存在しない。

遺物⑤　第１主体部から出土した人骨は、成年後半～熟年（性別不明）である。（第６章１参照）

遺物⑥　第１主体部の副葬品は刀１・刀子１である。

遺物⑦　第２主体部の副葬品は大刀１・鏃１である。

※

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

土師器・坏（器－３）は内斜口縁坏である。口縁端部の処理も丁寧である。また、土師器・甕（器－１）は単口縁球胴甕と考えられる。これらの時期は「多田山Ⅰ期または、それ以前」と考える。

無茎有腸抉長三角形鏃（鉄－４）は、「多田山Ⅱ期」以降に盛行する形式であるが、初現的な資料は「多田山Ⅰ期」まで遡るものである（杉山 1993）。

円筒埴輪は、２条３段構成のものばかりであり、所謂「基部の伸長化」は認められない。透孔の形状はやや半円的な円形も存在するが、主体は円形であり、総体としては「円形志向」が窺える。赤色顔料の塗彩は認められず、底部調整も、僅かにそれらしき資料を含むものも大多数には存在しない。よって、近年の研究（島田 2001）に基づき、その時期を「多田山Ⅰ期」と考える。

遺構の時間的位置づけ

僅かに残存する盛土直下からＦＡ層が確認されたことから、本盛土がＦＡ降下以降であることが判る。FAの降下時期については「多田山Ⅰ期の最終末」あるいは「多田山Ⅰ期の初め」と考えられる（編集者の考え）ので、盛土構築（＝古墳築造）の時期は「多田山Ⅰ期」以降と考える。

２つの竪穴式小石槨の築造の先後関係については、「第１主体部→第２主体部」という順序を考えている。その根拠は、墳丘中心位置に第１主体部があり、墳堀部に第２主体部があるからである。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①④・遺物②③）から、「初期群集墳」を構成する１古墳と考えられる。既研究（右島 1993）によれば、この種の古墳の造営時期は、「多田山０～Ⅰ期」相当の時期と考えられている。ところで、本墳の築造時期と最も近似する情報はＦＡとの関係と、樹立埴輪の情報である。前者に関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期（以降）」であり、後者のうち円筒埴輪に関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期」である。

したがって、本墳の築造時期は「多田山Ⅰ期」と考える。このことは周堀出土土器の時期とも矛盾することがない。

なお、第２主体部出土の無茎有腸抉長三角形鏃は次時期に下る要素を含んでいるが、このことについては、「第２主体部が古墳構築後の追葬施設と考えられること」と「この形式の鏃の初現が多田山Ⅰ期まで遡ること」の中で、包括的に理解した。

多田山３号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・64
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・64
3　第１主体部・・・・・・・・・・・・・・70
4　第２主体部・・・・・・・・・・・・・・74
5　第３主体部・・・・・・・・・・・・・・78
6　第４主体部・・・・・・・・・・・・・・83
7　墳丘下旧地表面・・・・・・・・・・・・86
8　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・87
9　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・104

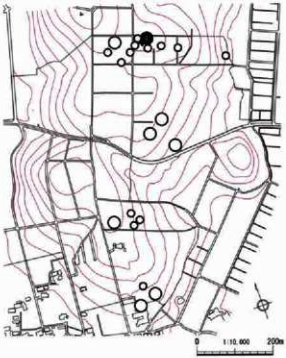


図50　多田山３号墳　位置図

1　調査前の状況

多田山3号墳は、標高147m付近、多田山丘陵の頂部（標高159m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面の一部が東方向へ僅かに舌状突出する、その場所にある。

調査前の状況では直径20m位の範囲が土饅頭上に膨らんでおり（最高1m程度）、墳丘の存在を示唆していた。但し、墳丘想定位置の西側が大幅に削平されていることや、全域が耕作地であることから、墳丘盛土の残存具合が懸念された。事前の試掘によっても周堀の一部が確認され、墳丘直径30m程度の円墳の存在が想定された。なお、本古墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀

（1）墳丘（図51～54）

墳丘全長25.0mの、二段築成の造り出し付き円墳である。円丘部は直径約22.0m、下段が地山削り出しの造作による二段築成をなす。造り出し部は、造り出し巾約7.0m、造り出し長約3.5mの規模であり、墳丘の南西部に付設する。

盛土の存在は円丘部の西側の一部と造り出し部を

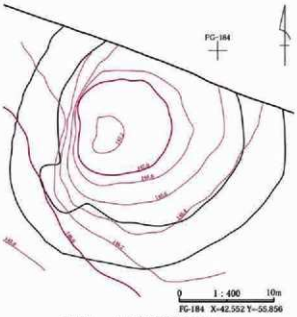


図51　墳丘付近の地形測量図

写真7　調査着手時の墳丘残存状況（南西→）

を除く箇所で確認され、残存厚は最高で0.6m程度を計る。盛土はロームブロックや黒色粘質土、或いはそれらの混土が重層的に確認された。これらは、周堀掘削土を盛土に利用したものと思われる。なお、盛土に版築的な層は存在しなかった。この盛土は第1主体部を完全に被覆していること（図54）と、第2・3主体部の構築によって掘削されていること（図62・67）が確認されている。よって、古墳築造に際しては、第一に第1主体部の構築及び閉塞、その後墳丘の盛土行為を実施し、さらにその後、第2・3主体部を構築したと考えられる（第4主体部と盛土行為との新旧関係は、不明）。

ところで、盛土直下の旧地表面にはその最上層にFAの一次堆積層が存在していた。このFA層の直上の層（以下、FA直上層）にはFAのほかにAs-Cを多く含む黒色土が存在したり、ローム主体土が存在したりすることが確認された。よって、FA直上層は旧地表土ではなく、盛土最下層（旧地表と接する盛土）と考える方が妥当である。よって、この古墳の盛土はFA堆積後まもない時期に、その行為が行われたと考えられる。墳丘への埴輪樹立の痕跡は、墳丘上段部において円筒埴輪の基部が残存した痕跡が2箇所、掘り方のみの痕跡が1箇所、確認された（図56）。なお、想定される埴輪列と第2・3主体部の位置が重複すること、さらにこの2つの主体部の閉塞土中に本墳の埴輪片が混入していることを踏まえると、第2・3主体部が墳丘盛土及び埴輪樹立後に構築されたことが理解できる。

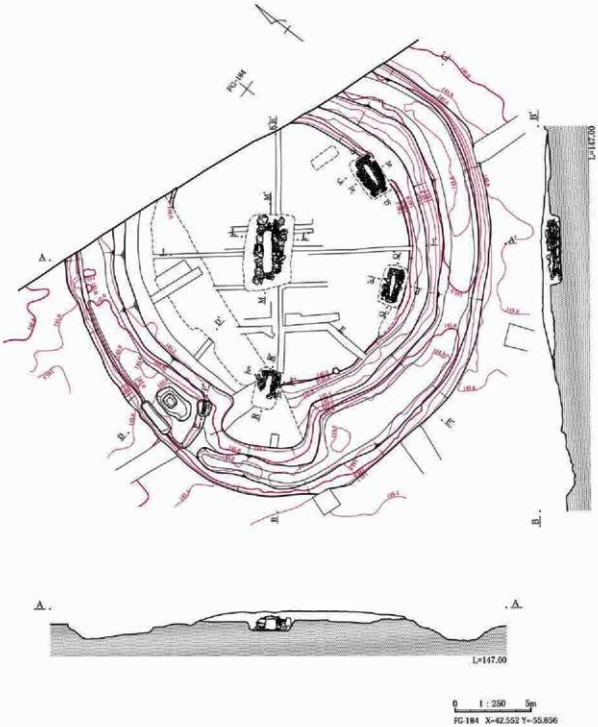
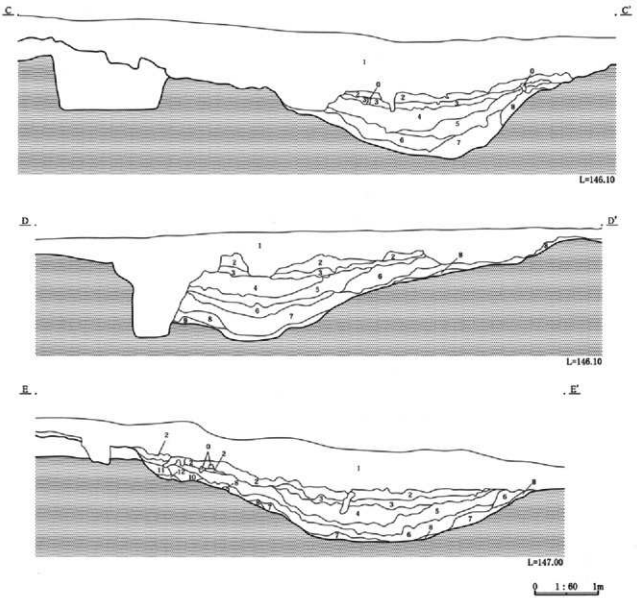


図52　墳丘および周堤　平・断面図

（2）周堀（図 52・53）

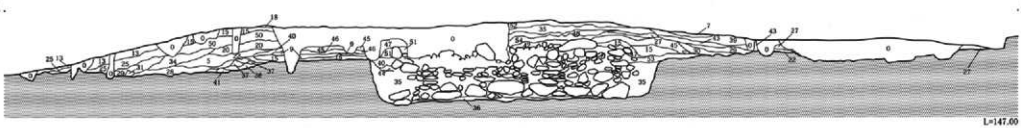
周堀は、墳丘の周りを全周すると推定する。

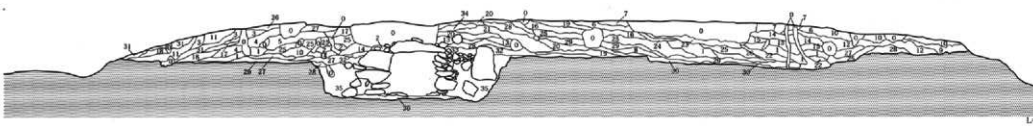
確認面での規模は、上幅 3.0 ～ 5.5 m、下幅 0.8 ～ 1.7 m、深さ 1.1 ～ 1.8 mであり、断面形状が逆台形を呈する。周堀の底面は凹凸が見られるが、覆土断面の観察では張り床状の埋め戻しのを痕跡は認められなかった。周堀底面からはの埴輪棺が検出された（図 56）。また、造り出し部北側には幅 0.7 ～ 0.9 mの土橋状の掘り残した痕跡が検出された。覆土は、As-C や FA を含む暗褐色土やロームを含む黄褐色土が主体であり、上層に As-B の一次堆積層が存在する。



1　暗褐色土　ローム粒含む（表土及び攪乱土）
2　黒褐色粘質土　Ａｓ－Ｂを僅かに含む
3　Ａｓ－Ｂ層
4　黒褐色粘質土　Ａｓ－Ｃ・ＦＡを多く含む　しまっている
5　暗褐色土　Ａｓ－Ｃ・ＦＡを含む　ややフカフカ
6　褐色土　Ａｓ－Ｃ・・ＦＡを僅かに含む
7　黄褐色土　ロームの二次堆積土　フカフカ
8　黄褐色土　ロームブロック状に多く含む　ややかたい
9　黄褐色土　ロームの二次堆積土
10　暗褐色粘質土　ロームを僅かに含む（崩落した墳丘盛土）
11　黒褐色土　Ａｓ－Ｃを多く含む（崩落した墳丘盛土）
12　褐色粘質土　ロームブロックを含む（崩落した墳丘盛土）

図 53　周堀覆土　断面図





0　撹乱
1　黄褐色土　ロームが主体　FA 含む　かたい
2　黄褐色土　ロームが主体　FA をわずかに含む
3　黄褐色土　ロームブロック・FA（または As-C）を含む
4　黄褐色土　ロームが主体　やわらかい
5　黄褐色土　ロームが主体　FA（または As-C）を含む　やわらかい
6　褐色土　ロームが主体　FA を含む　かたい
7　褐色土　ロームブロック・FA（または As-C）を含む　かたい
8　褐色土　ロームをわずかに含む　かたい
9　褐色土　ローム土が体　黒色土を含む　かたい
10　褐色土　ロームをわずかに含む　FA わずかに含む　やわらかい
11　褐色土　ロームを含む　やわらかい
12　褐色土　ロームが主体　やわらかい
13　褐色土　FA（または As-C）を多く含む　しまりあり
14　暗褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む　やわらかい
15　暗褐色土　FA（または As-C）を含む　やわらかい
16　暗褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む　やわらかい
17　暗褐色土　FA（または As-C）を含む　カーボン含む　かたい
18　暗褐色土　ロームブロック・FA（または As-C）を含む　かたい
19　暗褐色土　FA（または As-C）を含む　カーボン含む　かたい
20　暗褐色土　FA（または As-C）を含む　かたい
21　暗褐色土　FA（または As-C）をわずかに含む　すごくかたい
22　黄色土　ロームブロック　かたい
23　黒褐色土　ロームを含む　FA（または As-C）を含む　やわらかい
24　黒褐色土　ロームを含む　FA（または As-C）を含む　かたい
25　黒褐色土　ロームわずかに含む　FA（または As-C）を多く含む
26　黒褐色土　ロームを・FA（または As-C）を含む　かたい
27　黒褐色土　FA（または As-C）を含む　かたい
28　黒褐色土　FA（または As-C）多く含む　かたい
29　黒色土　FA（または As-C）を含む　かたい
30　黒色土　ロームをわずかに含む　FA（または As-C）を含む　やわらかい
31　黒色土　ロームをわずかに含む　FA（または As-C）を含む　かたい
32　黒色土　ローム・FA（または As-C）含む　ザラザラしている
33　黒色土　粘性強い
34　褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む　やわらか
35　暗褐色土　ロームを多く含む　FA（または As-C）を含む　かたい
35　黄褐色土　ロームが主体　かたい　粘質　安山岩の亜角礫を含む
36　白色粘土
37　黄褐色土　ロームが主体　FA（または As-C）を含む　かたい
38　黄褐色土　ロームが主体　かたい
39　黄褐色土　ロームが主体　FA（または As-C）・カーボンを含む
40　黄褐色土　ロームブロックが主体　やわらかい
41　黄褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む
42　褐色土　ローム・FA（または As-C）を多く含む　粘性強い
43　褐色土　FA（または As-C）を含む　かたい
44　暗褐色土　かたい　粘性強い
45　暗褐色土　FA（または As-C）を多く含む　ザラザラ
46　黒褐色土　FA（または As-C）を多く含む　かたい
47　黒褐色土　FA（または As-C）をわずかに含む　かたい
48　黒褐色土　FA（または As-C）を含む　かたい　粘質
49　黒褐色土　FA（または As-C）・白色粘土を含む　粘質
50　黒褐色土　ローム・FA（または As-C）をわずかに含む
51　黒褐色土　FA（または As-C）を多く含む
52　黒色土　粘性強い　FA（または As-C）を含む　かたい
53　黒色土　ローム・FA（または As-C）・白色粘土を含む　かたい
54　黒色土　粘ローム・FA（または As-C）を多く含む　かたい

0　1:60　1m

図 54　墳丘盛土断面図

（3）　墳丘での遺物出土状況（図 56）

墳丘は西側 1/3 程が著しく削平されており、造り出し部の大半も盛土が削平されていた。また、それ以外の墳丘盛土部も撹乱坑が多く存在した。

だが、墳丘２段目の南縁辺部から、円筒埴輪の基部が２箇所で出土した。ともに僅かな深さだが、直径 20cm 程度の掘り方をもつ。検出された埴輪の基部は高さ５～ 10cm 程度の器高しかもたず、残存状況は劣悪である（図 56 Ｃ－Ａと Ｂ）。また、埴輪の出土は見られなかったものの、径 16cm・深さ 12cm のピットが検出された（図 56 Ｃ－Ｃ）。これについても埴輪樹立のための掘り方の可能性がある。なお、表土からは須恵器坏身（器－２）が出土している。

（4）周堀内における遺物出土状況（図 56・57）

周堀は西側が著しく削平されており、造り出し部の付近まで及んでいた。しかし、周堀内からは多量の埴輪と少量の土器、及び埴輪棺が出土した。

埴輪の出土状況　出土した埴輪には円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人・家）がある。これら各種埴輪片は、その大半が浅間Ｂ軽石層直下の黒色粘質土層（断面Ｃ～Ｅでの第４・５層）に出土が集中している、という共通点を持つ。また一方で、円筒埴輪・朝顔形埴輪は、平面分布的にはエリアⅠ～Ⅳの全てから出土しているのに対し、形象埴輪はエリアⅡの西側からの出土に限定される。なお、本墳の形象埴輪の出土量は少ないが、このことについては、造り出し部一帯が著しい削平を受けたため、埴輪が失われてしまったと考えている。

土器の出土状況　土師器坏（器－１・３～９）、須恵器大甕（器－ 11 ～ 17・19 ～ 31）が出土している。出土層位は何れも、黄褐色土層（断面Ｃ～Ｅでの第７層）である。また、土師器坏はエリアⅠ・Ⅱに出土が偏るのに対し、須恵器甕は破片資料ながら、エリアⅠ～Ⅳの全てにおいて出土が認められる。

埴輪棺の検出状況　土橋の北脇、造り出し部の北西くびれ部から合わせ口の埴輪棺が検出された（図 56 Ａ右）。掘り方は周堀底面から掘りこまれており、長辺 1.0 ｍ×短辺 0.9 ｍ×深さ 0.45cm の隅丸方形を呈する。出土遺物は皆無であった。

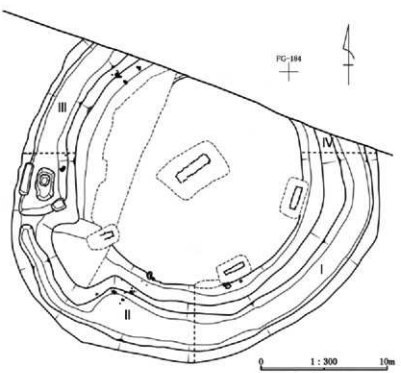


図 55　　周堀内遺物出土状況図

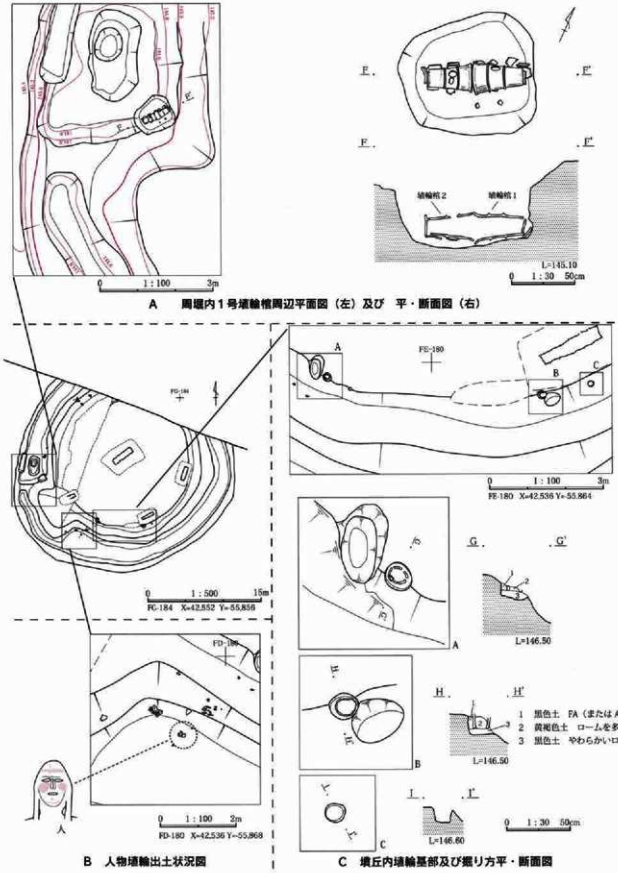


図56　墳丘及び周堀内遺物出土状況詳細図（A～C）

３　第１主体部

（１）概要（図57・58）

第１主体部は、「竪穴式石室（石槨）」である。

遺構確認面　遺構の存在は、墳丘盛土から掘り込まれた盗掘坑の覆土除去の段階において確認された。また、墳丘盛土断面Ｊ－Ｊ'及びＫ－Ｋ'の観察により、本石室（石槨）が墳丘盛土構築以前に完成し、閉塞されていることが判明した。さらに、その断面観察により、盛土下の地山面には、長軸4.6ｍ×短軸3.2ｍの平面・長方形を呈する掘り方が存在することが予想された。なお、天井石の一部が除去されており、盗掘によって内部が改変している可能性が高いことも予想された。

規　模　石室（石槨）の主軸はＮ－53°－Ｅである。石槨の内法は、長軸2.97ｍ、短軸0.81ｍ、高さ0.70ｍである。

石　材　石材は全て輝石安山岩の割石を用いている。側壁用材は、重量的は5.0～130.0kgと様々だが、50.0kg前後のものが多い。また、天井用材は、重量的には57.0～248.0kgのものが使われており、100.0kg以上のものが多い。

積み方　側壁、東短側壁の基底石が積み方Ｃ（Ｄ？）である以外は、積み方Ｂが主体であり、部分的に積み方Ａを採用している。特に注目されるのは西短側壁であり、同じ短側壁でありながら、積み方Ｂを採用している点である。床石には1.0～7.0kg程度のものが採用されている。

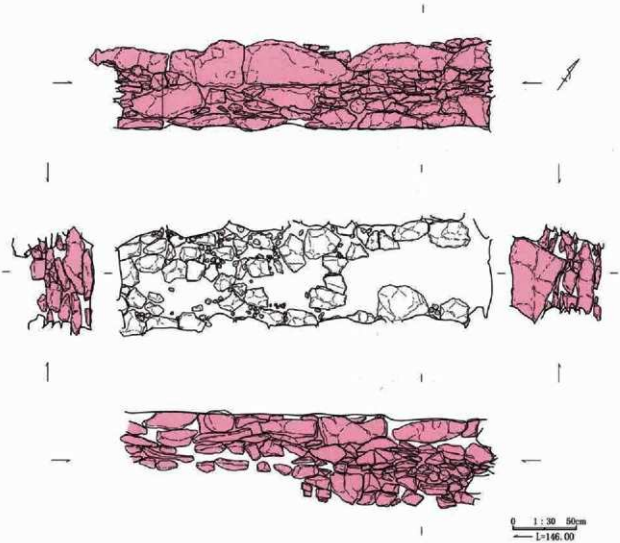


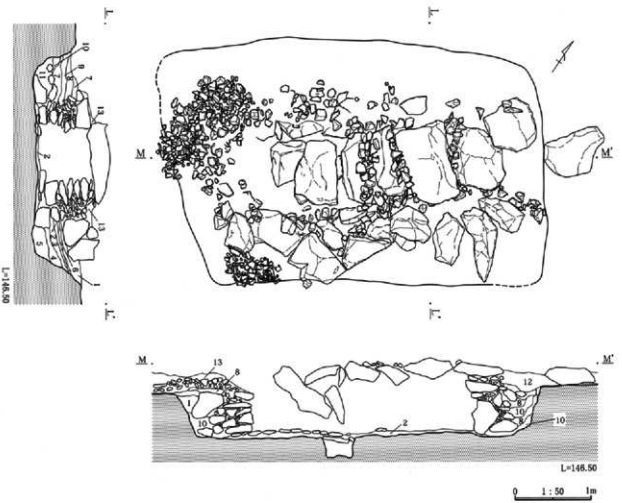
図57　第１主体部　石室展開図

裏込めは、輝石安山岩の小振りの割石を多く用いているが、白色粘土はあまり使っていない。なお、南長側壁の裏込めは巾約 40cm にわたって石材が込められており、他が 10cm 以内であるのに比べて異質な状況を呈していた。

閉　塞　閉塞は2重に行われていた。第1の閉塞は輝石安山岩の割石と粘土による閉塞で、天井石のすき間を割石で塞ぎ、さらにそのすき間を粘土で埋めていた。第2の閉塞は粘質土による閉塞であり、粘質の黒色・褐色土を用いて、墓坑を埋めていた。

赤　彩　赤色顔料の塗布は、長・短側壁及び全ての天井石に行われていた。長・短側壁への塗布は、壁面構築後に行われ、天井石への塗布は、高架以前に内面のみに行われたものと思われる。顔料はベンガラであった（第5章4を参照）。

構築方法　掘り方掘削から天井高架までの工程は、他の「竪穴式小石槨」と変わらない。だが、50kg 前後の石材を主体的に使う点や、短側壁の東西で石の積み方が異なる点などは、他の「竪穴式小石槨」では見られない、異質な様相である。



1　褐色土　ロームを多く含む　FA（または As-C）を含む　やわらかい
2　白色粘土層
3　黒褐色土　FA（または As-C）を含む　かたい
4　黒褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む　やわらかい
5　褐色土　ローム・FA（または As-C）を多く含む　粘性強い
6　黄褐色土　ロームが主体　かたい
7　黄褐色土　ロームが主体　FA（または As-C）を僅かに含む
8　黒褐色土　ローム・FA（または As-C）を含む　かたい
9　黒褐色土　ロームを僅かに含む　かたい
10　褐色土　ロームが主体　かたい
11　黒褐色土　ロームを多く含む多い　FA（または As-C）含む　粘質
12　黒褐色土　ローム FA（または As-C）・白色粘土を含む
13　暗褐色土　粘性強い

図 58　第1主体部　石室平・断面図（天井石高架時）

(2) 解体調査データから復元する構築工程（図 59・60）

第１段階　墓坑の掘削

墳丘の中央部に長軸 5.00 m、短軸 3.20 m、0.70 mのやや歪んだ方形の墓坑を掘削する。さらに、墓坑底面のほぼ中央部に直径 0.40 m、深さ 0.25 mの穴（以下､床下穴）を掘削する。

なお、墓坑の掘削は墳丘の盛土以前に行われる。

第２段階　床下穴の閉塞

床下穴を何らかの目的で使用した後に、輝石安山岩の板状割石（一辺 0.3 ～ 0.4 m程度の不正方形）で閉塞する。

第３段階　粘土床と床石の設置

墓坑底面に白色粘土を厚さ 5 ～ 10cm 程敷く。その範囲は石室の設置範囲よりやや広い程度である。その後、床石を敷設する。敷設の範囲は長辺 3.00 m、短辺 1.00 mの平面・短冊形を呈している。床石は全て輝石安山岩の小振りの板石である。

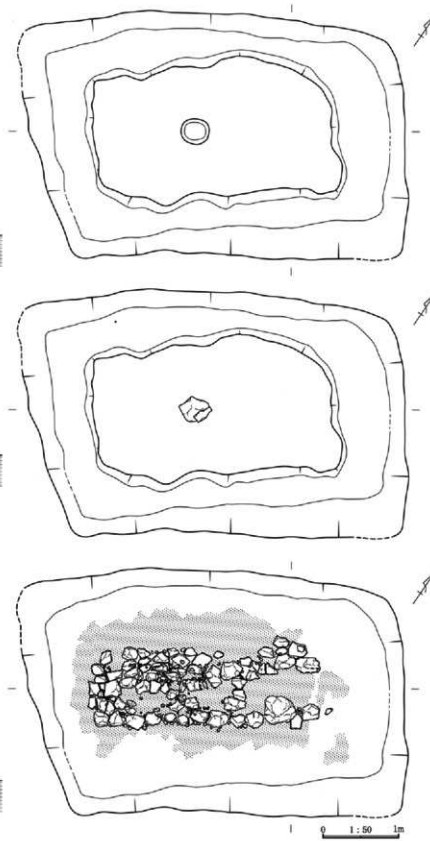


図 59　第１主体部　構築工程図（1）

第4段階　側壁根石の設置

長辺2.90 m、短辺0.80 mの長方形プランを形作るように側壁の根石を設置する。北東の短側壁→他の3つの側壁の順で根石が設置される。北東の短側壁の根石だけは積み方C（or D?）であるが、他は全て積み方Bである。なお、裏込もこの段階から始まる。

第5段階　側壁の構築と赤彩

輝石安山岩の板石を積みあげ、高さ0.6 mの側壁を構築する。裏込は側壁の積み上げと同時進行である。裏込材にはあまり白色粘土を用いず、割石と黒色土を主体とする。側壁構築後にベンガラを側壁に塗布する。

遺体及び副葬品はこの段階以後、納められたと推定する。

第6段階　天井石の高架と閉塞

天井石は、まず、石材下面（室内に向く面）にベンガラを塗布し、その後、北東側から順に高架させる。その後、輝石安山岩の小振りの割石と白色粘土で完全に閉塞させる。

墳丘盛土はこの後、始まる。

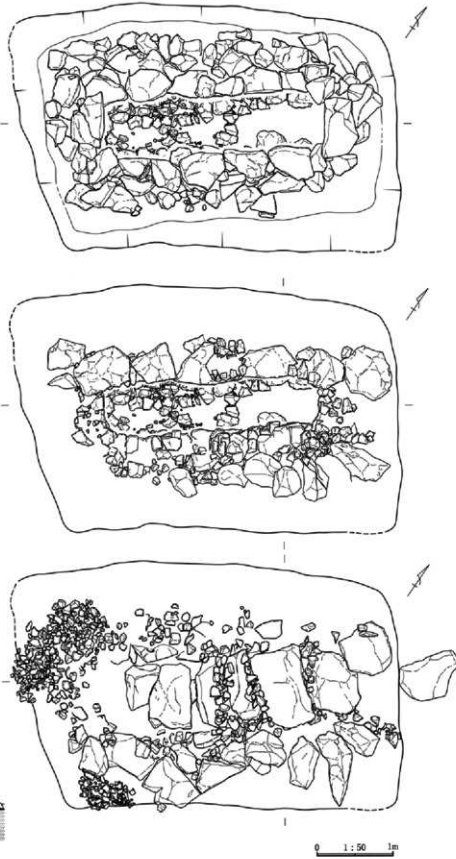


図60　第1主体部　構築工程図（2）

4　第２主体部

（1）概要（図61・62）

第２主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

検出確認面　確認面は盛土面と一部、地山基壇面であり、その面において、長軸2.95 m×短軸1.70 mの長方形の平面プランが確認され、墓坑の存在を認識した。覆土には粘性の強い暗褐色土が主に使用され、その状況から未盗掘であることを予想した。

規　模　石槨の主軸はN－20°－Eである。石槨の内法は、長軸1.70 m、短軸0.40～0.50 m、高さ0.42～0.56 mである。短軸長は中央付近が最も長い（0.50 m）が、全体的には北側が長く（0.48m）、南側が短い（0.40 m）。

石　材　石材は全て輝石安山岩の割石を用いている。側壁用材は、重量的には10.0～15.0kgのものが多く、南北短側壁用材が約30.0kgで最も重い。天井石用材には178.5kg（最大）のものがある。

積み方　石材は南北の短側壁には積み方Ｃを採用し、東西長側壁には積み方Ｂを採用している。床面には1.0kg前後の板石を平置きしている。

天井は４枚の石材を高架させている。大きさは、最北端（頭部上）の178.5kgが最大、最南端（足部上）の80.3kgが最小である。

裏込めは、輝石安山岩の小振りの割石と白色粘土をふんだんに使い、養生している。

閉　塞　閉塞は２重に行われていた。第１の閉塞は輝石安山岩の割石と粘土を用いた閉塞であり、天井石のすき間を割石で塞ぎ、さらにそのすき間を白色粘土で埋めていた。第２の閉塞は粘質土を用いた閉塞であり、主に、粘性の強い褐色・暗褐色土を用いて、墓坑を埋めていた。

赤　彩　赤色顔料の塗布は、長・短側壁及び全ての天井石に行われていた。長・短側壁への塗布は、壁面構築後に行われたものと思われる。天井石への塗布は、高架以前に内面のみに行ったものと思われる。顔料はベンガラである（第５章４参照）。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混合の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域で一般的な工法を採用している。

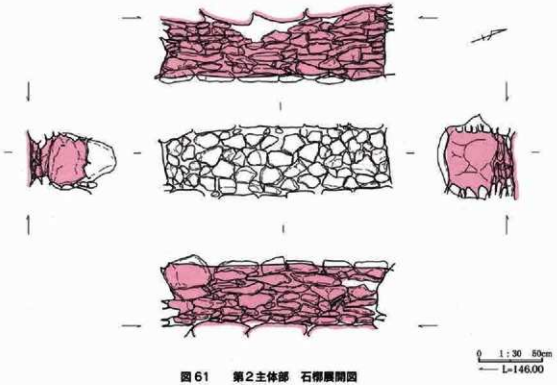


図61　第２主体部　石槨展開図

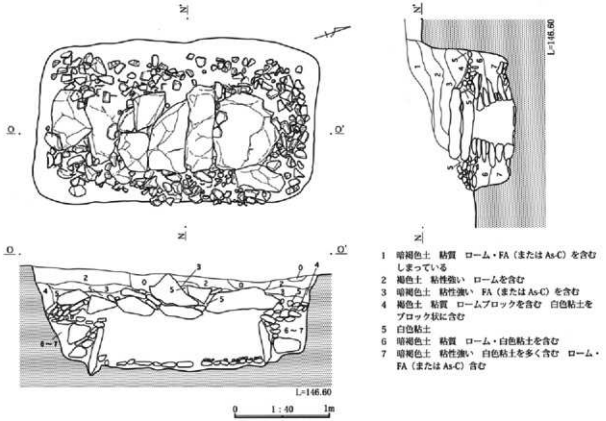


図62　第2主体部　石槨平・断面図（閉塞時）

（2）第2主体部内における遺物出土状況（図63）

人骨・人歯　出土しなかった

副葬品　内部北側から刀子（鉄－1・2）、ミニチュア農工具（鉄－7・8）が出土した。この4点については、床に敷かれた玉石の直上から出土した。

鉄鏃（鉄－3～5）と刀子（鉄－6）は槨内に流入した土砂に紛れて出土した。

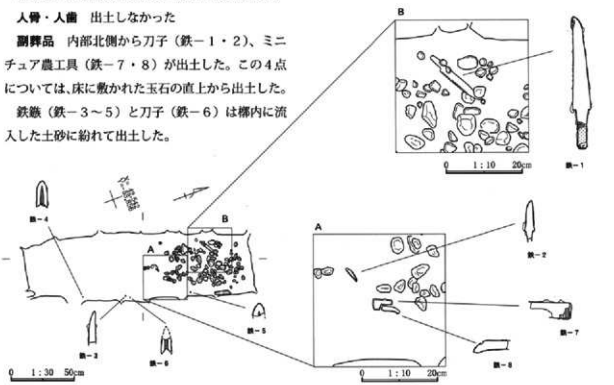


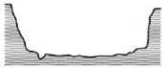
図63　第2主体部内副葬品出土状況図

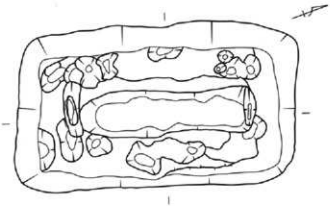
（3）解体調査データから復元する第２主体部の構築工程（図 64・65）

第１段階　墓坑の掘削

墳丘内の東端、墳裾に接する位置に、長軸 2.95 m、短軸 1.70 m、深さ 1.10 m（確認時）の隅丸長方形の墓坑を掘削する。この際、底面には長軸 1.85 m、短軸 0.50 m、深さ 0.05 mの舟底状の凹みを掘り込む。

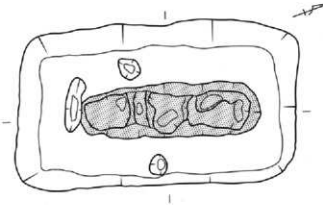
なお、墓坑の掘削は墳丘の盛土後に行われたと推定している。





第２段階　粘土床の敷設

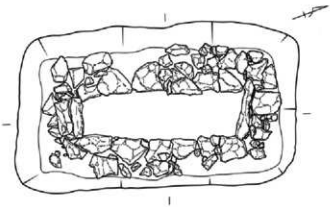
前段階で掘り込んだ凹みに、白色粘土を敷設する。また、その周囲にも暗褐色土を薄く敷設し、墓坑底面の凹凸を平坦化させる。なお、直径 20 ～ 25cm、深さ 8 ～ 10cm のピット２つが平坦面からほり込まれている。



第３段階　側壁の設置

長辺 1.70 m、短辺 0.50 mの長方形プランを形作るように側壁の根石を設置する。側壁は短側壁→長側壁の順で設置する。

なお、短側壁は板石を積み方Ｃし、長側壁は積み方Ｂしている。割石を用いた根固めのための裏込めも始まる。



0　1：80　2m　　0　1：40　1m

図 64　第２主体部　構築工程図（1）

第4段階　床石の設置

小振りの板石を床面に敷き詰める。

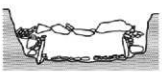
第5段階　側壁の構築・玉石の敷設及び赤彩

長側壁のみにて積み方Bにより、高さ0.4mの側壁を構築する。短側壁は各1枚の石材で既に0.4mの高さが確保されているので、この段階では壁面構築のための石積みは行わない。側壁構築後にベンガラを側壁に塗布する。床面には直径2～5cmの玉石を敷く。

遺体及び副葬品はこの段階終了後、納められたと推定する。

第6段階　天井石の高架

天井石は、北端の石材下面（恐らく遺体頭部の頭上）のみ、ベンガラを塗る。その後、北から順番に高架させる。



第7段階　天井の閉塞

天井石の隙間を別の中小の大きさの石材で閉塞し、その後白色粘土で間詰めをする。さらに、褐色粘質土で墓坑全体を閉塞する。

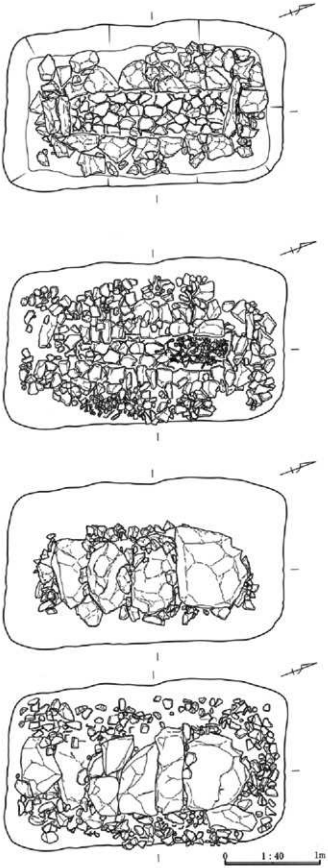


図65　第2主体部　構築工程図（2）

5　第3主体部

（1）概要（図66・67）

第3主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

検出確認面　確認面は盛土面であり、その面において、長軸2.70 m×短軸1.70 mの長方形の平面プランが確認され、墓坑の存在を認識した。覆土には褐色土が主に使用され、その状況から未盗掘であることを予想した。

規　模　石槨の主軸はN－66°－Eである。石槨の内法は、長軸1.70 m、短軸0.28～0.36 m、高さ0.34～0.46 mである。短軸長は東側の方がが長く（0.46m）、西側の方が短い（0.34 m）。

石　材　石材は全て輝石安山岩の割石を用いている。側壁用材は、重量的には15.0～25.0kgのもの多く、東短側壁用材が約50.0kgで、最も重い。天井石用材には62.0kg（最大）のものがある。

積み方　石材は東西短側壁には積み方Cを採用し、南北長側壁には積み方Bを採用している。

床面には2.0～15.0kg前後の板石を平置きしている、その上に直径2.0～5.0cm程の円礫（川原石）を床面全体に敷き詰めている。。

天井は5枚の石材を高架させている。大きさは、最東端（頭部上）の62.0kgが最大、最西端（足部上）の30.2kgが最小である。

裏込めは、輝石安山岩の小振りの割石と白色粘土を使い、養生している。

閉　塞　閉塞は2重に行われていた。第1の閉塞は輝石安山岩の割石を用いた閉塞であり、天井石のすき間を割石で塞ぐものであった。第2の閉塞は粘質土を用いた閉塞であり、主に、粘土を混ぜた暗褐色土やロームを含む暗褐色土等を用いて、墓坑を埋

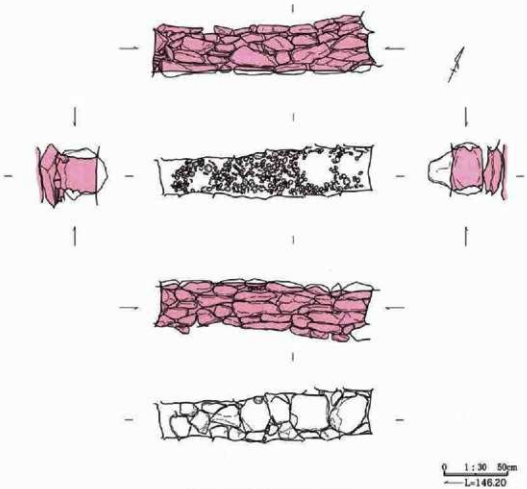
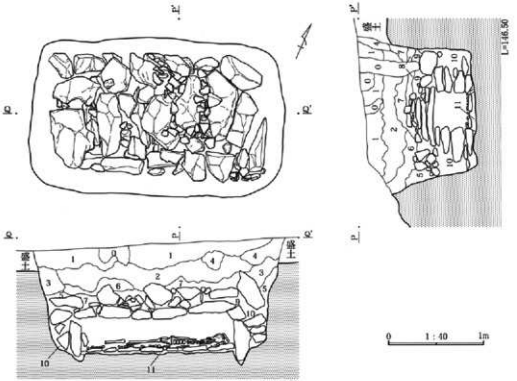


図66　第3主体部　石槨展開図



1　褐色土　ロームブロックわずかに含む　しまっている
2　暗褐色土　ローム・FA（またはAs-C）を含む　埴輪片を含む
3　暗褐色土　ローム・FA（またはAs-C）を多く含む　しまっている
4　褐色土　ローム含む　やわらかい
5　暗褐色土　ローム粒多い　白色粘土粒まじる　しまっている
6　黒褐色土　ローム粒　FA（またはAs-C）を含む
7　暗褐色土　白色粘土を含む　ロームを多く含む　（天井被覆土）
8　黄褐色土　しまっている　ロームが主体　かたい
9　黄褐色土　強い粘質　ローム含む　白色粘土も多く含む
10　褐色土　ロームと白色粘土を多く含む。安山岩の亜角礫も含む
11　白色粘土

図67　第3主体部　石槨平・断面（閉塞時）

めていた。なお、この閉塞土中には、本墳に樹立していたと思われる円筒埴輪片が僅かながら、混入していた。

赤　彩　赤色顔料の塗布は、長・短側壁及び全ての天井石に行われていた。長・短側壁への塗布は、壁面構築後に行われたものと思われる。天井石への塗布は、高架以前に内面のみに行ったものと思われる。顔料はベンガラである（第5章4参照）。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混合の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域で一般的な工法を採用している。

なお、本石槨は後述する人骨の出土状況から考えると、一度閉塞したものを再度開口したと考えられる。だが、その明らかな痕跡を遺構調査から情報として捉えることはできなかった。

（2）第3主体部における遺物検出状況（図68）

本石槨は完全未盗掘であり、調査による開口時においても、土砂が槨内の1/3程度を覆っていたが、攪乱の痕跡は見られなかった。

人　骨　成人男性の全身骨格（1号人骨）と幼児の頭骨（2号人骨）が出土した。1号人骨は、頭位を北東にとる仰臥伸展葬であり、頭骨の上には板石が1枚置かれていた。また、2号人骨は、1号人骨の寛骨と大腿骨に覆われていた（図68）。

1号人骨の大腿骨・寛骨は正位置にあり、乱れが認められないため、1・2号人骨の槨内への埋葬順序は「2号人骨→1号人骨」ということになる。

※人骨出土状況の詳細は田中良之教授の記録（第5章1）を掲載。

副葬品　なにも出土しなかった。

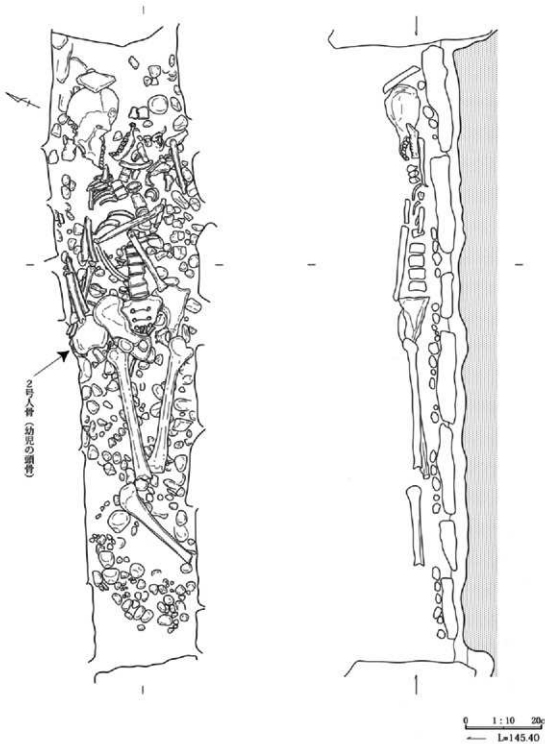
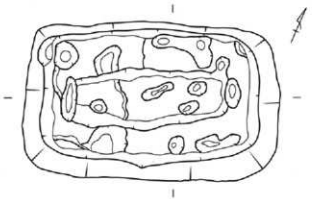


図 68　第３主体部　石棺内１号・２号人骨検出状況

（3） 解体調査データから復元する第3主体部の構築工程（図69・70）

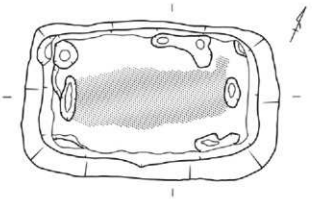
第1段階　墓坑の掘削

墳丘内の南端、墳裾に接する位置に、長軸2.70 m、短軸1.70 m、深さ1.15 m（確認時）の隅丸長方形の墓坑を掘削する。この際、底面には長軸1.80 m、短軸0.62 m、深さ0.05 mの舟底状の凹みを掘り込む。なお、墓坑の掘削は墳丘の盛土後に行われたと推定している。



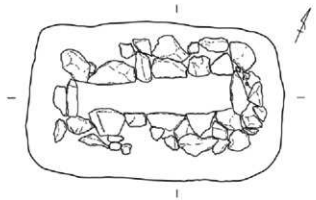
第2段階　粘土床の敷設

前段階で掘り込んだ凹みに、白色粘土を敷設する。また、その周囲にも暗褐色土を薄く敷設し、墓坑底面の凹凸を平坦化させる。



第3段階　側壁の設置

長辺1.70 m、短辺0.45 mの長方形プランを形作るように側壁の根石を設置する。側壁は短側壁→長側壁の順で設置する。なお、短側壁は板石を積み方Cし、長側壁は板石を積み方Bしている。割石を用いた根固めのための裏込めも始まる。



0　1：80　2m　　0　1：40　1m

図69　第3主体部　構築工程図（1）

第４段階　床石の設置

小振りの板石を床面に敷き詰める。

第５段階　側壁の構築・玉石の敷設及び赤彩

長側壁は板石を半積み方Ｂし、高さ 0.35 ～ 0.40 mの側壁を構築する。短側壁は各１枚の石材で構築しているために追加の石積みは行わない。側壁構築後にベンガラを側壁に塗布する。床面には直径２～５cm の玉石を敷く。

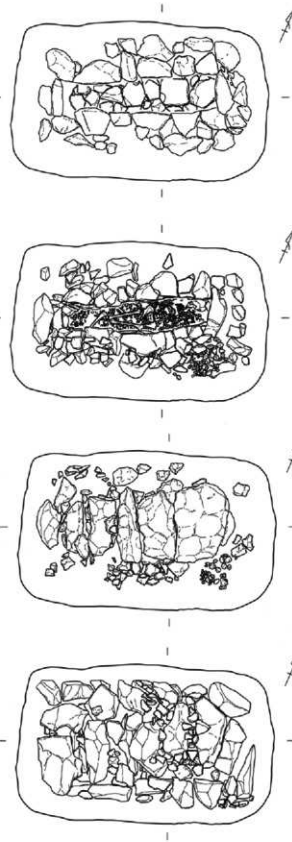
遺体はこの段階終了後、納めたと推定する。

第６段階　天井石の高架

天井石は、東端の石材下面（恐らく遺体頭部の頭上）のみ、ベンガラを塗る。その後、東から順番に高架させる。

第７段階　天井の閉塞

天井石の隙間を、中小の大きさの石材で閉塞し、その後白色粘土混じりの土でで間詰めをする。さらに、暗褐色土・褐色土で墓坑全体を閉塞する。



0　1:80　2m　　0　1:40　1m

図 70　第３主体部　構築工程図（2）

6　第4主体部

（1）概要（図71・72）

第4主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

検出確認面　確認面は地山面であり、その面で長軸1.90 m×短軸1.53 mの掘り方と思われる平面プランと側壁用材と思われる石材が確認され、墓坑の存在を認識した。なお、天井石は皆無であり、掘り方の西半分は削平により、失われていた。

規　模　石槨の主軸はN－68°－Eである。石槨の内法は、長軸（残存）1.20 m、短軸0.35 m、高さ（残存）0.26 mである。

石　材　残存する石材は全て輝石安山岩の割石である。側壁用材は、重量的には21.3～103.6kgのものを用いていた。

積み方　石材は東の短側壁には積み方Cを採用し、東西長側壁には積み方Dを採用している。床面には0.1～2.0kg前後の板石を平置きしている。

裏込めは、輝石安山岩の小振りの割石と、白色粘土をまぜた粘質の黄褐色土で養生している。

閉　塞　天井石がないため不明である。

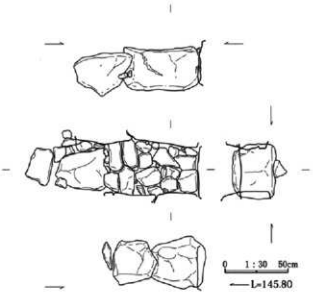


図71　第4主体部　石槨展開図

赤　彩　確認できなかった。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混合の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域で一般的な工法を採用している。

但し、側壁積みに積み方Dを採用している点が、他の石槨では認められない異質な点である。

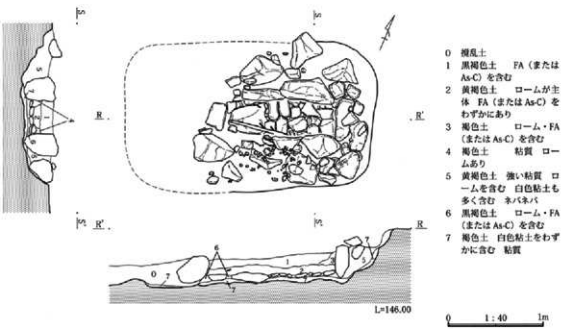


図72　第4主体部　石槨平・断面図

（2）第４主体部における遺物出土状況（図 73）

本石槨は後世の削平により、天井石の全てと、石槨の西半分を失った状態で検出された。だが、残存した箇所からは、多くの遺物が出土した。

人　骨　人骨・歯は検出されなかった。

副葬品　南長側壁際から鉄製品がまとまって出土した。

刀（鉄－９）は切先を西に、刃部を南に向けて出土した。切先の一部は削平により失われているが、それ以外の残存状況は良好である。

素環頭（鉄－10）は刀の中茎の脇から出土した。上部を東に向け、南長側壁に立てかけるように置いてあった。

刀子（鉄－11）は刀の中茎下から出土した。切先を西に向け、刃部を南に向けていた。

鉄鏃３点（鉄－12～14）のうち、１点（鉄－12）は、刀の刃部の下から出土した。鏃身を北西に向けていた。他の２点（鉄－13・14）は破片での出土であり、出土状況はあいまいである。

なお、石槨内部が盗掘のため荒らされた痕跡も認められないことから、若干のズレはあるかもしれないが、出土遺物の位置についてはほぼ原位置であると考えている。

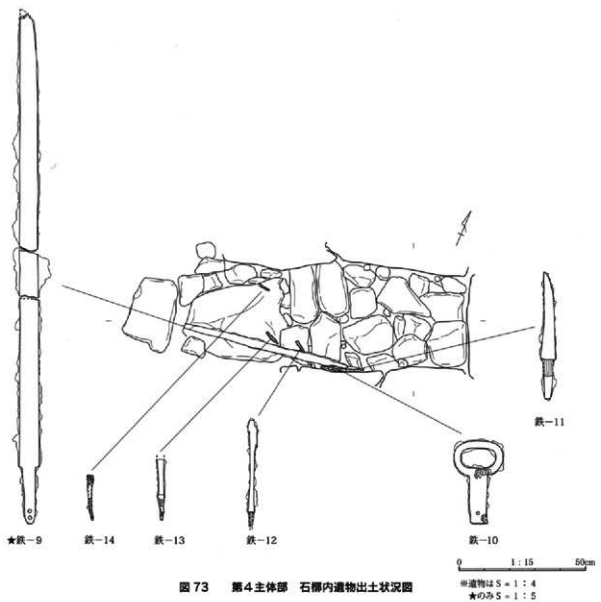
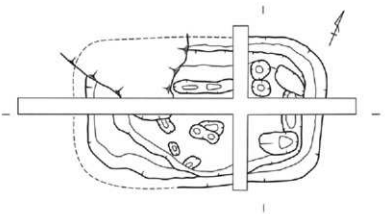


図 73　第４主体部　石槨内遺物出土状況図

（3）　解体調査データから復元する第4主体部の構築工程（図74）

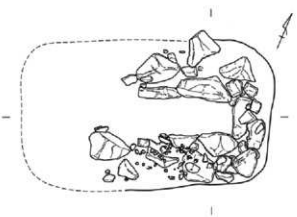
第1段階　墓坑の掘削

墳丘の南西端、円丘と造り出し部の取りつく箇所に、長軸2.70 m～、短軸1.70 m（確認時）の隅丸長方形の墓坑を掘削する。



第2段階　側壁の設置

長辺1.50 m～、短辺0.40 mの長方形プランを形作るように側壁の根石を設置する。側壁は短側壁→長側壁の順で設置する。なお、長・短側壁とも積み方Cを採用している。割石を用いた根固めのための裏込めも始まる。



第3段階　床石の設置～天井の閉塞

小振りの板石を敷き詰めて床とする。その上に玉石は敷かない。

この後、遺体・副葬品の埋納を行う。

さらには、天井の高架、閉塞が行われたと考えられる。

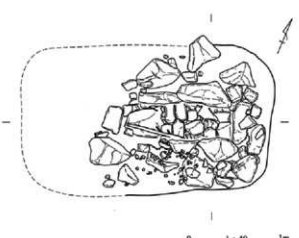


図74　第4主体部　構築工程図

7　墳丘下旧地表面（図 75）

墳丘盛土を除去した面、所謂「盛土行為直前面」からは、墳丘下面溝が検出された。

この墳丘下面溝は、円丘部と同心円状の掘り込みであり、調査可能範囲のほぼ全域で検出された。掘り込みは溝状を呈し、その規模は、直径約 15.00 mの大きさをもち、上幅 2.80 ～ 5.00 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mを計る。平面規模に比して深さが極端に浅いため、平面的には認定が困難であったが、断面観察においては確実にその存在が確認された（図 54）。

これと同種の遺構は、多田山１号墳で検出されており、こちらでは溝内からベンガラの塊が出土している。だが、多田山３号墳の墳丘下面溝内からは、調査範囲内では出土遺物は皆無であった。

この溝は、盛土との関係において特別な状況は見いだせない。断面を観察する限り、盛土行為時に、墳丘下面溝部分に特定の質の土を用いる状況は見られなかった。むしろ、第１主体部の床下穴を中心とした同心円上に、この溝や、墳裾、周堀ラインが重複することを重視すると、この溝の性格づけとしては、墳丘構築時の平面プランニング用と考えた方がよさそうである。

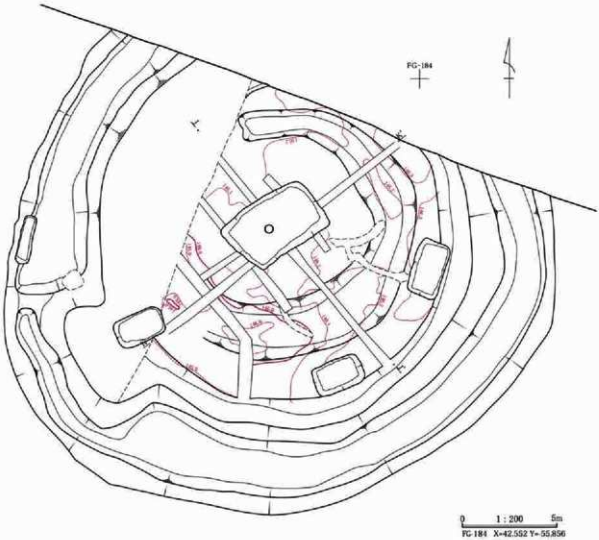


図 75　墳丘盛土下地表面平面図

8　出土遺物

（1）円筒埴輪・朝顔形埴輪（図76～83・表11）

円筒埴輪は接合により50本以上、朝顔形埴輪は3本以上が確認された。各属性については次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全て2条3段構成である。

法　量　器高は31.0～38.0cmの範囲にあるが、32.0cm前後のものと35.0cm前後のものとの2つにまとまりが認められる。

口径は19.7～26.0cmの範囲にあるが、22.0cm前後のものと24.5cm前後のものとの2つにまとまりが認められる。

底径は10.0～14.8cmの範囲内にあるが、11.0～12.0cmのものが多い。

技法の特徴　外面調整については、全てが「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」である。

内面調整については、「全面をタテナデし、最後に口縁をヨコナデする」という工程は全資料に共通する基本工程である。だが、中間工程において差違が認められ、「全面にタテナデを施した後、同じくほぼ全面にハケを施し、最後にヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、口縁をヨコナデするもの」の3種類に大別できる。うち、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」が主体的に存在する。なお、これらは、ハケの方向や工具の差違によって、細分も可能である。

突　帯　断面形には「台形」、「三角形」の2種類がある。主体的な存在は「三角形」であるが、両者が混在する場合もままある。また、突帯の器面へのナデつけには「仕上げナデ（突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を「上端・下端とも施すもの」、「上端のみに施すもの」の2種類がある。主体的な存在は「上端のみに施すもの」である。

透　孔　「半円気味の円形」と「円形」の2種類がある。主体的な存在は「円形」である。

線　刻　多種の線刻が認められる。外面3段には「＝」、「－」、「∩」がある。また、内面上位には「＃」「｜｜」がある。

底部調整　1点も確認できない。

色調・焼成　色調には「黄橙色系」「橙色系」「黄褐色系」「淡黄色系」「赤褐色系」がある。焼成には「硬質な焼き上がり」と「軟質な焼き上がり」とあるが、前者の方が多い。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石が含まれているほか、長柱状黒色結晶（長石？）の混入が目立つ。なお、片岩や骨針化石が認められるものも一定量が含まれる。

赤　彩　外面の1条目の突帯～口縁の間と、内面の口縁部付近に施されているものが多い。

B．朝顔形埴輪

規　格　全体規格が判るものはないが、残存部からは、円筒部は3条4段構成、朝顔部には突帯が1条つくことが想定できる。

法　量　器高は不明だが、残存部からは54.0cm程度が推定される。口径は33.0cmを計り、底径は推測ながら12.0cm程度と想定できる。

技法の特徴　外面には「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面には「全面にタテナデを施した後、円筒部上半以上にハケを施し、最後に口縁にヨコナデを施」している。

突　帯　断面・台形で、上のみ仕上げナデを施す。

透　孔　円形である。

線刻・底部調整　ともに認められない。

色調・焼成　色調は橙色であり、硬い焼成であるものが主体であるが、。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石が含まれているほか、長柱状黒色結晶（長石？）の混入が目立つ。

赤　彩　確認できない。

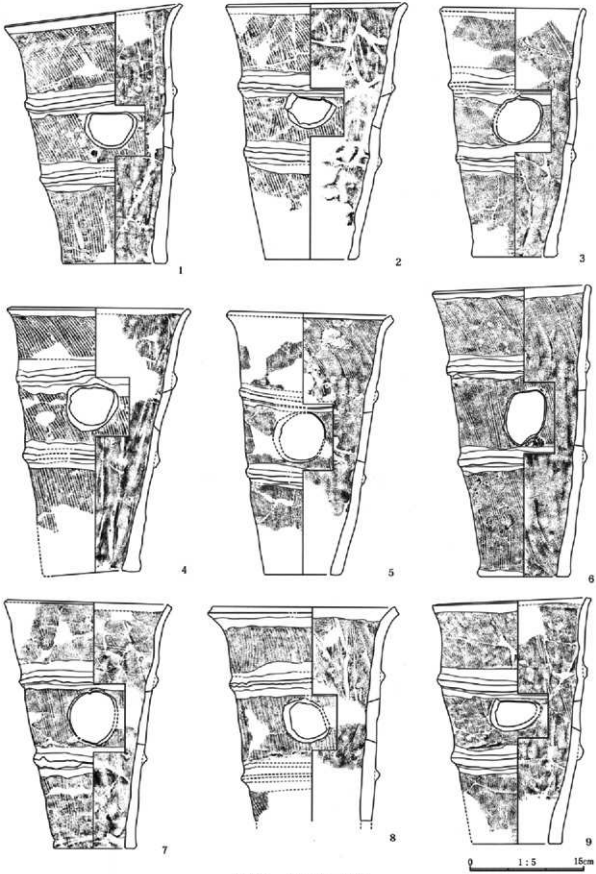


図 76　円筒埴輪（1）

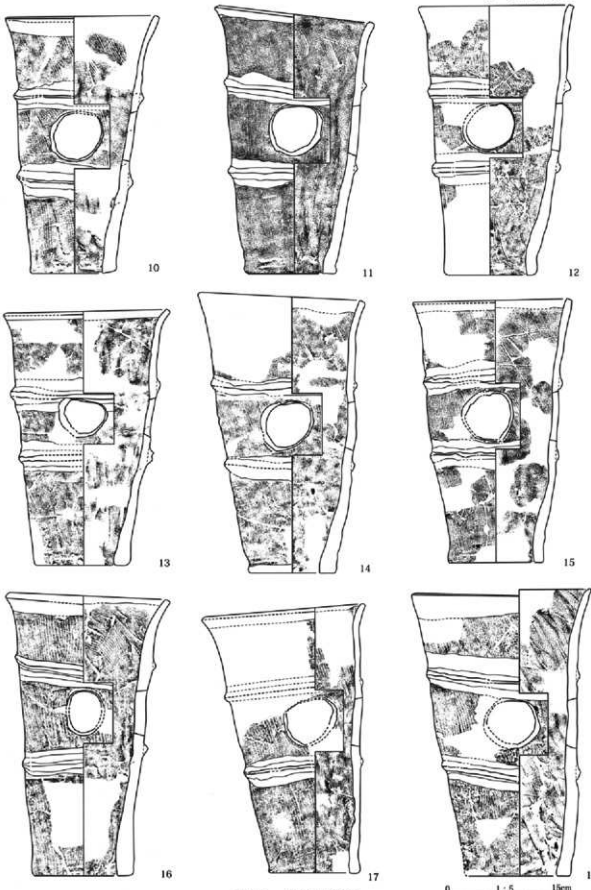


図77　円筒埴輪（2）

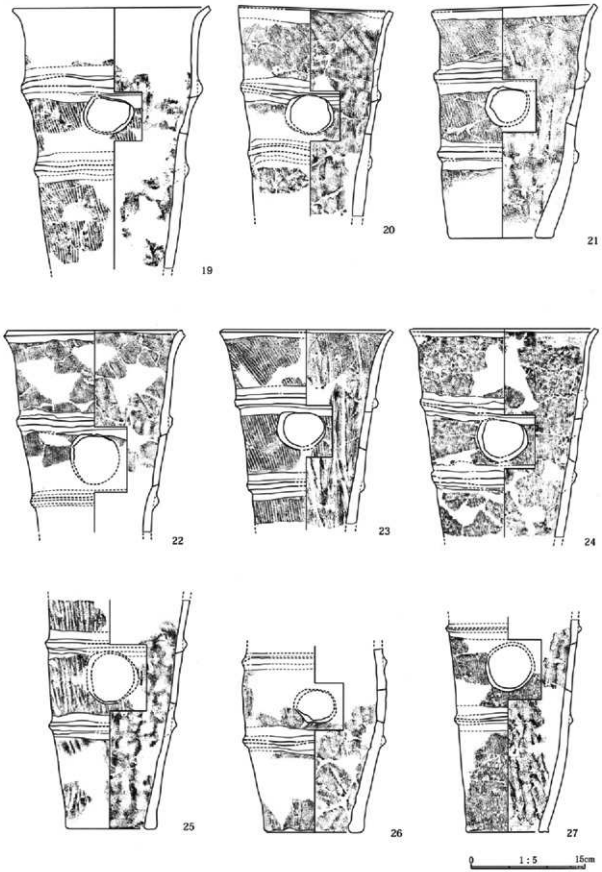


図 78　円筒埴輪（3）

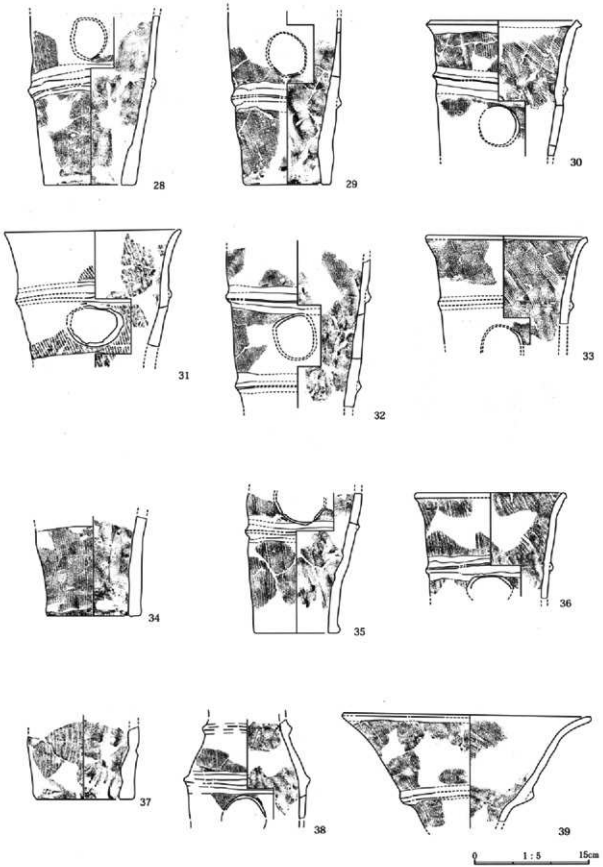


図79　円筒埴輪（4）

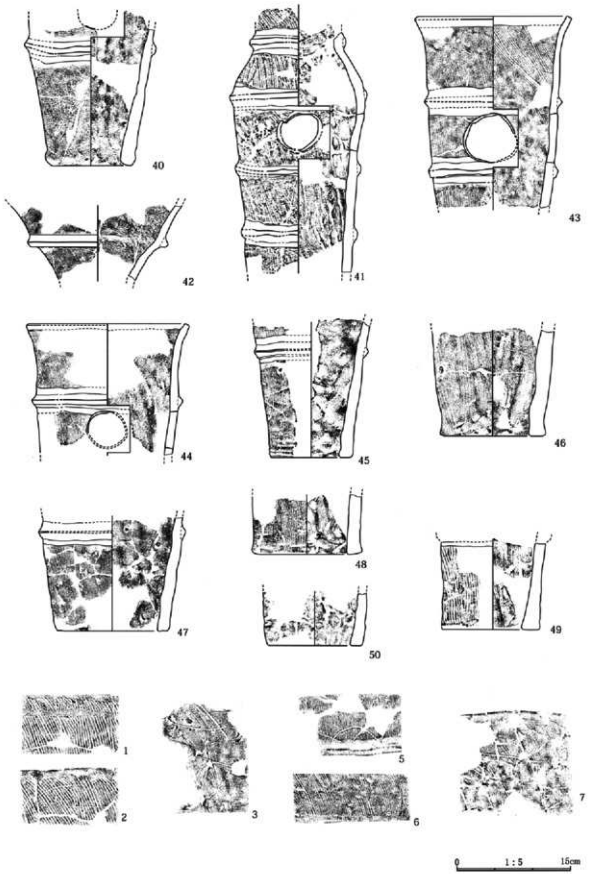


図 80　円筒埴輪（5）・線刻（1）

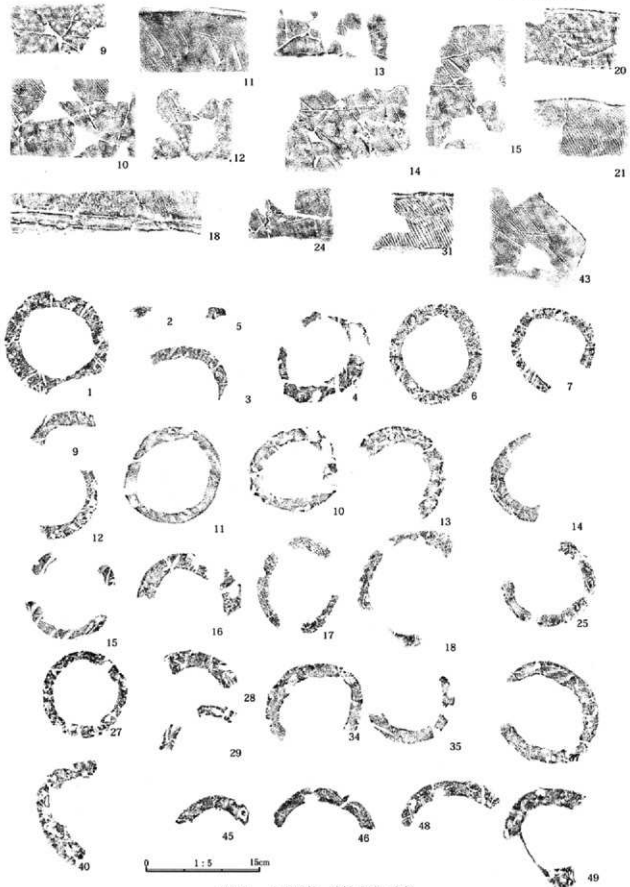


図81　円筒埴輪　線刻（2）・底部

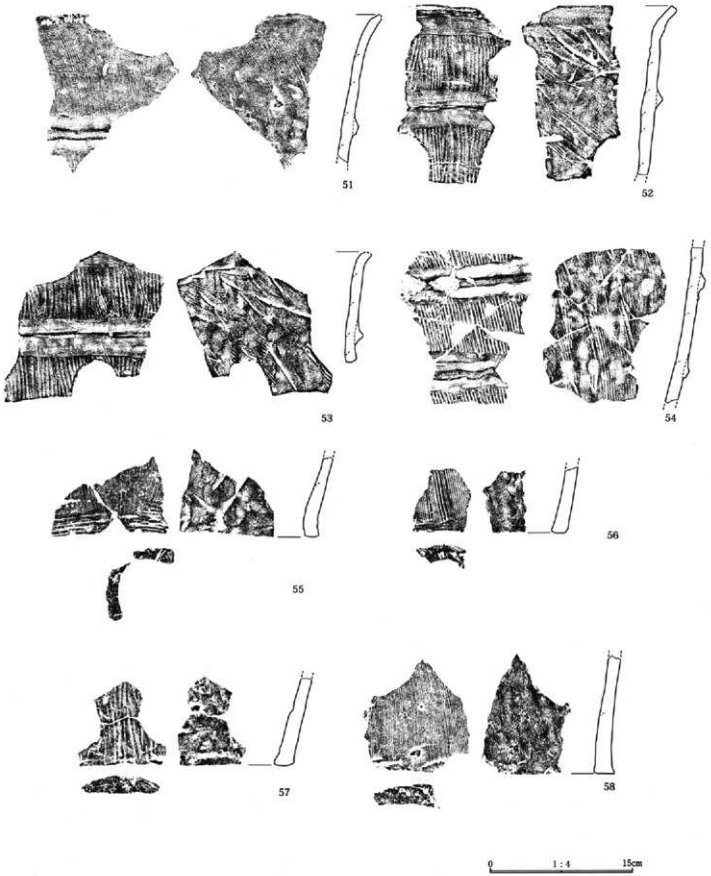


図82　円筒埴輪　破片（1）

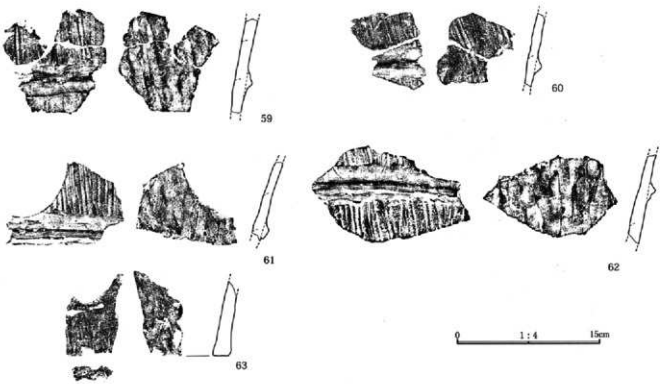


図83　円筒埴輪　破片（2）

多田山3号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号
種類…普通⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪
器高…口縁部から体部までの高さ（口縁の高さが一定していない場合はいちばん低い位置を計測）※斜体数字は復元高
口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
調整（外面）…A⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　a⇨「タテハケ」（a は、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載）　?⇨「摩滅のため不明」
調整（内面）…A⇨「20cm 以上を一気になであげるタテナデ→粗いタテナナメハケ→口縁付近ヨコナデ」　B⇨「20cm 以上を一気になであげるタテナデ→口縁付近ヨコナデ」　C⇨「短いタテナデ→上半のみタテナナメハケ→口縁ヨコナデ」　D⇨「短いタテナデ→上半タテハケ→上端ナナメハケ→口縁付近ヨコナデ」　E⇨「短いタテナデ→粗いタテハケ→口縁付近ヨコナデ」　a⇨「タテナデ」　b「?→タテハケ→口縁付近ヨコナデ」　c⇨「ナデ→タテナナメハケ」　d⇨「板ナデ?」（a～d は、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載）
ハケメ…幅 10mm あたりのハケメの本数
突帯…A⇨断面が台形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　B⇨断面台形＋丁寧な仕上げナデを上端のみ施す。下端は簡略的な仕上げナデ　C⇨断面三角形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　D⇨断面三角形＋丁寧な仕上げナデを上端のみ施す。下端は簡略的な仕上げナデ　E⇨断面が台形と三角形＋仕上げナデは上端のみ施す
透孔…A⇨半円志向の円形　B⇨正円形　C⇨不整円形
ヘラ描き…○⇨あり　×⇨なし　?⇨箆描きが施されそうな部分が欠落しているため、不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
箆描の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外1⇨外面基部　外2⇨外面2段目　外3⇨外面3段目　内1⇨基部周辺の内面　内2⇨2段目制近の内面　内3⇨3段目制近の内面　「形」は、描かれた形を掲載。（例：外面3段目に横線2本の箆描き→「外3／＝」）
赤彩…●⇨外面の基部を除く全面＋内面の上部に赤彩あり　○⇨外面の基部を除く全面のみに赤彩あり　×⇨なし　a⇨外面に赤彩（a は、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載）
底部調整…○⇨あり　×⇨なし　－⇨底部がないため不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
色調…A⇨黄橙色　B⇨浅黄橙色　C⇨にぶい橙色　D⇨橙色　E⇨明黄褐色　F⇨灰黄褐色　G⇨淡黄色　H⇨明赤褐色
出土位置…出土したエリア（図55）に○を記載。※1個体が複数破片の接合のために、出土エリアが複数にまたがる場合が多い。
備考…その他、特記事項を記載。

表11　円筒・朝顔形埴輪観察表

番号	種類	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	刷毛 (本)	突帯	透孔	置楯	赤彩	底調	色調	出土位置 I	出土位置 II	出土位置 III	出土位置 IV	備考
1	円筒	31.0	23.8	14.0	A	A	3～4	B	A	○	外3／＝	○	×	D		○		軟質胎土
2	円筒	33.6	24.3	*13.0*	A	A	3～4	A	A	○	外3／＝	○	×	D		○		軟質胎土
3	円筒	32.7	19.7	11.5	A	C	7～8	B	B	○	内3／#	●	×	B	○			口縁端部シャープ
4	円筒	35.0	24.4	*13.0*	A	A	3～4	B	C	?	?	○	×	B			○	軟質胎土
5	円筒	34.0	22.5	*11.0*	A	C	6～7	A	B	○	外3／∩	●	×	B		○		口縁端部シャープ・埴輪粘1
6	円筒	38.0	21.0	11.8	A	C	4～5	A	B	○	外3／－	●	×	D		○		
7	円筒	32.3	22.2	11.1	A	C	4～5	B	B	○	内3／#	●	×	C			○	
8	円筒	*34.0*	25.1	－	A	C	2～3	D	B	×	×	○	－	C			○	口縁端部シャープ
9	円筒	32.0	21.2	12.0	A	C	5～6	A	C	○	外3／＝	○	×	C			○	口縁端部摘み出し
10	円筒	33.8	20.8	11.2	A	C	3～4	D	B	○	内3／#	●	×	B		○		
11	円筒	35.0	21.0	12.0	A	C	6～7	D	B	○	外内3／	●	×	B		○		重量感がある／口縁端部摘み出し・埴輪粘2
12	円筒	35.5	*20.3*	12.1	A	C	7～8	B	B	○	内3／#	●	×	B		○	○	
13	円筒	33.4	22.0	12.9	A	C	6～7	A	A	○	外3／＝	○	×	B		○		
14	円筒	34.5	22.2	11.7	A	C	6～7	B	B	○	内3／#	●	×	B	○	○		
15	円筒	34.5	21.0	12.2	A	C	7～8	B	B	○	内3／#	●	×	E	○	○	○	
16	円筒	36.5	22.0	13.1	A	C	2～3	C	B	?	?	×	×	B	○	○		○	
17	円筒	34.8	22.0	12.0	A	C	5～6	D	B	?	?	○	×	C		○		○	結晶片岩混入
18	円筒	37.6	23.6	14.0	A	B	3～4	C	B	×	×	○	×	C	○		○	重量感あり／口縁端部シャープ
19	円筒	*36.0*	*26.0*	－	A	C	3～4	B	A	?	?	○	－	D			○	口縁端部シャープ
20	円筒	*31.0*	20.8	－	A	C	7～8	B	A	○	外3／＝	○	－	C		○		軟質胎土／口縁端部シャープ
21	円筒	31.0	22.0	*13.8*	A	D	3～4	B	A	○	外3／＝	○	×	F		○		軟質胎土／つくりが雑
22	円筒	*31.0*	24.0	－	A	C	5～6	A	B	○	外3／∩	○	－	B		○	○	口縁端部シャープ
23	円筒	*31.0*	23.0	－	A	A	4～5	B	A	○	外3／＝？	○	－	D		○		軟質胎土／結晶片岩混入？／口縁端部シャープ
24	円筒	*35.0*	25.2	－	A	E	6～7	B	A	○	外3／＝	○	－	C		○		軟質胎土／口縁端部シャープ
25	円筒	－	*21.0*	12.0	a	a	2～3	B	B	?	?	×	×	H	○	○		結晶片岩混入？
26	円筒	－	－	13.1	a	a	?	D	B?	?	?	a	×	D		○		軟質胎土／結晶片岩混入？
27	円筒	－	－	11.0	a	c	5～6	D	B?	?	?	a	×	C			○	
28	円筒	－	－	12.0	a	a	7～8	D	B?	?	?	a	×	A	○			
29	円筒	－	－	11.7	A	b	7～8	D	B?	?	?	a	×	G				○
30	円筒	－	21.0	－	A	c	7～8	C	B	○	内3／‖	○	－	C		○		
31	円筒	－	*23.5*	－	A	A	3～4	B	A	○	外3／＝	○	－	B	○			軟質胎土
32	円筒	－	－	－	a	c	6～7	B	B?	?	?	a	－	A	○	○		
33	円筒	－	21.6	－	A	b	7～8	C	B?	?	?	a	－	B	○	○		
34	円筒	－	－	12.6	a	b	7～8	－	－	?	?	－	×	A		○	○	
35	円筒	－	－	11.2	a	a	4～5	D	B?	?	?	a	×	A		○		
36	円筒	－	20.2	－	A	C	3～4	D	C?	?	?	×	－	H		○	○	結晶片岩混入
37	円筒	－	－	13.2	a	a	3～4	－	－	?	?	－	×	B	○	○		－
38	朝顔	－	－	－	a	a	7～8	－	B	?	?	a	－	B	○			
39	朝顔	－	33.0	－	A	C	5～6	B	－	?	?	a	－	B		○		○
40	円筒	－	－	12.0	a	a	7～8	A	B?	?	?	－	×	E	○			
41	朝顔	－	－	－	a	a	3～4	B	B	?	なし？	a	－	B	○			軟質胎土
42	朝顔	－	－	－	a	c	7～8	B	－	?	?	a	－	C	○	○		
43	円筒	－	*21.0*	－	A	C	7～8	E	B	○	内3／#	a	－	B				○
44	円筒	－	*21.8*	－	A	C	6～7	B	B?	?	?	a	－	B		○		
45	円筒	－	－	*11.4*	a	a	6～7	D	B?	?	?	a	×	B		○		白い胎土
46	円筒	－	－	*14.0*	a	a	3～4	－	－	?	?	－	×	C		○		
47	円筒	－	－	*14.8*	a	a	7～8	－	－	?	?	－	×	C		○		
48	円筒	－	－	*14.5*	a	a	4～5	－	－	?	?	－	×	B				○
49	円筒	－	－	13.0	a	a	3～4	－	－	?	?	－	×	B		○		
50	円筒	－	－	12.6	?	a	板ナデ	－	－	?	?	－	×	F		○		軟質胎土／つくり雑
51	円筒	－	*22.0*	－	A	C	6～7	A	A?	○	外3／－	a	－	D	○	○		
52	円筒	－	*23.0*	－	A	C	3～4	C	B	?	?	a	－	G				○
53	円筒	－	*23.0*	－	A	C	3～4	C	B	?	?	a	－	D	○			
54	円筒	－	－	－	a	c	3～4	B	A?	?	?	a	－	C				○
55	円筒	－	－	*10.0*	a	a	7～8	－	－	?	?	－	×	B	○			軟質胎土／つくり雑
56	円筒	－	－	*11.0*	a	a	5～6	－	－	?	?	－	×	B		○		白い胎土
57	円筒	－	－	*14.0*	a	a	2～3	－	－	?	?	－	×	B				白い胎土
58	円筒	－	－	*14.0*	a	a	6～7	－	－	?	?	－	×	C				○
59	円筒	－	－	－	a	a	2～3	C	－	?	?	×	－	D		○		○
60	円筒	－	－	－	a	c	2～3	C※	－	?	?	×	－	D				結晶片岩混入
61	円筒	－	－	－	a	a	2～3	B※	B?	?	?	×	－	D	○			○ 結晶片岩混入
62	円筒	－	－	－	a	a	2～3	D※	－	?	?	×	－	D		○		結晶片岩混入
63	円筒	－	－	*13.0*	a	a	2～3	－	－	?	?	－	×	B			○	結晶片岩混入

(2) 形象埴輪（図84）

A．人物埴輪

人－1

男子の頭部。顔面部から頭頂部まで、突起物による表現はない。額部には鉢巻の表現と思われる赤彩があり。美豆良は欠損する。外面は顔面以外はハケ調整。顔面はハケ調整後、ナデ調整。赤彩は頬・顎のほか、額にあり。色調は橙色。胎土中には輝石とチャートが認められる。焼成はやや硬質。造り出し部の東側くびれ部周堀内より出土。

人－2

左手の破片。人差し指と中指が欠損。ユビは比較的忠実に表現される。外面、手の甲はハケ調整。ユビはナデ調整。手の平はナデ調整。赤彩は手の甲から手首部分にあり。手のひらの一部に、不整形の凹部がある。焼成時に棒を刺したものと考えられる。色調は橙色。胎土中には輝石とチャートが認められる。焼成はやや硬質。周堀エリアⅡより出土。

人－3

部位：右腕。肩の付け根から二の腕付近の破片。赤彩なし。細かいハケ調整。部分的にナデ調整のみ。色調は橙色。胎土中には輝石とチャートが認められる。焼成はやや硬質。周堀エリアⅡより出土。

人－4

部位：島田髷の後右端の破片。上面にはハケ調整。下面には頭部からの剥離痕跡があり。赤彩は不明。色調は橙色。胎土中には輝石が認められる。焼成はやや粉っぽい。周堀エリアⅡより出土。

人－5

部位：脇の下付近の破片。外面はナデと細かいハケ調整の痕跡がある。内面は大半が剥離している。外面の一部に赤彩あり。色調は橙色。胎土中には輝石とチャートが認められる。焼成はやや硬質。周堀エリアⅡより出土。

B．家形埴輪

家－1

部位：壁体の一部。内外面ともハケ調整。色調は橙色。胎土中には輝石が認められる。焼成はやや硬質。周堀エリアⅢより出土。

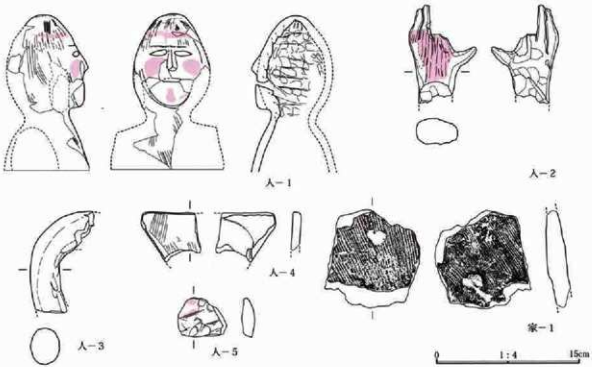


図84　人物埴輪・家形埴輪

（3）土器（図85・86・表12・13）

出土土器には、須恵器と土師器がある。器種は甕と坏に限定される。出土地点は墳丘表土と周堀覆土である。

土師器・坏類は多くが所謂「模倣坏」に属する（器－１・３～８）。口径は12.0～13.0cm、高さは4.5～5.0cmの範疇におさまるものと推定する。ほぼ完形に接合できた資料は１点（器－１）は口縁が直立し、坏部が深みをもつものであり、「模倣坏」の中でも古相を示す。また、その他の破片資料についても同様の様相がうかがえる資料が多い。この中には多田山４号墳の埴輪胎土によく似ているものもあり（器－１・３～５）、示唆的である。須恵器・坏（器－２）は口径12.0cm、高さ4.4cmの有蓋坏の身の部分である。立ち上がりはやや内斜気味であり、端部は丸く収める。身の部分はやや深めである。この須恵器坏身は墳丘表土より出土の資料であるが、その形態的特徴から、この古墳の時期と大きく離れるものではないといえる。

土師器・坏（器－９）には内面にベンガラの付着痕跡がある。須恵器・坏蓋（器－10）は時期が異なるものと考える。

須恵器・大甕（Ｅ－11～31）は破片数は少ないもの、技法的特徴の差異から３個体（或いはそれ以上）の存在が推定される。１個体目は、波状文と沈線とを施し、円形浮文を付加させた文様をもつ口縁（器－11）に、平行叩きとカキ目を外面に施す体部（器－15・16・21・22・25・27）を有するものである。２個体目は、浅い沈線のみの文様をもつ口縁（器－12・14）と、平行叩きを外面、同心円状叩きを内面に施す体部（器－17・18・23）を有するものである。なお、この２個体目は胎土が極めて緻密で、セピア色をしている。３個体目は、平行叩きを外面、同心円状叩きを内面に施す体部（器－13・28・29・31）を有するものである。胎土が極めて粉っぽいのが特徴であり、他の須恵器片との識別は一目瞭然の一群である。

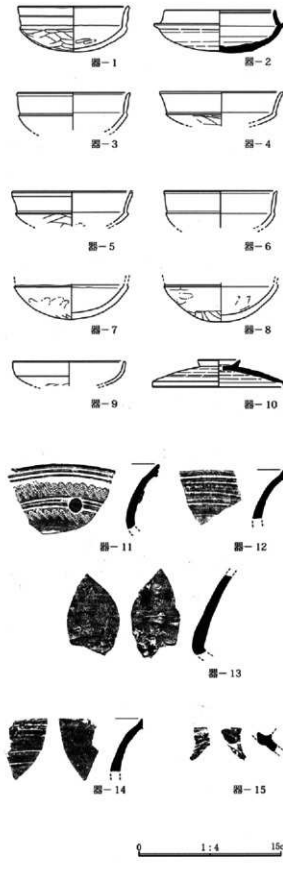


図85　土器（1）

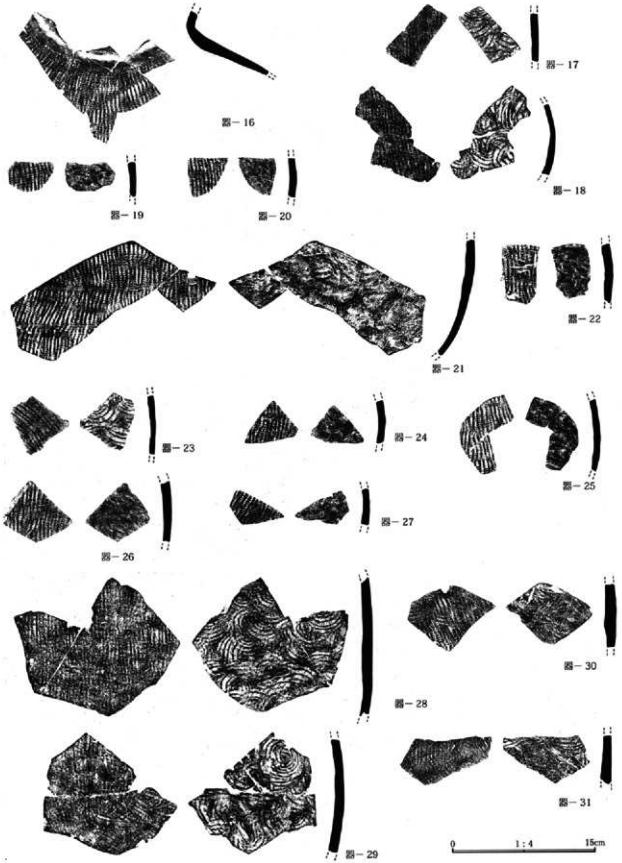

器－16
器－17
器－18
器－19
器－20
器－21
器－22
器－23
器－24
器－25
器－26
器－27
器－28
器－29
器－30
器－31
0
1：4
15cm

図86　土器（2）

表12　土器　観察表（1）

番号	器種	法量(cm) 口/底/高	形態及び成形の特徴	色調	焼成	出土エリア Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	備考
1	土師器 坏	11.9/× /4.8	形態：口縁は僅かに内湾気味に立ち上がる。中位に横ナデによる、浅い段差をもち、端部は僅かに外反し、丸く収める。口縁と体部の境に稜を持つ。体部はやや深い。丸底。　成形形：口縁は横ナデ。稜線は、上位は強い横ナデ、下位はヘラケズリによってケズリ出されている。体部は斜横位のヘラケズリ。体部内面は斜横位のナデ。	橙色	やや 密		○			4号墳の埴輪胎土によく似ている。
2	須恵器 坏身	11.9/−/ 4.4	形態：たちあがりはやや高く、内斜し端部に至る。端部は丸い。受け部は短く、ほぼ水平にのびる。底部は浅く、やや扁平。外周1/2を回転ヘラケズリ調整。	灰白色	やや 密	墳丘表土				全体に黒く煤けている。完形
3	土師器 坏	12.0/× /3.5〜	形態：口縁は内湾気味に直立する。端部は丸く収めるが、内面に内斜する面を持つ。口縁と体部の境に明瞭な稜を持つ。体部は深めと推定。丸底と推定。　成形形：口縁はヨコナデ。稜線は、上位の強い横ナデによって形作られている。体部は外面目不定なで（残存部のみ）、内面は斜横位のナデ。	橙色	密		○			4号墳の埴輪胎土によく似ている。6と同一？
4	土師器 坏	13.0/× /3.5〜	形態：口縁は外斜する。端部は面取りされ、浅い沈線がめぐる。口縁と口縁と体部の境に明瞭な稜を持つ。体部はやや深めと推定。丸底と推定。　成形形：口縁はヨコナデ。稜線は、上位は強い横ナデ、下位はヘラケズリによってケズリ出されている。体部は斜横位のヘラケズリ。体部内面は斜横位のナデ。	橙色	やや 密	○				4号墳の埴輪胎土によく似ている。
5	土師器 坏	13.0/× /3.5〜	形態：口縁は僅かに内湾気味に外斜する。端部は面取りされ、沈線がめぐる。口縁と体部の境に明瞭な稜を持つ。体部はやや深めと推定。丸底と推定。　成形形：口縁はヨコナデ。稜線は、上位は強い横ナデ、下位はヘラケズリによってケズリ出されている。体部は斜横位のヘラケズリ。体部内面は斜横位のナデ。	にぶい 黄橙色	密	○				内外面に赤彩か??
6	土師器 坏	12.0/× /3.5〜	形態：口縁は内湾気味に直立する。端部は丸く収めるが、内面に内斜する面を持つ。口縁と体部の境に明瞭な稜を持つ。体部は深めと推定。丸底と推定。　成形形：口縁はヨコナデ。稜線は、上位の強い横ナデによって形作られている。体部は外面目不定なで（残存部のみ）、内面は斜横位のナデ。	橙色	密	○				4号墳の埴輪胎土によく似ている。5と同一？
7	土師器	12.0〜/ ×/3.8〜	形態：口縁欠損。口縁と体部の境に明瞭な稜をもつ。体部は深い。丸底。　成形形：体部は内外面とも丁寧なナデを施す。	橙色	密			○		内外面に赤彩か??
8	土師器 坏	12.0〜/ ×/3.9〜	形態：口縁欠損。口縁と体部の境に明瞭な稜をもつ。体部は深い。丸底。　成形形：体部は外面はナデ後底部のみケズリ。内面は丁寧なヘラナデを施す。	橙色	やや 密	○				内外面に赤彩か??
9	土師器 坏	13.0/× /2.5〜	形態：口縁は短く、内湾気味に立ち上がる。端部は丸く収めるが、内面が僅かに突出する。口縁と体部の境には浅い沈線が1条めぐる。体部は浅い。丸底と推定。　成形形：口縁はヨコナデ体部は外面はケズリ後、ナデ。内面はナデ。	橙色	やや 密	○				−
10	須恵器 坏蓋	14.0/−/ 2.9	形態：天井に環状鈕を貼付。天井からやや内湾気味に下り、端部近くでやや外反する。端部は下方に折れ、丸く仕上げる。　成形形：天井部は回転ヘラ、上位1/3は回転ヘラ??を施す。内面もナデ。構み貼付。	灰白色	やや 密	○				内面に焼き重ねの痕跡あり。外面には自然釉が部分的に掛かる
11	須恵器 大甕	22.0/− /8.5〜	口縁部のみ　外湾気味に短く、開く。外面の中位に3条の沈線をめぐらした後、その上下に波状文を施す。さらに、その後沈線上に円形鈕を貼付する。口縁端部は外面に1.3cmの面を持ち、2条の沈線がめぐる。 成形形：ヨコナデ。	灰色	密			○		−
12	須恵器 大甕	22.0/− /5.0〜	口縁部のみ　外湾気味に短く、開く。口縁端部は外面に1.0cmの面を持ち、1条の沈線がめぐる。 成形形はヨコナデ。	灰色	極密		○			断面にセピア色あり。
13	須恵器 大甕	−/−/−	口縁部のみ　外湾気味に短く、開く。口縁端部は欠損。 成形形はヨコナデ。外面にはその後、浅いタテハケを部分的に施す。	灰白色	やや 密				○	胎土が粉っぽい
14	須恵器 大甕	22.0/− /5.3〜	口縁部のみ　外湾気味に短く、開く。口縁端部は外面に1.0cmの面を持ち、1条の沈線がめぐる。 成形形はヨコナデ。	灰色	極密		○			断面にセピア色あり。12と同一
15	須恵器 大甕	−/−/−	頸部のみ　体部外面には平行叩きを施し、体頸部付近にはヨコナデを施す。	灰色				○		
16	須恵器 大甕	−/−/−	頸部のみ　口縁は直線的に立ち上がる。体部は球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施した後、体部にはラフなピッチでカキ目調整を施し、頸部付近にはヨコナデを施す。	灰色	密		○			11と同一？
17	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	極密		○			断面にセピア色あり。23と同一？
18	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	極密	第1主体部覆土				断面にセピア色あり。23と同一？

表13　土器　観察表 (2)

番号	器種	法量(cm) 口/底/高	形態及び成整形の特徴	色調	焼成	出土エリア I	II	III	IV	備考
19	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密			○		−
20	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	密		○			−
21	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施した後、体部にはラフなピッチでカキ目調整を施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密		○			16と同一
22	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施した後、体部にはラフなピッチでカキ目調整を施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密	○				16と同一
23	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	精密		○			断面にセピア色あり。12と同一
24	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密	○				−
25	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施した後、体部にはラフなピッチでカキ目調整を施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密		○			16と同一
26	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密	○				−
27	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施した後、体部にはラフなピッチでカキ目調整を施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密		○			16と同一
28	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	やや密	○				胎土が粉っぽい
29	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	やや密		○			胎土が粉っぽい
30	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には当て具の痕跡あり	灰色	密		○			−
31	須恵器 大甕	−/−/−	体部のみ　球胴を呈する。体部外面には平行叩きを施す。内面には同心円文のついた当て具の痕跡あり	灰色	やや密				○	胎土が粉っぽい

(4) 石製品 (図87)

紡錘車 (石−1) は、墳丘表土より出土した。

石材は滑石である。色調は青灰色を呈する。形状は断面台形を呈し、斜辺に直線的である。大きさは、短辺2.0cm、長辺4.0cm、高さ1.6cmを計る。成形は各面とも丁寧な磨きを施している。線刻は見られない。

図87　石製品 (S = 1:2)

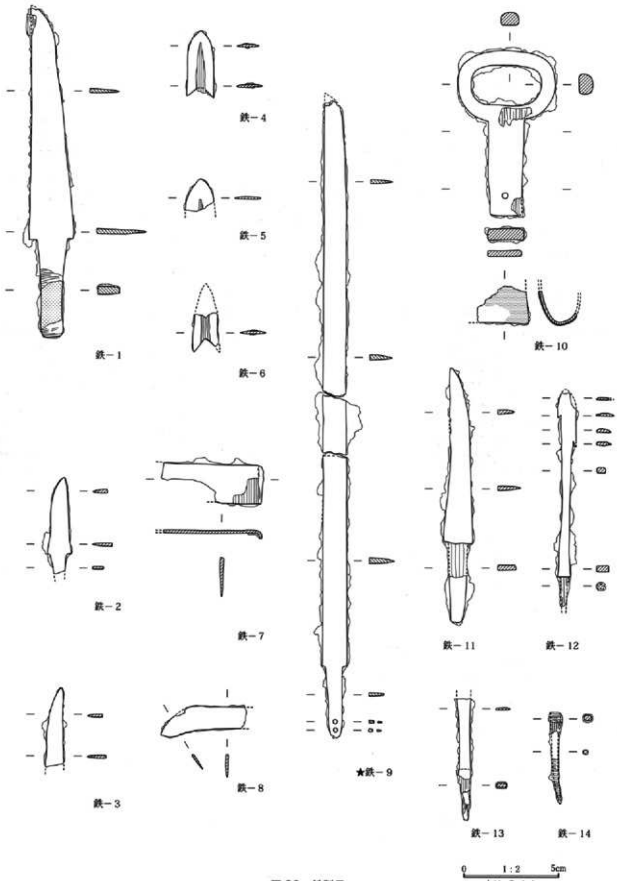


図88　鉄製品

（5）鉄製品（図88・表14）

大刀（鉄－9）は切先を一部欠損するがほぼ完存品である。推定全長68.0cmを計る。両関で、茎胴部は中細、茎尻は栗尻を呈する。目釘孔は茎尻近くに、2孔が開けられている。

素環頭大刀頭（鉄－10）は完存品である。環長径5.2cm、環短径3.7cmを計る。目釘孔は1孔あく。茎には木質が残存している。なお、これに伴って、素環頭大刀の柄部の握りの部分の破片がある。黒漆と思われる面が外面に付着していると思われる。刀子2点（鉄－1・11）はともにほぼ完存している。鉄－1は全長17.6cm、刀長12.4cmの大型刀子である。両関で、茎には糸巻きの上に鹿角を被せている。刃部の一部に木質があり、鞘の可能性がある。鉄－11は全長13.6cm、刀長9.3cmの小型刀子である。刃がやや反っており、先細りである。両関で、茎には木質が一部残存している。

ミニチュア刀子2点（鉄－2・3）はともに欠損品である。鉄－2は、茎部が欠損している。残存長5.1cm、刃長4.1cmを計る。両関で、残存する茎部には木質は認められない。鉄－3は、刃部のみの遺存である。残存長は4.2cmを計る。切先がやや尖り気味である。

無茎長三角形鏃3点（鉄－4～6）のうち、完存する鉄－4は刃長3.4cmを計る、無茎有腸抉長三角形鏃である。小型で薄手の造りの鏃であり、根ばさみの木質が両面に付着している。鉄－5は残存長1.7cmを計る。小型薄手の鏃である。鉄－6は残存長2.0cmを計る、無茎有腸抉長三角形鏃である。小型薄手の鏃であり、根ばさみの木質が両面に付着している。

長頸片逆刺長三角形鏃（鉄－12）は、残存長11.3cmを計る。ほかにも鏃茎（鉄－14）があり、これには茎部に木質が残存し、その上に繊維が巻かれている。

また、鉄－13は工具とおもわれる製品である。薄手扁平な造りのものであり、ノミ状工具の可能性がある。

表14　鉄製品計測値一覧

遺物番号	種類	全長	刃長	刃幅	刃厚	頸長	頸幅	鎬厚	茎長	茎幅	茎厚	木質	出土位置	備考
		(cm)												
1	刀子	17.6	12.3	2.4	0.25	－	－	－	5.3	1.4	0.45	○	第2主体部	中茎に鹿角
2	ミニチュア刀子	5.1＋	4.1	1.2	0.20	－	－	－	1.0＋	0.8	0.20	×	第2主体部	
3	ミニチュア刀子	4.2＋	4.2＋	1.0	0.15	－	－	－	－	－	－	×	第2主体部	
4	無茎有腸抉長三角形鏃	3.4	3.4	1.4	0.10	－	－	－	－	－	－	○	第2主体部	
5	無茎長三角形鏃	1.7＋	1.7＋	1.5＋	0.10	－	－	－	－	－	－	×	第2主体部	
6	無茎有腸抉長三角形鏃	2.0＋	2.0＋	1.4	0.10	－	－	－	－	－	－	○	第2主体部	
7	鏃	5.3	5.3	2.0	0.15	－	－	－	－	－	－	○	第2主体部	
8	ミニチュア鏃	4.4＋	4.4＋	1.3	0.10	－	－	－	－	－	－	×	第2主体部	
9	大刀	68.0	60.0	2.4	0.40	－	－	－	8.0	1.3	0.30	×	第4主体部	中茎に目釘孔2
10	素環頭大刀頭	8.7	環長径5.2	環短径3.7	環厚0.7	環巾1.0			5.2	1.9	0.70	○	第4主体部	
11	刀子	13.6	9.3	1.5	0.30	－	－	－	4.2	1.0	0.30	○	第4主体部	
12	長頸片逆刺長三角形鏃	11.3＋	2.7＋	0.8	0.20	7.1	0.5	0.25	1.5＋	0.3	0.30	○	第4主体部	刃部計測値は長刃部
13	工具？	3.7＋	－	－	－	－	－	－	2.7＋	－	－	○	第4主体部	
14	鏃茎	4.7＋	－	－	－	－	－	－	4.7＋	－	－	○	第4主体部	

９　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　全長25.0ｍの造りだし付き円墳である。

遺構②　盛土はＦＡ層直上から行われている。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　竪穴式石槨（室）・小石槨が４基ある。

遺構⑤　第１主体部は盛土開始以前、第２・３主体部は盛土開始以後にそれぞれ構築されてる。

遺構⑥　第３主体部墳土には埴輪片が含まれていた。

遺構⑦　後世の削平で造出し部の大半は喪失。

遺物に関する主な情報

遺物①　土師器坏・須恵器甕・埴輪が周堀から、紡錘車、須恵器坏身が墳丘から出土した。

遺物②　形象埴輪は人物・家が存在する。

遺物③　円筒埴輪は全て２条３段構成である。

遺物④　円筒埴輪は半円透孔と円形透孔が共存し、器面赤彩も多く存在する。底部調整はない。

遺物⑤　未盗掘の第２主体部からは、刀子・無茎鏃・曲刃鎌・ミニチュア鎌が出土した。

遺物⑥　未盗掘の第３主体部からは成年の全身骨格と幼児骨が発見された（第６章１参照）。

遺物⑦　第３主体部の成年人骨は、白骨化後骨の一部が人為的に動かされていた。

遺物⑧　第４主体部からは素環頭・刀・刀子・長頸鏃が出土した。

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

土師器・坏（器－１・３～８）は口縁が直立気味に立ち上がる須恵器坏蓋模倣坏であり、「多田山Ⅰ～Ⅱ期」と考えられる。須恵器・坏身（器－２）はその特徴から「多田山Ⅱ期」と考える。

無茎有腸抉長三角形鏃（鉄－４～６）はその初現が「多田山Ⅰ期」まで遡りうるものであり、長頸片小爪片逆刺長三角形鏃（鉄－12）は「多田山Ⅰ期」以前に盛行する(杉山1993)。曲刃鎌は「多田山０期」以前に盛行するものである（杉山2000)。素環頭（鉄－10）も、その盛行は「多田山０期」以前である（加部1993)。

円筒埴輪は、全て２条３段構成であり、「基部の伸長化」は認められない。透孔形状は半円志向的円形と円形が共存する。赤色顔料の塗彩も多く存在する。底部調整はない。近年の研究（島田2001）に基づき、その時期を「多田山０～Ⅰ期」と考える。

遺構の時間的位置づけ

墳丘盛土はＦＡ層直上から行われていたことが判明したため（第５章１参照)、盛土構築がFA降下直後であると考えられる。FAの降下時期については「多田山０期末～Ⅰ期初」と考える（編集者）ので、盛土構築時期もそれに近い時期と考える。

４つの竪穴式石槨(室)・石槨の築造の先後関係は、「第１主体部→第２・３主体部」という順序を考えている。その根拠は、第１主体部は盛土以前、第２・３主体部は盛土後の構築だからである。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①④・遺物③④）から、「初期群集墳」（右島1993）の中核墳と考えられる。一方、本墳の築造時期に最も近似する情報はFAとの関係と、円筒埴輪の情報である。前者からは「多田山０期末～Ⅰ期初」、後者からは「多田山０～Ⅰ期」という時期が導かれる。よって、本墳の築造時期は「多田山０期末～Ⅰ期」と考える。このことは周堀出土土器や副葬品の時期とも矛盾することがない。なお、第２～４主体部に構築については、第２主体部については無茎有腸抉長三角形鏃の副葬から「多田山Ⅰ期後半～Ⅱ期」、また第４主体部については長頸片小爪片逆刺長三角形鏃の副葬から、「多田山Ⅰ期」と考える。さらに、「素環頭の副葬」を考慮すると「第１主体部→第４主体部→第２主体部・(第３主体部？)」という構築順が想定される。

そして、本墳における埋葬行為は「多田山０期末からⅠ期まで」と考えられる。(なお、摩耗した曲刃鎌の評価が曖昧なままなので一部再検討を要する。)

多田山4号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・106
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・106
3　埋葬主体部・・・・・・・・・・・・・・・110
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・116
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・131

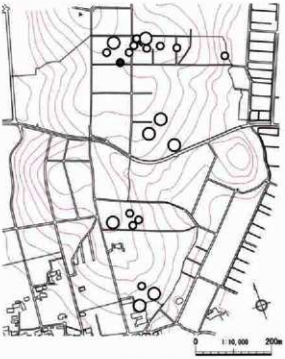


図89　多田山4号墳　位置図

1　調査前

多田山4号墳が存在する地点は標高145 m付近、多田山丘陵頂部（標高159 m）南東部の馬の背状にのびる平坦地形面である。その平坦面上に本墳はある。

調査前の状況としては、事前の試掘によって周堀の一部が確認されたことから、直径20 m前後の円墳の存在が想定された。しかし、現地表面においては墳丘状の高まりは全く認識できず、墳丘盛土は残存していないものとの想定もされた。なお、本古墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀

(1) 墳丘（図90）

墳丘直径15.5 m、二段築成の円墳である。二段築成とはいっても、一段目は墳丘裾部の地山部分を0.7～1.0 mの幅をで全周削り出すものである。

盛土はわずかに認められ、検出時の層厚で5～8 cmほどであった。その直上にはAs-Bを含む黒色土が覆っていることから、構築時にはこれ以上の厚さの盛土が存在していたと推定される。盛土はロームブロックと黒色土との混土であり、周堀掘削土を利用したと想定される。また、盛土直下の旧地表に

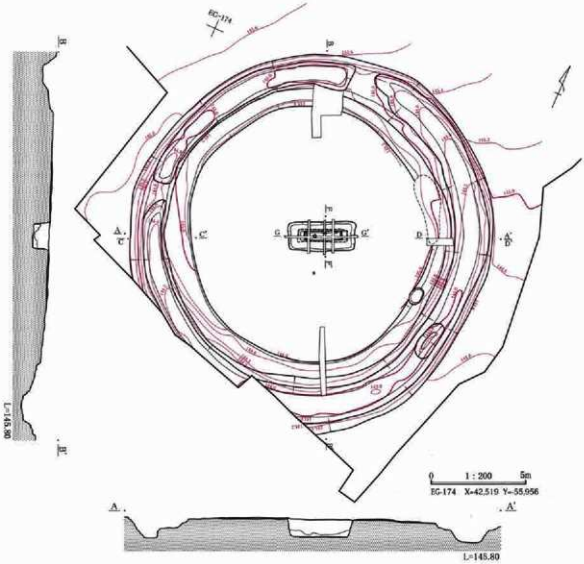


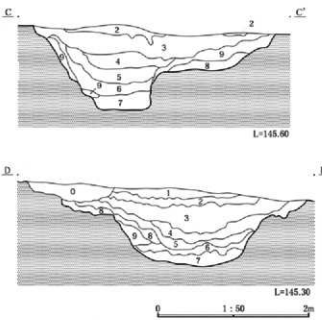
図90　墳丘及び周堀平面図

はFAの一次堆積層の存在がわずかに認められたことから、本墳の盛土行為がFA降下後、あまり時間差なく行われたと推測される。

埋葬施設との新旧関係については、主体部の埋土が盛土を断ち切るように存在することから、第一に「墳丘の盛土行為」を行い、その後埋葬施設を構築したと考えられる。なお、墳丘部に埴輪の基部が原位置のまま、残存する資料は皆無であった。

（2）周堀（図90・91）

調査確認面においては、墳丘の周りを全周する。調査時での規模は、上幅1.5～3.0 m、下幅0.8～1.0 m、深さ1.0～1.2 mであり、断面形状が逆台形または箱形を呈する。周堀の底面は比較的平坦化していたが、その底面には張り床状の埋め戻しをした痕跡は認められなかった。周堀内に埋葬施設は存在せず、土橋状に周堀の一部を掘り残した痕跡も認められなかった。覆土は、As－CやFAを含む黒・暗褐色土が主体であり、上層にAs－Bの一次堆積層が存在する。



0　表土
1　As－B混じり黒色土
2　As－B層
3　黒色土　As－C・FAを含む　ハニワを多量に含む
4　黒褐色土　しまりあり　As－C・FAを含む　ハニワを含む
5　暗褐色土　As－C・FAをわずかに含む
6　暗褐色土　ロームを含む　As－C・FAを含む
7　黄褐色土　ロームが主体　フカフカしている
8　褐色土　ロームを含む　As－C・FAをわずかに含む
9　黄色土　ロームブロックを多く含む（ロームは二次堆積）

図91　周堀断面図

（3）墳丘内における遺物出土状況（図92）

墳丘盛土直下の旧地表面上から土師器・坩（器－1）が正置状態で出土した（図92 B）。この坩はわずかに残存する盛土によって覆われていた状況から、本墳の盛土行為前に据え置かれた土器と考える。据え置きの箇所は深さ5 cmほどの凹地となっていた。この凹地の底面からはFAは確認できず、両側の旧地表面からはFAが確認できることから、本土器の据置の際には旧地表面を掘り下げてから据え置いたと推測できる。

（4）周堀内における遺物出土状況（図92・93）

周堀内からは埴輪片のみが出土した。出土埴輪の種類には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人・馬）がある。

本墳の埴輪出土状況における特徴は、円筒埴輪の出土数量の少なさと形象埴輪片の残存状況の良さとの2つである。

円筒埴輪の埴輪片は平面分布的には、エリアⅠ～Ⅷの全てから出土しており、層位分布的にもAs－B層下の黒色土層（断面C・Dにおける第3層）にまとまっている。いずれの円筒埴輪片も、地山削り出しのテラス上で出土している状況から、この出土位置より高レベルの位置から転落したものと考えられる。そして、円筒埴輪の基部が原位置で確認されてはいないが、本来は二段目（墳丘盛土上）に埴輪は樹立していたものと推測できる。

そのような出土状況を呈する、円筒埴輪片であるが、その総量は少なく、他の古墳周堀内では円筒埴輪片が多量に分布しているのに対し、本墳の周堀内では円筒埴輪は点々と分布するのみなのである（図92 A）。比較の1つとして、同時期・同規模の多田山2号墳の埴輪の内容と比べてみると、平面・層位分布的には同様な状況を呈しながら、接合復元された円筒埴輪の個体数には相違があり、多田山2号墳

が60本以上であるのに対し、本墳は10本程度なのである。この少なさの原因は、本来的な樹立数の少なさを示しているものといえる。なぜなら、周堀覆土のうちその上層にはAs－Bが残存しており、かつ他の古墳において埴輪が集中分布する黒色土層は本墳においても認められるからである。つまり、周堀の残存状況は他の古墳のそれとなんら変わることがなく、よって、埴輪個体数の少なさは周堀の残存状況の悪さに起因するものではないといえる。

一方、形象埴輪は、平面分布的には、周堀の南西部、エリアⅦ・Ⅷのみ、しかも直径３ｍ程の範囲内にのみ、集中して出土するするという特徴をもつ。また、層位分布的にはAs－C・FAを多く含む黒色土層（断面Ｃ・Ｄの第３層）に集中する。

ここに存在する形象埴輪片からは、その後の接合関係把握により、人物３体と馬１体の存在が確認できた。そしてその接合関係を破片時の出土位置と照合してみると、個体別に平面分布の範囲に差異が認められる。

人－１（女:巫女）はエリアⅧからの出土であり、形象埴輪破片群の中では最も北側に破片が集中して出土している。破片群はまとまりを持っており、分散していない。人－２（男：馬曳き）はエリアⅦから集中して出土している。破片は人－１との混在はなく、人－３と馬－１との混在が若干見られる。人－３（女：振り子持ち）は、エリアⅦとⅧにまたがっての出土であるが、破片群は人－１・２、馬－１の破片群に混在しており、分散気味の出土である。

馬－１は形象埴輪破片群の中では最も南側に破片が集中している。破片群は集中出土していないものの他の形象埴輪片との混在は人－２・３と僅かにあるのみであり出土状況としては独立した１つのまと

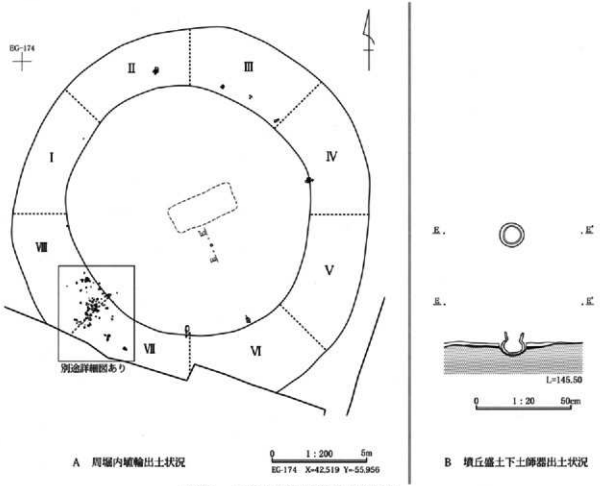
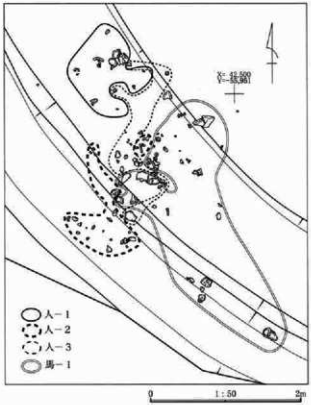


図92　周堀及び墳丘の遺物出土状況図

まりをもっている。

なお、これらの資料には、それぞれに対応する基部が存在せず、そのため本来的な樹立位置や方向は不明である。よって、正確な形象埴輪の樹立位置関係は確定できないが、埴輪片の分布状況から考えると形象埴輪列は周堀から墳丘内部に向かった方向で、左から人－1（巫女）・人－3（呪具持ち）・人－2（馬曳き）・馬－1という配列が推定される。特に人－2と人－3の関係については出土状況から考えると不明瞭な部分もあるが、馬－1との関係性を重視すると人－2がその所作から考えて馬－1の横に位置すると考えた。



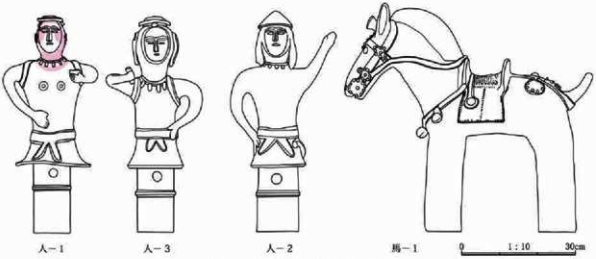


図93　形象埴輪出土状況詳細図

３　埋葬主体部

（１）調査報告に先立って

本墳の埋葬主体部は、「木棺」である。

この主体部は、解体調査を行うことによって、棺と粘土床の構造に希有な特徴が見いだすことができた。その構造については、データの記述を中心とした既成の事実報告形式では説明しきれないため、調査の段階ごとの記述を行い、各段階によって判明した事実と所見を報告することとする。

（２）存在の確認

検出確認面は、墳丘盛土下の地山面である。その確認面において、墳丘ほぼ中央に、長軸 3.50 m×短軸 1.60 m の長方形の平面プランを確認し、ここに墓坑の存在を認識した。確認面段階において、長方形プラン内は、ＦＡ粒やローム粒を含む、しまりの強い黒褐色土でほぼ単一的に覆われており、盗掘痕も確認されなかった。よって、こうした状況から、本埋葬施設は、未盗掘状態であることを想定した。

（３）調査着手時の方針（図 94）

調査着手時においては、「本埋葬主体部は石槨である」と想定した。そのため、閉塞状況や天井石の状況を把握し、未盗掘であることを確認するため、墓坑の短軸方向に一本のサブトレンチを設定し、掘削した。すると、深さ 0.6 ～ 0.8 m の箇所で、石材ではなく炭化材が検出された。この時点で、埋葬施設が石槨ではないことが判明し、さらには断面土層（断面Ｆ－Ｆ'）の観察から、「木棺」の可能性を考えるに至った。但し、先に検出された炭化材が何なのかが不明のままであったために、調査の次なる段階としては、閉塞覆土を全て除去し、炭化材の面を検出することを行った。

（４）炭化材の検出（図 95）

閉塞土を除去していくと、深さ 0.6 ～ 0.8 m の範囲で炭化材が検出された。検出状況の所見は次の５点にまとめられる。

①炭化材の平面分布は、長軸 2.5 m、短軸 0.6 m の短冊形の範囲で存在すること。

②分布範囲の内側、長軸 2.0 m、短軸 0.5 m の範囲では陥没した状態で存在していること。

③残存状態が断片的な部分もあるが、全ての炭化材片が木目方向が同一であること。

④炭化材は、残存状況からみると、厚さ 0.3 ～ 0.5cm の柾目材であること。

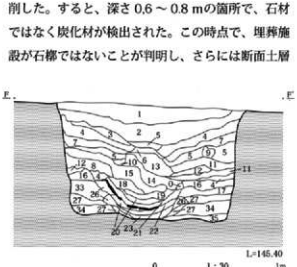
⑤炭化材は、副葬品である鉄鏃の上に存在すること。

さらに、後の分析結果ではこの炭化材の樹種はヒノキであることが判明した。

このような所見と分析結果から、この炭化材は次のようなものであったことが推測できる。

Ａ．この炭化材は長さ 2.5 m、幅 0.6 m、厚さ 0.5mm（以上）のヒノキの柾目板材であること。（所見①③④＋分析結果）

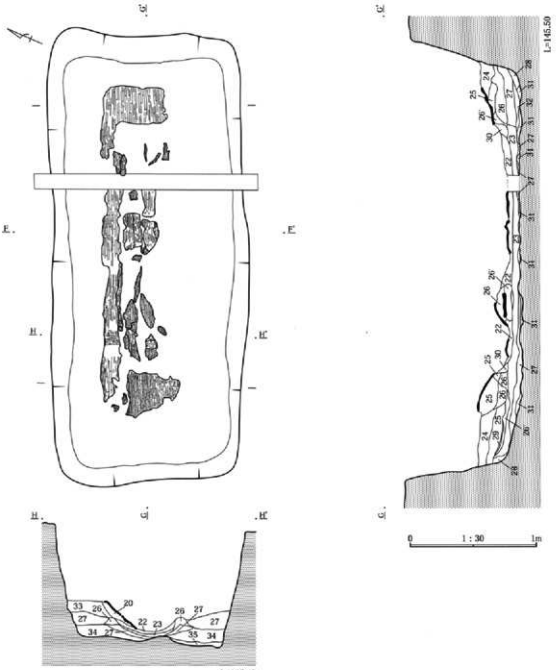
Ｂ．この炭化材は、棺の上を覆っていたこと（所見②⑤）



※ 22 ～ 35 層は、後の調査段階のデータを後付けした

0　攪乱土
1　黒褐色土　かたい　As－C・FAを多く含む　ローム微量含む
2　黒褐色土　やわらかい　As－C・FAを多く含む　ローム微量含む
3　黒褐色土　やわらかい　As－C・FAを含む
4　黒褐色土　かたい　As－C・FAをわずかに含む
5　暗褐色土　やわらかい　As－C・FAをわずかに含む
6　灰褐色土　やわらかい　As－C・FAを多く含む　ロームを
7　褐色土　やわらかい　As－C・FA・ロームをわずかに含む
8　褐色土　やわらかい　As－C・FAをわずかに含む
9　褐色土　かたい　As－C・FAを含む　ロームをわずかに含む
10　暗褐色土　やわらかい　As－C・FA・ロームをわずかに含む
11　暗黄褐色土　かたい　As－C・FAなし　ロームを含む
12　黒色土　かたい　As－C・FAをわずかに含む

図 94　埋葬施設確認のための断面図（Ｆ－Ｆ'）



13　灰褐色土　やわらかい　As－C・FAブロックを含む
14　黒色土　やわらかい　As－C・FAなし　ロームをわずかに含む
　　きめ細かい粒子、砂粒が混ざる
15　褐色土　やわらかい　ロームを含む　きめ細かい粒子、砂粒が混ざる
16　暗褐色土　かたい　As－C・FA含む
17　黒色土　かたい　As－C・FAなし　ロームなし
18　黒褐色土　やわらかい　きめ細かい砂粒混ざる
19　黒褐色土　やわらかい　ロームを含む　きめ細かい砂粒混ざる
20　黒褐色土　きめ細かい　砂粒混ざる　白色粘土粒をわずかに含む
　　カーボン粒を多く含む
21　褐色土　かたい　白色粘土を多く含む　カーボン粒を含む
22　灰褐色土　ロームブロック含む　鉄錆を下端に含む　カーボン含む
23　黄褐色土　かたい　ローム含む
24　黒色土　かたい　ロームを含む
25　黒色土　粘質　やわらかい
26　白色粘土
26′白色粘土を多く含む黒色土
27　褐色土　かたい　ローム含む
28　黄褐色土　やわらかい　ロームを多く含む
29　暗褐色土　粘質　植物ペースト含む
30　黒色土　やわらかい　カーボン粒を多く含む
31　黄褐色土　やわらかい　ロームが主体で黒色ブロックをわずかに含む
32　黒褐色土　しまり強い　白色粘土をブロック状に含む
33　暗褐色土　やわらかい　ローム含む　カーボン含む
34　暗褐色土　かたい　ローム多く含む
35　褐色土　やわらかい　ローム主体

図95　炭化材平・断面図

なお、なぜ炭化しているかについては、材のしまりをよくするため、或いは、現地で火をかけたか、いずれかであろうが、前者と考えたい。

（5）棺の構造（図96）

炭化材除去後に、検出された痕跡から、この主体部が木棺であることを確信した。

推定される棺は半截状の割竹形木棺であり、両端の小口部には押えの板を別途設置する構造をもつ。また棺の規模は、長軸2.00 m、短軸0.50～0.60 m、深さ0.25～0.30 mを計る。

実際には棺材は未検出であるため、棺の樹種は不明である。しかし、棺の上面を被覆していた材がヒノキであることも考えると、棺自体の樹種もヒノキの可能性は高いといえる。

（6）棺内の遺物出土状況（図96）

棺内からは人骨・歯の出土は皆無であった。副葬品としては棺内北東部（遺体の頭部～肩部右脇と推定）から鉄鏃が19本出土した。1本を除きほぼまとまって存在したが、鉄鏃群をおさめる収納具の痕跡は残っていなかった。さらに、棺内南西部（遺体の脚部と推定）から、長軸0.20m短軸0.18 m、厚さ0.04 mの輝石安山岩の板石が出土した。この石材は、上層を炭化材に覆われていることからも、本来的に棺内にあったものと考えられる。さらに、その出土位置が遺体の脚部付近と推定されることを考え合わせると、この石材は遺体の再生を封印するた

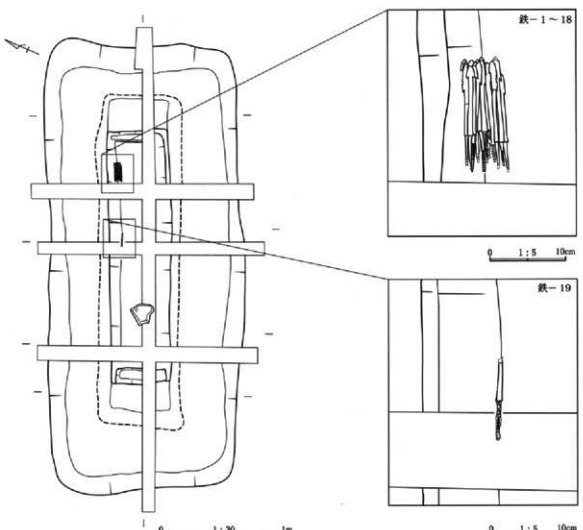


図96　木棺痕跡平面図及び副葬品出土状況図

めに置かれたものと考えられる。

（7）粘土床の構造（図97）

棺外に存在する炭化材を除去すると、若干の黒色土を挟んで、粘土床が検出された。

粘土床は墓坑の張り床をおおよその形状に掘削し、その箇所に白色粘土を用いて、構築されていた。

検出された粘土床は、「舟形粘土床」を名付けたものであり、その構造は次のである。

全長3.10 m、最大幅0.66 mを計る。墓坑の長軸と方向を一にしている。全体の形状は舟形を呈する。この粘土床は、木棺を設置するための部分と、舟を表現するための部分に分解することができる。前者は木棺の規模に合わせて白色粘土を床面に敷いたものであり、木棺と直接接点もつ。ゆえに、棺材が消滅したのちも、その痕跡が粘土に残存している。後者は棺の設置とは直接接点はなく、前者の粘土床の付加的存在である。棺の小口部に接する粘土部分から、東側には「艫（とも）」を表現するべく白色粘土を方形に形作り、西側には「舳先（へさき）」を表現するべく、墓坑の張り床をその形状に掘り込み、白色粘土をその底面に貼り付けることで形作られていた。この2つの箇所には、遺物や有機物がが据えられた痕跡は認められなかった。なお、粘土床に使用された粘土内からも遺物の出土はなかった。

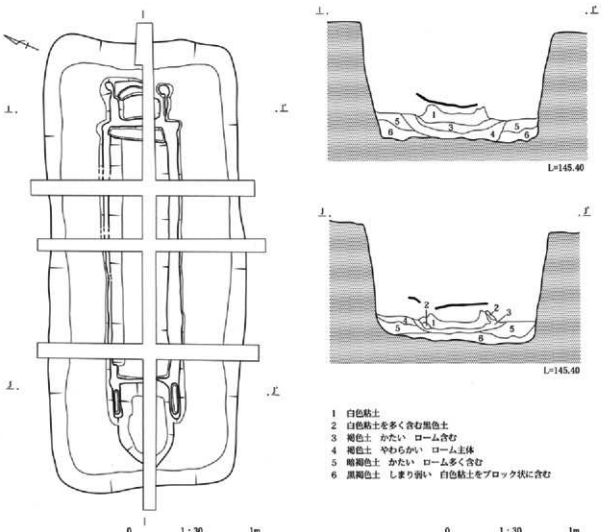


図97　舟形粘土床　平・断面図

（8）解体調査データから復元する構築工程（図 98・99）

第１段階　墓坑の掘削

墳丘のほぼ中央部に、長軸 2.60 m、短軸 1.15 m、深さ 0.90 m（確認時）の隅丸方形の墓坑を掘削する。なお、墓坑の掘削行為と墳丘の盛土行為の新旧関係は不明である。

第２段階　張り床と粘土床設置坑の掘削

墓坑には、張り床としてローム混じりの粘質土を張る。その厚さは、10 ～ 15cm 程度である。その後、粘土床を張るために、張り床面を、長さ 2.30m 、幅 0.55m 、最深 6cm の規模で、舟形に掘削する。

第３段階　粘土床の設置

粘土床設置坑に粘土を張る。この際、舟形を形作る。

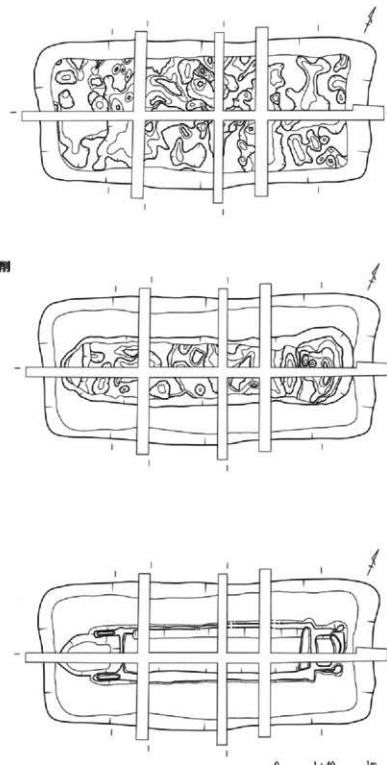
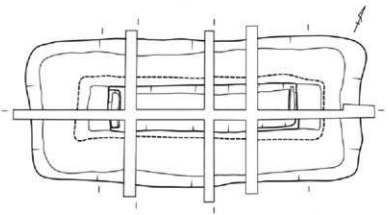


図 98　主体部　構築工程推定図（1）

第4段階　棺の設置

粘土床の中央に、木棺を設置する。その際、墓坑壁面と木棺の間の空間は徐々に埋め土していく。したがって、この段階で、舟形粘土床は埋められてしまう。

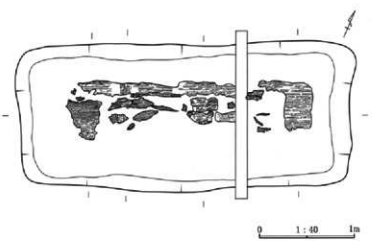
棺を設置後、遺体を納め、副葬品を納めたものと推定される。

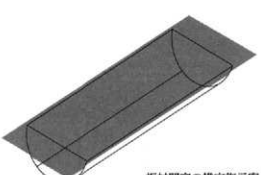


第5段階　棺の閉塞

棺の閉塞は2.00 m×0.60 m、厚さ0.04 m、またはそれ以上のヒノキの板材をのせる。

その後は黒色土で墓坑を埋める。





板材閉塞の推定復元案

図99　主体部　構築工程推定図（2）

4　出土遺物

（1）円筒埴輪・朝顔形埴輪（図100・101・表15）

円筒埴輪・朝顔形埴輪は調査時における出土破片数が、他の古墳に比して極端に少なかった。

接合により、円筒埴輪が約10本、朝顔形埴輪が2本存在することが確認された。各属性は次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全て2条3段構成である。

法　量　器高は33.5～35.7cmの範囲にあるりが、34cm前後のものが多い。

口径は21.5～24.5cmの範囲にあるが、22.0cm前後のものが多い。

底径は11.5～14.0cmの範囲内にあるが12.0cm前後のものが多い。

技法の特徴　外面調整については、全て「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」である。

内面調整については、全て「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」である。

突　帯　断面形には「台形」、「三角形」の2種類がある。主体的な存在は「台形」であるが、両者が混在することもある。また、突帯の器面へのナデつけは、全て「仕上げナデ（突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を上端・下端とも施し」ている。

透　孔　全て「円形」である。

線　刻　全て、内面上位に「×」がある。

底部調整　内面を削るものが主体的に存在する。

色調・焼成　色調は「赤褐色系」である。焼成は「やや硬質な焼き上がり」である。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石・角閃石が含まれているほか、長柱状黒色結晶（長石？）の混入が認められる。中でも、石英の混入具合が高いことは注目される。

赤　彩　認められない。

B．朝顔形埴輪

規格・法量　僅かな資料からは全体規格を知ることができず、不明である。

技法の特徴　外面には「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面は円筒部は「全面にタテナデを施」し、朝顔部は「ナデ後、ハケを施」している。

突　帯　断面・台形で、上下に仕上げナデを施す。

透　孔　円形である。

線刻・底部調整　不明である。

色調・焼成　色調は赤褐色と橙色であり、やや硬い焼成である。

混入鉱物・粒子　円筒埴輪とほぼ同じであるが、石英の混入具合は、円筒埴輪ほど多くない。

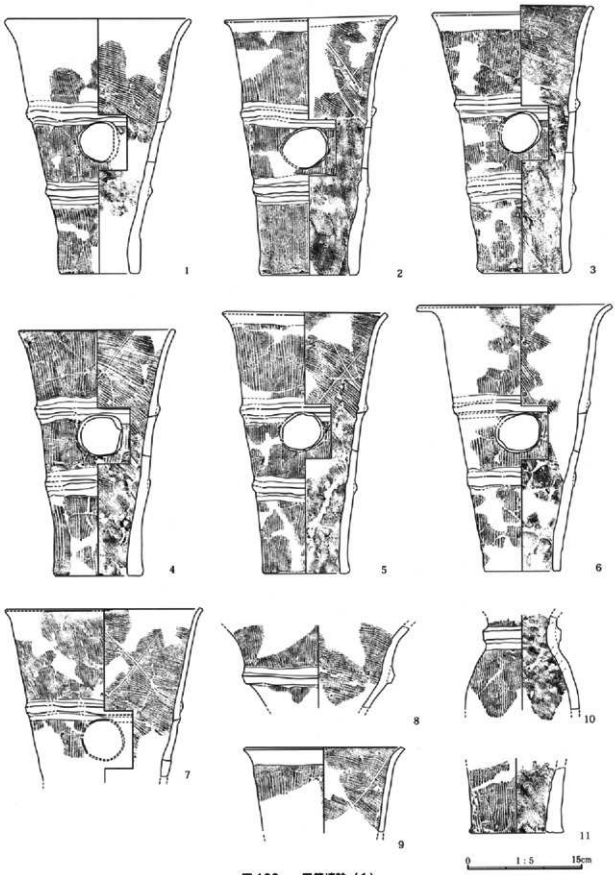


図100　円筒埴輪（1）

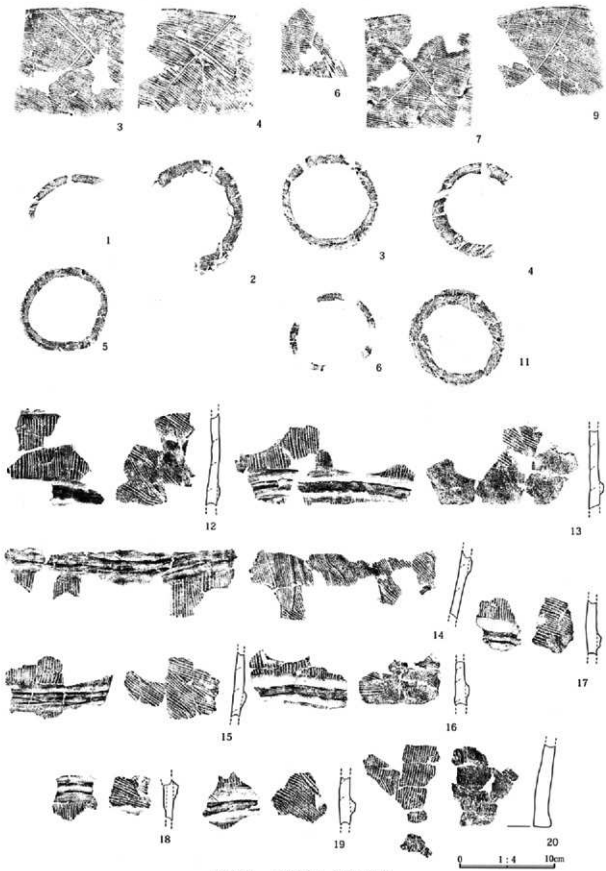


図101　円筒埴輪　底部・線刻

多田山４号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号
種類…円筒⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪
器高…口縁部から体部までの高さ（口縁の高さが一定していない場合はいちばん低い位置を計測）※斜体数字は復元高
口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
調整（外面）…A⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　a⇨「タテハケ」b⇨「タテナデ」（aは、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載）
調整（内面）…A⇨「タテナデ→上半のみナナメハケ→口縁ヨコナデ」　a⇨「ナデ→タテナナメハケ」b⇨「タテナデ」（aは、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載）
ハケメ…幅10mmあたりのハケメの本数
突帯…A⇨断面が台形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　B⇨断面三角形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す
透孔…A⇨正円形
線刻…○⇨あり　？⇨線刻が施されそうな部分が欠落しているため、不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
　線刻の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外１⇨外面基部　外２⇨外面２段目　外３⇨外面３段目　内１⇨基部附近の内面
　内２⇨２段目附近の内面　内３⇨３段目附近の内面　「形」は、描かれた形を掲載。（例：外面３段目に横線２本の線刻→「外３／＝」）
赤彩…×⇨なし
底部調整…○⇨あり　×⇨なし　－⇨底部がないため不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
色調…A⇨明赤褐色　B⇨にぶい赤褐色　C⇨橙色
出土位置…出土したエリア（図92）に○を記載。※１個体が複数破片の接合のために、出土エリアが複数にまたがる場合が多い。
備考…その他、特記事項を記載。

表15　円筒埴輪・朝顔形埴輪　観察表

No	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	線毛 (本)	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置								備考
											内容	内容		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
1	円筒	33.8	*22.0*	*12.0*	A	A	5～6	A	A	○	内３／×	○	内/ケズリ	A	○	○						造出の痕跡あり
2	円筒	34.3	24.0	14.0	A	A	5～6	A	A	○	内３／×	○	内/ケズリ	A		○			○			口縁内面面取り丁寧
3	円筒	35.4	21.5	13.0	A	A	4～5	A B	A	○	内３／×	○	内/ケズリ	A	○							－
4	円筒	33.5	22.8	12.5	A	A	5～6	A B	A	○	内３／×	×		A		○	○	○		○		－
5	円筒	34.5	22.1	12.0	A	A	4～5	B	A	○	内３／×	○	内/ケズリ	A				○	○			－
6	円筒	35.7	24.5	11.5	A	A	4～5	A	A	○	内３／×	○	内/ケズリ	A			○	○			○	－
7	円筒	－	*24.5*	0.0	A	A	4～5	A	A	○	内３／×	？		A				○		○	○	～１条欠損
8	朝顔	－	－	－	A	A	4～5	A	A	○	内３／×	？		C						○	○	朝顔の一部のみ残存
9	円筒	－	*22.0*	－	a	a	4～5	－	－	○	内３／×	？		A							○	－
10	朝顔	－	－	－	b	b	4～5	A	－	？		？		B				○		○		
11	円筒	－	－	12.3	A	A	4～5	－	－	？		○	内/ケズリ	A					○			底部のみ
12	円筒	－	－	－	a	a	5～6	A B	－	？		？		A				○		○		２段目破片
13	円筒	－	－	－	a	a	4～5	A	A	？		？		A				○				－
14	円筒	－	－	－	a	a	4～5	A	A	？		？		A						○		－
15	円筒	－	－	－	a	a	4～5	A	A	？		？		A				○		○		－
16	円筒	－	－	－	a	a	4～5	A	－	？		？		A				○				－
17	朝顔	－	－	－	a	a	4～5	A	A	？		？		A					○			－
18	朝顔	－	－	－	a	a	4～5	A	－	？		？		A					○			－
19	朝顔	－	－	－	a	a	4～5	A	－	？		？		A					○			－
20	円筒	－	－	－	a	a	4～5	－	－	？		○	内/ケズリ	A							○	一段目

(2) 形象埴輪

A　人物埴輪

人－1　(図 102・103)

杯をささげる女性

器高　推定で 57.0cm。但し、残存部は半身部のみであり、残存高は 39.0cm である。復元に当たっては世良田諏訪下3号墳の人物埴輪の高さを参考とした。なお、基部の直径 10.0cm については、裾部内面で観察できた基部の剥離痕跡が根拠となる。

形態の特徴　全体的に小作りの人物埴輪である。顔も縦長が約 10.0cm（半身部全体の 1/4）と、小顔である。髪形は平面・バチ形の島田髷であり、結び緒や線刻による頭髪の表現、粘土塊による額部からの櫛刺しの表現がなされている。目は小さく表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は下半が欠損しているものの、残存部から推測すれば、鼻筋の通ったスリムなかたちである。口は横長水平に表現されている。顎はシャープに表現されている。耳は粘土紐で環状に表現され、それと同じ形状で直下に耳環を表現している。後頭部から首筋にかけては線刻により頭髪の表現をしている。なお、顔面への赤彩は眉から目尻を通って頬、さらには首筋に至るまで施されている。首には長さ約 1.0 ｃｍの垂飾が 10 個以上ついた首飾りがつく。肩幅は広く、胸板も厚い。肩から脇にかけては幅 1.2cm の襷が掛けられており、この襷は背部で「X 字形」になる。右腕は肩部付近のみしか残存していないものの、腰部に右手指先の表現が認められることから、腰に当てていたと考えられる。左腕は前面に差し出し、杯を捧げる表現がなされている。体部には乳房の表現がなされているが、他にはなにもない。腰部はくびれ、幅 2.5cm の帯が巡る。この帯は前面では帯端が垂下した表現がなされている。この帯は両側面部分が全く残存していないため、腰に

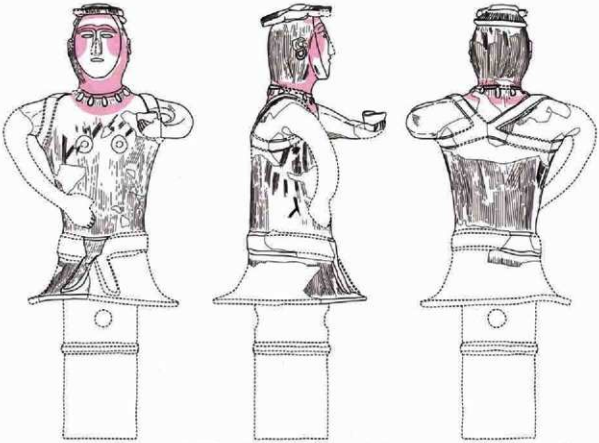


図 102　人物埴輪（1）人—1（1）

なにかぶら下げていたか、否かは判断できない。裾部は大きく外に開くが、装飾品などの貼り付けは認められない。

技法の特徴　頭部・体部・腕部・基部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅0.8～1.0cmの粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部を形作っている。輪積み後は、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はわずかなナデのみである。頭頂部には直径約0.4cmの孔がある。島田髷は、この孔を塞ぐように上から貼り付けられている。顔面は卵形の頭部に粘土塊を貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、違和感のないフェイスラインを作り出している。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。体部は、幅1.0～1.3cmの粘土紐を積み上げることによりつくられている。輪積み後、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はナデで整形されるのみで輪積みの痕跡は残存している。腕部は二の腕付近については輪積みによってつくられているが、そこから先は粘土紐をつかって形作っている。

なお、頭部と体部は別づくりである。頭部は顎部分から上に向かって、輪積みされ、頭頂部を直径1.5cmほどの粘土塊で閉塞する。そして、頸部内面で、粘土帯の未接着の部分が確認できることから、胸部と頭部の接合が頸部で接合されたことが確認できる。

器面全体について、外面は丁寧なナデ及びハケ整形を施して輪積み痕を消しているが、内面はナデ調整のみのため、輪積み痕が残存している箇所が多い。但し、裾部の内面にはハケ整形が認められる。

色調・焼成・胎土　色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中には石英・赤褐色粒子・輝石が確認できるが、特に輝石の混入具合が目立つ。

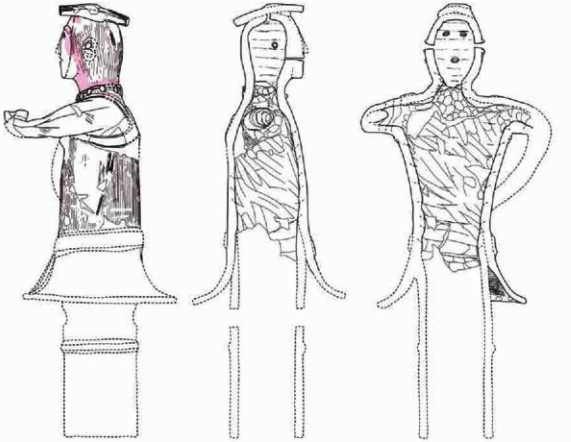


図103　人物埴輪（2）人―1（2）　0　1:5　15cm

人－２（図 104・105）

菅笠をかぶる男子

器高　推定で 58.0cm。但し、残存部は半身部のみであり、残存高は約 38.0cm である。復元に当たっては世良田諏訪下３号墳の人物埴輪の高さを参考とした。なお、基部の直径 9.0cm については、裾部内面で観察できた基部の剥離痕跡が根拠となる。

形態の特徴　全体的に小作りの人物埴輪である。頭頂部には剥落痕があり、別作りの菅笠が取りつくものと考えられる。髪は下端部が「逆さＴ字形」を呈する、下げ美豆良が表現されている。なお、下端部は肩部に接することなく、宙に浮いたままである。さらに、左右の美豆良の外面には、径 0.1 ～ 0.15cm の孔が斜め上に向いた状態で開けられている。

顔の表現は明確であり、目は切り抜きによって横長の表現がされている他、瞼の表現まで粘土帯の隆起によって表現されている。眉も粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は眉間からまっすぐ鼻筋が通っており、スリムなかたちである。欠損のため、鼻孔の表現の有無は不明である。口は横長水平に表現されている。顎はやや丸味をもった輪郭であるが、シャープに表現されている。耳の表現はない。

首には垂飾がついた首飾りがつく。胸板は厚い。右腕は大半が欠損しているが、腰部右脇に右手指先の表現が存在することから、腰に当てていたと考えられる。左腕も大半が欠損しているが、左肩部と脇の下の形状から、斜め上に腕を挙げている表現が想定される。なお、左掌は開いている。胸部から胴部にかけては何かを装着した痕跡は認められない。腰部はくびれており、そこには巾 3.0cm の帯の表現がなされ、正面には結んだ帯端の表現がある。左腰部には鞘に入った刀の表現がある。鞘には刺突によ

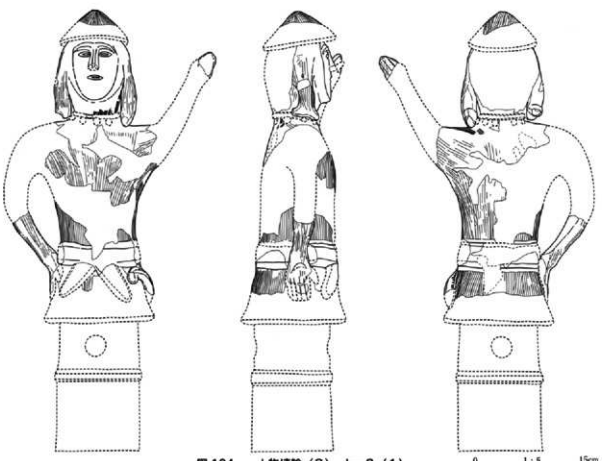


図 104　人物埴輪（3）人―2（1）

る縫い編みの表現もなされている。また、腰の背面には剥落痕が存在するが、おそらく鎌の表現がなされていたと考えられる。裾部は僅かに外に開く。

技法の特徴　頭部・体部・腕部・基部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅1.0～1.5cmの粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部を形作っている。輪積みは、口から頭頂部に向けて積み上げられて、1番上の部分にはボタン状の粘土塊を詰め込んでいる。輪積み後、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はわずかなナデのみである。顔面は卵形の頭部に粘土塊を貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、シャープなフェイスラインを作り出している。目・口は外面からの穿孔によってつくられている。美豆良は頭部側面にナデつけている。体部は、幅1.0～1.5cmの粘土紐を積み上げることによりつくられている。輪積み後は、外面はナデとハケで丁寧に整形され、内面肩部付近にのみ、ハケが施され、それ以外はナデで整形されるのみである。腕部は残存しないため不明だが、肩部の内面が中空でナデ付けの痕跡がないことから、中空の可能性もある。裾部も輪積みによってつくられていると思われる。

なお、頭部と体部は、首よりやや上（顎の先端くらいの位置）で連結されている。そのことは、頸部内面の観察において、粘土帯の未接着部分が存在することによって確認できる。

内外面ともナデ調整が施されており、外面については縦方向のハケを顔面以外の全面に施している。赤彩は確認できない。

色調・焼成・胎土　色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中には石英・赤褐色粒子・輝石が確認できるが、特に輝石の混入具合が目立つ。

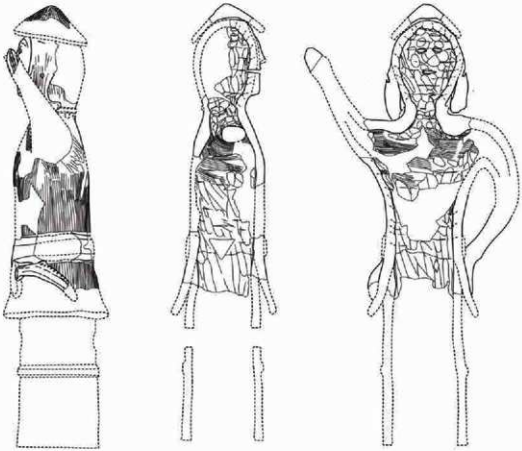


図105　人物埴輪（4）人―2（2）　0　1：5　15cm

人－３（図 106・107）

右手に呪具をもつ女子

器高　推定で 57.0cm。但し、残存部は半身部のみであり、残存高は 35.5cm である。復元に当たっては世良田諏訪下３号墳の人物埴輪の高さを参考とした。なお、基部の直径 10.0cm については、本資料には手がかりはなく、人－１・２を参考とした。

形態の特徴　小作りな人物埴輪であるが体部と頭部のバランスが、人－１・２に比べて良くない。

髪形は平面・パチ形の島田髷が想定される。結び緒や線刻による頭髪の表現、粘土塊による額部からの櫛刺しの表現がなされている。目は小さく、眉は粘土帯をわずかに隆起させ、表現している。鼻は鼻筋の通ったスリムなかたちだが、鼻孔の表現はない。口は横長水平に表現されている。顎は欠損している。耳は粘土紐で環状に表現され、その内部から下げ紐状の耳飾りを取り付けている。首には長さ 1.0cm 以上の垂飾が４個（またはそれ以上）ついた首飾りがつく。肩から脇にかけては幅 2.0cm の襷が掛けられており、この襷は背部で「変形Ｘ字形」になる。右腕は前に付き出し、手には棒状の道具（呪具）を握っている。なお、呪具の下端部は欠損しており、全長は不明である。左腕は肩部付近のみしか残存していないものの、その湾曲具合から、腰に当てていたと考えられる。肩幅は狭く、上半身の作りは貧弱である。乳房の表現もない。腰部はくびれておらず寸胴である。腰には、幅 3.5cm の帯が表現されている。この腰帯以下は欠損しているため、腰になにかぶら下げていたか、否かは判断できない。裾部の形態も不明である。

技法の特徴　頭部・体部・腕部・基部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅 0.8

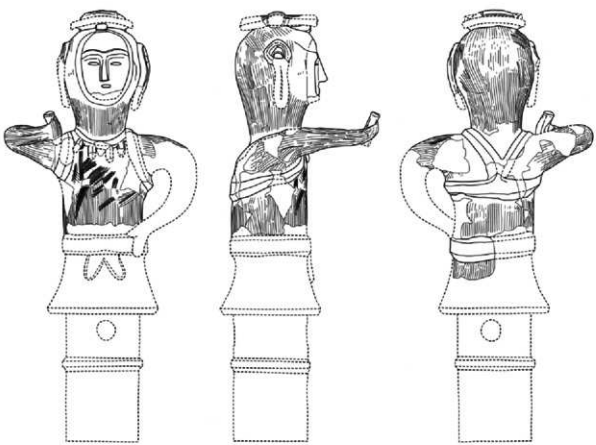


図 106　人物埴輪（5）人—3（1）　0　1：5　15cm

～1.0cmの粘土紐を積み上げることにより丸茄子形の頭部を形作っている。なお、輪積みは耳付近の高さの上下で向きが少し変わっており、下部ではほぼ水平の、上部ではら旋状の輪積みラインが認められる。輪積み後は、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はナデもほとんど施していない。頭頂部には直径約0.6cmの孔があり、島田髷がこの孔を塞ぐように上から貼り付けられている。顔面は頭部に楕円形の粘土板を貼り付け、ナデ付けることで、フェイスラインを作り出している。だが、この造作はバランスが悪く、頭部と顔面部の境目が段を為し、写実的でない。目・口・耳は外面からの穿孔によってつくられている。体部は、幅1.0～1.3cmの粘土紐を積み上げることによりつくられている。なお、脇の下付近の上下で輪積みの向きが少し変わっており、下部ではら旋状に、上部ではほぼ水平に輪積みがなされている。輪積み後は、外面はナデとハケで丁寧に整形され、内面はナデで整形されるのみで、輪積みの痕跡は残存したままである。肩部は細かい粘土塊を首から腕方向に4～5個ほどつぎ足すことによって曲線を作り出している。腕部は二の腕付近は輪積みによってつくられているが、そのより先端部は粘土帯を継ぎ足して、丁寧なナデを施すことにより、スムーズな曲がりを作り出している。

なお、頭部と体部は別づくりである。頸部内面で、粘土帯の未接着の部分が確認できることから、胴部と頭部の接合が頸部で行われたことが確認できる。外面は顔面部を除き、全面にハケ整形を施している。赤彩は確認できない。

色調・焼成・胎土　色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中には石英・赤褐色粒子・輝石が確認できるが、特に輝石の混入具合が目立つ。

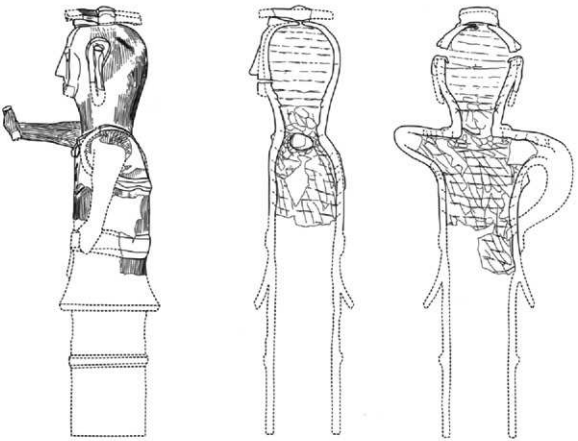


図107　人物埴輪（6）人―3（2）　0　1:5　15cm

Ｂ．馬形埴輪

馬－１（図 108 ～ 110）

残存状況　頭部から脚の付け根までは９割程度の残存であるが、脚部はほとんど失われている。復元全長は 66.0cm 、推定復元高は 59.0cm である。

形態・表現の特徴　各部位の表現は写実的である。頭部は縦詰まりの筒形で、口元の方向にやや垂れ下がっている。巾 1.0cm ほどの筆の擦痕らしきものが目の間から鼻先にかけて十文字に確認できるが、これは赤彩の痕跡かもしれない。顎部も頭部の一連の曲面で表現されている。鬣は板状を呈し、先端部は頭頂部ですぼまり、背部は鞍の前輪に取りつくように表現されている。小さな円盤をのせた角状鬣は板状鬣とは遊離し、独立して表現されている。ハケによる鬣側面の髪表現は丁寧に施されている。耳は頭部刳り貫き後、粘土板で表現されている。目は刳り貫きにより、やや垂れ目に表現されている。鼻は口の上の部分に楕円形の穿孔によって鼻孔が表現されている。口は切り抜きによって表現されている。顎部・頸部は細く長く、40° 程度前斜しその先端に頭部が取りつく。胸部は張り出しが認められず、胴部は高さよりも厚みの方があり、やや扁平気味である。胴側部は丸みを持っている。腹部はほぼ寸胴であり、鞍装着部分での括れはほとんど認められない。尻部は単純な丸形であり、尾は粘土塊のはめ込みによって表現されている。腹部は扁平である。脚部は左右後脚が僅かに残存するが、その状況からは、筒形の脚である以外は判らない。スカシ孔は尻部の尾の下位置に１孔と胸部下に２孔が存在する。

馬具の表現　表現された馬具は、全て扁平な粘土紐（又は粘土板）の貼り付けにより表現されている。

鏡板は直径 4.0cm 程の楕円（不整方形？）のも

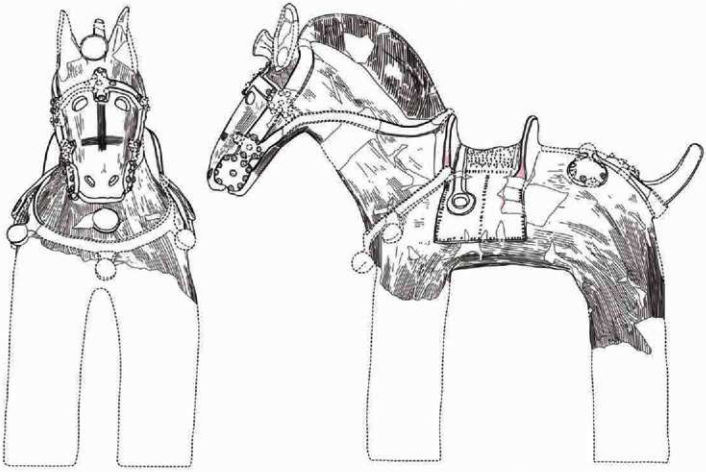


図 108　馬形埴輪（１）馬―１（１）　0　1:5　15cm

のであり、中心に1つ、縁辺に9つ（乃至10つ）の鋲が表現されている。面繋は巾1.6～2.0cmの粘土紐で表現され、多数の鋲の貼付によって、辻金具の表現を作りだしている。手綱は巾1.0～1.2cmの粘土紐で表現され、端部は左右鐙板に繋がる。胸繋は、巾1.0～1.3cmの粘土紐で表現され、端部は鞍の前輪に連結する。また、胸繋には鈴が3個つく。鞍は前輪・後輪とも厚さ1.2cm程度の弧状の粘土板を取り付けることで表現しているが、居木の隆起の表現や、障泥や鞍での裁縫の表現もなされている。輪鐙は巾0.8cmの粘土紐で表現されている。障泥は厚さ0.6cm未満の粘土板を貼り付けて表現されている。尻繋は巾1.5～1.8cmの粘土紐で表現され、雲珠の表現も認められる。この雲珠からは鋲留めの円形杏葉が三方に取りつく。

技法の特徴　頭部は輪積みで成形され、内面には粗いナデが残存する。頸部も胴部も輪積の積み上げでつくられているが、それぞれの方向が異なる。何れも内面にはナデを施す。脚部と腹部との接合部分には扁平で分厚い粘土板を2重に用いている。脚部は大半が欠損しており、技法の詳細は不明である。なお、器面外面は全体的にハケ整形を施している。赤彩は鞍の縁部で僅かに認められる。

各部位の技法の特徴からは（1）脚部の製作→（2）扁平な粘土板による脚部と腹部との連結→（3）輪積みによる胴部の製作→（4）輪積みによる胸部・頸部の製作→（5）輪積みによる頭部の製作＋頭部と頸部の連結→（6）外面の整形及び装飾＋（赤彩？）、という工程が推測される。

色調・焼成・胎土　色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中には石英・赤褐色粒子・輝石が確認できるが、特に輝石の混入具合が目立つ。

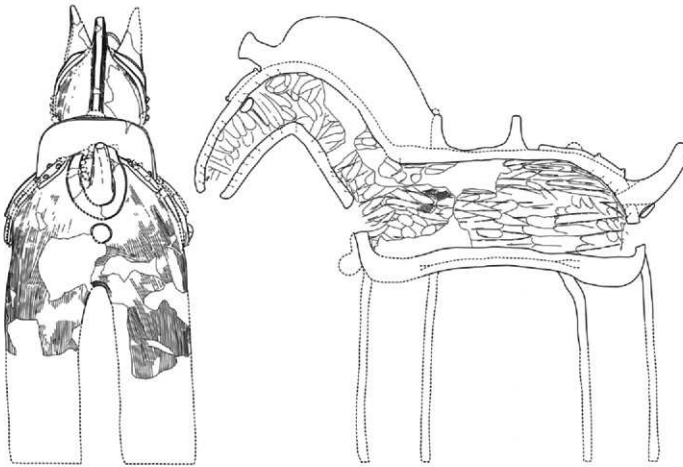


図109　馬形埴輪（2）馬―1（2）　0　1：5　15cm

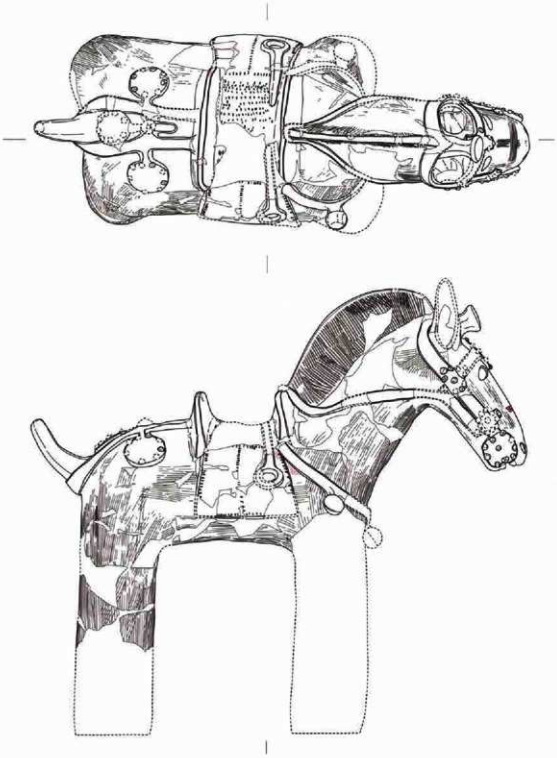


図110　馬形埴輪（3）馬―1（3）

C．不明の形象埴輪片（図111）

不明－1・不明－2

扁平な破片。人物のどこかについていたものが剥落した資料と推定。外面はハケを施す。内面は剥離痕跡を残すが、貼り付け元のハケメが圧痕としてのこっている。色調はにぶい橙色、焼成はやや硬質。周堀エリアⅦから出土。

不明－3

突起状の埴輪片。人物のどこかについていたものが剥落した資料と推定。全体をナデ調整。色調はにぶい橙色、焼成はやや硬質。周堀エリアⅦから出土。

（3）土器（図111）

土師器・坩（器－1）。墳丘下の地山面に正位置で出土した。

口縁は直立し、体部は中位に最大径をもつ。平底。口縁外面には縦斜位のミガキを、体部外面には横方向のケズリを丁寧に施す。

胎土には石英が多く含まれている点が特徴的であり、同墳の形象埴輪の胎土とも類似する。全体的に丁なつくりである。

（4）鉄製品（図112・表16）

長頸片小爪片逆刺長三角形鏃（鉄－1・3・6～9・11・15～17）は頸部長が6.1～7.0cm、刃部長は逆刺部を含めると2.6～4.2cmを測る。逆刺は浅く、何れも台形関である。

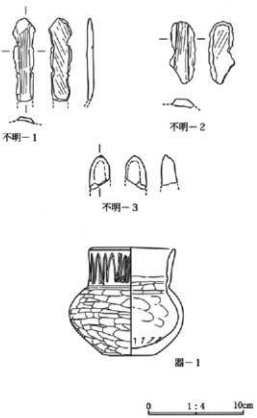


図111　不明形象埴輪片及び土器

長頸腸抉長三角形鏃（鉄－2・4・5・10・12～14・18）は頸部長が5.1～8.6cm、刃部長は1.2～3.3cmを測る。逆刺は浅いものが多いが、やや深めのものも伴う。台形関である。

表16　鉄製品計測値一覧

番号	種類	全長	刃			小爪			頸			関			茎			備考
			長	幅	厚	長	幅	厚	長	幅	厚	幅	長	厚	幅	長	厚	
1	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	12.2+	2.60	0.80	0.20	1.00	0.90	0.15	6.40	0.60	0.25	0.80	0.30	3.30				
2	長頸有腸抉長三角形鏃	13.3+	2.9+	1.10	0.15	—	—	—	8.40	0.80	0.30	0.70	0.40	2.40				
3	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	13.3+	3.6+	0.80	0.20	1.3+	0.8+	0.15+	6.80	0.55	0.30	060	0.35	2.9+				
4	長頸有腸抉長三角形鏃	13.0+	3.30	1.15	0.20	—	—	—	8.60	0.70	0.25	0.90	0.30	2.3+	深い逆刺			
5	長頸有腸抉長三角形鏃	10.7+	2.20	1.00	0.20	—	—	—	7.40	0.55	0.30	0.80	0.30	1.2+				
6	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	13.1+	4.20	0.80	0.20	1.0+	1.10	0.20	7.00	0.60	0.25	0.80	0.30	2.3+				
7	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	10.3+	3.10	0.80	0.20	1.0+	1.00	0.20	6.15	0.60	0.25	0.80	0.35	1.4+				
8	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	11.8+	3.00	0.70	0.20	1.30	0.90	0.15	6.40	0.50	0.30	0.70	0.35	2.2+				
9	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	11.6+	3.4+	0.80	0.20	1.90	1.10	0.15	6.60	0.60	0.25	0.80	0.30	1.8+				
10	長頸有腸抉長三角形鏃	10.3	3.2+	1.15	0.15	—	—	—	5.10	0.50	0.20	0.70	0.30	2.4+				
11	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	13.0	3.20	0.70	0.20	1.40	0.85	0.10	6.10	0.55	0.25	0.60	0.30	4.20				
12	長頸有腸抉長三角形鏃	13.7	1.20	0.90	0.20	—	—	—	7.50	0.50	0.25	0.80	0.30	4.70				
13	長頸有腸抉長三角形鏃	12.8+	1.6+	1.10	0.15	—	—	—	7.60	0.55	0.25	0.70	0.30	3.7+				
14	長頸有腸抉長三角形鏃	12.7+	2.20	0.75	0.15	—	—	—	7.70	0.50	0.25	0.60	0.30	3.2+				
15	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	12.0	3.10	0.70	0.15	1.45	1.00	0.15	6.70	0.55	0.20	0.70	0.30	2.50				
16	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	12.7	3.25	0.70	0.15	1.70	0.95	0.10	6.20	0.50	0.20	0.70	0.40	3.50				
17	長頸片小爪逆刺長三角形鏃	14.5	3.40	0.80	0.20	1.70	1.10	0.10	6.10	0.60	0.25	0.80	0.35	3.50				
18	長頸有腸抉長三角形鏃	15.2+	3.10	0.95	0.10	—	—	—	6.80	0.50	0.30	0.70	0.40	5.00				

単位：cm

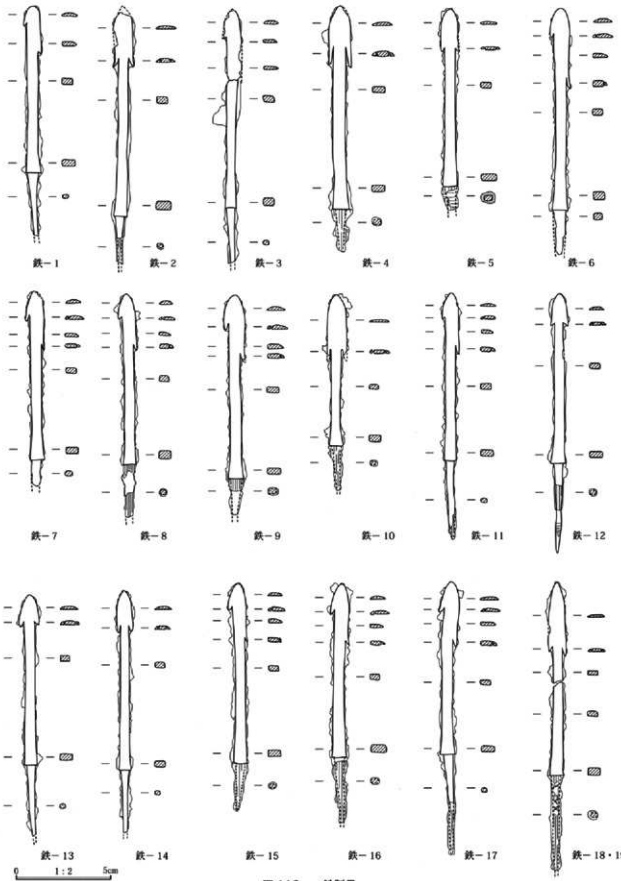

鉄－1
鉄－2
鉄－3
鉄－4
鉄－5
鉄－6
鉄－7
鉄－8
鉄－9
鉄－10
鉄－11
鉄－12
鉄－13
鉄－14
鉄－15
鉄－16
鉄－17
鉄－18・19
0
1：2
5cm

図112　鉄製品

5　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が15.5 mの円墳である。

遺構②　盛土直下にはFA層が存在していた。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　埋葬施設はその痕跡から木棺といえる。

遺構⑤　埋葬施設内から検出された炭化材の状況から、埋葬時には木棺上に板材が被されていたと考えられる。

遺構⑥　棺床は白色粘土で舟形を形作っている。

遺物に関する主な情報

遺物①　土師器坩が正置状態で盛土下から出土している。

遺物②　形象埴輪は馬１体・人３体が存在する。

遺物③　円筒埴輪は全て２条３段構成であり、「基部の伸長化」は認められない。

遺物④　円筒埴輪は全て円形透孔であり、器面の赤彩はない。しかし、底部調整は内面ケズリが確実に行われている。

遺物⑤　主体部の副葬品は鉄鏃が18点である。

※

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

土師器・坩（器－１）は口縁が直立し、外面にタテミガキを施すものである。この形式の土師器は位置づけが難しいが、その盛行は「多田山Ⅰ期」とみることが妥当である。

長頸片小爪逆刺長三角形鏃（鉄－１・３・６～９・11・15～17）は「多田山０～多田山Ⅰ期」に存在し、群馬県地域では特に「多田山Ⅰ期」相当時期に盛行する形式の鏃である。長頸有腸抉長三角形鏃（鉄－２・４・５・10・12・13・14・18・19）は、腸抉は深いもの（鉄－４）が含まれていないことや、全てが台関であり、棘関が含まれていないことを踏まえると、「多田山Ⅰ期」のものと考えることが適切である。

円筒埴輪は、２条３段構成のものばかりであり、所謂「基部の伸長化」は認められない。透孔の形状は円形である。赤色顔料の塗彩は認められない。底部調整は極めて明瞭に、ケズリが施されている。底部調整の盛行は「多田山Ⅱ期」と考えられるが、その出現は「多田山Ⅰ期」後半期に相当する時期に初現が認められる。よって、これらの属性を踏まえ、近年の研究（島田 2001）も考え合わせ、これらの円筒埴輪の時期を「多田山Ⅰ期（後半）」と考える。

遺構の時間的位置づけ

僅かに残存する盛土直下からＦＡ層が確認されたことから、本盛土がＦＡ降下以降であることが判る。

FAの降下時期については「多田山０期の最終末」あるいは「多田山Ⅰ期の初め」と考えられる（編集者の考え）ので、盛土構築（＝古墳築造）の時期は「多田山Ⅰ期」以降と考える。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①・遺物③④）から、「初期群集墳」を構成する１古墳の可能性が考えられる。既研究（石島 1993）によれば、この種の古墳の造営時期は、「多田山０～Ⅰ期」相当の時期と考えられている。但し、埋葬施設が「竪穴式小石槨」でなく、木棺であるという点が気にかかるところである。

ところで、本墳の場合、築造時期に近似する情報は４つある。まず一つ目は、墳丘築成時期とＦＡとの先後関係に関する情報であり、導き出された盛土行為開始時期は「多田山Ⅰ期」である。次に、盛土直下出土の土師器・坩の情報であるが、この土器の盛行時期は「多田山Ⅰ期」と考えることができる。三つ目は副葬品としての鉄鏃の情報であるが、長頸片小爪逆刺長三角形鏃と長頸有腸抉長三角形鏃の各属性や組み合わせ関係から「多田山Ⅰ期」と考えることが適切である。最後に、円筒埴輪の情報であるが、これに関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期」である。したがって、本墳の築造時期は「多田山Ⅰ

期」と考えることがもっとも妥当である。

なお、円筒埴輪に見られる、新出の属性（底部内面ケズリ調整）を考慮すると、「多田山Ⅰ期」でも後半期とするほうがより妥当なのかもしれない。但し、形象埴輪に関しては、先代からの伝統的な作風を色濃く残しているため、その点からのアプローチによる本墳の再解釈の必要性も感じている。

※

本墳の埋葬施設は「舟形粘土床」を敷設し、棺構造は割竹状の半截木棺であり、炭化板材で棺を被覆するという特異な構造を呈するものである。これは、所謂「木炭槨」や「舟形木棺」とは異なるものであると考えるが、同様の事例を他に見いだすことができず、比較検討が加えられない状況にある。しかし、その棺を押さえる粘土床が舟形を呈していたということは、近年、見直しが図られている「舟葬」との関連において注目されるものであり（岡本 2000・辰巳 2001）、岡本・辰巳氏が論じるような他界観が反映されたものと考えられる。ちなみに、後藤守一氏がが舟葬論を展開する基礎資料となった赤堀茶臼山古墳（後藤 1931）は本墳の北東約 500 mの地点に位置する。

なお、こうした舟葬的な埋葬施設は、本古墳群内において、本墳が唯一の存在であることから、こうした舟葬が集団の全体的表象として採用されたというわけではない。どのような背景のもとに本墳のみで構築されたかについては、他の属性も加味した上で再検討の必要がある。

多田山５号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・・134
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・134
3　埋葬施設・・・・・・・・・・・・・・・・136
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・139
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・148

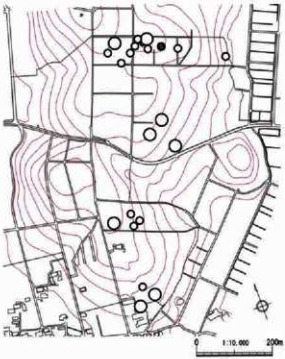


図113　多田山５号墳　位置図

１　調査前

多田山５号墳は、標高 144 m付近にある。その位置は、多田山丘陵の頂部（標高 159 m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面の一部が東方向へ僅かに舌状突出する、その縁部である。

調査前の状況では墳丘状の高まりも存在せず、古墳の存在を想定できる状況ではなかった。しかし、試掘において周堀の一部が確認され、墳丘径 10 m前後の円墳の存在が想定された。なお、本墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

２　墳丘と周堀

（１）墳丘（図 114）

墳丘直径が 9.8 mの円墳である。残存状況がよくなく、墳裾部における地山削り出しのテラス面の存在は確認できなかった。

墳丘盛土は全く残存していなかった。遺構確認面が浅間Ｃ軽石やＦＡを含む地山層であることからも、盛土の存在は期待できなかった。

（２）周堀（図 114・115）

周堀は、墳丘同様、平面プランはほぼ円形を呈し

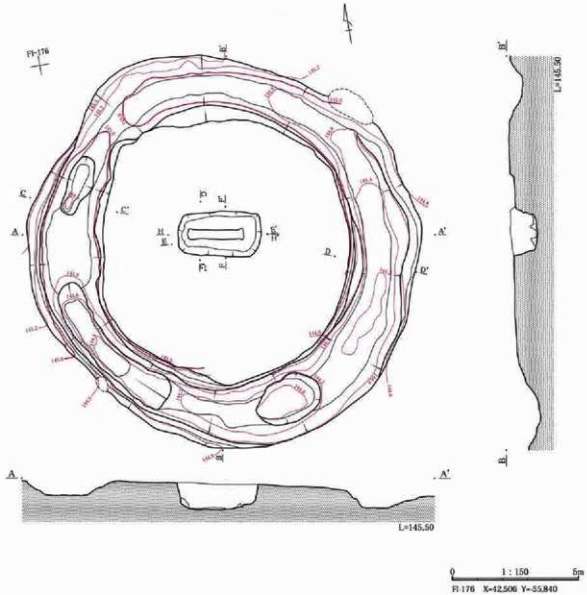


図 114　墳丘及び周堀　平・断面図

ている。底部は平坦な箇所と凸凹した箇所の両方が存在したが、周堀内埋葬は確認できなかった。周堀の規模は上幅2.3～3.0 m、下幅1.0～1.5 m、深さ0.4～08 mであり、周堀の規模を含めると古墳規模は直径約16.0 mになる。さらに周堀断面は椀状、覆土にはＦＡや浅間Ｃ軽石が含まれいることが確認された。

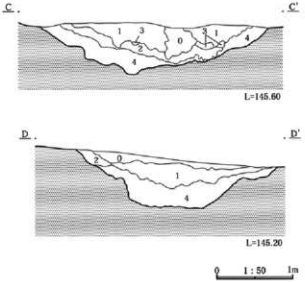
（3）周堀内における遺物出土状況（図116）

周堀内より出土した遺物は、円筒埴輪・朝顔形埴輪、形象埴輪、土師器である。

円筒埴輪・朝顔形埴輪については、平面分布的には散在しており、特定のエリアに集中する状況は認められない。また、層位分布的には、全埴輪片が周堀覆土上層の黒褐色土層（周堀断面Ｃ・Ｄでの第１層）からの出土が、圧倒的に多い。

形象埴輪については種類としては人物の破片と家の破片が、僅かに出土するのみであったが、平面分布的には散在していた。人物については出土資料は１点のため、傾向を知るに至らない。しかし、家形埴輪の破片については、複数の破片が周堀のいたるところから出土しており、特定のエリアに集中する状況は認められない。また、層位分布的には、全埴輪片が周堀覆土上層の黒褐色土層（周堀断面Ｃ・Ｄでの第１層）からの出土に限定される。

土師器については、甕・坩・坏が出土した。それぞれは平面分布的には分散しているが、個体単位においてはほぼまとまっており、接合率も高い。層位分布的には、全土師器が周堀覆土下層の黄褐色土層（周堀断面Ｃ・Ｄでの第４層）からの出土である。



0　撹乱土
1　黒褐色土　ＦＡ・As－Ｃを含む（埴輪多い）
2　褐色土　ローム・ＦＡ・As－Ｃを含む　しまりあり
3　灰褐色土　ＦＡをブロックで含む　しまりあり
4　黄褐色土　ロームが主体　ＦＡ・As－Ｃを僅かに含む

図115　周堀覆土断面図

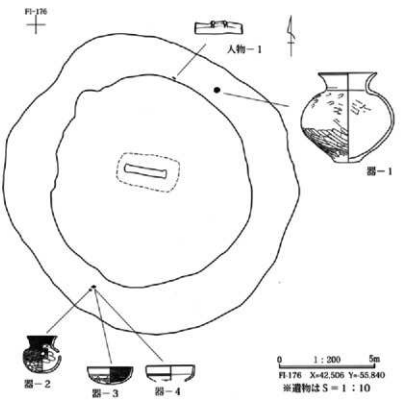


図116　周堀内遺物出土状況図

３　埋葬施設（図 117・118）

埋葬施設は、「木棺」である。

本主体部は、調査着手時は竪穴式石槨の存在を想定し、多田山４号墳同様、墓坑の調査を実施した。

（１）確認状況

盛土はすべて失われており、地山確認面を精査したところに、長軸 3.20 m×短軸 1.80 mのいびつな隅丸長方形の平面プランを確認し、これを埋葬主体と想定して調査を実施した。

（２）残存状況

暗灰黄色土が埋め土として確認されたが、縦横のベルトを残して掘り下げてみると、この土は盗掘時の攪乱土であることが判明した。平面プラン確認時のプランの歪みもこれに影響されていたと考えられる。盗掘は深さ０．６～０．９mにおよんでいたが、床面の粘土床は全壊を免れていた。そして、この攪乱土を除去することにより、本主体部に状況を確認するにいたった。

（３）墓坑埋土

墓坑下部で、わずかに残存していた。それにはローム土と灰白色粘土が用いられていた。

（４）埋葬主体

粘土床の形状から、割竹形木棺と考えた。木棺の規模は、長さ 1.9 m、径 0.4 mを想定できる。棺は床のみならず、側面・上面とも粘土で被覆されていたようである。それを示す状況としては粘土が側面のほぼ全体に木棺の輪郭を残すような状態で検出されたことや、埋土断面下層において、棺上面に相当する位置に粘土が存在することがあげられる。また同じく、粘土の残存状況から木棺の短側壁には厚さ 3.0cm 以下の厚みをもった板材が、小口部を抑えていたと考えられる。なお、半截状の木棺の形状は想定できるものの、その上半部については同じく半截状の木棺が存在するのか、あるいは多田山４号墳のように板で閉塞する構造なのかは不明である。

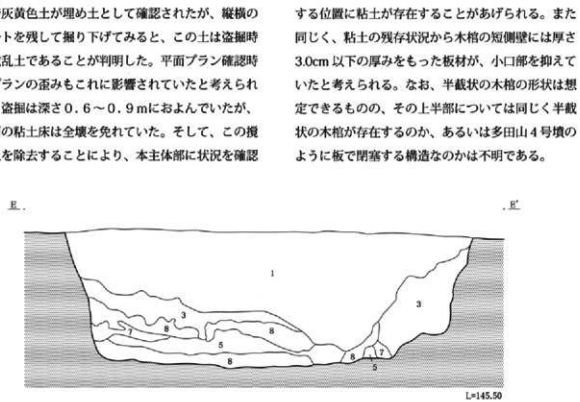


図 117　埋葬施設確認のための断面図（Ｅ－Ｅ'・Ｆ－Ｆ'）

（5）遺物の出土状況

遺物は鉄製刀子（鉄－1）と緑色凝灰岩製管玉（玉－1～25）が粘土床の内部、棺の北半部の粘土床からの出土である。特に管玉は、破砕された状態で出土している。構築時における埋納遺物と考えられる。

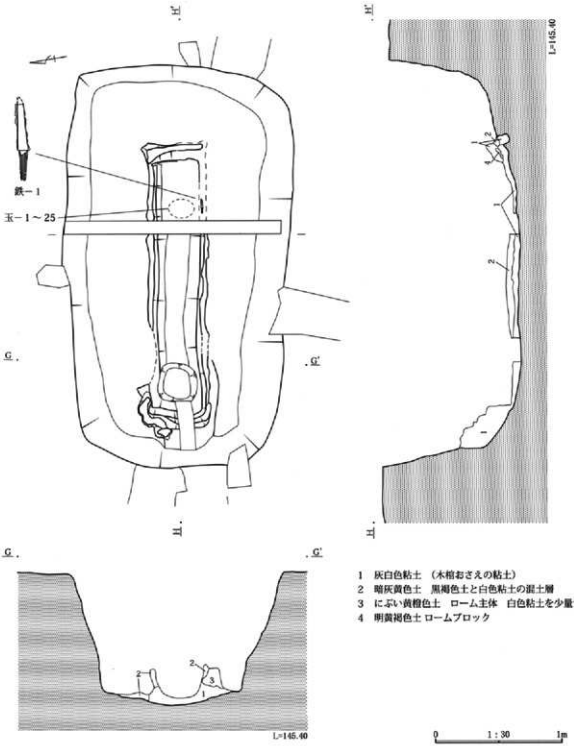


図118　埋葬施設　平・断面図　および　遺物出土状況図

（6）　解体調査データから復元する構築工程（図 119）

第１段階　墓坑の掘削

墳丘のほぼ中央に、長軸 3.20 m、短軸 1.80 m、1.10 m（確認時）の隅丸長方形の墓坑を掘削する。なお、調査所見からは墓坑の掘削段階が、盛土前か、盛土後か、は不明であった。

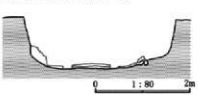
第２段階　墓坑底面への粘土の敷設と棺床部分の掘り方の掘削

墓坑底面のほぼ全域にに厚さ５～10cm の粘土を敷く。さらに、その後、木棺を設置する箇所に、長軸 2.10 m、短軸 0.50m 、深さ 0.05 mの掘り方を掘削する。

第３段階　粘土床の設置（＋木棺の設置・墓坑の閉塞）

木棺を設置する箇所に粘土床を設置する。さらに、小口部分は多くの白色粘土で充填し、押えとする。なお、この段階で、粘土床内に刀子・玉類を埋納したと考えられる。

この後、木棺を設置し、さらには墓坑を閉塞したと推定する。



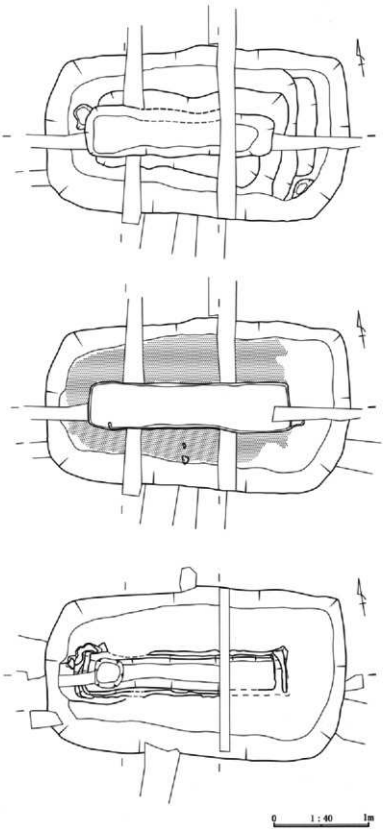


図 119　　埋葬施設　構築工程図

4　出土遺物

(1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪（図120～123・表17）

円筒埴輪は接合により10本以上、朝顔形埴輪は1本が確認された。各属性については次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全体規格が判明しているものは少ないが、破片資料の様相から考えて、2条3段構成が主体的に存在すると考える。

法　量　器高が判明している資料は1本だけだが、それは37.0cmを測る。

口径が復元値も含めて判明しているものは3本のみである。それらは、26.5cm～28.0cmを測る。

底径は13.2～16.0cmの範囲内にあるが、14.5～15.0cmのものが多い。

技法の特徴　外面調整については、全てが「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」である。

内面調整については、「全面をタテナデし、最後に口縁をヨコナデする」という工程は共通する基本工程である。だが、中間工程において差違が認められ、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」と「全面にタテナデを施した後、口縁付近にヨコハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」との2種類に分けられる。うち、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」が主体的に存在する。

突　帯　断面形には「台形」のみ1種類がある。また、突帯の、器面へのナデつけには「仕上げナデ(突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を「上端・下端とも施すもの」、「上端のみに施すもの」の2種類がある。主体的な存在は「上端のみに施すもの」である。

透　孔　確認したものは全て「円形」である。

線　刻　内面上位に「　＼　」を施すものは1本確認されている。

底部調整　確実なものは1点も確認できない。

色調・焼成　色調は「橙色系」のみである。やや硬い焼成である。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石が含まれている。

赤　彩　1点も確認できない。

B．朝顔形埴輪

規　格　全体規格が判るものがなく、不明である。

法　量　全器高や口縁径については規格が判るものがなく、不明である。

底径は16.0cmのものが1本確認されている。

技法の特徴　外面は「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面は、円筒部については「全面にタテナデを施」し、朝顔部については「ナデ後ハケを施し、最後に口縁にヨコナデを施」している。

突　帯　断面・台形で、上下に仕上げナデを施す。

透　孔　円形である。

線刻・底部調整　不明である。

色調・焼成　色調は橙色であり、やや硬い焼成である。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石が含まれている。

赤　彩　確認できない。

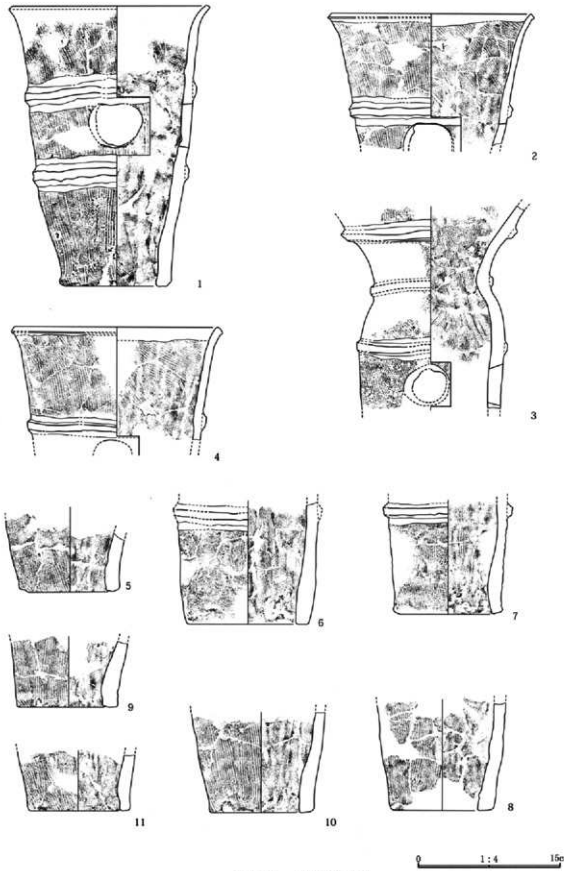


図 120　円筒埴輪（1）

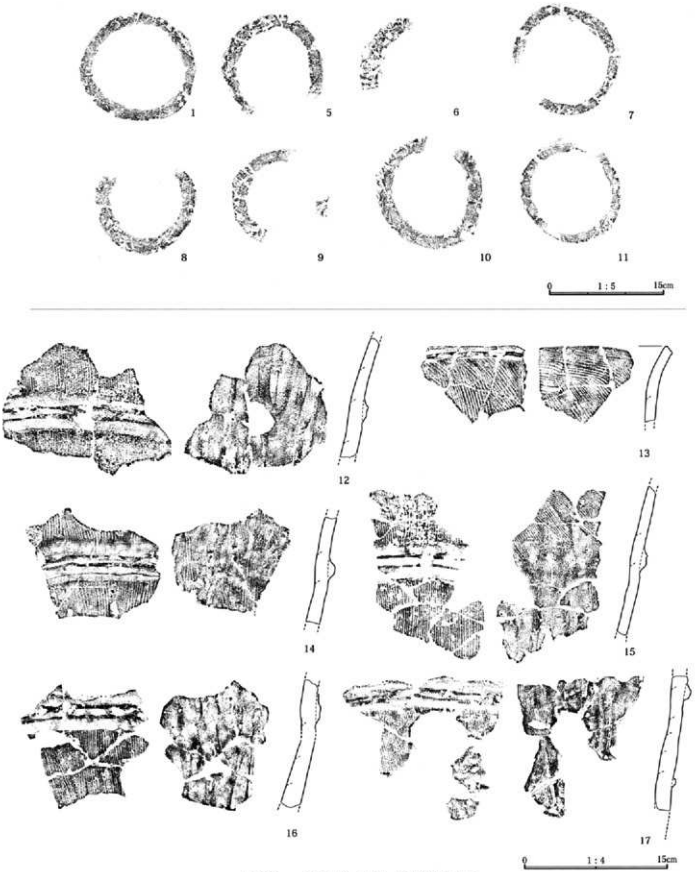


図121　円筒埴輪　底部　および破片（1）

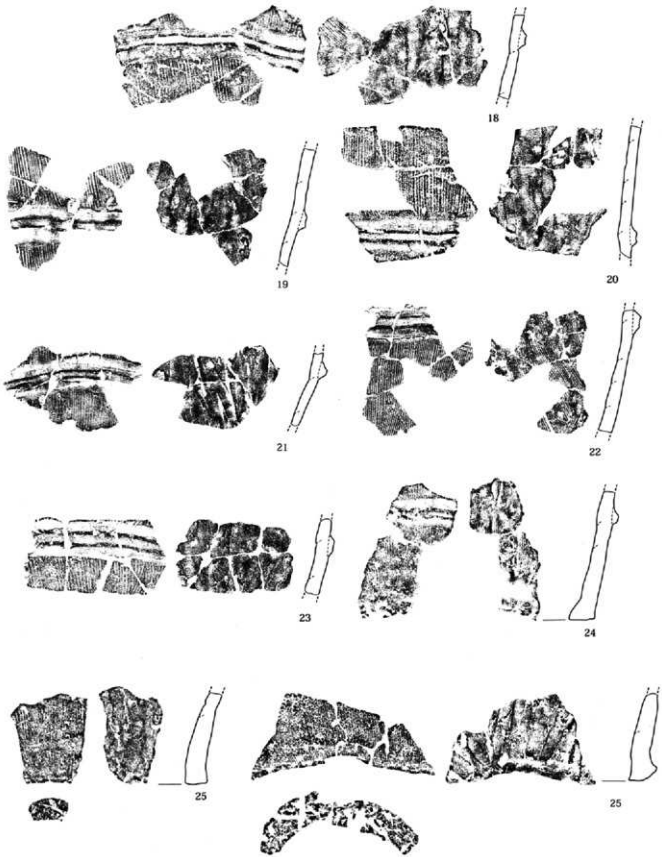


図122　円筒埴輪　破片（2）

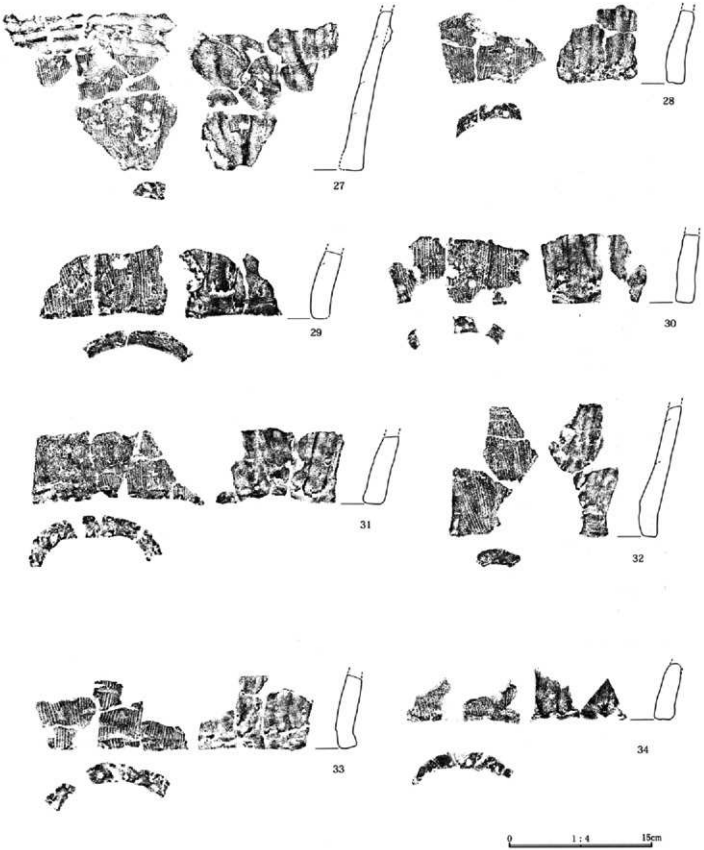


図 123　円筒埴輪　破片（3）

多田山５号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号　**種類**…円筒⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪　**器高**…口縁部から体部までの高さ
口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
調整（外面）…A⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　a⇨「タテハケ」(aは、部分復元資料や破片資料のため全体が不明なものに記載)
調整（内面）…A⇨「タテナデ→口縁部近ヨコハケ→口縁部近ヨコナデ」　B⇨「タテナデ→上半ナナメハケ→口縁付近ヨコナデ」　a⇨「タテナデ」　b⇨「タテナデ→粗いタテハケ」　c⇨「タテナデ→上半ナナメハケ」(a～cは、部分復元・破片資料のため全体が不明なものに記載)
ハケメ…幅10mm あたりのハケメの本数
突帯…A⇨断面が台形＋丁寧な仕上げナデを上・下端とも施す　B⇨断面台形＋丁寧な仕上げナデを上端のみ施す。下端は簡略的仕上げナデ。
透孔…A⇨正円形
線刻…○⇨あり　×⇨なし　？⇨線刻が施されそうな部分が欠落しているため、不明（○の場合はその内容を備考欄に記載）
線刻の詳細既述⇨（位置／形）で既述。（例：内面３段目に斜線１本の線刻→「内３／＼」）
赤彩…本項にはなしのため、不記載　**底部調整**…△⇨可能性あり　×⇨なし　－⇨底部がないため不明（△の場合はその内容を備考欄に記載）
色調…A⇨にぶい橙色　B⇨橙色　**出土位置**…「周堀」に記載を一括　**備考**…その他、特記事項を記載。

表17　円筒埴輪・朝顔形埴輪観察表

No	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	刷毛(本)	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置	備考
1	円筒	37.0	*26.5*	14.0	A	A	5～6	A	A	△		×	A	周堀	
2	円筒	-	27.4	-	A	B	5～6	A	A？	○	内３／＼	－	A	周堀	
3	朝顔	-	-	-	A	B	4～5	A	A？	△		－	A	周堀	
4	円筒	-	*28.0*	-	A	B	5～6	A	A	△		－	A	周堀	
5	円筒	-	-	13.5	a	a	4～5	？	－	？		×	A	周堀	
6	円筒	-	-	*16.0*	a	b	4～5	A	－	？		×	A	周堀	
7	円筒	-	-	14.5	a	a	4～5	？	－	？		△	A	周堀	底部内面：横ハケ？（ナデ前）
8	円筒	-	-	*13.2*	a	a	5～6	？	－	？		×	B	周堀	
9	円筒	-	-	13.5	a	a	4～5	？	－	？		×	A	周堀	
10	円筒	-	-	14.5	a	a	4～5	？	－	？		△	B	周堀	底部内面：横ハケ？（ナデ前）
11	円筒	-	-	13.5	a	a	4～5	？	－	？		×	A	周堀	
12	円筒	－	－	－	a	a	7～8	？	A？	？		×	A	周堀	
13	円筒	－	－	－	A	B	4～5	？	－	？		×	A	周堀	
14	円筒	－	－	－	a	b	5～6	A	A	？		×	A	周堀	
15	円筒	－	－	－	a	c	7～8	A	A？	？		×	A	周堀	
16	円筒	－	－	－	a	a	6～7	A	－	？		×	A	周堀	
17	円筒	－	－	－	a	b	7～8	A	A	？		×	A	周堀	
18	円筒	－	－	－	a	c	7～8	A	A？	？		×	A	周堀	
19	円筒	－	－	－	a	a	5～6	A	A？	？		×	A	周堀	
20	円筒	－	－	－	a	a	6～7	A	A？	？		×	A	周堀	
21	朝顔	－	－	－	a	a	4～5	A	－	？		×	A	周堀	
22	円筒	－	－	－	a	b	5～6	A	A？	？		×	A	周堀	
23	円筒	－	－	－	a	a	5～6	A	－	？		×	A	周堀	
24	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	B？	A？	？		×	A	周堀	
25	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
26	円筒	－	－	*16.0*	a	a	7～8	？	－	？		×	A	周堀	
27	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	A	－	？		×	A	周堀	
28	円筒	－	－	*14.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
29	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
30	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
31	円筒	－	－	*16.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
32	円筒	－	－	*15.0*	a	a	6～7	？	－	？		×	A	周堀	
33	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	
34	円筒	－	－	*15.0*	a	a	5～6	？	－	？		×	A	周堀	

(2) 形象埴輪（図124）

A．人物埴輪

人－1

部位：太刀。細長い円筒状の形状を呈す。内面には剥離痕跡がある。外面2カ所には、帯状の粘土で帯執りの紐の表現を示す。赤彩なし。全面ナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）・軽石が目立つ。

B．家形埴輪

家－1

部位：棟の破片。鰹木の剥離痕跡がある。外面はハケ調整。棟部には鰹木貼り付けのために粘土を貼り付ける。内面は粘土塊を幾重にも貼り付け、補強している。貼り付け後、ナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）が目立つ。

家－2

部位：軒先の破片。外面はハケ調整後、軒先部にはナデ調整を施す。内面はハケ調整。輪積み痕跡が残る。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）が目立つ。

家－3

部位：鰹木の破片。下部には剥離痕跡あり。ナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）・軽石が目立つ。

家－4

部位：家の一部か？平面は帯状、断面は蒲鉾状を呈する。両端は欠損。外面はヨコナデ調整。内面は、ハケ調整。また内面は、剥離痕跡あり。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）・軽石が目立つ。

家－5

部位：軒先の破片。外面はハケ調整後、軒先部にはナデ調整を施す。内面はハケ調整及びナデ調整。輪積み痕跡が残る。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）が目立つ。

家－6

部位：壁体の破片。外面はハケ調整。内面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）・軽石が目立つ。

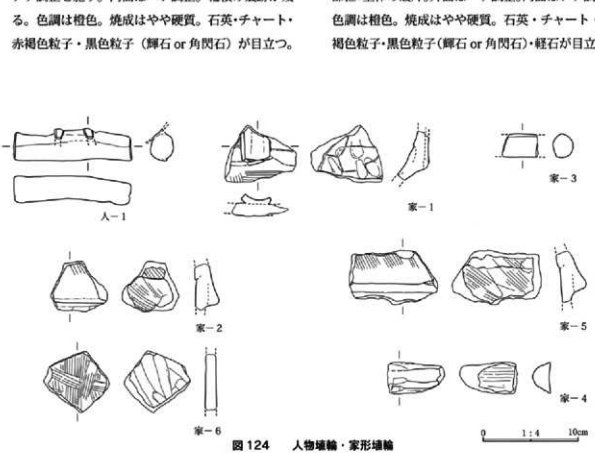


図124　人物埴輪・家形埴輪

（3）土器（図 125・表 18）

掲載した土器は全て土師器であり、器種は甕と坏である。なお、出土土器の細片まで観察したが、土師器の他器種や須恵器片の出土は一片も確認できなかった。

甕（器－１）は器高 23.8cm、口縁径 15.5cm、底径 7.0cm を計る、単口縁の甕である。体部外面にはヘラケズリを多用し、その後、上半部にナデを施している。胎土には砂礫を多く含んでいるものの、口縁端部の処理など、細部の作り上げは丁寧である。

鉢（器－２）は器高 9.7cm、口縁径 7.9cm を計る。器面の仕上げは、ヨコミガキによって極めて丁寧に行われている。口縁中位には、そのミガキによって段を作り出している。体部中位の穿孔は焼成前のものである。胎土は比較的緻密である。

坏（器－３･４）は口径 12.0cm 程の、所謂「模倣坏」である。ともに端部の処理などはややシャープさにかけるが、器－３では内面全体に丁寧なミガキをかけており、仕上げの丁寧さが見受けられる。

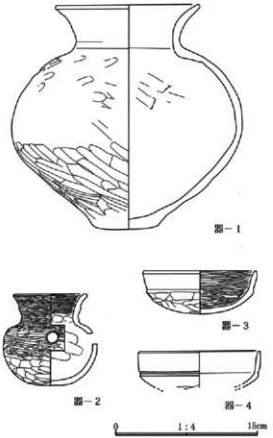


図 125　土器

表18　土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口/底/高	形態及び成整形の特徴	色調	焼成	出土位置	備考
1	土師器 甕	15.5/7.0/23.8	形態：やや外反気味に広がる単口縁・やや緩つまりの球胴・やや丸みをもった平底成整形：口縁横ナデ・頸部横ナデ・体部は外面はヘラケズリ後上半部のみナデ、内面はヘラナデ・底部はヘラケズリ後ナデ調整にてつくりだし	橙色	やや粗	周堀	外面に黒斑対に2つあり底部は焼成穿孔
2	土師器 鉢	7.9/×/9.7	形態：口縁は外反気味に立ち上がる。中位に不明瞭な段を持つ。体部は中位やや上に最大径を持つ球胴底部はやや平底気味の丸底成整形：口縁はナデ後斜横位ミガキを密に施す。体部は上半はケズリ後ナデ、その後に斜横位のミガキを密に施す。下半はケズリ後、横かなミガキを施す。内面はナデ。焼成前穿孔	にぶい橙色	やや密	周堀	同墳の形象埴輪に胎土が類似
3	土師器 坏	12.0/×/4.5	形態：口縁は僅かに内傾気味に立ち上がる。端部は丸く収める。口縁と体部の境に稜を持つ。体部はやや深い。丸底。成整形：口縁は横ナデ。内面については、その後、横位の密なヘラミガキ。稜線は、上位は強い横ナデ、下位はヘラケズリによってケズリ出されている。体部は斜横位のヘラケズリ。体部内面は斜横位の密なヘラミガキ。	にぶい橙色	やや密	周堀	体部外面に黒斑１つあり
4	土師器 坏	/13.0/×/3.5～	形態：口縁は内傾気味に直立する。端部は丸く収めるが、内面に内斜する面を持つ。口縁と体部の境に明瞭な稜を持つ。体部は深めと推定。丸底と推定。成整形：口縁はヨコナデ。稜線は、上位の強い横ナデによって形作られている。体部は外面は体部下半はヘラケズリ、上半は不定ナデ。内面は斜横位のナデ。	橙色	密	周堀	4号墳の埴輪胎土によく似ている。

（4）鉄製品（図 126）

刀子（鉄－１）は切先が一部欠損している。残存長は 10.2cm であるが、推定全長は 11.0cm 前後であり、小型の刀子と考えられる。残存刃長は 6.1cm、刃巾は 1.4cm、刃厚は 0.3cm、茎長は 4.0cm、茎巾は 1.1cm、茎厚は 0.3cm を、それぞれ計る。茎部には木質が一部遺存している。

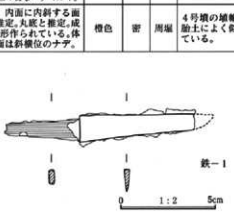


図 126　鉄製品

(5) 玉製品 (図127・表19)

玉製品には、丸玉と管玉がある。

丸玉 (玉－1・2) は2点が出土した。材質は葉蝋石である。いずれも完形品である。玉－1は直径0.9cm、厚さ0.6cmを計り、玉－2は直径1.0cm、厚さ0.8cmを計る。中心部の穿孔はともに0.2cmであり、片側穿孔である。

管玉 (玉－3～25) は23点出土した。材質は全て緑色凝灰岩である。完形品と思われるものは1点 (玉－3) のみである。この資料は直径1.0cm、長さ2.8cmを計る。中心部の穿孔は0.2cmであり、両側穿孔と思われる。その他の資料 (玉－4～25) は全て破損品である。但し、これらの資料はいずれも推定復元できる直径が完形資料のそれに近く、元来は玉－3とほぼ同一規格品であったことが推測できる。なお、資料の中には2孔の穿孔があるもの (玉－10・15) や未完遂の孔があるもの (玉－14・16) など未成品と思われるものも含まれている。

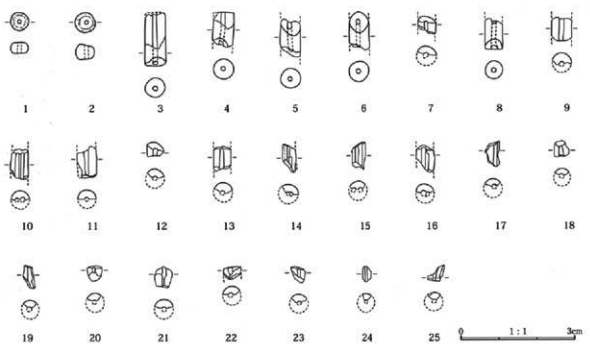


図127　玉製品

表19　玉製品観察表

番号	種類	材質	直径	孔径	厚み	色調		番号	種類	材質	直径	孔径	厚み	色調	
1	丸玉	紫ろう石	0.90	0.20	0.60	EM	片面穿孔	14	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.50	MG	不明・未完遂の孔1
2	丸玉	紫ろう石	1.02	0.20	0.78	EM	片面穿孔	15	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.40	MG	2孔あり
3	管玉	緑色凝灰岩	1.05	0.21	2.80	MG	両面穿孔？	16	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.35	MG	不明・未完遂の孔1
4	管玉	緑色凝灰岩	1.05	0.20	1.80	MG	両面穿孔？	17	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.30	MG	不明
5	管玉	緑色凝灰岩	1.05	0.20	1.90	MG	不明	18	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.80	MG	不明
6	管玉	緑色凝灰岩	1.05	0.20	1.80	MG	不明	19	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.20	MG	不明
7	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.90	MG	不明	20	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.80	MG	不明
8	管玉	緑色凝灰岩	0.95	0.22	1.60	MG	両面穿孔？	21	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.10	MG	不明
9	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.20	MG	不明	22	管玉	緑色凝灰岩	1.10	0.20	0.70	MG	不明
10	管玉	緑色凝灰岩	0.95	0.20	1.55	MG	2孔あり	23	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.80	MG	不明
11	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.75	MG	不明	24	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.90	MG	不明
12	管玉	緑色凝灰岩	1.10	0.20	1.30	MG	不明	25	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	0.90	MG	不明
13	管玉	緑色凝灰岩	1.00	0.20	1.20	MG	不明								

※「色調」…EM→EMERALDGREEN　MG→MOSSGREEN

5　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が 9.8 mの円墳である。

遺構②　墳丘盛土は全く残存していなかったが、遺構確認面の地山にはFAやＡｓ－Ｃが多く含まれていた。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　埋葬施設は木棺である。

遺物に関する主な情報

遺物①　土師器坏・甕・鼎などや、埴輪が周堀内から出土している。

遺物②　形象埴輪は人と家の存在が確認できる。

遺物③　円筒埴輪は全て２条３段構成であり、基部の伸長化は認められない。

遺物④　円筒埴輪は円形透孔が主体で、器面赤彩はなく、底部調整も確かなものは存在しない。

遺物⑤　主体部は、盗掘を一部に受けていたが、副葬品としては刀子・管玉が存在した。

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

土師器・坏（器－３・４）は口縁が直立気味の須恵器坏蓋模倣坏である。口縁端部は丸く仕上げられている。この形態や造作からは、「多田山Ⅰ期」に帰属時期をおくことが適当である。土師器・鼎（器－２）や甕（器－１）は形態的にやや古相を呈しているようにもみえる。

円筒埴輪は、全体復元されたものが少ないため、あまり積極的には論じられない。だが、数少ない復元資料や、破片資料から窺える情報からは、２条３段構成のものばかりであり、所謂「基部の伸長化」は認められない。透孔の形状は円形である。赤色顔料の塗彩は認められず、底部調整も、僅かにそれらしき資料を含むものも大多数には存在しない。よって、近年の研究（島田 2001）に基づき、その時期を「多田山Ⅰ期」と考える。

管玉（玉－３～25）は緑色凝灰岩製である。近年の動向（深澤 2003）から考えると、こうした性質の玉類の生産は「多田山Ⅰ期」以降に展開するものと考えられる。

遺構の時間的位置づけ

墳丘盛土は全く残存していなかったが、遺構確認面の地山にはFAやＡｓ－Ｃが多く含まれているということは、FA降下以降と考えられる。FAの降下時期については「多田山０期最終末～多田山Ⅰ期の初め」と考えられる（編集者の考え）ので、盛土構築（＝古墳築造）の時期は「多田山Ⅰ期」以降と考える。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①③・遺物③④）から、「初期群集墳」を構成する１古墳と考えられる。既研究（右島 1993）によれば、この種の古墳の造営時期は、「多田山０～Ⅰ期」相当の時期と考えられている。但し、埋葬施設が竪穴式小石槨でなく、木棺である点がやや気掛かりである。

一方、本墳の築造時期と最も近似する情報はＦＡとの先後関係と、副葬品としての玉製品の情報、円筒埴輪の情報である。FAとの先後関係を通して導き出された墳丘構築時期は「多田山Ⅰ期（以降）」である。また、玉製品については、その生産時期から考えて「多田山Ⅰ期」以降であると考えられる。さらに、円筒埴輪に関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期」である。

したがって、本墳の築造時期は「多田山Ⅰ期」と考えられる。

多田山６号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・150
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・150
3　埋葬施設と旧地表・・・・・・・・・・・・154
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・156
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・174

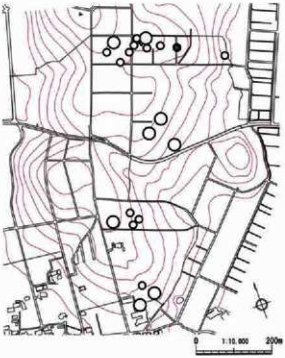


図128　多田山６号墳　位置図

1　調査前

多田山6号墳は、標高142m付近にある。その位置は、多田山丘陵の頂部（標高159m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面の一部が東方向へ僅かに舌状突出する、その縁部である。

調査前の状況では墳丘状の高まりは確認できず、古墳の存在を想定できる状況ではなかった。また、試掘においてもその存在が確認されていなかった。ところが、表土掘削段階で、周堀の輪郭が確認され、墳丘径20m前後の円墳の存在が想定された。

なお、本墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀

（1）墳丘（図129）

墳丘直径16.0mの円墳である。墳裾部の大半は崩れがひどく、多田山2号墳で見られるような、地山けずり出しの二段築成構造は明確には認められなかった。

盛土の存在は墳丘中央付近の一部（おおよそ直径6.0mの範囲）のみで、厚さ2～8cmほどが確認された。その直上にはAs－Bを含む黒色土が覆っていることから、削平を受けたものと思われる。盛土はロームブロックと黒色土との混土であり、周堀掘削土を利用したと想定される。また、盛土直下のにはFAの一次堆積層の存在が認められたことから、本墳の盛土行為がFA降下直後に行われたと推測される。

（2）周堀（図129）

調査確認面においては、南側の土橋部分を除き、墳丘の周りを全周する。

規模は、上幅3.2～4.0m、下幅0.9～1.3m、深さ0.9～1.2mであり、断面形状が逆台形を呈する。周堀底面は平坦化していたが、最下層の覆土の状況から、張り床状の埋め戻しをした痕跡は認められなかった。

周溝内埋葬についても存在は確認できなかった。

土橋は、周堀の南側においてその存在が明瞭に確認できた。それは、幅1.5m、長さ（＝周堀の上幅存在）2.4mの規模を持つものであり、両端の周堀底部との高低差は0.6～0.8mである。

覆土は、As－C・FAを含む黒・暗褐色土、ロームを含む黄褐色土が主体であり、上層にAs－Bの一次堆積層が存在する。

（3）周堀内における遺物出土状況（図130・131）

周堀内からは多量の埴輪片と少量の土器片・石製品が出土している。

埴輪の出土状況　出土した埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪がある。

円筒埴輪は全て2条3段のものであり、50本以上の個体が破片となって出土した。朝顔形埴輪は確実にそれと判断できるものは、1個体分の破片資料しかない。

形象埴輪は、人物と馬、家の破片が出土した。全て1体づつの個体識別ができる。

これら各種埴輪の出土状況には共通点と相違点がある。まず、共通点は層位分布に認められる。全埴輪片がAs－B層下の黒色土・黒褐色土層（断面C・Dでの第3・4層）に出土が集中している、という点である。この層は周堀底面から0.5～1.1mの高さに認められる層である。ちなみに、周堀底面からの埴輪片の出土は皆無であった。

また、相違点は平面分布に認められる。円筒埴輪・朝顔形埴輪は、平面分布的にはエリアⅠ～Ⅶの全てから出土しているのに対し、形象埴輪の内、人物はエリアⅦ、馬はエリアⅦ・Ⅷからのの出土に限定されるのである。なお、形象埴輪の内、家はエリアⅢ・Ⅳ・Ⅶ・Ⅷから出土している。

さらに、これらの接合関係に関しては、円筒埴輪の場合、一個体の接合は同一・隣接エリアの資料に限らず、複数の遠隔エリアの資料についても認められた（なお、形象埴輪の場合は、出土エリアが限定されるため、自ずと接合も同一・隣接エリアに限定された）。

こうした出土状況と接合関係を考え合わせると、以下のことが推定される。

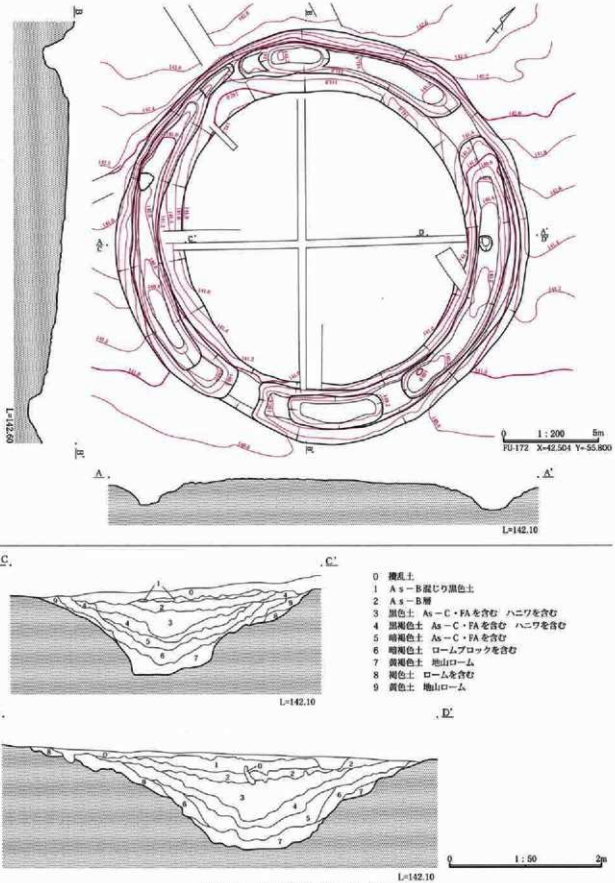


図 129　墳丘および周堀　平・断面図

円筒埴輪については、出土分布の状況から本来の樹立位置を復元することは難しい。なぜなら、どれか１つの個体資料をとってみても、その接合資料の分布範囲が複数のエリアにわたっているからである。

形象埴輪については、層位・出土位置・接合関係がいずれもまとまりを持つこと（図 131）から、おおよその位置を推定することは可能である。おそらく「人－１と馬－１」の位置的関係性が認められる。また、家の破片が四方に分散して出土している状況からは、家が人物や馬と並立していたと考えるのではなく、墳頂部に置かれていたものが破片となって周堀の内の四方に転落したと考える方が妥当である。

土器の出土状況　土器は須恵器・大甕（器－１）が出土した。この土器の破片は、そのほとんどがAs－B層下の黒色土層（断面C・Dでの第３層）に集中しており、平面分布においてもエリアⅧに限定される。破片総数に対して接合率は約 70％であり、約 30％の破片が未接合であった。しかし、これらの未接合の資料においても、技法や焼成具合などから、器－１と同一資料と考えられた。こうした出土状況から、この須恵器・大甕は、周堀のエリアⅧ付近の墳裾に置かれていた可能性が考えられる。

なお、形象埴輪（人物・馬）と須恵器・甕が出土したエリアⅧは、周堀内に存在する土橋と隣接する場所にある。

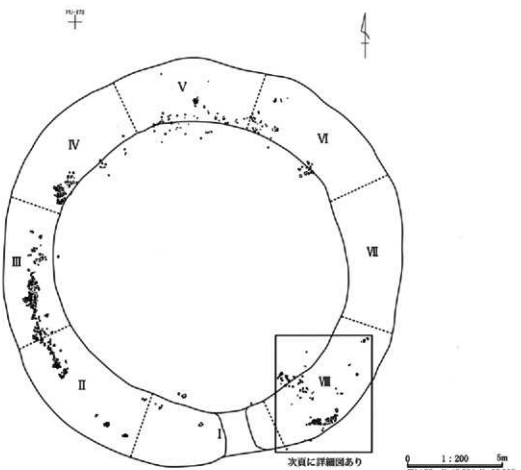


図 130　周堀内遺物出土状況図

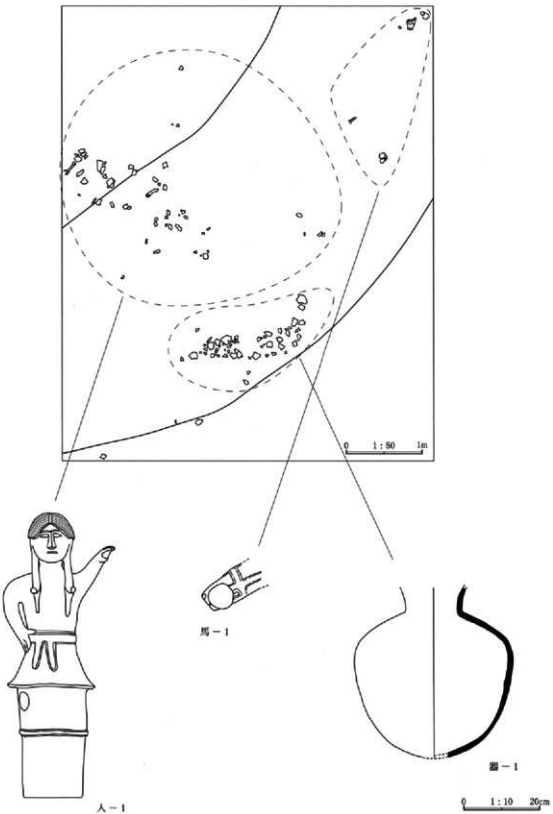


図131　形象埴輪（人物・馬）および須恵器・大甕の詳細分布図

３　埋葬施設と旧地表（図 132・133）

（１）埋葬施設の調査

本調査によって埋葬施設は検出されなかった。

本墳の場合、周堀内からの出土する埴輪・須恵器から導き出される年代観と、それに基づく多田山古墳群内の同時期古墳の埋葬施設の様相を考え合わせると、想定される埋葬施設は、地表面を深く掘り込む掘り方をもつ、竪穴系埋葬施設であった。

平面精査により、わずかに残存する盛土上からその平面プランを確認しようとしたができなかった。さらには盛土をスライス除去しながらそのプランの検出に全力を尽くしたが、盛土を完全除去したにもかかわらず、想定していた種類の埋葬施設は検出されなかった。

（２）旧地表面の状況

本墳の場合、盛土の存在は墳丘中央付近の一部（おおよそ直径 6.0 m の範囲）のみであったため、その範囲内のみから、旧地表面が検出された。旧地表面には FA が露出していた（図 132 のトーン部）が、その FA 面は周辺地形と同一の傾斜面を呈していた。

また、FA が残存するこの範囲はほぼ墳丘の中央に位置しており、本来ならば埋葬施設が存在している場所である。しかし、旧地表を検出した限りにおいては、FA 面に層の乱れや窪みが存在する状況は全く見いだせなかった。

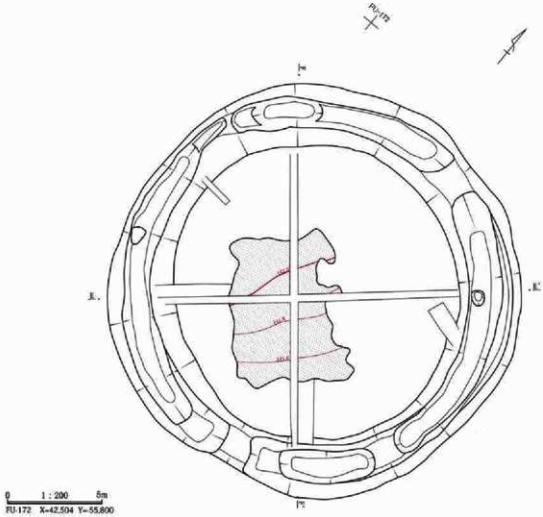
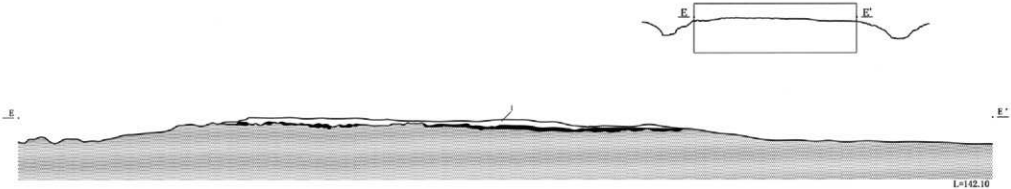
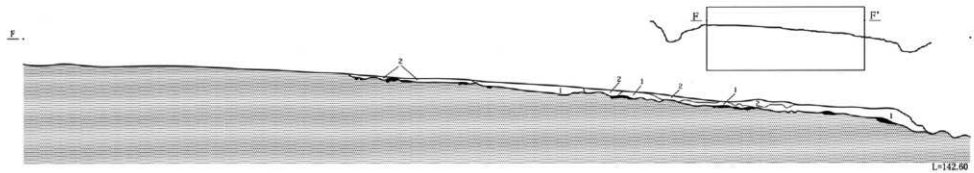


図 132　墳丘盛土下の旧地表面　平面図





1　黄褐色土　かたい　ロームブロックを多く含む　As－Cをわずかに含む
2　暗褐色土　ロームをわずかに含む
※クロヌリはFA

0　1：50　2m

図 133　墳丘盛土　断面図

4　出土遺物

(1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪（図134～142・表20・21）

円筒埴輪は接合により60本以上、朝顔形埴輪は1本の存在が確認された。各属性は次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全て2条3段構成である。

法　量　器高は28.1～40.0cmの範囲にあるが、32～34cm前後のものが多い。

口径は18.0～24.5cmの範囲にあるが、21.5cm前後のものが多い。

底径は11.0～16.5cmの範囲内にあるが12.0cmのものが多い。

技法の特徴　外面調整については「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」と、「全面を板ナデ後、口縁部のみにヨコナデするもの」の2種類が認められる。全体の9割5分以上は前者であり、後者は極めて客体的に存在する。

内面調整については、「全面をタテナデし、最後に口縁をヨコナデする」という工程は全資料に共通する基本工程である。だが、中間工程において差違が認められ、「全面にタテナデを施した後、同じくほぼ全面にハケを施し、最後にヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、雑なハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、ハケを施し、再度上半のみハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、再度上半のみにナデを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」の5種類に大別できる。うち、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」が主体的に存在する。なお、これらは、ハケやナデの方向や工具の差違によってさらに細分も可能である。

突　帯　断面形には「台形」、「三角形」、「扁平な台形」の3種類がある。どれも同じ程度採用されている点が特徴である。なお、これらは混在することが多々認められる。また、突帯の器面へのナデつけには「仕上げナデ（突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を「上端・下端とも施すもの」、「上端のみに施すもの」の2種類がある。ともに同じ程度採用されている点が特徴である。

透　孔　全て「円形」を採用している。

線　刻　多種の線刻が認められる。外面3段には「｜」「||」「|||」「＼」「\\」「U」「×」「⌒」、外面1段には「×」「＋」「＼」がある。また、内面上位には「＼」「＝」「×」「キ」がある。

底部調整　内面を削るものが稀に認められる。

色調・焼成　色調には「黄橙色系」「橙色系」「黄褐色系」「灰白色系」「赤褐色系」「褐色系」がある。焼成には「硬質な焼き上がり」と「軟質な焼き上がり」とあるが、後者の方が多い。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石・角閃石が含まれているほか、白色粒子（軽石？）・長柱状黒色結晶（長石？）の混入が目立つ。

B．朝顔形埴輪

規　格　全体規格が判るものがなく、不明である。

法　量　全器高や底径については、不明である。口径は推定33.0cmのものが1本確認されている。

技法の特徴　外面は「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面は、朝顔部については「ナデ後ハケを施し、最後に口縁にヨコナデを施」している。

突　帯　断面台形で、上下に仕上げナデを施す。

透　孔　不明である。

線刻・底部調整　不明である。

色調・焼成　色調は橙色であり、やや硬い焼成である。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石が含まれているほか、白色粒子（軽石？）・長柱状黒色結晶（長石？）の混入が目立つ。

6　多田山6号墳

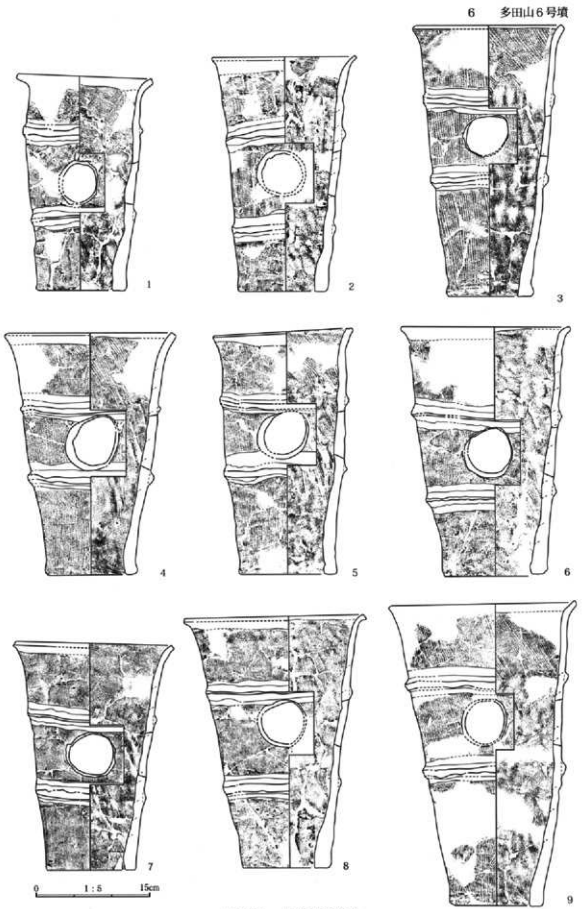


図134　円筒埴輪（1）

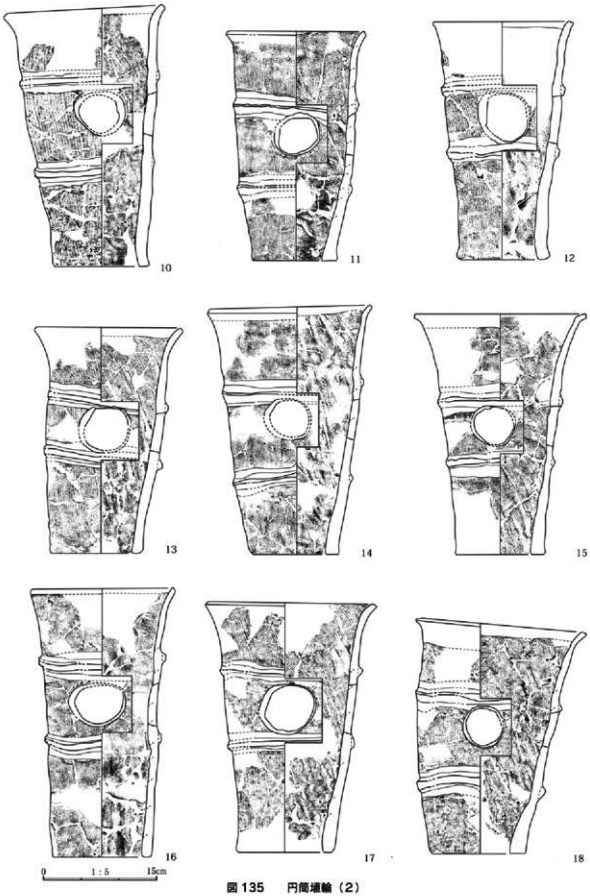
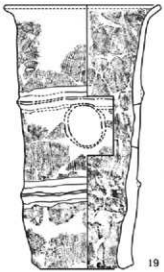
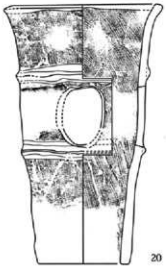
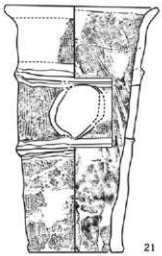
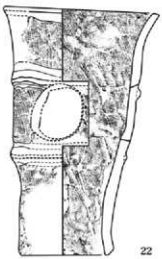


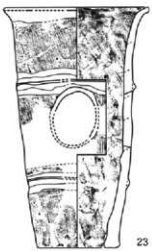
図 135　円筒埴輪（2）

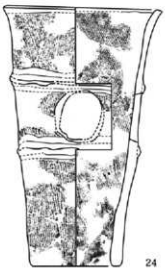


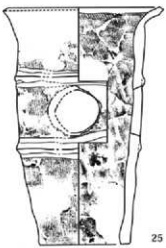


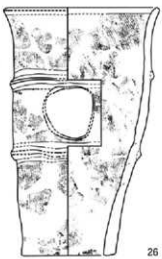












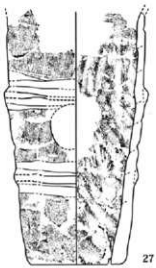


図136　円筒埴輪（3）

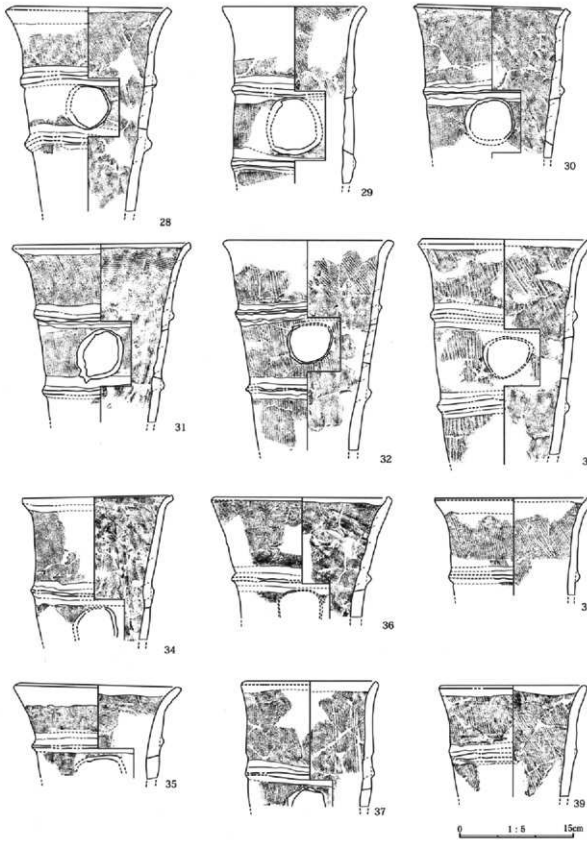


図 137　円筒埴輪（4）

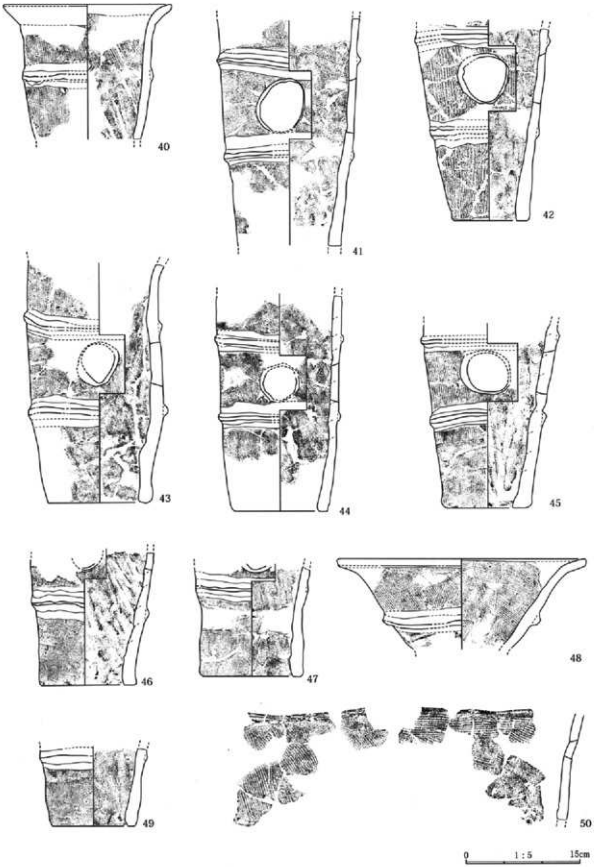


図138　円筒埴輪（5）・朝顔形埴輪

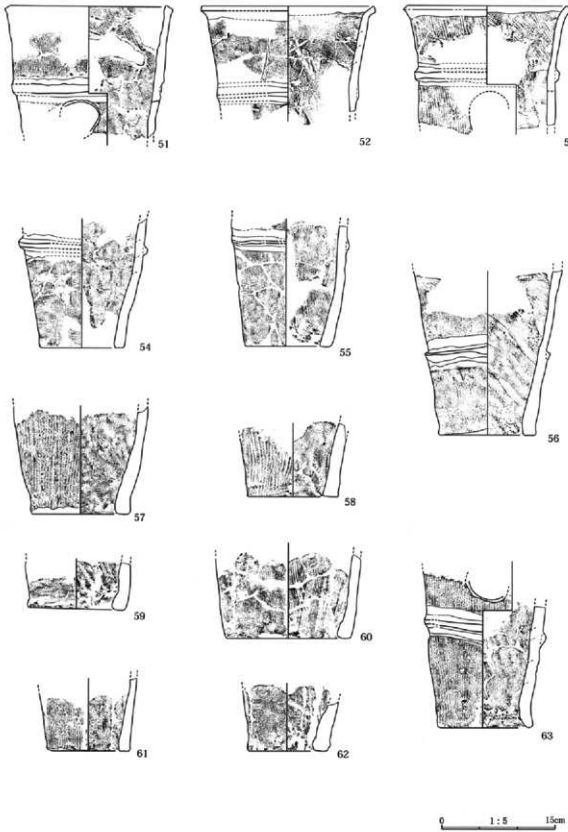


図139　円筒埴輪（6）

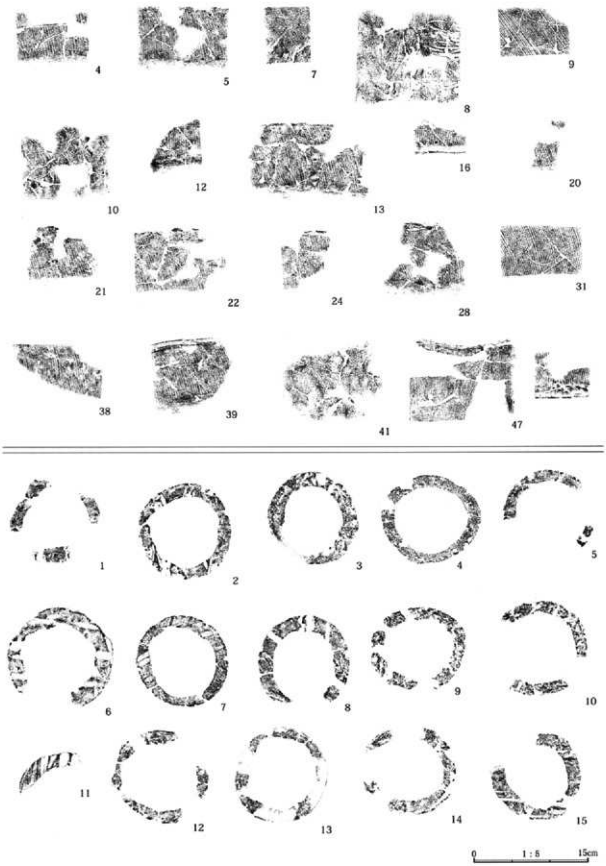


図 140　円筒埴輪　線刻および底部（1）

図141　円筒埴輪　底部（2）

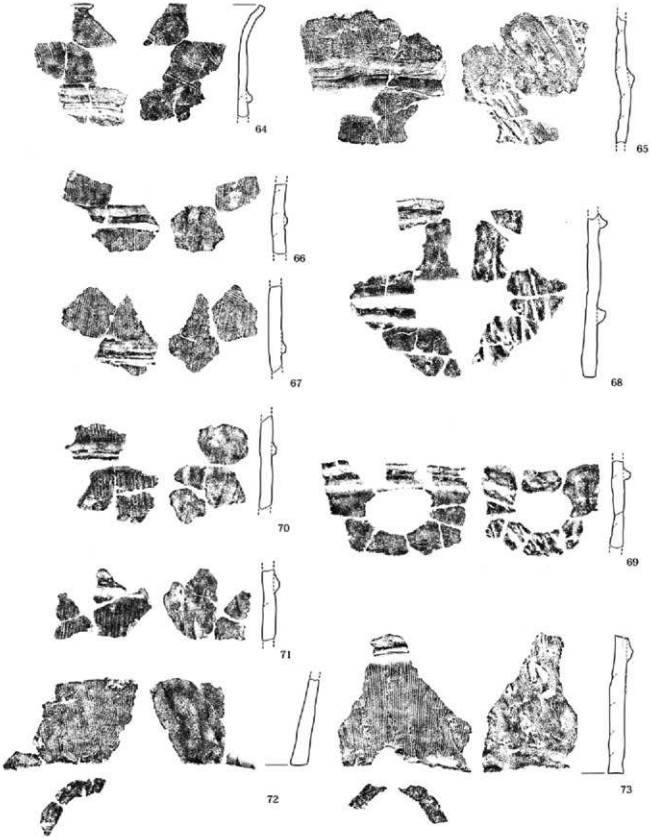


図142　円筒埴輪　破片

多田山６号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号

種類…普通⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪

器高…口縁部から体部までの高さ（口縁の高さが一定していない場合はいちばん低い位置を計測）※斜体数字は復元高

口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径

底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径

調整（外面）…Ａ⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　Ｂ⇨「板ナデ→口縁ヨコナデ」　ａ⇨「タテハケ」ｂ⇨「器面剥離のため不明」（ａとｂは、破片資料のため全体が不明なものに記載）

調整（内面）…Ａ⇨「タテナデ→タテハケ→口縁ヨコナデ」Ｂ⇨「タテナデ→タテハケ→上半のみナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｃ⇨「タテナデ→タテハケ→上半のみナナメナデ→口縁ヨコナデ」　Ｄ⇨「タテナデ→上半のみタテナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｅ⇨「タテナデ→上半のみナナメナデ→口縁ヨコナデ」　Ｆ⇨「タテナデ→上半のみタテハケ→口縁ヨコナデ」　Ｇ⇨「タテナデ→散漫なタテハケ→口縁ヨコハケ→口縁ヨコナデ」　Ｈ⇨「タテナデ→雑なナナメハケ→口縁ヨコナデ」　Ｉ⇨「タテナデ→雑なナナメハケ→口縁ヨコナデ→口唇ヨコナデ」　Ｊ⇨「タテナデ→タテハケ→口縁ヨコヨコハケ→口縁ヨコナデ」　Ｋ⇨「タテナデ→上半のみタテハケ→上半のみヨコハケ」　ａ⇨「タテナデ→タテナナメハケ」　ｂ⇨「タテナデ」　ｃ⇨「タテナデ→タテナナメナデ→口縁ヨコナデ」　ｄ⇨「タテナデ→タテナナメナデ」＿ｅ⇨「タテナデ→ナナメハケ→ヨコハケ」（ａ～ｅは、破片資料のため全体が不明なものに記載）

ハケメ…幅 10mm あたりのハケメの本数

突帯…Ａ⇨断面が台形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｂ⇨断面台形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｃ⇨断面三角形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｄ⇨断面三角形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｅ⇨断面における高まりがほとんど認められない形＋ナデを上・下端とも施す

透孔…Ａ⇨正円形　Ｂ⇨不整円形

線刻…○⇨あり　×⇨なし　?⇨線刻が施されそうな部分が欠落しているため、不明

（○の場合はその内容を記載）線刻の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外１⇨外面基部　外２⇨外面２段目　外３⇨外面３段目　内１⇨基部附近の内面　内２⇨２段目附近の内面　内３⇨３段目附近の内面「形」は、描かれた形を掲載。（例：外面３段目に横線２本の線刻→「外３／＝」）

底部調整…△⇨確定はできないが可能性あり　×⇨なし（△の場合はその内容を備考欄に記載）

色調…Ａ⇨黄橙色　Ｂ⇨浅黄橙色　Ｃ⇨にぶい黄橙色　Ｄ⇨橙色　Ｅ⇨明黄褐色　Ｆ⇨明赤褐色　Ｇ⇨にぶい褐色

出土位置…出土したエリア（図 130）に○を記載。※１個体が複数破片の接合のために、出土エリアが複数にまたがる場合が多い。

備考…底部調整の詳細を記載。その他、特記事項を記載。

表20　円筒埴輪・朝顔形埴輪観察表（1）

No	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	調整		縦毛(本)	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置								備考
					外面	内面					内容			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
1	円筒	28.1	*18.0*	12.0	A	D	6～7	A C	A	?		×	D					○				
2	円筒	31.2	*20.0*	12.5	A	B	5～6	C	A	?		×	A		○							
3	円筒	35.8	*22.0*	11.5	A	B	4～5	A	A	?		×	C	○						○		焼き硬い
4	円筒	32.0	*21.0*	12.5	A	A	5～6	B D	A	○	外3／	×	C		○	○						
5	円筒	32.5	20.5	12.0	A	B	5～6	B D	A	○	外3／‖	×	D		○			○				
6	円筒	33.0	23.0	0.0	A	C	7～8	C	A	×		×	D				○	○				
7	円筒	30.0	21.5	11.8	A	B	7～8	C	A	○	内3／＼?	×	D		○	○						
8	円筒	33.4	23.0	12.0	A	C	7～8	C	A	○	内3／＼	×	D			○	○					
9	円筒	40.0	24.5	12.0	A	D	4～5	A	A	○	内3／＝	×	C				○	○	○	○		
10	円筒	34.7	21.5	12.5	A	E	4～5	A C E	A	○	内3／×	×	D		○	○	○	○				
11	円筒	30.5	20.0	*11.0*	A	G	7～8	A C	A	×		×	D		○							
12	円筒	31.7	20.5	12.3	A	B	5～6	B D	A	○	外1／＼	×	D		○	○						
13	円筒	29.9	*20.0*	12.5	A	D	5～6	A C	A	○	外3／‖	×	E			○	○					
14	円筒	33.0	22.5	12.0	A	B	6～7	C	A	○	外1／＋	×	D			○	○	○		○		
15	円筒	31.8	*22.5*	12.0	A	G	6～7	A C	A	?		×	E				○	○				
16	円筒	35.8	19.5	13.0	A	D	4～5	A	A	○	外3／⌒	△	D	○						○		底部内面にケズリあり？
17	円筒	33.0	*23.0*	*12.5*	A	A	4～5	B D	A	?		×	C				○					外面に黒斑粒子あり
18	円筒	31.0	24.0	13.0	A	B	6～7	A~D	A	×		×	A			○						
19	円筒	34.9	*21.0*	12.5	A	H	5～6	C	A	×		×	D			○						
20	円筒	*34.2*	21.5	*12.5*	A	A	4～5	C	B	○	外3／‖	×	E						○	○		
21	円筒	32.5	21.5	12.5	A	B	4～5	C	A	○	外3／‖	×	C				○	○		○		底の歪みあり
22	円筒	32.4	21.0	12.2	A	A	4～5	B D	A	○	外3／＼＼	×	E									
23	円筒	31.7	19.5	11.2	A	B	6～7	C	A	×		×	D			○						
24	円筒	34.4	21.0	12.4	A	B	5～6	A C	A	○	外3／‖	○	D						○			底部内面にケズリ
25	円筒	31.2	21.0	12.0	A	F	5～6	B D	A	○	外3／‖	×	A			○						

表21　円筒埴輪・朝顔形埴輪観察表（2）

No	器種	器高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	調整 外面	調整 内面	扁平(本)	突帯	透孔	線刻 内容	底部調整	色調	出土位置 I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	備考
26	円筒	32.7	*21.0*	12.2	A	F	3～4	BD	A	?	×	D						○			器形の混みが強しい
27	円筒	-	—	13.5	a	a	7～8	AC	A	?	△	D		○							底部外面に調整あり？
28	円筒	-	21.0	-	A	B	4～5	AB	A	○ 外3／‖	?	C						○			
29	円筒	-	20.0	-	A	A	4～5	BD	A	?	?	C		○							
30	円筒	-	21.0	-	A	I	5～6	D	A	?	?	D						○			
31	円筒	-	24.5	-	A	J	5～6	A	A	○ 外3／U	?	D		○	○						
32	円筒	-	*22.0*	-	A	D	4～5	BD	A	?	?	D					○				
33	円筒	-	*23.0*	-	A	D	3～4	A	A	?	?	B					○				
34	円筒	-	21.0	-	A	B	7～8	E	A	?	?	D					○	○			
35	円筒	-	*22.0*	-	A	K	4～5	C	A	?	?	D			○						
36	円筒	-	22.0	—	B	E	断ナデ	C	A	?	?	D			○	○					特異な突帯
37	円筒	-	*21.0*	-	A	B	4～5	E	A	?	?	D				○			○		
38	円筒	-	*21.5*	-	A	D	4～5	B	A	○ 外3／‖	?	C			○				○		
39	円筒	-	20.5	-	A	D	3～4	E	A	○ 外3／‖	?	D			○						
40	円筒	-	-	—	A	a	5～6	E	A	?	?	C		○							口唇部著しい外湾
41	円筒	-	-	*12.0*	a	b	4～5	D	A	○ 内3／キ	?	E	○						○		
42	円筒	-	-	11.0	A	b	4～5	D	A	?	?	D			○						
43	円筒	-	-	14.0	A	a	6～7	BD	A	?	×	D			○						
44	円筒	-	-	*13.0*	a	b	5～6	B	A	?	×	D		○	○				○		
45	円筒	-	-	12.5	a	a	4～5	BD	A	?	×	D		○							
46	円筒	-	-	12.5	a	a	7～8	E	A？	?	×	D						○	○		
47	円筒	-	-	14.0	a	b	7～8	E	A？	○ 外1／×	×	D		○							
48	朝顔	-	*33.0*	-	A	e	5～6	A	?	?	?	D	○	○							朝顔部のごく一部残存
49	円筒	-	-	11.4	a	a	6～7	E	?	○ 外1／×	×	E						○			
50	円筒?	-	-	-	a	e	4～5	?	?	?	?	F				○					
51	円筒	-	*22.2*	-	A	a	5～6	A	A	?	?	D		○							
52	円筒	-	*23.5*	-	A	a	6～7	E	A？	?	?	D		○							
53	円筒	-	*22.6*	-	A	a	3～4	A	A？	?	?	E						○			
54	円筒	-	-	*11.2*	a	b	5～6	A	?	?	×	F	○					○			
55	円筒	-	-	*11.3*	a	a	5～6	E	?	?	×	D							○		
56	円筒	-	-	*12.8*	a	b	5～6	BD	?	?	×	D		○							
57	円筒	-	-	*13.0*	a	b	3～4	?	?	?	×	E				○					
58	円筒	-	-	*12.0*	a	b	3～4	?	?	?	×	F			○						
59	円筒	-	-	*12.8*	a	a	5～6	?	?	?	×	D		○			○				
60	円筒	-	-	*16.5*	a	a	5～6	?	?	?	×	D									
61	円筒	-	-	*11.0*	a	b	5～6	?	?	?	×	C		○	○						
62	円筒	-	-	*11.0*	a	b	5～6	?	?	?	×	D			○		○				
63	円筒	-	-	*12.8*	a	b	5～6	AC	A？	?	×	D					○		○		
64	円筒	-	*22.0*	-	A	c	4～5	BD	A	?	×	C	○	○							
65	円筒	-	-	-	a	a	5～6	E	A？	?	?	D		○							
66	円筒	-	-	-	a	a	5～6	A	A？	?	?	D								○	
67	円筒	-	-	-	a	a	4～5	A	?	○ 外3／＼	×	D							○		
68	円筒	-	-	-	b	b	6～7	E	?	?	×	D						○			特異な突帯
69	円筒	-	-	-	b	d	6～7	D	?	?	×	D			○						
70	円筒	-	-	-	a	b	2～3	?	?	?	×	D				○	○				異質な胎土
71	円筒	-	-	-	a	a	2～3	?	?	?	×	G				○	○				異質な胎土
72	円筒	-	-	*12.0*	a	b	5～6	?	?	?	×	C					○				
73	円筒	-	-	*11.5*	a	a	5～6	?	?	?	×	B		○							

（2）形象埴輪

A．人物埴輪

人－1（図 144・145）

左腕を差し上げる男子

器高　75.0cm

形態の特徴　大振りで、顔も大きい男子埴輪である。髪形は振り分け髪であり、線刻による頭髪の表現が丁寧に施されている。垂髪も 2.5 ～ 3.0cm の幅で丁寧に表現されている。美豆良は胸付近まで長く表現されている。目は大きな滴形で、やや寄り目である。眉は粘土帯を隆起させ、表現している。鼻は欠損しているが、残存部からの推測により、しっかりとした大きな鼻がつくものと思われる。口は横長であるが、両端がわずかに下がっている。顎はエラが張り、シャープに表現されている。耳の表現は認められない。顔面への赤彩もない。肩は広く、胸板も厚い。腕は太く、指先の表現まで丁寧である。右腕は腰部に向かっており、その手は腰に当てるような仕草に表現されている。左腕は、斜め前方に差し出されており、その手は、手のひらを外側に向け、何かを握る所作をしている。体部には衣服等の表現がない。腰部は弱くくびれており、全周を幅 2.3cm

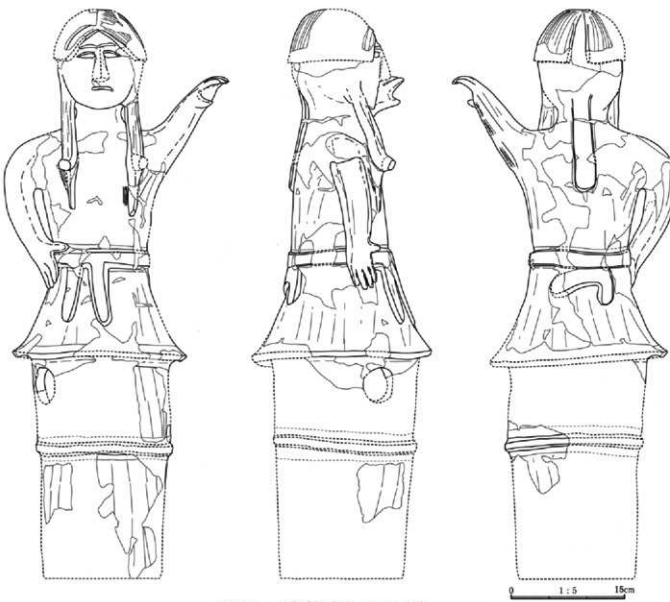


図 143　人物埴輪（1）人－1（1）

の帯、さらに前面には帯端が垂下した表現がなされている。この帯の背面には鐙が下げられている。

基部には2つの円形透孔が開く。突帯は一条巡る。

技法の特徴　基本的には、全てが輪積みによって成形し、その後内外面ともナデによって整形している。外面のナデは顔面や腕、指先などについては丁寧に施している。その単位は不明であるが、肩から下の体部や裾部、さらには基部に至るまで、板ナデを施している。内面のナデは体部については長いストロークの指ナデを、輪積み痕が消えるくらい丁寧に施しているが、頭部内面については、製作者の指が入らないこともあって、指頭痕に近い程の指ナデを施すのみである。垂髪・美豆良・振り分け髪・鐙・帯などは別途用意した粘土帯を丁寧なナデによって貼り付けている。また、頭頂部ではボタン状粘土塊を用いて最後の輪積みを塞いでいる。腕の接合は中実の接合である。半身部と基部との接合は、基部の上に半身部を乗せ、裾部を貼り付けて接合部分を塞いでいると思われる。赤彩は施されていない。

色調・焼成・胎土　色調は赤褐色。焼成はやや硬質。胎土中にはチャート・赤褐色粒子・輝石・黒灰色粒子（凝灰岩？）が確認できる。

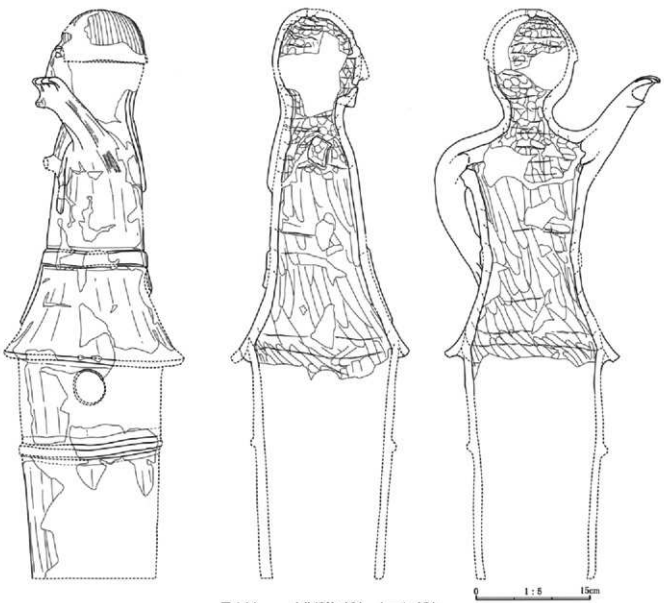


図144　人物埴輪（2）人－1（2）

人－2（図145）

部位：下げ美豆良の一部。断面円形。断面中心には径3mmの空洞があり、製作時の軸棒の存在が示唆できる。上端は扁平になり、剥離痕が認められる。全体にナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

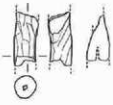


図145　人物埴輪(3)　人－2

B　馬形埴輪（図146・147）

馬形埴輪は出土量が少なく、有効な接合関係を見いだすことはできなかった。但し、いずれも破片にも、石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石or角閃石）・軽石が同様に含まれ、色調・焼成具合も類似することから、同一個体を考えられる。

馬－1

部位：顔の一部。鼻から口にかけての部分。面繋は幅2.0cmの粘土紐で表現されている。さらに面繋には、部分的に赤彩が残存しており、本来は面繋全体に施されていたものと考えられる。また、鏡板の表現は残存していなかったが、剥離痕の状況から考えて、円形鏡板を表現した粘土板が貼付されていたと思われる。口の表現は幅0.2cm程の沈線で表現されているのみである。鼻孔の表現は直径1.0cm程度の未貫通の孔で表現されている。

成形は、幅2.0cm程度の粘土紐を輪積みし、口先部分には楕円形の粘土板を貼り付け、閉塞している。内外面とも、ナデ調整で整形されており、粘土紐の貼り付けもナデによる。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土位置は周堀エリアⅧであり、人－1と隣接している。

馬－2

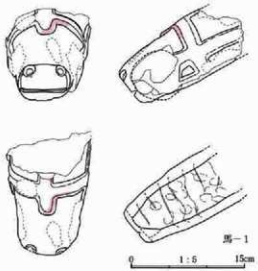
部位：馬鈴。孔はシャープに切りとられ、全体的に丁寧なつくりである。背面全体は剥離痕。ナデ調整で成整形されており、体部への貼り付けもナデによる。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

馬－3

部位：馬鈴。孔はシャープに切りとられ、全体的に丁寧なつくりである。背面全体は剥離痕。ナデ調整で成整形されており、体部への貼り付けもナデによる。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

馬—4

部位：面繋の左頬：辻金具の破片。繋は粘土帯の貼り付けによって表現されており、赤彩が施されている。辻金具の鋲の表現はない。破片上端に耳の孔一部が残存する。外面は丁寧なナデ調整、内面もユビナデ調整。色調は明黄褐色。周堀エリアⅧから出土。



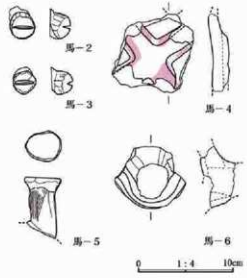


図146　馬形埴輪（1）

馬－5

部位：角状鬣。頂部は平坦。鬣部は筒状の呈するが、頂部付近で逆ハの字状に広がる。中実。側面はハケ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－6

部位：尻尾の付け根の破片。尻尾は中実。尻繋は粘土帯の貼り付け。尻尾の上位には赤彩が施されている。外面は全体的に丁寧なナデ調整。内面もナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

馬－7

部位：鈴。下の孔の表現なし。形状は突起物状。外面はナデ成形。背面は剥離痕。色調は明黄褐色。焼成はやや砂っぽい。墳丘表土からの出土。

馬－8

部位：鈴。下の孔の表現なし。形状は突起物状。外面はナデ成形。背面は剥離痕。色調は明黄褐色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－9

部位：右前足付け根の破片。外面はハケ調整。完成時に死角となる、付け根の部分はナデ調整。内面はハケ及びナデ調整。色調は明黄褐色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－10

部位：障泥板の破片。外面は丁寧なナデ調整。内面は剥離の痕跡。色調はにぶい橙色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－11

部位：雲珠の一部。巾 1.5cm 程度の粘土帯をなでつけて、雲珠を表現している。なでつけはやや砂っぽい。内面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－12

部位：繋の破片。三繋のうち、どこかは不明瞭。面繋の可能性大。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

馬－13

部位：繋の破片。三繋のうち、どこかは不明瞭。面繋の可能性大。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅧから出土。

馬－14

部位：輪鐙の破片。表裏面とも丁寧なナデにより、平坦面をつくっている。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

馬－15

部位：鐙板の一部？巾 8mm の平たい粘土帯の上に、径 1cm の平たい粘土板を貼付する。裏面は剥落痕となっている。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。周堀エリアⅧから出土。

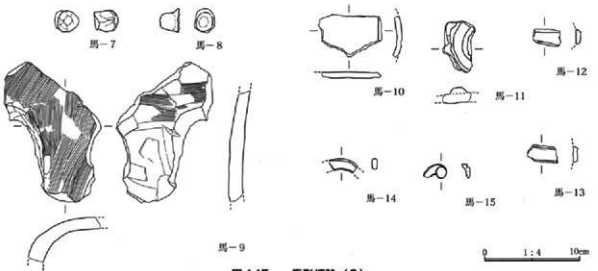


図 147　馬形埴輪（2）

C　家形埴輪（図 148）

家形埴輪も出土量が少なく、有効な接合関係を見いだすことはできなかった。但し、いずれも破片にも、石英・チャート・赤褐色粒子・黒色粒子（輝石 or 角閃石）・軽石が目立つ特徴をもち、色調・焼成具合も類似することから、同一個体を考えられる。

家－１

部位：屋根の軒先部の破片。外面左側がやや内側に湾曲し、寄せ棟屋根のコーナー部に接続する寄せ棟屋根の隣接資料と推測できる。外面は、屋根部をハケ調整を斜格子状に施す、なお軒先はナデ調整を施す。内面は、ハケ調整と間で調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅢからの出土。

家－２

部位：壁体の柱の破片？壁体の梁桁の破片？屋根の棟押さえ部材の破片？やや内湾気味の壁体（or 屋根）に巾 1.3cm の突帯が巡る。突帯はしっかりした断面四角形。突帯の一端は収束している。外面は突帯の左右で調整が異なる。右ではハケ調整が施され、左面にはハケが施されていない。内面はハケ調整後、ユビナデをラフに施す。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅣからの出土。

家－３

部位：壁体。外面はハケ調整。内面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅦからの出土。

家－４

部位：屋根の軒先の破片。剥離著しい。外面にはハケ調整の痕跡あり。内面は不明。色調は橙色。焼成はやや硬質。周堀エリアⅣからの出土。

家－５

部位：鰹木？　断面半円形、蒲鉾形の破片。下面は剥離した痕跡を認められる。破片右側面には斜位のハケ調整がなされる。左側面にはこのハケメ調整が認められないが、表面下部には存在するものと推測する。色調は橙色。周堀エリアⅦからの出土。

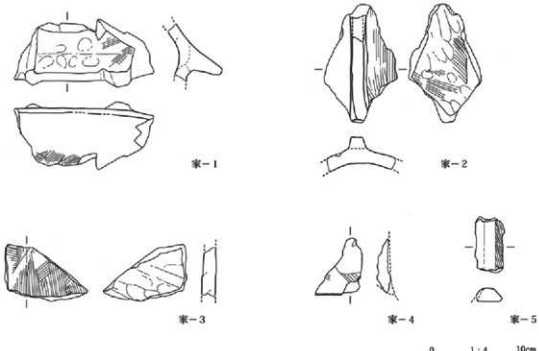


図 148　家形埴輪

D　不明形象埴輪片（図149）

形象埴輪の一部あると思われるが、種類が特定できない資料である。

不明－1

何かの隙間を充填した粘土塊。豆状突起が1つ以上貼付されている。外面にはハケ調整が部分的に施される。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は墳丘表土である。

不明－2

茄子状の破片。断面は不整円形。一方に扁平な剥離痕跡がある。外面は雑なナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅧである。

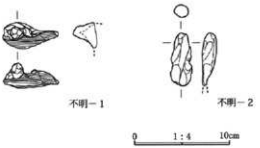


図149　不明形象　破片

（3）土器（図150・表22）

須恵器・大甕（器－1）が1個体のみ出土した。

この大甕は体部は球形を呈し、その上位に最大径をもつ。底部は残存していないが、おそらく丸底であろう。残存は全体の1/4程度であり、残存高は46.0cm、体部の最大径は推定で42.0cmである。口縁部には沈線を施し、その間に波状文を充填している。胴部は、外面には平行叩き、内面には同心円叩きを施している。胎土には砂礫を多く含む。色調は灰色。焼成は良好。出土は周堀エリアⅧであり、その中でもほぼ一ケ所に集中して出土している。

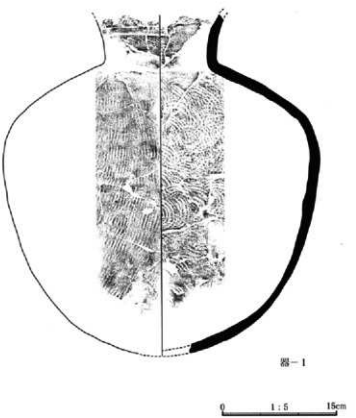


図150　土器

表22　土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口/底/高	形態及び成形の特徴	色調	焼成	出土位置	備考
1	須恵器 大甕	－/× /46.0～	形態：口縁は直立気味に開く。体部は上位に最大径をもつ球胴形。底部は丸底。 成整形：口縁は横ナデ。外面には、2条の沈線を施し、その上下に波状文を施す。なお、口縁上部は欠損しているが、この施文はこの欠損部にも存在すると考えられる。頸部は横ナデ。 胴部は、外面が平行叩き、内面が同心円叩き。	灰色	やや密	周堀内エリアⅧ	全体の1／4程度の残存

5　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が16.0 mの円墳である。

遺構②　墳丘盛土直下にはＦＡ層が存在する。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　周堀の南部には巾1.5 mの土橋が存在することが確認された。

遺構⑤　埋葬施設は未確認である。

遺物に関する主な情報

遺物①　須恵器・大甕が周堀内から出土している。

遺物②　形象埴輪は馬１体・人１体・家１棟が存在する。但し、未接合資料の存在から何れも個体数が増える可能性もある。

遺物③　円筒埴輪は全て２条３段構成であり、基部の伸長化は認められない。

遺物④　円筒埴輪は円形透孔が主体で、器面赤彩はなく、底部調整も確かなものは１点も存在しない。

遺物⑤　円筒埴輪の総数（60 本以上）に対して、朝顔形埴輪の数（１本分）が極端に少ない。

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

円筒埴輪は、２条３段構成のものばかりであり、所謂「基部の伸長化」は認められない。透孔の形状は全て円形である。赤色顔料の塗彩は認められず、底部調整も、僅かにそれらしき資料を含むものも大多数には存在しない。よって、近年の研究（島田 2001）に基づき、その時期を「多田山Ⅰ期」と考える。

遺構の時間的位置づけ

僅かに残存する盛土直下からＦＡ層が確認されたことから、本盛土がＦＡ降下以降であることが判る。FA の降下時期については「多田山０期の最終末～Ⅰ期の初め」と考えられる（編集者の考え）ので、盛土構築（＝古墳築造）の時期は「多田山Ⅰ期」以降と考える。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①・遺物③④）から、「初期群集墳」を構成する１古墳の可能性が考えられる。既研究（右島 1993）によれば、この種の古墳の造営時期は、「多田山０～Ⅰ期」相当の時期と考えられている。

ところで、本墳の築造時期と最も近似する情報はＦＡとの先後関係と、円筒埴輪の情報である。前者にから導き出された盛土構築時期は「多田山Ⅰ期(以降)」であり、後者の円筒埴輪に関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期」である。

したがって、本墳の築造時期は「多田山Ⅰ期」と考える。

※

本墳からは埋葬施設が検出されていない。当該地域の埋葬施設は旧地表を深く掘り下げて埋葬施設を造ることが多いため、本墳のように墳丘盛土の大半を喪失した検出状況でも、埋葬施設が検出されることが多い。したがって、埋葬施設については、①全く異なる埋葬施設を考えるか、あるいは②埋葬施設の存在を否定するのかどちらかである。埴輪が周堀内に転落しているということからは、当時における墳丘部への埴輪樹立が想定でき、①の可能性が考えられる。ところが、当該地域の埋葬施設は、７世紀に至るまで、基本的には、地山を掘り下げた埋葬施設が主流のため、②ということも考慮しなければならない。今後、類例を含まえての検討を要する課題である。なお、この点に関して留意すべき点には、周堀内に完全掘り残しの土橋が存在すること、墳丘中央部には FA 層が攪乱を受けずに残存していたことなどが挙げられる。

多田山７号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・176
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・176
3　埋葬施設・・・・・・・・・・・・・・・・176
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・176
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・178

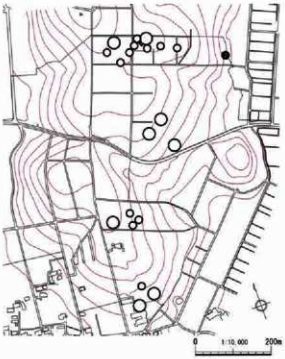


図151　多田山７号墳　位置図

1　調査前

多田山7号墳は、標高117 m付近にある。その位置は、多田山丘陵西端の裾端部、頂部（標高159 m）から連なる急傾斜の斜面が裾端部に至り、緩傾斜に変換する、その地点である。

調査前の状況では墳丘状の高まりは確認できず、古墳の存在を想定できる状況ではなかった。また、試掘においてもその存在が確認されていなかった。ところが、表土掘削の段階で、周堀の輪郭が確認され、墳丘径20 m前後の円墳の存在が想定された。

なお、本墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀（図152）

（1）墳丘

直径14～16 mの円墳と推定する。周堀のみの調査のため、明確な墳丘は検出されなかったが、周堀内側の立ち上がりを墳丘ラインと推定し、推定規模を導き出した。墳形については、調査範囲内の形状から、円墳と推定した。

（2）周堀

調査確認面においては、墳丘の周りを全周する。現状での上幅2.5～3.0 m、下幅1.2～1.8 m、深さ0.5～0.7 m、断面形状が逆台形を呈する。底面は比較的平坦化している。周堀内埋葬の痕跡は認められなかった。土橋は検出されなかった。覆土は、黒・褐色粘質土が主体であり、細砂礫を含む層もある。降下テフラの堆積層は認められなかった。

（3）周堀内における遺物出土状況

周堀内より出土した遺物は、円筒埴輪が1点のみである。墳丘想定部の南側の周堀内から出土した。平面分布的には、周堀の内側立ち上がり付近にまとまっていた。恐らく墳丘内の埴輪が転落して、周堀内で残存したと考えられる。また、層位的には、周堀覆土上層の細砂礫を含む黒褐色土層（断面Aでの第1層）である。

ところで、この古墳の場合、埴輪の出土が1本のみであるが、それは樹立本数を示すものではない。他の埴輪を有する古墳の状況を考えると、本来は多数の埴輪が樹立していたものと推定する。というのも、同一群内の他の古墳はいずれも、周堀覆土の上層（周堀低面から0.5～1.2 mの高さ）に出土が限定する傾向にある。しかし、本墳の場合、周堀が深さ約0.5～0.7 mしかないため、本来ならば存在していた埴輪片の包含層がすでに削平されていると考える。

3　埋葬施設

埋葬施設は検出されなかった。但し、表土掘削時に、輝石安山岩の割石を雑多に詰め込んだ土坑が2箇所、断面にかかった。掘削当初は主体部を削ってしまったものかと不安を抱き、断面の状況を確認したが、①石材のあり方が石槨の積み方の状況を示していないこと、②掘り込み面がAs－B混入土より上層の面であること、の2つの点から、主体部自体は削っていないことを確信した。さらに、その詰め込まれた石材の多くが板状石材であることから、「本来は石槨が存在したが、後世に破壊され、石材のみが再度、土坑内に廃棄された」ということを推定した。

4　出土遺物（図152）

（1）円筒埴輪

器面の摩滅がひどい、円筒埴輪を1本出土した。

規格　2条3段構成である。口径は21.0cm、底径は11.8cm、器高は32.4cmである。

透孔　円形スカシがつく。

突帯　断面が緩い台形を呈する。

成整形　外面は板ナデ後、口縁のみヨコナデを施す。内面は、タテナデ後、上半のみタテハケを施し、さらに口縁のみヨコナデを施す。

赤彩・底部調整・篤描　確認できない。

胎土　混入物の多い、粗い胎土である。混入物には、石英・輝石 or 角閃石・チャート・白色、赤褐色、黒色粒子・軽石・片岩を含む。骨子は含まない。

焼成・色調　焼成は甘い。色調は浅黄褐色を呈する。

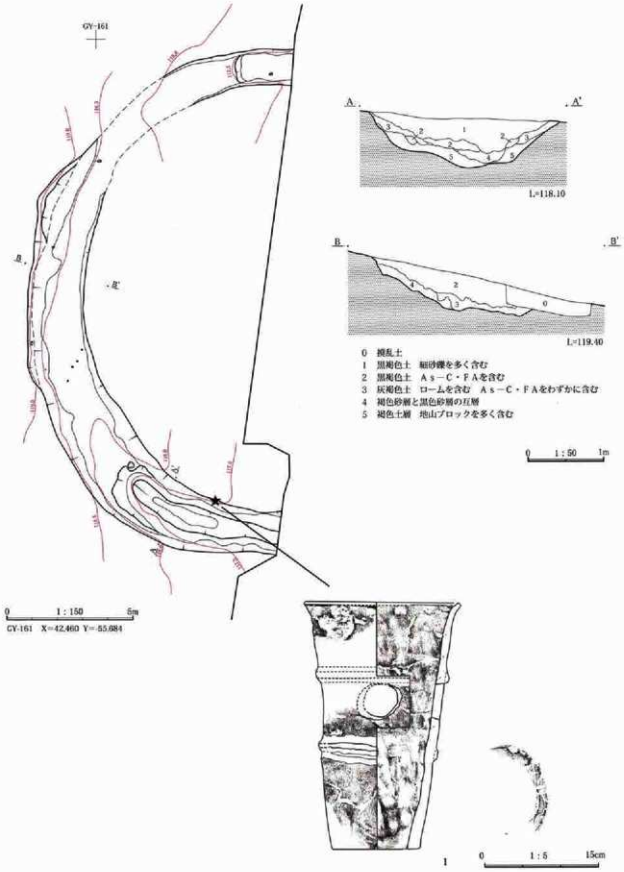


図 152　墳丘および周堀　平・断面図（上）／　出土円筒埴輪（下）

5　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が 14 ～ 16 mの円墳である。

遺構②　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構③　埋蔵施設は未検出だが、散在する輝石安山岩の割石のあり方を検討した結果、この石材が本墳に関連する可能性があり、そのことから考えて、「竪穴式小石槨」が本墳の埋葬施設として有力であること。

遺物に関する主な情報

遺物①　１点のみ出土した円筒埴輪は２条３段構成であり、基部の伸長化は認められない。

遺物②　円筒埴輪は円形透孔で、器面赤彩はなく、底部調整も確認できない。

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

円筒埴輪は、２条３段構成であり、「基部の伸長化」は認められない。透孔は円形である。赤色顔料の塗彩や底部調整は認められない。よって、この特徴の円筒埴輪が盛行時期である「多田山Ⅰ期」を本資料の時期と考えたい。

遺構の時間的位置づけ

周堀覆土にＦＡ層がないことから、ＦＡ降下以降の築造とし、「多田山Ⅰ期」以降と考える。

※

本墳は、FA 降下以降の築造の可能性が高く、かつ、出土した円筒埴輪の特徴は「多田山Ⅰ期」に盛行するものである。よって、少ない根拠ながら、本墳の築造時期を「多田山Ⅰ期」と考えたい。

なお、本墳は、丘陵頂部の、他の初期群集墳から大きく離れている。よって、本墳は丘陵頂部の多田山１～９号とは異なる古墳群に属してしていた可能性もある。

5　まとめ（多田山８号墳）

184 頁からのつづき

槨」が１基存在する。

遺物に関する主な情報

遺物①　土師器坏が周堀内から出土している。

遺物②　埴輪は出土していない。

遺物③　埋葬主体部から出土した人骨は、成年後半～熟年（性別不明）である。（第６章１参照）

遺物④　第１主体部の副葬品は刀子１・鏃５である。

※

これらのことから次の位置づけができる。

遺物の時間的位置づけ

土師器・坏（器－１）は内斜口縁坏である。口縁端部の処理も丁寧である。これらの時期は「多田山Ⅰ期または、それ以前」と考える。

長頸有腸抉片刃鏃（鉄－２～６）は、逆刺が浅く、台間であり「多田山０～Ⅰ期」に盛行する形式である（杉山 1993）。

遺構の時間的位置づけ

周堀覆土にＦＡ層がないことから、ＦＡ降下以降の築造とし、「多田山Ⅰ期」以降と考える。

※

以上のことから、本墳は次のように理解できる。

本墳は、遺構・遺物の特徴（遺構①④）から、「初期群集墳」を構成する１古墳と考えられる。既研究（右島 1993）によれば、この種の古墳の造営時期は、「多田山０～Ⅰ期」相当の時期と考えられている。ところで、本墳の築造時期と最も近似する情報はＦＡとの関係と、副葬品としての鉄鏃の情報である。前者に関して導き出された時期は「多田山Ⅰ期（以降）」である。また、後者に関して導き出された時期は「多田山０～Ⅰ期」である。

したがって、本墳の築造時期は「多田山Ⅰ期」と考える。このことは周堀出土土器の時期とも矛盾することがない。

多田山８号墳

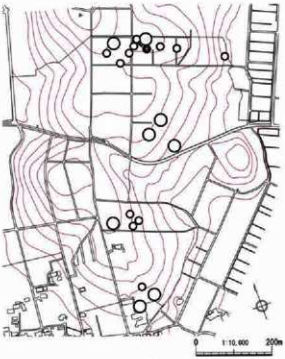


図 153　多田山８号墳　位置図

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・180
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・180
3　埋葬施設・・・・・・・・・・・・・・・・181
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・184
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・178・184

1　調査前

多田山8号墳は、標高144 m付近にある。その位置は、多田山丘陵の頂部（標高159 m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面の一部が東方向へ僅かに舌状突出する、その縁部である。

調査前の状況では墳丘状の高まりも存在せず、古墳の存在を想定できる状況ではなかった。しかし、表土掘削時に周堀の一部と埋葬施設の石材が確認され、墳丘径10 m前後の円墳の存在が想定された。

なお、本墳は上毛古墳総攬記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀（図154）

（1）墳丘

墳丘径8.0 mの円墳である。墳丘盛土の存在は確認できなかった。本来は存在した盛土が、後世の削平により、喪失してしまったと考えることが妥当であろう。

（2）周堀

墳丘同様、平面プランはほぼ円形を呈する。周堀外縁部での直径11.0 mである。周堀は辛うじて平面プランを確認することができるものの、削平度合いはひどい。特に墳丘の西側の周溝については、その深さが10cm未満の箇所もある。こうした条件のもと、最も残存具合がよい墳丘東側の周堀で、その規模を計ると、上幅は最大2.10 m、下幅は約1.0 m、深さは最深で0.65 mを計る。周堀の断面形は椀または皿形を呈し、覆土にはFAやAs－Cが含まれていた。周溝内埋葬は存在しない。

（3）周堀内における遺物出土状況

周堀内より出土した遺物は、土師器・坏（器－1）が1点のみである。墳丘の南東側の周堀内から出土した。層位的には、周堀覆土の褐色土層（断面Cでの第2層）である。

なお、埴輪の出土が皆無である。

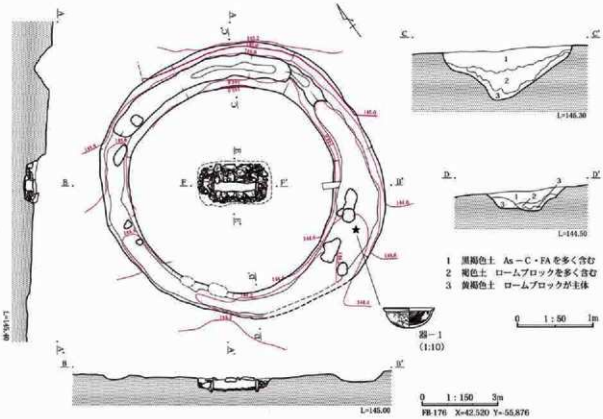


図154　墳丘および周堀　平・断面図

3　埋葬施設

（1）概要（図155・156）

埋葬施設は、所謂「竪穴式小石槨」である。

検出確認面　墳丘下の地山面であり、その面において、長軸3.0 m×短軸1.65 mの長方形の平面プランが確認された。さらに、その内側には板状の石材が露出しており、周囲の白色粘土の存在も合わせると、この石材が天井石であることも確信した。但し、天井石と考えた石材は乱れており、一部に盗掘坑らしき穴も存在している状況から、すでに盗掘を受けていると考えられた。

規模　石槨の長軸はS－54°－Eである。石槨の内法は、長軸1.70 m、短軸0.25～0.46 m、高さ0.28～0.35 mである。短軸長は南東側のほうが広く（0.46m）、北西側のほうが短い（0.25 m）。

石材　全て輝石安山岩の割石を用いている。

積み方　積み方は短側壁と長側壁では異なっている。まず、短側壁は、南東・北西の両壁とも板状石材の最も広い面を立てるようにして設置している（積み方C）。一方、長側壁は北東・南西壁ともに、南東短側壁にもっとも近い一石は長側壁面長の1/2～1/3にも及ぶほどの大きさの石材を置き（積み方D）、その他の部分には小振りの板石を平積み（積み方B）している。天井石は乱れており、原位置を保持していないが、残存状況からみて、20.5～120.5kgの石材を5石乃至6石を使用していたようである。

裏込は、輝石安山岩の小振りの割石と白色粘土をふんだんに使い、養生している。

赤彩　石槨内面への赤彩は確認されなかった。

構築方法　掘り方を掘削し、その中に石を組み、土石混合の裏込めを施すという、当該地域での一般的な「竪穴系埋葬施設」の工法を採用している。なお、盛土が残存していないため、盛土と埋葬施設との構築の前後関係は把握できなかった。

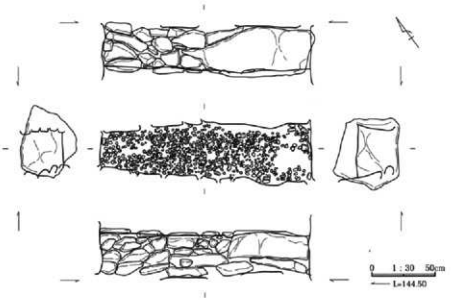


図155　主体部　展開図

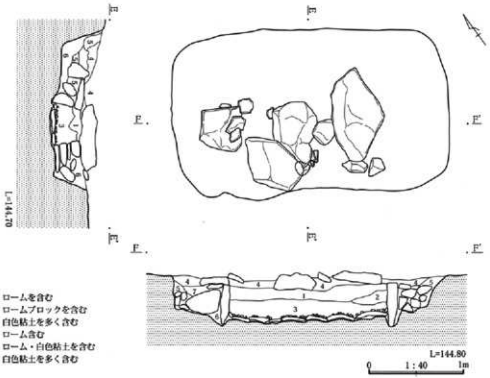


図 156　主体部　平・断面図

（2）石槨内における遺物出土状況（図 157）

人歯　石槨内の南東側から人歯が７点出土した。

槨内は攪乱を受けているが、人歯に関しては、まとまった状態で出土し、なおかつその出土位置が槨の東寄りであることから、この位置を被葬者の頭部の位置と考える。その他の人骨は出土しなかった。

副葬品　被葬者の頭位脇から刀子（鉄－１）が１点、腰部付近からは鉄鏃（鉄－２～６）が５点、出土した。

いずれも割れた状態で出土しており、散乱気味での出土のため、埋納時の刃部の方向などの詳細な情報を得ることができなかった。

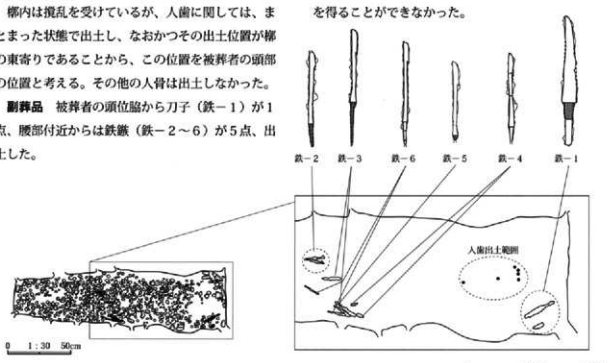


図 157　石槨内遺物出土状況図

(3) 解体調査データから復元する構築工程 (図 158)

第1段階　墓坑の掘削

墳丘の中央位置に、長軸 3.00 m、短軸 1.65 m、深さ 0.50 m (確認時) の隅丸長方形の墓坑を掘削する。

なお、墓坑の掘削と墳丘盛土の新旧関係については不明である。

第2段階　床石および側壁の設置

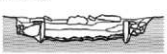
長辺 1.70 m、短辺 0.50 m の長方形プランを形作るように側壁の根石を設置する。側壁は長側壁→短側壁の順で設置する。長側壁は南東短側壁に接する1石づつには厚みのある石を用いて積み方Dし、それ以外は板石を積み方Bする。また短側壁は板石を積み方Cする。その後、床には板石を敷設する。なお、割石を用いた根固めのための裏込も行う。

第3段階　床面への小礫の敷設

小振りの板石を床面に敷き詰める。この後、遺体と副葬品を納めたと考えられる。

第4段階　天井石の高架と閉塞

天井石を高架させ、その後、小礫と白色粘土で閉塞を行う。



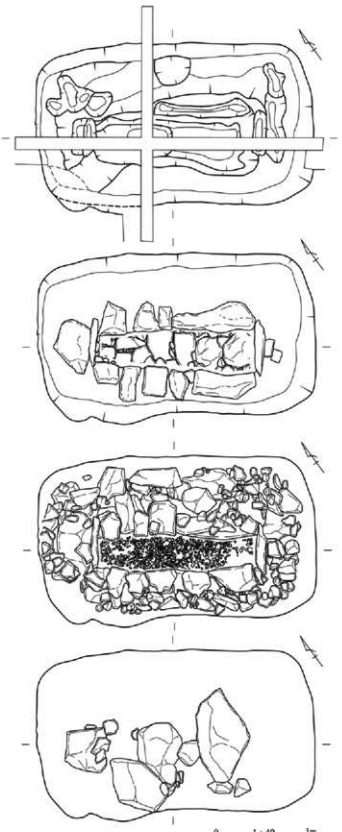


図 158　主体部　構築工程推定図

4　出土遺物

（1）土器（図 159）

土師器坏１点（器－１）がある。口径 13.7cm、高さ 5.3cm を測る、内斜口縁坏である。

口縁は短く外斜し、端部を僅かにつまみ上げる。体部はやや深く、球形。丸底。口縁はヨコナデ、体部外面は斜横位ヘラケズリ後、上半のみナデ調整。内面はナデ調整後、斜位ヘラミガキ。色調は橙色。焼成は良好。周堀南東部からの出土。

（2）鉄製品（図 159・表 23）

刀子（鉄－１）は全長 17.1cm の完存品である。刃長は 11.5cm、刃巾 1.7cm、刃厚 0.3cm、茎長 5.6cm、茎巾 1.3cm、茎厚 0.3 を測る。刃部の欠損が顕著である。中茎には木質が残存する。

長頸有腸抉片刃鏃（鉄－２～６）はいずれも一部が欠損しているが、刃長が 3.0cm 前後、頸長が 6.6 ～ 8.0cm ほどの鏃である。刃部は片丸造であり、逆刺は浅く、台形腸を有するという共通の特徴をもっている。中茎に木質が残存する鏃（鉄－２・３・５）もある。

5　まとめ

調査・整理により、本墳に関して得られた遺構・遺物に関する主な情報は次の通りである。

遺構に関する主な情報

遺構①　墳丘径が 8.0 m の円墳である。

遺構②　墳丘盛土は全て喪失している。

遺構③　周堀内にはＦＡの堆積がない。

遺構④　輝石安山岩の割石を用いた「竪穴式小石

※まとめの続きは 178 頁にあり。

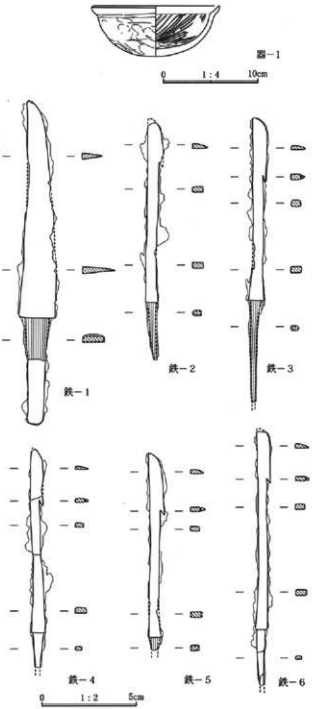


図 159　土器・鉄製品

表23　鉄製品計測値一覧

遺物番号	種類	全長	刃長	刃幅	刃厚	頸長	頸幅	頸厚	茎長	茎幅	茎厚	木質	出土位置	備考
		(cm)												
1	刀子	17.1	11.5	1.7	0.30	－	－	－	5.6	1.3	0.30	○	石郭内	中茎に木質あり
2	長頸有腸抉片刃鏃	12.6+	2.1+	0.8+	0.2+	7.4	0.6	0.25	3.0	－	－	○	石郭内	刃部は片丸
3	長頸有腸抉片刃鏃	15.0+	3.4	0.7	0.25	6.6	0.8	0.30	5.4+	－	－	○	石郭内	刃部は片丸
4	長頸有腸抉片刃鏃	11.6+	2.9+	0.7	0.20	7.0	0.7	0.25	1.8+	－	－	×	石郭内	刃部は片丸
5	長頸有腸抉片刃鏃	10.4	3.3	0.8	0.20	6.7	0.7	0.30	0.7+	－	－	○	石郭内	刃部は片丸
6	長頸有腸抉片刃鏃	13.4+	2.2+	0.7	0.20	8.0	0.6	0.30	2.9+	－	－	×	石郭内	刃部は片丸

多田山９号墳

1　調査前・・・・・・・・・・・・・・・・・186
2　墳丘と周堀・・・・・・・・・・・・・・・186
3　埋葬主体部・・・・・・・・・・・・・・・190
4　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・194
5　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・220

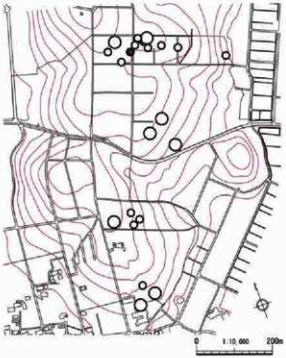


図 160　多田山９号墳　位置図

1　調査前

多田山9号墳は、標高145 m付近、多田山丘陵の頂部（標高159 m）南東部に馬の背状にのびる平坦地形面にある。

調査前は、ほぼ平坦化しており、墳丘状の高まりも存在せず、その存在を想定できる状況ではなかった。だが、事前の試掘において周堀の一部が確認され、墳丘直径15 m程度の円墳の存在が想定された。

なお、本墳は上毛古墳総覧記載漏れの古墳である。

2　墳丘と周堀

（1）墳丘（図161）

本墳は、墳丘直径11.8 m、二段築成の円墳である。

この二段築成は、一段目については墳丘裾部の地山面を幅1.0～1.3 mのテラス状に削り出したものであり、多田山2号墳などの造作と同種のものである。この地山削りだしのテラス面は、その存在の確認において覆土との識別が難しく、検出調査も難航した。が、いくつもの断面観察から土質の違い（硬い地山と軟らかい覆土の違いなど）を見極めて、検出に至った。なお、このテラス面上には転落した円筒埴輪も存在していた。

盛土の存在は一部で確認され、盛土直下の地山には土層断面観察によりFAの一次堆積層の存在が認められた。盛土とFAの堆積層の間には、層厚2～5 cmのFA混じりの黒色土が存在していることから、盛土行為自体はFA降下後、ある程度の時間差をおいて開始されたんものと考えられる。盛土にはロームブロックと黒色土との混土が認められることから、周堀掘削土を盛土に利用したと想定される。さらに、埋葬主体部の埋土はこの墳丘盛土を断ち切って存在する状況が確認されたことから、古墳築造に際しては、まず第一に墳丘の盛土行為を実施したことが推測できる。

なお、墳丘部に埴輪の基部が原位置のまま、残存する資料は皆無であった。

（2）周堀（図161）

調査確認面においては、墳丘の周りを全周する。現状での上幅2.0～3.0 m、下幅0.9～1.3 m、深さ0.8～1.2 m、断面形状が逆台形を呈する。周堀の底面は多少の凹凸はあるものの、全体としては平坦である。なお、この平坦面は、地山を削りだしてつくりだされている。一部に土坑状の盛り込みが確認できたものの、それらが周堀内埋葬の痕跡であるとは判断しかねた。土橋の存在は認められなかった。覆土は、黒・暗褐色粘質土が主体であり、上層にAs－Bの一次堆積層が存在する。

（3）周堀内における遺物出土状況（図162・163）

周堀内からは多量の埴輪片と少量の土器が出土している。

埴輪の出土状況　出土埴輪には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人・馬・家）があるが、これら各種埴輪の出土状況には次の共通点が認められる。

それは、埴輪の層位的分布状況である。全埴輪片がAs－B層下の黒色粘質土層（断面C・Dでの第3・4層）からの出土に限定されるのである。この層は周堀底面から0.5～1.3 mの高さに存在する層であり、地山削りだしのテラス面を覆う覆土層でもある。ちなみに、周堀底面からの埴輪片の出土は皆無であった。

一方、各種埴輪の出土状況における相違点としては次のものが挙げられる。

それは、埴輪の平面的分布状況である。全埴輪のうち、円筒埴輪の分布は、エリアⅠ～Ⅷで確認されているが、密度が濃いのはエリアⅣ～Ⅷであり、逆に密度が薄いのはエリアⅡである。また、朝顔形埴輪の分布は、やはりエリアⅠ～Ⅷの全てで確認されている。しかし、密度が圧倒的に濃いのがエリアⅣ～Ⅷであるのに対し、逆に密度が極めて薄いのはエリアⅡである。エリアⅡでは破片がわずかに出土するのみであった。

一方、形象埴輪の分布はその種類によって異なっていた。まず、人・馬についてはエリアⅡを主とし、一部がエリアⅢにも存在するといった、極めて限定

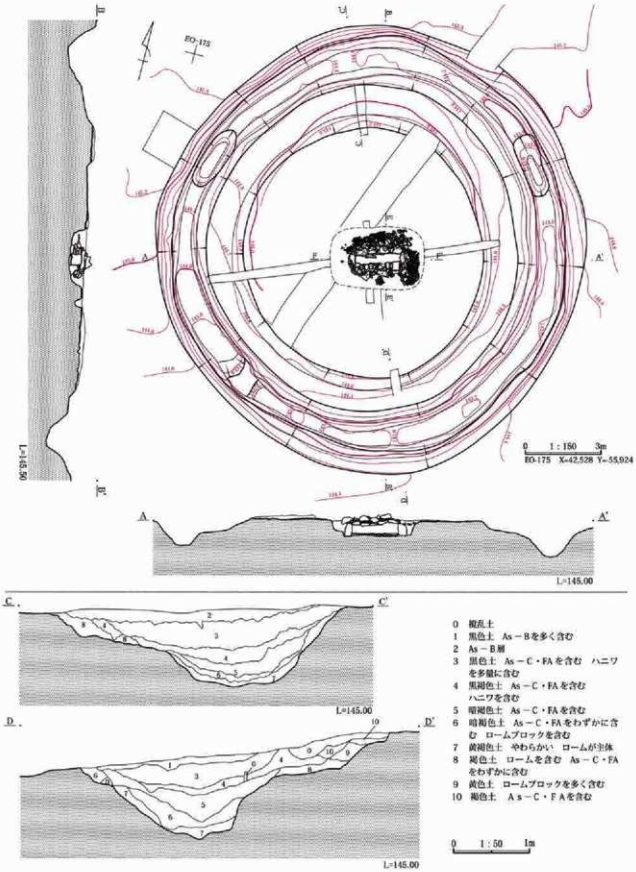


図 161　墳丘および周堤　平・断面図

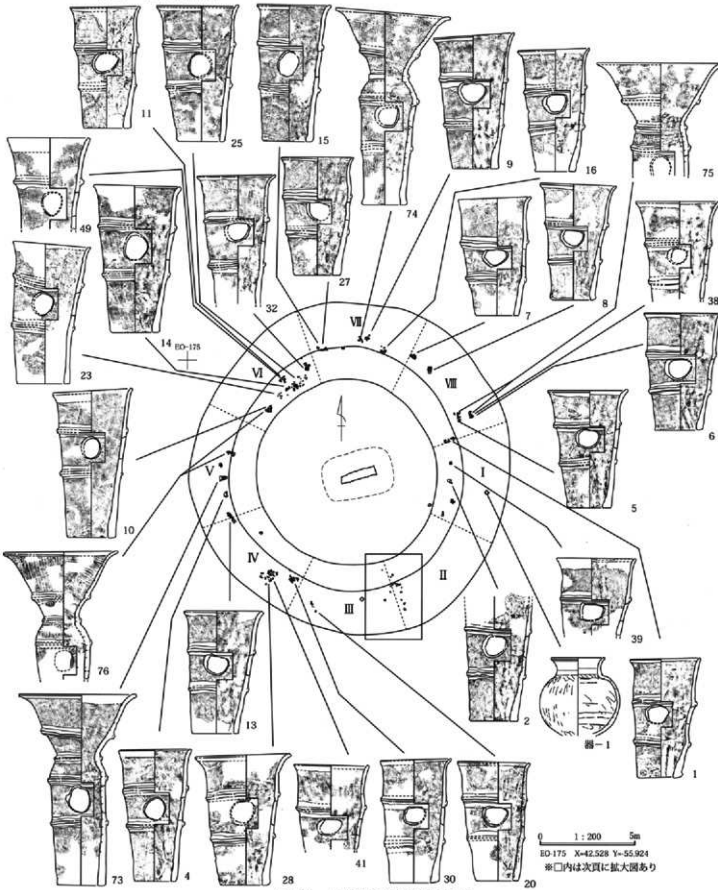


図162　周堀内における遺物分布図

された出土状況を示していた。また、家については、エリアⅡ～Ⅳ・Ⅵ～Ⅷにそれぞれ小片が散在する出土状況を示していた。

ところで、この出土エリアを踏まえた上、各埴輪片の接合関係を調査すると、次のことが考えられる。

円筒埴輪の場合、各個体においては、同一または隣接エリアにおいて接合関係が認められるということである。また、朝顔形埴輪についても1個体の除いては、円筒埴輪と同じく、同一または隣接エリアにおいて接合関係が認められる。形象埴輪については、人・馬についてはエリアⅡ・Ⅲのみからしか出土しないため、当然その箇所においてしか、接合関係は認められないが、家については同一・隣接エリアのみでなく、遠隔エリアの資料も含めて同一個体の資料と認めることができた。

こうした接合関係を加味して、出土状況のあり方を考えると、それぞれの埴輪について次のことが考えられる。

円筒埴輪・朝顔形埴輪については、接合関係が隣接エリアに限られることから、出土状況に基づくおおよその原位置の推定は可能かもしれない。

形象埴輪については、層位・出土位置・接合関係がいずれもまとまりを持つことから、おおよその位置を推定することは可能である。さらに、一部（人物－2・4と馬－1～3）においては、その組み合わせに有機的関係が伺えることから、発掘調査データから原位置を復元推定することは可能である。

土器の出土状況　土師器壺（器－1）は平面的分布ではエリアⅠ、層位的分布では暗褐色粘質土層（断面Cでの第6層）から出土した。この暗褐色粘質土層は周堤底面から0.2～0.6mの高さに存在する層であり、黒褐色粘質土層（前述した、埴輪片包含層）より下層に位置する。土師器・坏（器－2・3）も同様の出土状況を示す。

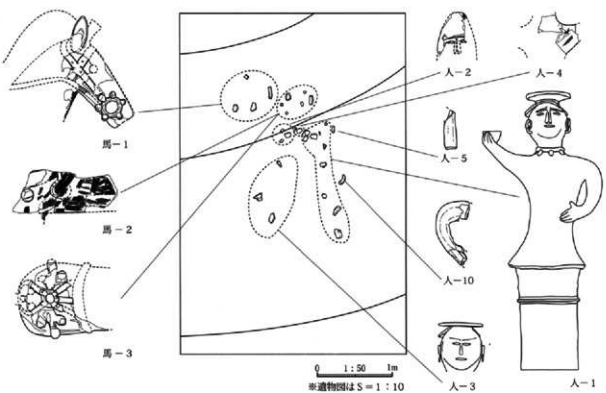


図163　形象埴輪の詳細分布図

3　埋葬主体部

（1）概要（図 164・165）

主体部は、所謂「竪穴式小石槨」である。

検出確認面　確認面はわずかに残存する盛土面であり、その面において、長軸 3.7 m×短軸 2.4 m の長方形の平面プランが確認され、墓坑の存在を認識した。

主体部の天井石は頑丈な設置状況であることから、本来の閉塞後、今日に至るまで開口されたとは思われず、その状況から完全未盗掘であると推測した。しかし、その直上の埋土は、比較的軟質な暗褐色土であり、この土質の状況が他の未盗掘の同種主体部の閉塞土とは異なることから、攪乱土と考えることとした。ちなみに、この土は粘土とロームが混じった暗褐色土であり、硬く閉まっていれば閉塞土と認識できるものである。

規模　石槨の長軸はN－76°－Eである。石槨の内法は、長軸 1.82 m、短軸 0.34 ～ 0.48 m、高さ 0.30 ～ 0.40 mである。短軸長は最大幅が中央付近にある（0.48 m）が、全体的には東側の方が僅かに広く（0.44m）、西側の方が短い（0.34 m）。

石材　全て輝石安山岩の割石をである。石材の割り方は乱雑であり、形状はサイコロ状のものから板状のものまで様々である。重量も最小 1.2kg から最大 73.5kg までと様々である。各部位に適した石材をそれぞれ用いたものと思われる。

積み方　短側壁については石材の最も広い面を立てるようにして設置している（積み方Ｃ）。長側壁については複数の積み方が採用されており、南長側壁は東半分を石材の最も広い面を立てるようにして設置し（積み方Ｃ）、西半分を石材の最も広い面を寝かせるようにして設置し（積み方Ｂ）である。また、北長側壁は下半分を石材の最も広い面を立てる

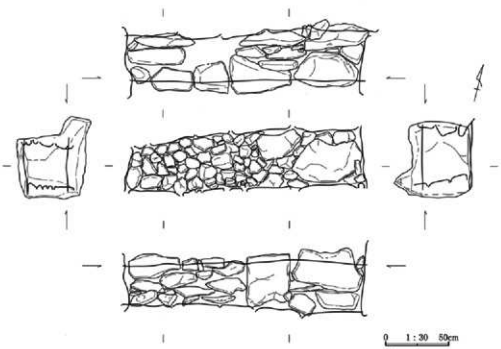


図 164　石槨展開図

ようにして設置し（積み方C）、上半分を石材の最も広い面を寝かせるようにして設置し（積み方B）てある。床面には東端に大振りの板石1枚を置き、それ以外の大半の部分は小降りの板石を隙間なく敷き詰めている。天井石は計6枚である。大きさは、最東端（頭部上）の95.0kgを最大、最西端（足部上）の20.2kgを最小にと、様々であるが、幅0.50～0.62mの長さの部分を高架させている点は共通している。

裏込には、わずかに石材は用いているものの、その大半は黒色土と暗褐色土にロームや白色粘土を混ぜた粘質土と、白色粘土そのものを用いて裏込を行っている。

閉塞　閉塞は輝石安山岩の割石と白色粘土を用いた閉塞であり、天井石のすき間を割石で塞ぎ、さらにそのすき間を白色粘土で埋めていた。なお、前述の通り、この上に粘質土による第二の閉塞が行われていた可能性があるが、その土は後世においていじくられているようである。

赤彩　短側壁および長側壁で、ベンガラの塗布は確認できた。天井石の内面にはベンガラの存在は全く確認することができなかったことから、元来ベンガラの塗布がなされなかったものと考えられる。

構築方法　墓坑を掘削し、その中に石組みし、土石混土の裏込めを施すという、「竪穴系埋葬施設」の当該地域で一般的な工法を採用している。

（2）石棺内における遺物出土状況

本主体部内においては、遺物の出土は皆無であった。開口時、内部はほぼ空洞であり、土砂の流入も少なかった。故に、人骨・歯や副葬品の出土を期待したが、内部の精査はもちろんのこと、土砂の水洗いまでおこなったものの、その片鱗すら見つけることはできなかった。

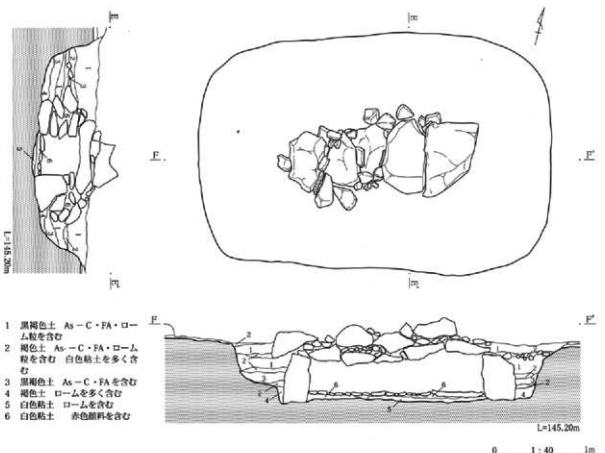
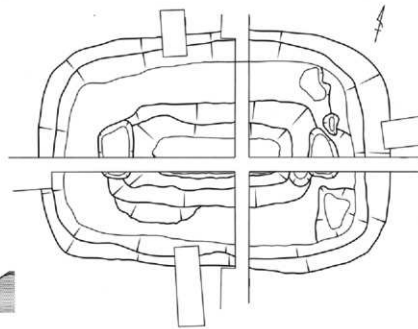


図165　主体部　平・断面図（閉塞時）

（3）解体調査データから復元する構築工程（図 166・167）

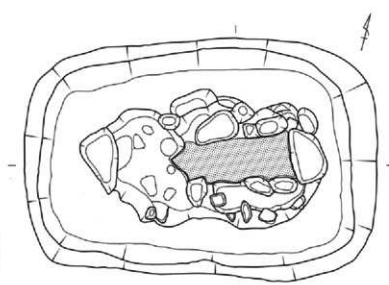
第１段階　墓坑の掘削

墓坑の掘削以前に盛土の構築が行われる。その後、墳丘のほぼ中央部に、長軸 3.70 m、短軸 2.40 m、深さ 0.80 m（残存盛土面）の隅丸方形の墓坑を掘削する。この際、側壁を設置する箇所については、若干の掘り窪めをさらに行った可能性もある。



第２段階　粘土床の敷設

墓坑内に掘り込まれた船底状の浅い窪み内に粘土を厚さは３～ 6cm ほど張る。



0　1：80　2m

0　1：40　1m

図 166　埋葬主体部　構築工程図（1）

第3段階　側壁と床石の設置

側壁設置は、大振りの石を短側壁の位置に置き、その後、長側壁を置いていく。側壁設置のための布掘りは認められない。床石はまず、大振りの板石を敷き、その隙間を小振りの板石で詰める。床石の上に、玉砂利を敷くような行為はしていない。

さらに、裏込め後、側壁の裏側には押えの石材（輝石安山岩の割石）を宛てがい、上面には小振りに亜角礫を敷き、裏の養生を行う。

第4段階　天井石の高架

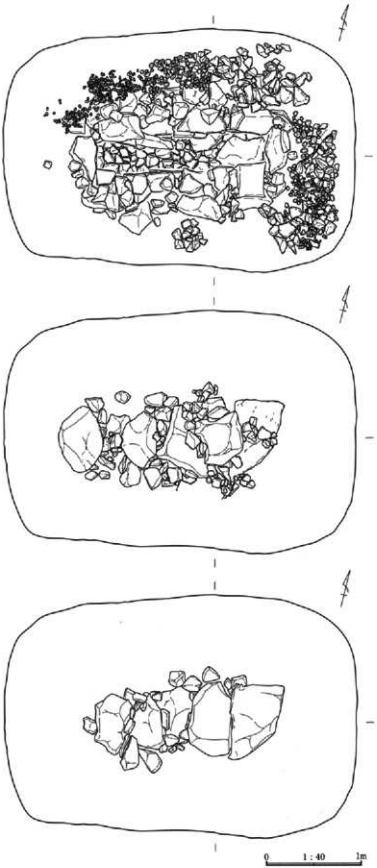
天井石は、大振りの礫を東側から順に高架させる。天井石の隙間には小振りの亜角礫をあてがい、隙間をふさぐ。

第5段階　天井の閉塞

高架した天井石の上に、さらに同規模の角礫を置く。その後、多量の亜角礫を用い、礫の間を塞ぎ、さらには白色粘土をその隙間に充填させ、完全に閉塞を行う。

この後、粘質土で、墓坑全体を閉塞したものと推測される。

0　1:80　2m



0　1:40　1m

図167　埋葬主体部　構築工程図（2）

4　出土遺物

(1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪（図 168～178・表 24・25）

円筒埴輪は接合により 70 本以上、朝顔形埴輪は４本以上の存在が確認された。各属性の特徴は次の通りである。

A．円筒埴輪

規　格　全て２条３段構成である。

法　量　器高は 30.0 ～ 40.0cm の範囲にあるが、32.0cm 前後のものと 36.0cm 前後のものの二種類にまとまりをもつ。

口径は 19.5 ～ 26.0cm の範囲にあるが、22.0cm 前後のものが多い。

底径は 10.0 ～ 14.5cm の範囲内にあるが 12.0cm のものが多い。

技法の特徴　外面調整については「全面をタテハケ後、口縁部のみにヨコナデを施すもの」と、「全面を板ナデ後、口縁部のみにヨコナデするもの」の２種類が認められる。両者の存在比率は約 2:1（タテハケ：板ナデ）である。

内面調整については、「全面をタテナデし、最後に口縁をヨコナデする」という工程は全資料に共通する基本工程である。だが、中間工程において差違が認められ、「全面にタテナデを施した後、口縁に仕上げのヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、同じくほぼ全面にハケを施し、最後にヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」、「全面にタテナデを施した後、同じくほぼ全面にハケを施し、上半のみにナデを施し、最後にヨコナデするもの」、の４種類に大別できる。うち、「全面にタテナデを施した後、上半のみにハケを施し、最後に口縁をヨコナデするもの」が主体的に存在する。なお、これらはハケやナデの方向や工具の差違によってさらに細分も可能である。

突　帯　断面形には「台形」、「三角形」、「扁平な台形」の３種類がある。うち、「三角形」が主体的に存在する。なお、これらは混在することが多々認められる。また、突帯の器面へのナデつけには「仕上げナデ（突帯と器面の境目が見えなくなるような丁寧なナデつけのこと）を「上端・下端とも施すもの」、「上端のみに施すもの」の２種類がある。うち、主体的存在は前者である。なお、「上下仕上げナデ」を施すものはほぼ全てが「断面・台形」であるのに対し、「上のみ仕上げナデ」を施すものには「断面・台形」と「断面・三角形」が１個体内で混在するものが多い。

透　孔　「半円指向の円形」と「円形」の２種類があるが両者が同程度存在する。

線　刻　多種の線刻が認められる。外面３段には「－」「＝」「≡」「≣」「≣」「／」「ｷ」、内面上位には「－」「＝」「≡」。

底部調整　一つも認められない。

色調・焼成　色調は「橙色系」のみである。焼成には「硬質な焼き上がり」と「軟質な焼き上がり」とあるが、前者の方が多い。

混入鉱物・粒子　チャート・石英・輝石・角閃石が含まれているほか、赤褐色粒子の混入が目立つ。なお、片岩や骨針化石が認められるものも稀にある。

B．朝顔形埴輪

規　格　全体規格が確認できるものは全てが、円筒部を２条３段構成とし、朝顔部には１条の突帯をつけている。

法　量　器高は 51cm 、口径 30.2 ～ 31.0cm 、底径 12.0 ～ 13.0cm を計る。

技法の特徴　外面には「全面をタテハケ後、口縁部にヨコナデを施」し、内面には「全面にタテナデを施した後、朝顔部にハケを施し、最後に口縁にヨコナデを施」している。

突　帯　断面・台形で、上下に仕上げナデを施す。

透　孔　「半円指向の円形」と「円形」の２種類があるが両者が存在する。

線刻・底部調整　ともに認められない。

色調・焼成　色調は橙色であり、硬い焼成である。

混入鉱物・粒子　円筒埴輪とほぼ同じである。但し、片岩や骨針化石の混入は確認できない。

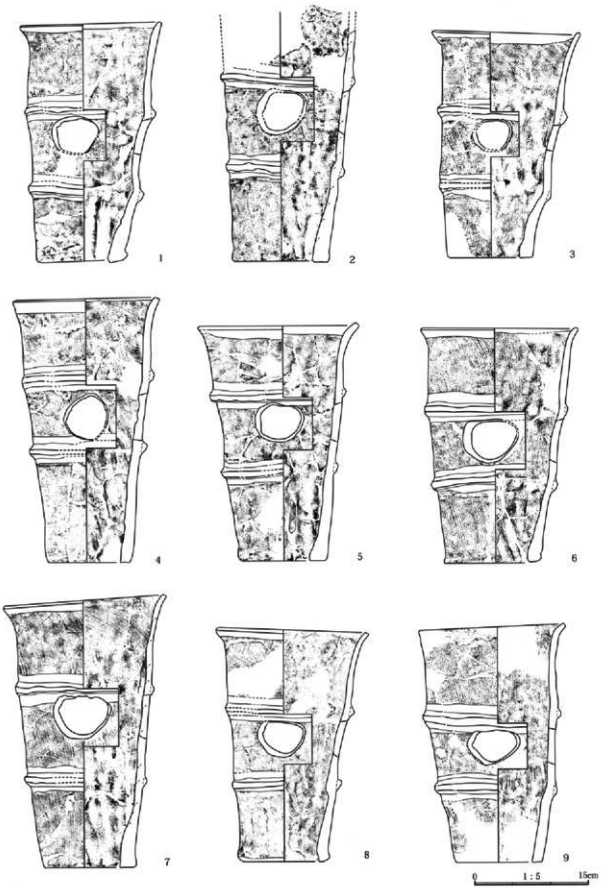


図 168　円筒埴輪（1）

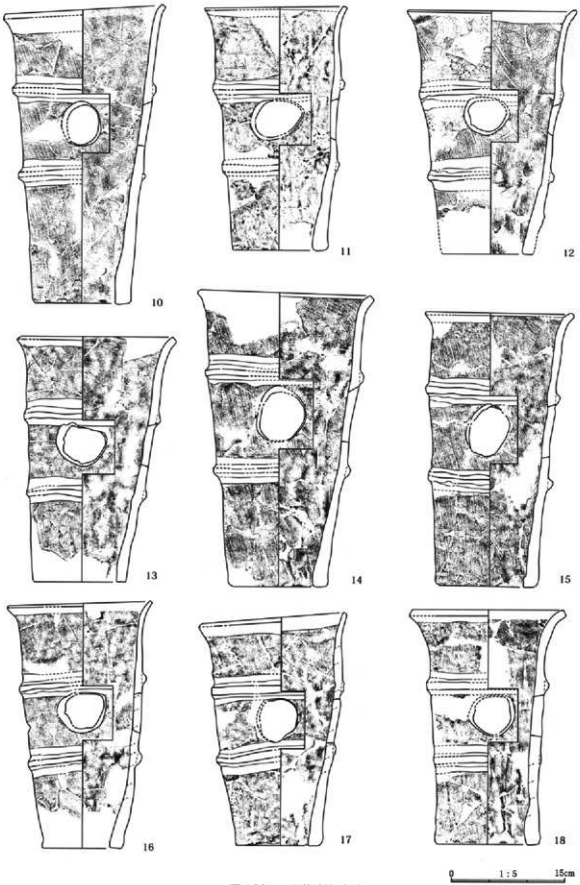


図169　円筒埴輪（2）

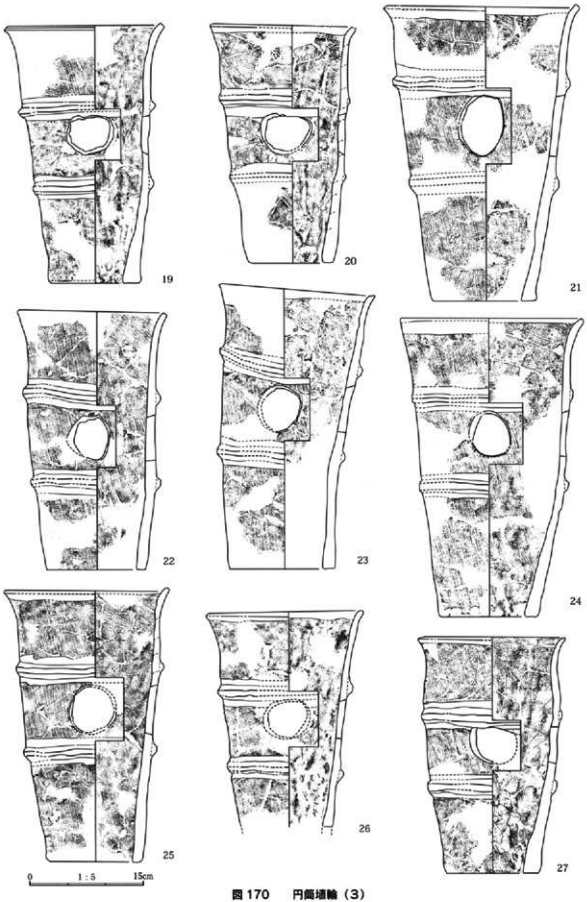


図170　円筒埴輪（3）

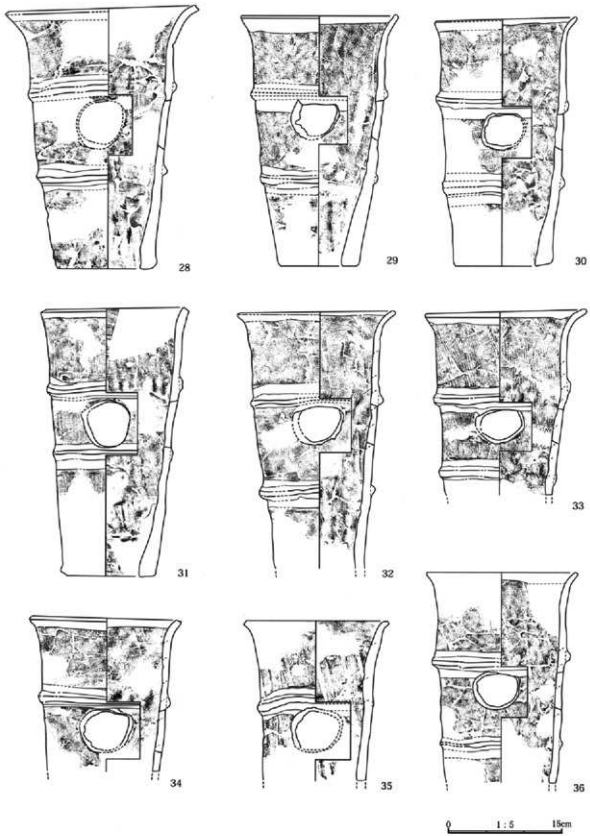


図171　円筒埴輪（4）

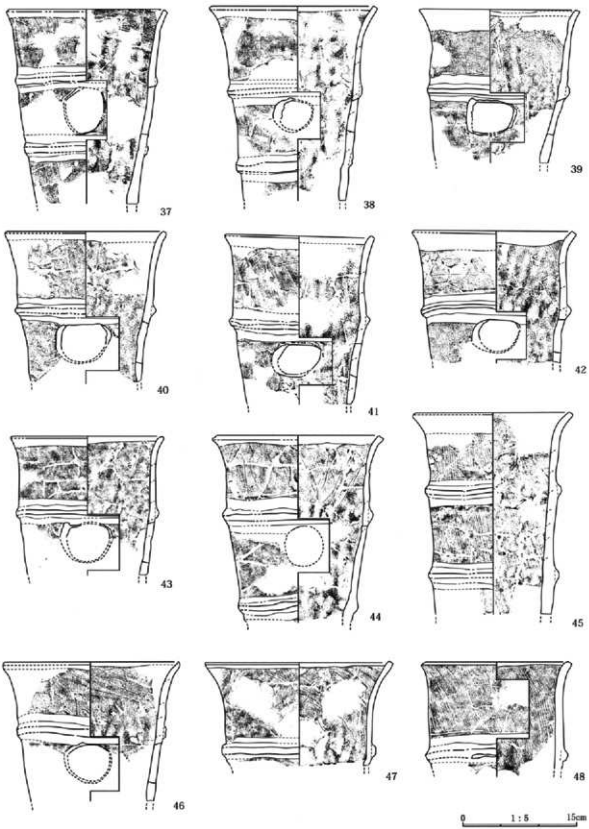


図172　円筒埴輪（5）

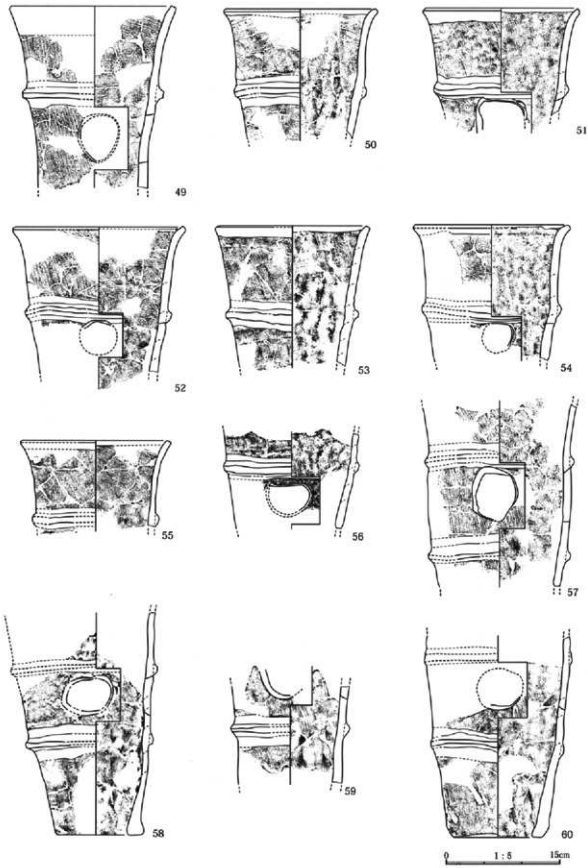


図173　円筒埴輪（6）

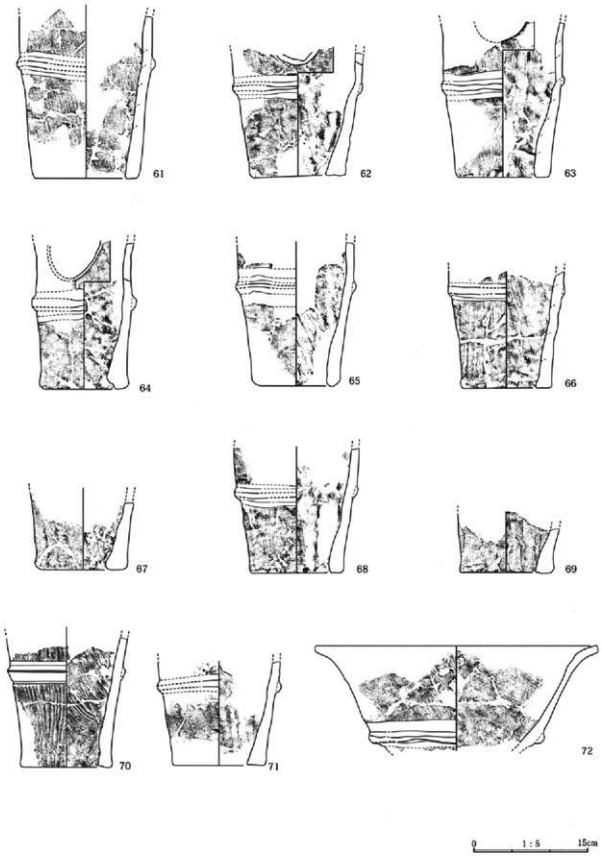


図174　円筒埴輪（7）・朝顔形埴輪（1）

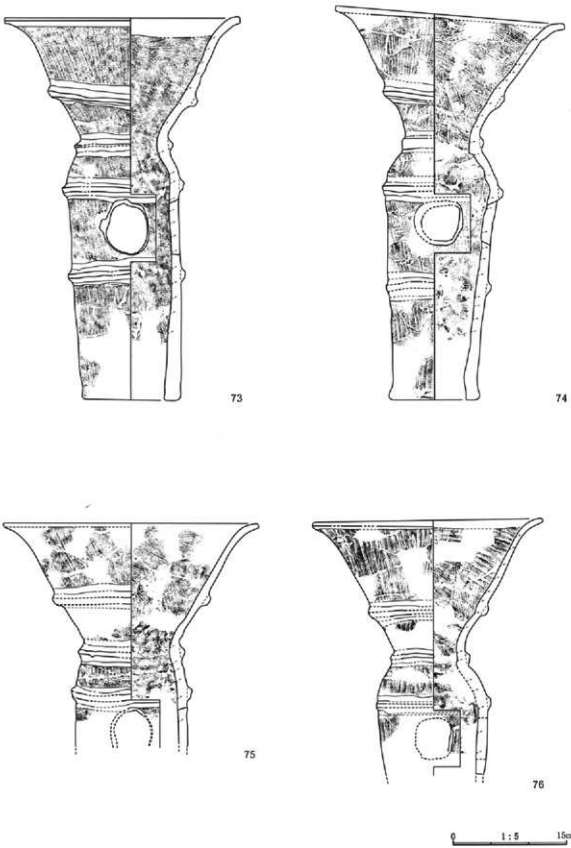


図 175　朝顔形埴輪（2）

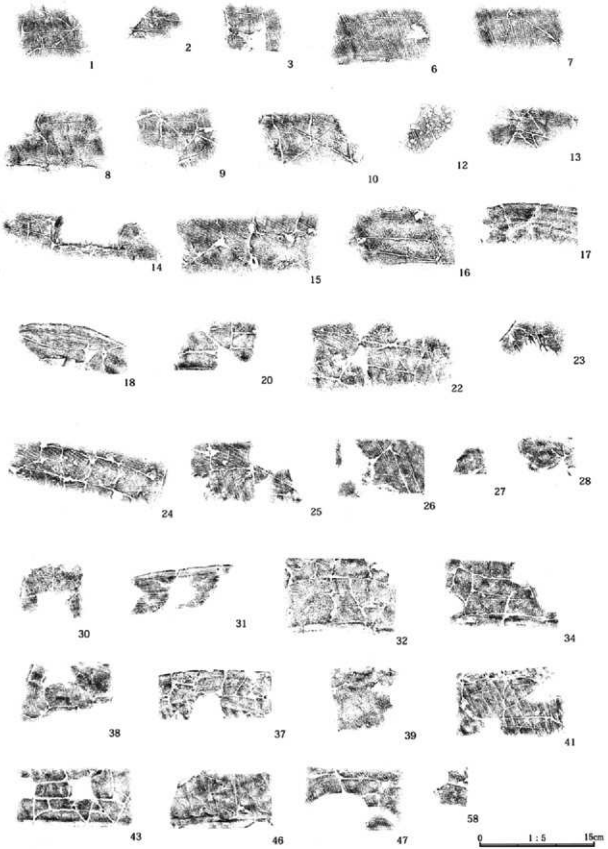

1
2
3
6
7
8
9
10
12
13
14
15
16
17
18
20
22
23
24
25
26
27
28
30
31
32
34
38
37
39
41
43
46
47
58
0
1:5
15cm

図176　円筒埴輪　線刻

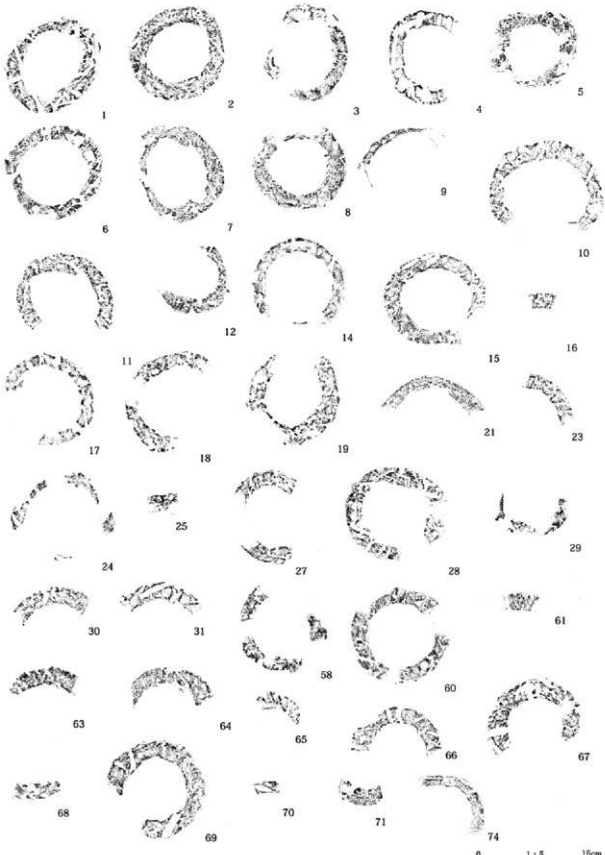

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
14
15
16
17
18
19
21
23
24
25
27
28
29
30
31
58
60
61
63
64
65
66
67
68
69
70
71
74
0
1:5
15cm

図177　円筒埴輪　底部

図178　円筒埴輪　破片

多田山９号墳　普通円筒・朝顔形埴輪　観察表凡例

番号…図番号
種類…円筒⇨普通円筒　朝顔⇨朝顔形埴輪
器高…口縁部から体部までの高さ（口縁の高さが一定していない場合はいちばん低い位置を計測）※斜体数字は復元高
口径…口縁部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
底径…底部の直径（口縁の輪郭がゆがんでいる場合は最長部分の直径を計測）※斜体数字は復元径
調整（外面）…Ａ⇨「タテハケ後、口縁ヨコナデ」　Ｂ⇨「板ナデ→口縁ヨコナデ」　ａ⇨「タテハケ」ｂ⇨「板ナデ」(ａとｂは、破片資料のため全体が不明なものに記載)
調整（内面）…Ａ⇨「タテナデ→タテハケ→口縁ヨコナデ」Ｂ⇨「タテナデ→上半のみタテハケ→口縁ヨコナデ」Ｃ⇨「タテナデ→タテハケ→上位のみヨコナデ→口縁ヨコナデ」Ｄ⇨「タテナデ→タテハケ→上位のみヨコナナメハケ→口縁ヨコナデ」Ｅ⇨「タテナデ→上半のみナナメハケ→口縁ヨコナデ」Ｆ⇨「タテナデ→口縁ヨコナデ」Ｇ⇨「タテナデ→タテヘラナデ→上位のみタテハケ→口縁ヨコナデ」ａ⇨「タテナデ」ｂ⇨「タテナデ→タテハケ」ｃ⇨「タテナデ→ヨコナデ」ｄ⇨「ナデ→ナナメハケ」(ａ～ｄは、破片資料のため全体が不明なものに記載)
ハケメ…幅 10mm あたりのハケメの本数　※板ナデ調整には「板ナデ」と記載
突帯…Ａ⇨断面が台形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｂ⇨断面台形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｃ⇨断面三角形＋仕上げナデを上・下端とも施す　Ｄ⇨断面三角形＋仕上げナデを上端のみ施す　Ｅ⇨断面における高まりがほとんど認められない形＋ナデを上・下端とも施す
透孔…Ａ⇨円形　Ｂ⇨半円志向の円形　Ｃ⇨不整半円形
線刻…○⇨あり　×⇨なし　？⇨線刻が施されそうな部分が欠落しているため、不明
（○の場合はその内容を記載）線刻の詳細既述⇨「位置／形」で既述。「位置」は、外１⇨外面基部　外２⇨外面２段目　外３⇨外面３段目　内１⇨基部附近の内面　内２⇨２段目附近の内面　内３⇨３段目附近の内面　「形」は、描かれた形を図載。(例：外面３段目に横線２本の線刻→「外３／＝」)
底部調整…×⇨なし　？⇨底部がないため、不明
色調…Ａ⇨橙色　Ｂ⇨にぶい橙色　Ｃ⇨褐色
出土位置…出土したエリア（図 162）に○を記載。※１個体が複数破片の接合のために、出土エリアが複数にまたがる場合が多い。
備考…その他、特記事項を記載。

表24　円筒埴輪・朝顔形埴輪観察表（1）

No	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	縦毛 (本)	突帯	透孔	線刻		底部調整	色調	出土位置								備考
											内容			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	
1	円筒	31.7	20.8	13.0	A	A	5～6	B	B	○	外３／＝	×	A	○							○	
2	円筒	－	－	12.5	B？	A？	板ナデ	B	B	○	外３／＝	×	A	○								
3	円筒	30.0	20.5	12.5	A	D	5～6	BD	B	○	外３／≡	×	A						○			
4	円筒	34.7	20.0	12.0	A	A	4～5	A	A	×		×	A					○				
5	円筒	31.0	*21.5*	12.0	B	F	板ナデ	B	B	？		×	A	○						○	○	
6	円筒	31.0	21.5	13.4	A	G	5～6	B	C	○	外３／＝	×	A	○							○	
7	円筒	36.0	24.0	12.5	A	A	4～5	B	C	○	外３／＝	×	A								○	
8	円筒	31.0	20.5	12.8	B	F	板ナデ	ACD	C	○	外３／≡?	×	B								○	底部内面に指紋
9	円筒	31.5	20.2	*12.0*	A	A	6～7	B	C	○	外３／＝	×	A						○	○		
10	円筒	38.5	*21.0*	14.5	A	C	6～7	A	A	○	内２／＝	×	B						○			
11	円筒	32.0	19.5	12.5	B	F	板ナデ	B	B	○	内３／＝or≡?	×	A						○			
12	円筒	32.4	21.5	12.0	A	A	5～6	BE	C	○	外３／－	×	A	○							○	
13	円筒	*32.0*	22.5	*12.0*	B	F	板ナデ	BD	C	○	内３／＝or≡	×	A				○	○				
14	円筒	38.9	23.5	12.5	A	C	6～7	A	A	○	内３／＝	×	A						○			
15	円筒	36.0	21.5	13.0	A	D	6～7	A	A	○	内３／＝	×	A	○					○	○		
16	円筒	32.5	20.5	*12.0*	B	F	板ナデ	B	B	○	外３／＝	×	A							○	○	
17	円筒	31.0	20.0	11.5	A	A	4～5	A	B	○	内３／－	×	A				○	○				
18	円筒	31.4	*21.0*	12.8	B	F	板ナデ	BDE	B	○	内３／＝	×	A	○								
19	円筒	34.0	22.0	12.1	A	A	5～6	BD	B	○	外３／ ≒	×	A					○	○	○	○	
20	円筒	*31.0*	20.5	*11.5*	B	A	板ナデ	DE	C	○	外３／＝	×	A			○						
21	円筒	39.3	*26.0*	*13.8*	A	A	6～7	A	A	○	内３／≡	×	A					○				
22	円筒	34.0	22.0	？	A	A	6～7	A	A	○	内３／＝	×	B						○			
23	円筒	36.2	*21.5*	*14.0*	A	B	6～7	A	A	○	内３／－	×	A	○					○	○	○	
24	円筒	40.0	23.0	13.0	A	D	7～8	A	A	○	内３／＝	×	A					○	○			
25	円筒	36.5	*21.5*	*12.0*	A	D	5～6	A	A	○	内３／＝	×	A	○					○	○		
26	円筒	－	21.5	－	A	B	5～6	B	B？	○	外３／＝	？	A		○	○						
27	円筒	31.5	20.5	11.8	A	B	4～5	BD	C	○	外３／－	×	A						○	○		
28	円筒	34.0	24.5	13.5	B	A	板ナデ	BD	B？	○	外３／＝	×	A				○					

表25　円筒埴輪・朝顔形埴輪観察表（2）

No	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	調整 外面	調整 内面	刷毛 (本)	突帯	透孔	線刻 内容	底部調整	色調	出土位置 I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	備考
29	円筒	33.5	20.5	12.0	B	E	板ナデ	BD	C	?	×	A	○								
30	円筒	33.0	20.0	*12.5*	A	A?	5～6	B	B	○ 外3／=	×	A				○					
31	円筒	35.1	22.0	*12.0*	A	E	5～6	A	A	○ 内3／−	×	A			○	○					
32	円筒	−	22.0	−	B	F	板ナデ	BD	C	○ 外3／≡	?	A	○					○	○		
33	円筒	−	21.5	−	A	A	5～6	B	B	○ 外3／−	?	A				○	○	○			
34	円筒	−	*21.0*	−	B	E	板ナデ	BD	B	○ 外3／=	?	A				○					
35	朝?	−	*18.5*	−	B	F?	板ナデ	DE	B	×	?	A			○	○					異質な工具で調整
36	円筒	−	*21.0*	−	B	E	板ナデ	BD	B	○ 外3／=	?	A					○				
37	円筒	−	21.0	−	A	E	5～6	AE	A?	○ 内3／=	?	A				○	○				
38	円筒	−	22.0	−	B	E	板ナデ	B	B	○ 外3／=	?	A							○	○	
39	円筒	−	22.5	−	B	F	板ナデ	B	B	○ 外3／=	?	A	○								
40	円筒	−	21.0	−	A	E	5～6	D	C	? なし?	?	A							○		
41	円筒	−	22.0		A	A	5～6	BD	C	○ 外3／=	?	A				○					
42	円筒	−	21.8	−	B	F	板ナデ	B	C	○ 外3／=	?	A				○					
43	円筒	−	*21.0*	−	B	F	板ナデ	B	B	○ 外3／=	?	A			○						
44	円筒	−	23.0	−	A	A	4～5	BD	B?	? ?	?	A				○					
45	円筒	−	*22.0*	10.0	A	E	4～5	A	A?	○ 内3／−	?	A						○			
46	円筒	−	*21.0*	−	A	E	5～6	A	B?	○ 外3／/	?	A				○					
47	円筒	−	24.5	−	A	D	4～5	B	BC?	○ 外3／=	?	A						○			
48	円筒	−	22.0	−	A	A	7～8	B	B?	○ 外3／≡	?	A	○								
49	円筒	−	*22.5*	−	A	E	6～7	A	A	? ?	?	A						○			
50	円筒	−	*20.4*	−	B	F	板ナデ?	B	BC?	○ 外3／=	?	A							○		
51	円筒	−	21.0	−	A	A	4～5	BD	C	? ?	?	A			○						
52	円筒	−	*23.0*	−	A	E	5～6	A	B?	? ?	?	A						○			
53	円筒	−	*21.0*	−	A	A	5～6	B?	BC?	? ?	?	A			○	○					
54	円筒	−	20.5	−	B	F	3～4	B	B?	○ 外3／=	?	A								○	
55	円筒	−	*21.0*	−	A	D	5～6	B	−	? ?	?	A	○								
56	円筒	−	−	−	a	a	2～3	B	C	? ?	?	A		○							
57	円筒	−	−	−	a	b	5～6	A	A	? ?	?	A						○			
58	円筒	*32.0*	*22.0*	*12.5*	b	a	板ナデ	B	A	○ 外3／=	×	A	○								
59	円筒	−	−	−	b	a	4～5	BD	BC?	? ?	?	A	○							○	
60	円筒	−	−	13.1	a	b	3～4	DE	BC?	? ?	×	A	○		○						異質な焼成
61	円筒	−	−	*14.0*	a	b	6～7	A?	?	? ?	×	A						○			
62	円筒	−	*22.0*	*12.5*	b	a	板ナデ	B	BC?	? ?	×	A			○						
63	円筒	−	−	*12.0*	a	b	3～4	B	BC?	? ?	×	A		○							
64	円筒	−	−	*12.0*	a	a	5～6	B	BC?	? ?	×	A		○							
65	円筒	−	−	*11.8*	a	a	5～6	B	−	? ?	×	A				○					
66	朝顔?	−	−	12.0	a	a	2～3	D	−	? ?	×	A					○				
67	円筒	−	−	12.3	a	a	3～4	−	−	? ?	×	C				○					
68	円筒	−	−	*12.0*	a	a	4～5	BD	−	? ?	×	B								○	
69	円筒	−	−	12.0	b	a	板ナデ	−	−	? ?	×	A	○								
70	朝顔	−	−	*12.0*	a	b	2～3	D	−	? ?	×	A								○	
71	円筒	−	−	*12.0*	b	a	板ナデ	B	−	? ?	×	A				○					
72	朝顔	−	31.0	−	a	d	5～6	A	−	? ?	?	A		○							
73	朝顔	51.0	−	13.0	a	c	6～7	A	AB?	? ?	×	A			○	○	○				
74	朝顔	51.0	−	12.0	a	c	2～3	A	B	? ?	×	A	○			○	○	○	○		
75	朝顔	−	30.2	−	a	c	5～6	A	AB?	? ?	?	A	○							○	
76	朝顔	−	30.5	−	a	d	2～3	A	AB?	?	?	A					○	○			
77	円筒	−	*22.0*	−	B	F	5～6?	B	−	○ 外3／≡?	?	A		○							
78	円筒	−	*21.0*	−	A	E	6～7	A	A?	○ 外3／=	?	A					○				
79	円筒	−	−	−	A	E	5～6	B	−	○ 外3／≡	?	A		○							
80	円筒	−	−	*13.0*	a	a	板ナデ	B	−	× −	×	A	○								
81	円筒	−	−	*13.0*	a	a	5～6	−	−	× −	×	A							○		
82	円筒	−	−	*12.0*	a	a	6～7	−	−	× −	×	A				○					
83	円筒	−	−	*14.0*	a	a	4～5	−	−	× −	×	A							○		

（2）形象埴輪

A　人物埴輪（図 179 ～ 181）

人－1

杯を捧げる女性

器高　推定で 73.0cm 。但し、残存部は半身部のみであり、残存高は 44.0cm である。

形態の特徴　大振りの女子埴輪である。髪形は平面・パチ形の島田髷であるが、残存する破片からは頭髪や櫛の表現は確認できない。目は、切れ長に表現されている。眉は粘土帯をわずかに隆起させて表現している。鼻は鼻筋の通ったスリムなかたちでだが、鼻孔の表現はない。口は横長水平に表現されている。顎は丸味をもって表現されている。耳は粘土紐で環状に表現されている。剥落痕の存在から、首には首飾りがつくと思われる。肩はややナデ肩、胸板はやや厚い。肩から脇にかけては幅 1.2cm の赤彩が施され、襷が表現されている。この襷は背部で「廿状」になる。赤彩による表現は前面・背面とも、襷以外のものを表現している可能性もある。右腕は前面に差し出しており、坏は出土していないものの、掌の剥落痕から、杯を捧げる所作が復元できる。左腕はほとんど残存しないが、肩・脇の湾曲具合と、接合できない左手の形から、腰付近に手と置いていると考えられる。胸部には剥落痕の存在から乳房が

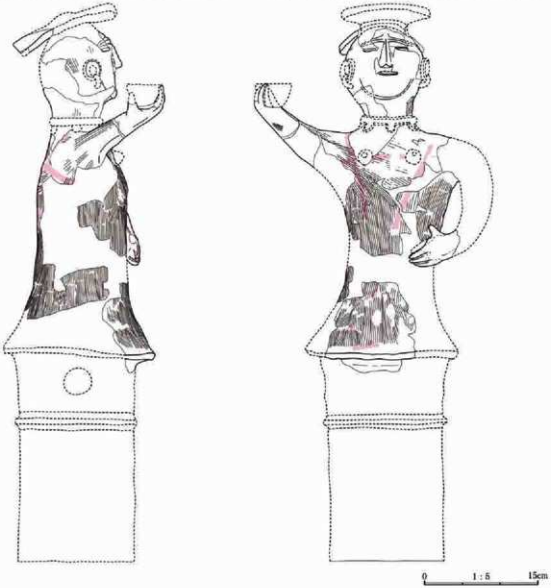


図 179　人物埴輪（1）人－1（1）

表現されていたことが判るが、他にはなにもない。腰部はくびれるが、帯の表現はない。尻部にも帯状の赤彩が認められるが、それ以外は認められない。

技法の特徴　頭部・体部・腕部・基部をそれぞれに作り、結合させる技法を用いている。頭部は幅1.2～2.0cmの粘土紐を積み上げることにより卵形の頭部を形作っている。輪積み後は、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はナデが主体である。頭頂部の状態は不明である。顔面は卵形の頭部に顎・鼻・眉など、部分的な粘土塊の貼り付け、丁寧に撫で付けることによって、フェイスラインを作り出している。目・口は外面からの穿孔によってつくられている。体部は、幅1.0～1.5cmの粘土紐の積み上げによりつくられている。輪積み後、外面はナデとハケで丁寧に整形されているが、内面はナデで整形されるのみで輪積みの痕跡は残存している。腕部は粘土紐をつかって形作っている。頭部と体部は別づくりであり、その接合部は頸部内面で、粘土帯の未接着の部分が確認できることから、頸部で接合されたことがわかる。

色調・焼成・胎土　色調は明褐色。焼成はやや硬質。胎土中には輝石・黒灰色粒子（凝灰岩？）が確認できる。

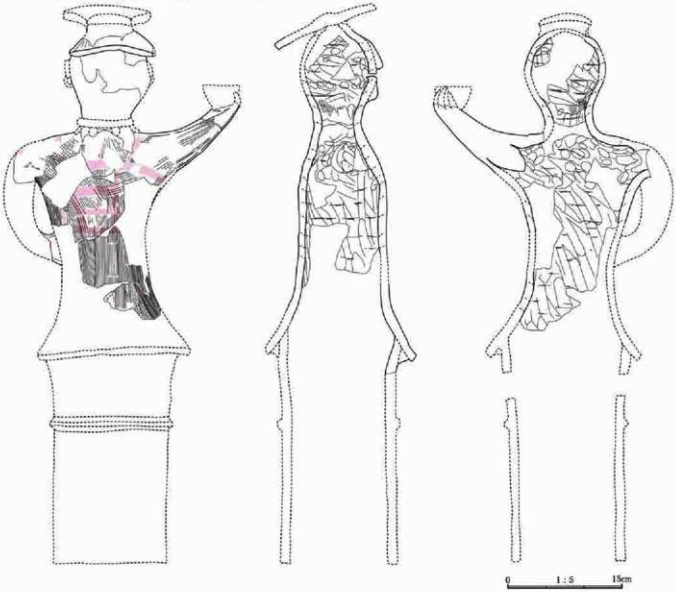


図180　人物埴輪（2）人－1（2）

人－2（図 181：人－3～16 も同じ）

部位：烏帽子をかぶる男子埴輪の頭部片

残存高は 11.8cm。頭頂部から頬部付近までが残存する。赤彩は眼窩上部と頬部に施されている。右頬に、美豆良の剥落痕が一部残存する。器面は剥落が著しく、赤彩範囲の調整の確認ができない部分が多い。技法的には、外面は頭頂部を除き、タテハケを施す。頭頂部は不定方向ナデを施す。内面は残存部の下部でヨコハケを施す他は、タテ・ヨコナデを施す。頭頂部充填痕が明瞭に残る。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土位置は図 163 参照。

人－3

部位：島田髷を結う女子埴輪の頭部片

残存高は 11.5 ｃｍ。頭頂部から口部付近までが残存する。髪形は平面・パチ形の島田髷であり、結び緒表現がなされている。赤彩は眼窩上部・頬部・鼻部、および島田髷の前面に施されている。残存状況が悪く、耳部などは剥落痕が残るものである。技法的には、外面は不定方向ナデを施す。内面は、タテ・ヨコナデを施す。頭頂部充填痕が明瞭に残る。なお、頭頂部には直径 0.8cm の孔があいており、それは島田髷の粘土板によって閉塞されている。出土位置は図 163 参照。

人－4

部位：男子埴輪の胸部片

残存高は 10.2 ｃｍ。頸部から胸部付近までが残存する。赤彩は確認できない。残存する左腕の付け根部分の形状から、左腕をあげる所作がとられている可能性が高い。背面には垂髪部の剥離した痕跡が明瞭に残存する。器面の一部は剥落している。技法的には、外面は、ハケ調整後、丁寧なナデを施す。内面はハケ調整後、ナデを施す。左腕の残存部には、腕を差し込んだ痕跡が残る。出土位置は図 163 参照。この破片は、出土位置や、胎土、技法や、形態の特徴から、人－2 と同一個体になる可能性が高い。

人－5

部位：左下げ美豆良。顔面から剥離したもの。中実。全面、丁寧なナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土位置は図 163 参照。

人－6

部位：下げ美豆良片。中実。丁寧なナデ調整。色調は橙色。焼成は砂っぽい。出土位置は周堀エリアⅢ。

人－7

部位：島田髷？　下面は全体が剥落。上面、側面は丁寧なナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

人－8

部位：耳飾りの破片。環状耳飾りの一部。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

人－9

部位：顎の破片。貼り付け顎の剥離したもの。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

人－10

部位：右腕。腰に当てる仕草の腕と推測。手のひらは、腰帯に貼付したと思われる剥離がある。指先は欠損しているが、内面に残された指表現の痕跡から考えると、線刻による表現と考えられる。中実で、差し込みタイプ。器面の荒れが著しく、不明瞭なものの、外面は丁寧なナデ調整が施されていると推測。色調は黄橙色。焼成は極めて砂っぽい。出土位置は図 163 参照。

人－11

部位：二の腕の破片。外面部の湾曲具合から、二の腕と判断。中実。外面は丁寧なナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

人－12

部位：腕の一部？器面は湾曲し、完形品の場合なら、断面は円形と推定。丁寧なナデを施している。中実。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

人－13

部位：脇の下の破片。形状から、腕の破片と考えた。外面には粗いハケ調整と粗いナデが全面に施されていることから、脇の下と推定した。色調は橙色。

焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

人－14

部位：半身像の被服裾部の破片。裾端部は面取りが施されている。裾端部はヨコナデ。内面は剥離痕跡。色調は橙色。焼成は砂っぽい。出土はエリアⅡ。

人－15

部位：半身像の被服裾部の破片。裾端部は面取りが施されている、外面はハケ調整。裾端部はその後ヨコナデ。内面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

人—16

部位：下げ美豆良の下端の破片。断面は円形。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

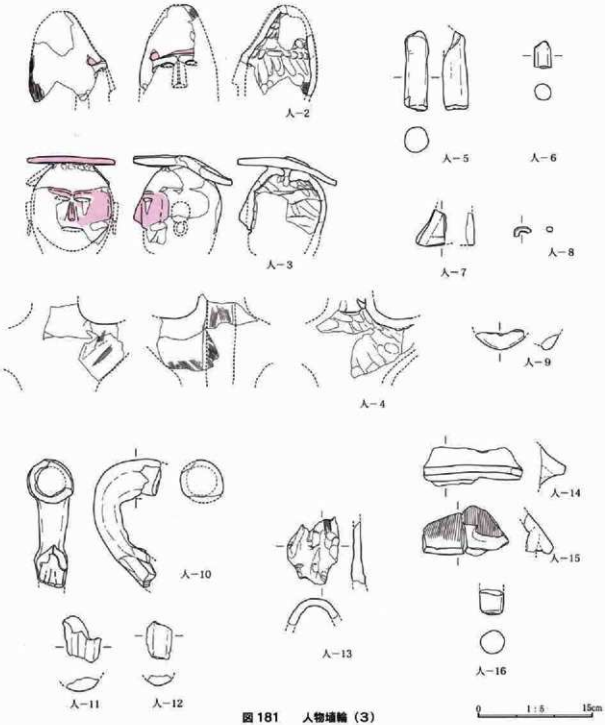


図 181　人物埴輪（3）

B．馬形埴輪（図 182・183）

本墳から出土した馬形埴輪片は接合関係が認められない部分も多かったが、色調・焼成等については同一視できるものであり、かつ部位の状況から1体分の資料と考えられる。

※

馬－1

部位　頭部片

出土位置　周堀（図 163 を参照）

形態の特徴　頭部が部分的に残存する。口は筒形に解放している。鼻の表現は確認できない。目へ側面に、くり抜かれている。

馬具の表現　六つの鈴を表現した素環鐙板と面繋・引手の表現がある。面繋は、巾 1.7 ～ 2.0 ｃｍの粘土帯で顔革を表現しており、辻金具の鋲を表現したと思われる剥落痕がある。引手は、巾 1.5 ～ 1.7 ｃｍの粘土帯で表現している。

赤彩の有無　器面全体の剥落が著しく、赤彩の有無は確認できない。

技法の特徴　外面は、ハケ調整後、ナデを施す。顔の表面等、外見上目立つ箇所は、特にナデが丁寧に施されている。内面は、不定方向のナデを施す。頭部は、筒状に成形した後に下部両側面に粘土板を貼り付け、顔面のタテ巾を広げており、その上に引手表現の粘土紐を貼り付けている。

馬－2

部位　左横腹部片

出土位置　周堀（図 163 を参照）

形態の特徴　左前足の付け根部と横腹部が部分的に残存する。

馬具の表現　胸繋とそれに付する鈴、輪鐙、障泥板の表現がある。胸繋は、巾 3.5 ｃｍの粘土帯で力革を表現しており、付属して鈴1つの表現もされている。輪鐙は、巾 1.0 ～ 1.3 ｃｍの粘土帯で表現している。障泥板は、厚さ 1.0 ｃｍの粘土板を胴部に附加させ、表現している。

技法の特徴　外面は、粗いハケ調整後、さらに細かいハケ調整を施し、その後ナデを施す。馬具装着面等、外見上目立つ箇所は、特にナデが丁寧に施されている。内面は、ハケ調整後、不定方向のナデを施す。障泥板表現のための粘土板の裏側には、補強のための粘土帯が存在していたようで、それを想定させる、剥離痕が確認できる。

馬－3

部位　後背～尻部片

出土位置　周堀（図 163 を参照）

形態の特徴　後背部から尻部にかけてが部分的に残存する。

馬具の表現　素環の雲珠を巾 1.2 ｃｍの粘土紐で表現する。また、三鈴つきの剣菱形杏葉のが左右両側面と尻部に、計3つ表現されている。いずれも粘土貼り付けである。尻繋、巾 1.5 ～ 1.8 ｃｍの粘土帯で表現している。また、後輪部の剥落した痕跡も確認できる。

技法の特徴　外面は、ハケ調整後、ナデを施す。馬具装着面等、外見上目立つ箇所は、特にナデが丁寧に施されている。なお、外面は器面の剥落がきわめて著しく、技法の観察は困難であった。内面は、不定方向のナデを施す。なお、内面においては部分に輪積み痕を確認することができる。その状況からすると、巾 2.5 ～ 3.0 ｃｍの粘土紐を水平に積み上げ、最後に背部を閉塞する作り方が想定できる。

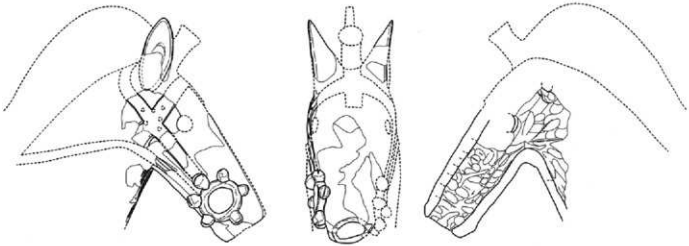
※

馬－4

部位：鞍の前輪または後輪の破片。厚さ 10mm 程度の粘土板をたて、上位を弧状に切り落としている。両面ともハケ調整を施したあとナデを施し、ハケメをすり消している上位端部まで弧状に丁寧なナデが施されている。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

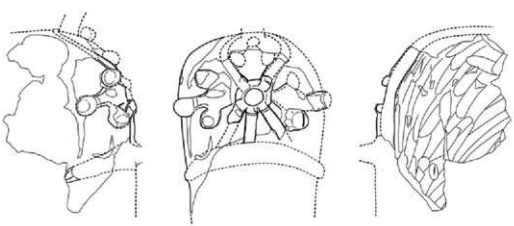
馬－5

部位：胸繋の一部。鞍との接合部付近。体部に、幅 3.4cm ほどの粘土帯で表現した胸繋を貼り付ける。外面は丁寧なナデ調整。内面はヘラケズリ及びナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。



馬－1

馬－2



馬－3

0　1：5　15cm

図182　馬形埴輪（1）

馬－６

部位：馬鈴。不整球形。孔は線刻１本による簡易なもの。全面ナデ調整。背部は剥離痕あり。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

馬－７

部位：馬鈴。不整球形。孔は線刻１本による簡易なもの。全面ナデ調整。背部は剥離痕あり。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

馬－８

部位：馬鈴。不整球形。孔は線刻１本による簡易なもの。全面ナデ調整。背部は剥離痕あり。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

馬－９

部位：馬鈴。面繋？の破片がつく。不整球形。孔は線刻１本による簡易なもの。全面ナデ調整。繋の背面には剥離痕あり。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

馬－10

部位：幅 2.0cm の舌状粘土塊。側面は１方向のみ割れ断面。全体の形状はさじ状にくぼんでいる。全体がナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

馬－11

部位：胸繋の一部。幅 3.0cm ほどの板状の破片。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

馬－12

部位：幅 2.0cm の板状粘土塊の上に同規模の板状粘土塊が覆い被さっている資料。埴輪の腰部か？外面はナデ調整。内面は剥離痕あり。出土は周堀エリアⅢ。

馬－13

部位：辻金具の一部。鋲を表現した粘土粒が剥離した痕跡が４カ所にある。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

馬－14

部位：面繋または尻繋の一部。幅 1.7cm ほどの板状の破片。僅かによじれた形状を呈する。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

馬－15

部位：胸繋の一部。幅 1.7cm ほどの板状の破片。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや硬質。出土は周堀エリアⅡ。

馬－16

部位：胸繋の一部。幅 3.2cm ほどの板状の破片。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

馬－17

部位：胸繋の一部。幅 3.5cm ほどの板状の破片。僅かに内湾する。背面は全面剥離痕。外面はナデ調整。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

馬－18

部位：足の一部。外面にはハケ調整。内面はナデ、ケズリ。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

馬－19

部位：胸繋の一部？　幅 3.6cm のヘラ状の破片。一端はＵ字状に収まる。背面には一部剥離痕あり。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅡ。

馬－20

部位：胸繋の一部。湾曲具合から、頸部あたりに位置する繋と推測。左下には弧状のナデ調整があることから、鈴がついていたものと推測。内面は全て剥離痕。色調は橙色。焼成はやや砂っぽい。出土は周堀エリアⅢ。

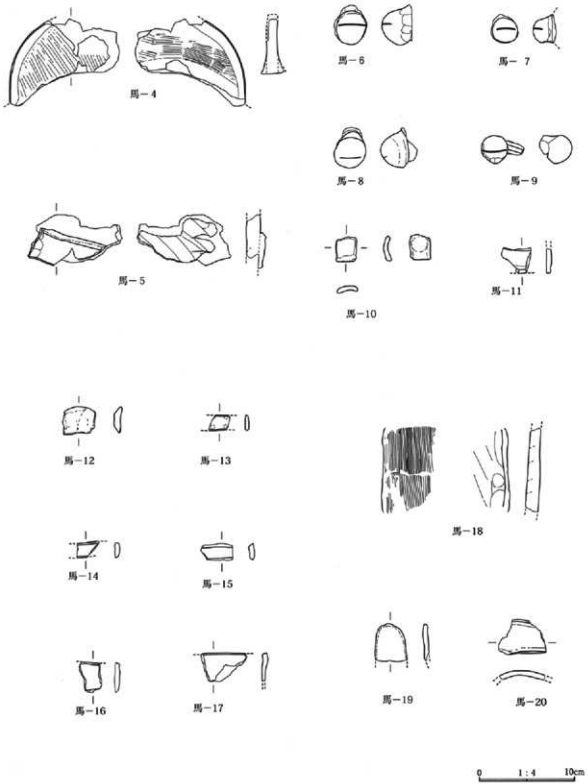

馬－4
馬－6
馬－7
馬－8
馬－9
馬－5
馬－10
馬－11
馬－12
馬－13
馬－18
馬－14
馬－15
馬－16
馬－17
馬－19
馬－20
0　1：4　10cm

図183　馬形埴輪（2）